
赤い鬼

藍沢 砂糖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤い鬼

【Nコード】

N2102P

【作者名】

藍沢 砂糖

【あらすじ】

夏祭りの夜に瑞穂は一つの赤いお守りを拾った。幽霊が見えるという弟の直哉はそのお守りをプレゼントされる。しかしそれは幸せを呼ぶようなお守りではなかった。

お守りを持つ者は消える。

赤いお守りをめぐる数十年にわたる物語。

そのお守りを持つ者は、決して幸せにはなれない。

お守りの事

暗い。

ざわざわと葉が風に揺れる音が聞こえる。周りは木々に囲まれているようで酷く視界が悪い。どうやら僕は森の中の一本道の途中に佇んでいるらしい。道の両脇には堅牢な木々が行く手を塞いでいる。そしてその木々の枝葉は天まで覆い隠している。

まるで檻の中に閉じ込められているようだ。

居心地が悪い。

前も真っ暗、後ろも真っ暗。

何処かにこの森という檻の出口がある事を信じて僕は当ても無く一本道を歩きだした。一步進む度に裸の地面がじやりと音を鳴らせる。人の気配も無い。蟲の声さえ聴こえない。寧ろ^{むし}生き物の気配が無い。唯一の音は森のざわめき。その中に僕の^{あしおと}蹠が不協和音のように鳴り響いている。

空を遮る枝葉の間から薄暗い空が見え隠れしている。

漸く^{ようや}僕の眼は暗闇に馴れてきた。

先程よりも僅かながら見通しが利くようになってきた。

どれ程歩いたのだろう。

代わり映えの無い森の檻の中は僕の感覚を狂わせる。もう一時間は歩き続けた気がするのだが実際は一分も経っていないのかもしれない。

その時、もう一つの不協和音が僕の耳に滑り込んだ。

う、うう。

今の音は…人の声だろうか。その音は森の水を打ったような静けさに飲み込まれてしまいそうな程小さい。

う、うう…ううう。

女性だろうか、啜り泣くような声が聞こえる。前へ、前へと歩みを進めるとその声は段々はつきりとした輪郭を帯びてきた。

声はこの近くで聞こえる。

僕は辺りを見回す。哀しさに満ちた女の啜り泣きはすぐ近くから発せられている筈だ。

目の前にひと際大きな樹が姿を現した。その太い幹には大仰に注連縄^{めなわ}まで巻かれている。何百年もここに立ち続けているのだろうか。その樹の足下で女が腰を下ろしてしくしくと咽び泣いていた。

「おい、どうしたんだ」

僕は女に駆け寄り、屈み込んだ。

「こんな所で何をしてるんだ」

そう問いかけても女は俯いたまま一瞥^{いちべつ}もくれる事はない。まるでその言葉が聞こえていないかのようにだらしなく足を投げ出したまま、ただしくしくと嗚咽^{おえつ}し続ける。その女の髪はぼさぼさに乱れ、衣服も薄汚れている。その汚らしさに僕は無意識の内に口元に手を遣っていた。

その女に覚えたどす黒い嫌悪感を抑えながら更によく観る。すると、女の左足の膝から先が不自然な方向にぐにやりと曲がっている事に気が付いた。

僕は息を飲んだ。

「君、足が折れてるじゃないか！」

女の泣き声が止んだ。

やっと僕に気付いてくれたのだろうか。

「このまま君を放っておく訳にはいかない。さあ、早く病院へ行こう」

そう言うと女はゆっくりと顔を上げ僕の方を見た。女と言うよりは少女と云い表しても良いような顔だ。未だ二十歳にもなっていないようなあどけなさが残っている。

よく見ると怪我は足の骨折だけではない。軀中からだの至る場所に擦り傷や打撲の痕がある。

右目の上にも痛々しい痣あざがあり紫色に腫れ上がっている。まるで四谷怪談のお岩だ。

「君は：どうしたんだ。事故で負ったような怪我には見えないが。まさか、誰かにやられたのか！」

僕は声を荒げて質ただした。

青痣の一つ一つから怨念のようなものが沸々と浮かび上がって来るように思えた。

再び女は俯いて、ひくひくと肩を引き攣つらせながら漸ようやく口を開いた。

「痛い。痛いよ。厭いやあ。やめて：。」

女は頭を抱えて、噁しわがれた声で呟く。

「何があったんだ！」

「石、石を投げないで。もうやめて、ごめんなさい、痛い。」

「石：だって？」

女は樓々（ぼろぼろ）に疵きず付いた両手で顔を覆い、おんおんと声を上げて泣き出した。

灰色にくすんだ指の隙間から女の目が覗いた。その瞳は悲嘆や恐怖、絶望と云った色に染まり切っていた。

一体誰から、どのような仕打ちを受けるとこうなるのか。非道ひどい。

この女が今に至る経緯いきわづなど聞きたくも無かった。

僕は吐き気を覚える程に胸が苦しくなり、その女から視線を外して暗い道の奥に目を遣った。

すると、道の奥に紅い光が仄ほのかに灯っている事に気が付いた。その正体を見極めるべく目を凝らす。

否、違いう。それは光ではない。

その空間だけ不自然に色が違っているのだ。更によく確認しようと歩み寄って行くとその姿が徐々に浮き彫りになってきた。

紅い浴衣ゆかたの少女がこちらに背を向けて立っている。

暗闇の中に、その紅だけがぼうと浮かんでいる。

漆黒が支配しているこの空間に少女の発する真紅は異質そのものだ。その色は鮮やかで妖しい程に美しく、心を奪われてしまいそうだった。僕は少女の背を見つめたままその場から一步も動けなかった。

辺りを一陣の風が吹き抜ける。木々はその風と呼応するようにざわざわ、ざわざわと騒ぎ立てる。

少女の髪が風に揺れる。

風が通り過ぎると木々は騒ぐのを止め、再び辺りを静寂が包み込んだ。僕は一步も動けないどころが指一本動かせなくなった。空気が張り詰めていき、呼吸すら止まってしまいそうな気がした。

僕はその場で人形のように固まってしまい、木々の檻の中で凄艶せいえんな少女の後姿と唯々（ただただ）対峙し続けていた。

あなたは わたしを おぼえてる

森閑とした世界で少女の澄んだ声が響いた。

そして、少女はゆっくりと僕の方に振り返る。

白い頬が僅かに覗いた。

※

いつもは誰からも忘れ去られたように閑寂な参道も今夜ばかりは露店が立ち並び、沢山の人で賑わっていた。

屋台の提灯や白熱灯が夜の町を煌々（こうこう）と照らし、人々の楽しい声が辺りを包んでいる。

白川瑞穂は弟の直哉なおやを連れて近所の神社の夏祭りに来ていた。

「姉ちゃん、今何時ぐらい？」

直哉が口元にたこ焼きのソースを付けたまま問いかける。

「時計がないからはっきり分からないけど、きっと小学生はとつくに家に帰る時間よ」

「今日はお祭りだから良いんだよ」

直哉は口元のソースをぺろりと舐めた。

「いつもならアンタもう寝てる時間じゃないの？なんで今日はこんなに元気でいられるのよ」

「だって今日はお祭りのために昼寝してたんだからまだまだ平気さ」
直哉は口を大きく横に開き青海苔の付いた歯を見せて笑った。

「もう…」

瑞穂は呆れた顔をして額に手を当てた。

「夏休みの宿題もちよつとぐらいやってるの？」

「大丈夫さ、あんなの最後にちよちよいつて片付けちゃえばいいんだよ。姉ちゃんこそやってるのかよ、大変なんでしょ？中学生は」
直哉がにやにやしながら瑞穂の顔を覗き込んだ。

「余計なお世話よ。私は毎日ちよつとずつやってるわ。アンタと違ってね」

こつんと直哉の額を軽く小突いた。

「もう、痛いなあ。大体こんなときまでお説教なんてやめてよ！母さんも十時までに帰ってくればいいって言ってただろ？ぼくは何もいけない事なんてしてないじゃないか」

河豚ふぐのように頬を膨らませて直哉が云い返した。

「はいはい、悪かったわね」

瑞穂は苦笑いを浮かべる。

「そんなまじめそうな事ばかり言ってるけど、本当は姉ちゃんももっと遊びたいんでしょ？」

「う、うん。まあそりゃそうだけどさ」

「ほらー、やっぱりそうだ！じゃあもっと色んなお店に行こうよ！」

瑞穂はにこりと微笑みながらそうねと答えた。

ぴよんぴよんと飛び跳ねながらはしゃぐ甚平姿の直哉はやんちゃ

坊主そのものだった。

年に一度の夏祭りと云う事もあり、瑞穂も意気込んで浴衣で赴いて来たのだが慣れない服装をしている所為か、どうも窮屈でならない。母に浴衣を着せて貰って鏡を覗き込んだ時も、そこに映っているのが自分ではないような違和感があった。

それに比べて直哉は生まれて初めて甚平を着たのだが全く気負う事も無く、いつも通りの澀刺はっちらつとした姿を保っている。その何事にも動じないような適応力に瑞穂は少し羨ましさを感じていた。

直哉が瑞穂の浴衣の袖口をちょいと引っ張り顔を見上げた。

「姉ちゃん、碁石投げやりたい」

「はあ？ アンタさっきもやったじゃない」

「さっきのは練習さ、ぼくは今度こそ一等のテレビゲームを捕るんだ」

直哉は腕を組み小さい身体を必死で大きく見せるように仁王立ちをした。

「ええっ、私は金魚掬すくいがしたいのに」

瑞穂は小さな不満を漏らした。

「じゃあぼくだけでやって来るよ」

「ちよっとまって、お金はあるの？」

「ない！ だから、姉ちゃん。その…。」

最初の否定は開き直ったように堂々としていたものの、その後は青菜に塩の如く声が萎しおれてしまった。もじもじと申し訳なさそうにしている直哉を見かねた。

「わかったわよ。これ以上は駄目だからね」

直哉に百円玉を二枚手渡すと直哉は嬉しそうに、にいと笑った。

「ありがとう姉ちゃん」

「それで駄目だったら諦めなさいよ。」

「へへっ、大丈夫。コツは掴んでるからね」

根拠のない自信を述べて直哉は駆け出した。

「終わったら鳥居の前で待ってるのよ！」

「分かったよー」

その言葉を残し直哉の姿は人の波の中へ溶けて消えていった。

――本当に分かってるのかしら

直哉の姿が見えなくなると瑞穂は少し心配そうに眉間に皺しわをよせた。まあ大丈夫だろうと、人の波へと歩いて行つた。

賑やかなで楽しい祭囃子まつりばやしが夜を拒んでいた。

夜空には黄金色の朧月が浮かんでいる。

夜も更けて人の足も疎まばらになりつつあり、中にはもう店を畳み始める屋台もあった。

徐々にいつもの静かな参道に戻ろうとしている。

「ちきしょう」

神社の鳥居に凭もたれ掛りながら直哉が悔しそうにしている。どうやら彼の再戦は返り討ちにされるといいう形で幕を閉じたようだ。

「もうちょつとだったのに。くっそー」

テレビゲームを名残惜しく思いながら地面に落ちている小石を蹴飛ばして独り言を云っている。

「こんな事ならばくも金魚掬いすればよかったなあ。もう、姉ちゃんまだかな？ 遅いよ」

もう祭りも終わる。

今更そんな事を思っても文字通り後の祭りだ。一つ、また一つと白熱灯を消していく屋台を遠目に眺めながら直哉は何か寂しげな気分になった。

直哉の前を沢山の人が方向に歩いて行く、もうみんな帰ってしまったのだろうか、参道は本来あるべき夜の姿に戻りつつあった。直哉は大きな溜息を吐いた。

その時何かが直哉の鼓膜かすを掠めた。

……め か……

かご… …かの …りは

小さな音なので辺りのざわめきに掻き消されてよく聞き取れなかったが謡声が聞こえる。子供の声だろうか。

い… …つ …やる

…あけの …ば…に

「誰だよ？」

声の主を見つくれるべく直哉が宙に視線を泳がせる。謡声は近くから聞こえている。

つ… … かめ… …べった

「あ、もしかして」

抑揚の無い歌声は直哉が凭れている鳥居の裏側から聞こえてくるようだ。

うしろ… …しょうめ…

鳥居の裏側を覗くと鼠色の地味な色の着物を着た女の子がちゃんと膝を抱えて座っていた。

だあれ？

「だあれ？」

直哉はにこやかに笑みながら女の子の謡う歌に合わせた。おかつは頭の女の子は白い顔を上げ、丸い瞳を直哉に向けた。

「後ろの正面は僕だよ。君は何年生だい？」

女の子は黙ったまま熟^{じゅ}と直哉の顔を見詰めている。

「ああ、ごめん。自己紹介をしなきゃね。ぼくは白川直哉。小学四

年生だよ。」

直哉は女の子の前に屈みこんだ。大きな瞳をした女の子はそのまま何も答えない。

「もしかして、このおれ様に惚れちゃったのかい？ 照れるなあ」

直哉がにやにやしながら嘯くと女の子は無表情のまま梟のように首をかくんと横に傾げる。

「じょ、冗談だよ！」

直哉は焦って前言を撤回した。

相変わらず女の子は全く喋ってくれない。無表情のまま、直哉の顔を大きな瞳で不思議そうに眺めている。

「君、不思議な目をしているね」

女の子は首を横に傾けたまま直哉の目を真っ直ぐに見ている。矢張り口を開く気配は無い。

「なんていうか、その、兎？ いや、違うな。何だろう」

女の子の傾いた首がすうと元に戻る。

うわ、動いたと直哉が驚きの声を上げたが相変わらず女の子は判で押したように無表情でその大きな瞳を直哉に向けている。

全く喋ってはくれないものの熟とこちらを見ているという事から存在自体を完全に無視されている訳ではなさそうだ。

もう意地でもこの女の子と話をしたい。そう思って直哉は次の話題を練っていた。

「直哉、そろそろ帰るよ」

突然後ろから声を掛けられたのでびくつと身体が引き攣った。

声のした方に振り返ると瑞穂の姿があった。手に金魚の入った袋をぶら提げ、クレープをむしゃむしゃと頬張っている。

「姉ちゃん…」

直哉は座ったままの姿勢で瑞穂の方に顔を向けた。

「アンタ何してんの」

「いや、この子とちよつと、その…仲良くなりたくてね」

鼻の下を擦りながら直哉は照れ臭そうにしている。

「この子ってどの子？」

「だからこの…」

直哉は正面に顔を向け直した。しかし目の前にあった筈の女の子の姿は忽然と消えていた。

あれえ、と直哉は気の抜けた声を上げた。

「何言ってるのよ、ほら帰ろ」

直哉は頷いて瑞穂と一緒に鳥居を後にする。途中、鳥居の方を振り返って見たが矢張り誰もいなかった。

夏祭りの楽しいざわめきが遠ざかっていく。

ぷわー

「何なのよそれ」

ぷわー

「五月蠅いわよ、ちよつと」

二人は田圃たんぼの畦道あぜみちをとぼと歩いていた。

直哉が近道だと云うのでここを通る事にしたのだが夜の田圃は暗くて気味が悪い。それに畦道と云ってもただ田圃の間に土を盛っただけのものなので凸凹でこぼこしていて歩き難い。

頼りない月明かりだけでは足を踏み外して水田に落ちてしまいそうで自然と歩くのが遅くなる。稲の陰に隠れている蛙達の合唱会が行われている。

ぷわー

「恥ずかしいからやめなさい！」

瑞穂が声を張った事に蛙達が驚いた為なのか合唱会は一時中断した。

「碁石投げの残念賞だよ」

直哉はストローの先に風船の付いた笛の玩具おもちゃで嬉しそうに遊んでいる。

静かな畦道に笛の玩具の間拔けな音だけが飴くだまする。

「姉ちゃん、本当にいたんだよ…」

瑞穂は横を歩く直哉の顔に視線を落とし、誰かと尋ねた。

「着物の子。鳥居の所にいたんだよ」

「ええ？そんな子いなかったじゃない」

瑞穂は解げせないといった様子で答える。

「じゃあ、また…」

沈んだ声の直哉に瑞穂は眉を顰ひそめて訊く。

「また幽霊？」

こくりと頷き、直哉は先程までの活発な様子とは打って変わって黙り込んでしまった。

直哉には幽霊が見える：らしい。

今までも窓の外から男の人が覗いているとか、枕元にお婆さんが正座しているとか、誰も居ない筈の部屋で子供の笑い声が聞こえるとか直哉の幽霊目撃談は後を絶たない。

一番新しい目撃談と云えば女瀬川によぜの幽霊の事だ。

女瀬川によぜというのは学校の帰り道にある溝どぶとも見間違えそうな細い用水路のような川の事だ。

川自体の深さはあるが、水量が少なくて雨でも降らない限り水面は膝にも届かないであろう程浅い。

水はお世辞にも綺麗とは云えない。

それに川岸は垂直に近いほど急で、しかもアスファルトで表面を固められている。川岸と云うか寧ろ壁と表現した方が良いでしょう。一度落ちてしまったら蟻地獄のように這い上がって来られないような気さえする。

そんな腥なまぐさい雰囲気なまぐさのする川の底から女の人を手招きしていたと云うのだった。

瑞穂もその時は一緒にいたのだが何も見えなかった。しかし想像しただけでも身の毛が弥よた立たった。

そして、その時の直哉の怯え方は異常だった。川から身を隠すように瑞穂の腰にしがみ付き半狂乱に泣きじゃくっていた。

それも瑞穂は冗談か何かの見間違いだとは思っているのだが矢張

り不気味だ。

瑞穂はそんなものを一度も見た事がないので幽霊など信じてはいない。しかし、直哉が自分には見えない何かに怯えている姿を見ていると何だか鬼魅きみが悪い。

「アンタ、本当に見えるの？」

訝しげに問いかけると直哉は再びこくりと伏し目がちに頷き、たぶんと呟いた。

「じゃあアンタ今日は幽霊をナンパしたの？」

重くなりすぎた場の雰囲気但至少でも和ませようと瑞穂は冗談ぼく言った。すると直哉は膨れっ面を上げた。

「違うよ、ぼくがそんなチャラチャラしたことするわけないじゃないか！」

思った通り直哉は少し冗談に乗って来た。

「それでもあの子は絶対ぼくに惚れてたぜ。恋する瞳ってやつだったよ、あれは」

にやにやしながら直哉は顎に手を遣った。切り替えの早い子だ。

瑞穂は呆れたように溜息を吐いた。

「そんな訳ないでしょ、女心が解ってないわねえ。だから幽霊さんにも振られたのよ」

ぶー、と直哉が膨れている。

再び蛙達の合唱が始まった。

「ほら、蛙もアンタが振られたの馬鹿にしてるよ」

瑞穂がくすくす笑って擲からかう。蛙達はげこげこと歌声を絶やさなかった。

ふと、直哉の足が止まる。

「どうしたの」

「あ、あそこ」

直哉は田圃の奥の方を指差した。

「誰かいる」

瑞穂もぞくりと悪寒がしてその方に目を遣った。しかし夜の田圃

は闇に包まれたままだった。

「何か光ったんだ」

「田圃の水が反射したんじゃない？」

「こんなに暗いのに反射なんかするわけないよ！」

瑞穂の答えに直哉は不安げに声を荒げる。

「それに、そんなのとは違う。何か紅い光が……」

正体不明の不気味な気配に怯え、二人は寄り添いながら辺りを見回す。

「ほら、あそこ！」

直哉が暗闇に指を向けた。目を凝らしてよく見ると紅い光が朦朧ぼんやりと宙に浮かんでいる。

「ひ、人魂だよ、姉ちゃん」

それは一つではない。田圃の至る所、瑞穂の足下にも無数に漂っている。

「あははは」

「姉ちゃん、何で笑ってるんだよ」

声を上げて笑う瑞穂を直哉が怪訝けげんな面持ちで見上げた。

「あれは蛍、平家蛍よ。」

え、と声を洩らし直哉は涙ぐんだ目を丸くした。

「ほらよく見てみなさい」

漆黒の闇が支配していた空間は暫し暖かい光の群れに包まれていた。

「うわあ、きれいだね。ぼく初めて見たよ」

目尻にまだ涙を蓄えたまま興味深そうに蛍の光を眺める無垢な弟の顔を瑞穂は愛おしそうに見つめた。いつも生意気な事ばかり云っているが偶たまには可愛い顔をするものだ。

「蛍ってきれいな川にしかないんじゃないの？ ぼく図鑑で見たよ」

「多分それは源氏蛍ね。平家蛍は田圃とか池とか流れない水の近くに住んでいるのよ」

瑞穂はそう言いながら自分も光の群れの方へ向き直した。

そしてすうと大きく息を吸った。

「夏は夜。月の頃は更なり。闇もなお。蛍の多く飛びちがいたる。また、一つ二つなど仄かに打ち光りて行くもをかし。」

一息に言ったので息を切らしてしまった。

「え、お菓子はどうしたの？」

「へへん、枕草子よ」

両手を腰に当て、胸を張って瑞穂は得意気に答える。

「何それ？」

「国語の時間に習ったの」

「何て意味？」

瑞穂はこめかみを人差し指で押さえた。

「ええと確か、夏は夜が良い。月が出ていればもっと良いし真っ暗でも良い。蛍がたくさん飛んでも良いし、ちよつとだけでもそれはそれで良いって意味だったかな」

「要するに何でも良い（・・）んだね」

つい先程までの泣き出しそうな顔は何処へ行ったのか、直哉はへらへら笑っている。

「んん、まあそんな訳じゃないと思うけど…兎に角、昔の人は自然の事に敏感だったって事よ。ほら、今みたいに蛍光灯や扇風機も無いでしょ」

直哉が難しそうな顔をする。

「誰がそんな事言ったんだよ、それに昔ってどれぐらい昔なんだい？」

「清少納言。今から千年以上も昔のおばさんね」

「ふーん」

直哉にはどうでも良い事のようにだ。

「千年以上も昔から月や蛍は綺麗だって思われてるって事よ。アンタにはちよつと難しかったかな？」

「ぼくは夏なら西瓜とかかき氷が良いな。あとお祭りのりんご飴とかたこ焼きとか」

見事な程に悉く食べ物しか頭に浮かんで来ないようだ。しかも、たこ焼き以外は総て甘い物で占められている。

「もう、アンタって本当に風情ってもんが無いわね」

瑞穂は直哉の頭に手を置きくしゃくしゃと撫で回した。

「そんなんだから幽霊の女の子にも振られるのよ」

「もうその事は言わないでよお」

困った顔をしてぶんぶん頭を振り、瑞穂の手を退けようとする。擲いもするし時には引っ叩いたりもする。しかし、瑞穂はそんなたった一人の幼い弟を本当に愛おしく、大切に思っている。

もしこの弟が危険な目に遭ったとすれば命を張っても守ってやりたい。それ程までに直哉の事が好きだった。

「じゃあ、そんな可哀想な子にはプレゼントをあげましょう」
「なにになに」

直哉が目を輝かせ仔犬のように跳び付いてくる。食べ物でも貰えるのかと期待しているのだろうか。

「う、ちよっと待ってね」

瑞穂は少し困った顔をして浴衣の懷をこそそと探った。

ちりん

殺風景な田圃に甲高い鈴の音が響き亘った。

瑞穂の細い指は鈴の付いた小さな紅い袋を摘んでいる。

「何これ」

「さあ、お守りじゃない？」

直哉は不思議そうな表情でそれを見た。

「ご神木の下に落ちてたのよ」

「なんだよ、拾い物かよ！」

直哉がまた膨れながら文句を言う。

「いいわよ、じゃあ私が貰っとく。ご神木の下に落ちてたんだからきつと不思議な力が宿ってると思ったのになあ。折角あげようと思

ったのに残念だわ」

瑞穂がぷいと視線を外すと直哉があたふたしながら弁解してきた。
「待って待って、姉ちゃんごめん！ぼく欲しいよ！」

これぐらいの齡の男の子は不思議とか神秘とか云った言葉に弱いらしい。

あまりの単純さに笑みが零れる。^{こぼ}

「はいはい、あげるから落ち着きなさい」

瑞穂が鈴付きの紅いお守りを差し出すと直哉はその不思議な力とやらの畏怖するように丁寧^{ていねい}に両手でそれを受け取った。

お守りが直哉の両手に降り立った時、再び鈴が小さく鳴いた。

「えへへ、ありがと。姉ちゃん」

直哉が齒を見せながら笑顔を見せる。もう青海苔は付いていないようだ。

「開けていい？」

満面の笑みでこちらを見ている。

「馬鹿……」

瑞穂は呆れたように右手で顔を覆った。

「お守りはね。開けるものじゃないのよ」

ぽかんとしながら直哉が丸い目をしている。

「開けたら不思議な力も逃げて行っちゃうよ。アンタも手から波動^{エネルギー}を出せるようになるかもしれないのに」

直哉の眼の色が変わった。

「ぼ、ぼく開けない！絶対に開けないよ！」

瑞穂は目を細めてにやにや笑う。

漫画に夢中な弟は枕草子^{やぶ}を揶揄^{キャラクタ}する事はあっても彼の中で神格化されている漫画の登場人物^{キャラクター}に関しては崇拜の対象になっているようだ。そこまで真剣になれる姿は幼稚ではあるが微笑ましい。

「男の子って本当に強いものが好きね。私にはよく解らないわ」

「姉ちゃんは女だからね、男にしかこの気持は解らないよ。強いってのは男の浪漫^{ロマン}だね」

うんうんと頷きながら直哉が手で顎を撫でる。

「そんなものなのかなあ」

本当にそういう事は瑞穂には理解出来ない。男勝りな瑞穂は明朗快活で云いたい事ははっきり云うような質たちなのだが暴力的なものにはどうも嫌悪感を覚える。強いという事も瑞穂にとっては腕力が強いという事、つまり彼女の嫌いな暴力に結びつくのだった。

クラスの男子が拳闘ボクシングの試合中継などがあった次の日に教室で拳を握り締めながら熱く語り合う姿を見てもその興奮を全く理解する事が出来ないでいる。

あれは競技スポーツだ。喧嘩とは違ってお互いの力と技を競い合っているのだと男子達は主張するがそれでも瑞穂にはどこが良いのか全く解らない。

幾ら競技いそどと雖も人を殴って傷付けて何が素晴らしい試合だと云うのだ。殴られたら痛いではないか。酷いときは血も流れるではないか。それを解っていて何故お互いを殴るのだろうか。

生来、優しい性格の瑞穂はそう思う。寧ろそうとしか思えないのだ。極端に云うと瑞穂にとって強いとは悪いという言葉と同義なのだ。

「直哉、アンタも強くなりたいの？」

「当たり前だよ、ぼくも男だもんね」

そう云って直哉はしゅっしゅっと息を洩らしながら拳を前に突き出している。この小さな弟もクラスの男子と同じなのだ。強さに魅せられた同じ男の子なのだ。

こんなに可愛い弟も強さという暴君を崇める信者の一人なのだと思うとげんなりする。

瑞穂はがっくり肩を落とし溜息を吐いた。

「直哉は何で強くなりたいのよ？」

そう問うと急に直哉は瑞穂から顔を背け、もじもじとしている。

「何なの、気になるじゃない。言いなさいよ」

「そ、それは…ちょっと」

直哉の顔にほんのり赤みが差した。この暗さでは本当は分からないのかもしれないが蛍の光も手伝って何となく彼が照れているのが分かった。

「ふん、どうせアンタ喧嘩が強くなってガキ大将にでもなりたいんでしょ？」

「違うよ！」

直哉が声を張り上げた。

蛙の合唱会は再び中断された。

直哉がこんな真剣な声を上げたのを初めて聞いた瑞穂は思わずその気迫に押されてたじろいでしまった。

「じゃ、じゃあ何でなのよ」

「だからそれは…その…」

重々しく直哉が口を開く。

「姉ちゃんを守りたいんだよ」

水を打ったような静けさが二人を包んだ。

その沈黙を振り払うように直哉が続ける。

「だって姉ちゃんは女だろ。今は姉ちゃんの方が大きくて強いけどその内ばくの方が大きくなるし強くなる。だからそれからはばくが姉ちゃんを守りたいんだ」

顔を真っ赤にして直哉が早口に言った。その両の小さな拳は強く握りしめられていた。

「馬鹿ね…」

瑞穂は屈み込み、後ろから小さな弟を抱きしめた。

やめろよ恥ずかしいよと直哉はもぞもぞと抵抗する。

それを諫めるように更に強くぎゅうと力を込める。

「アンタに守られるほど私は弱くないよ」

直哉は抵抗するのを止めた。

二人の時間はそのまま暫く停止していた。蛍がふわふわと二人を

照らしながら漂っている。

「でも、ぼくは強くなりたいよ。いつか姉ちゃんを守れるぐらい」
瑞穂は弟のまだ頼りない肩に顔を埋めた。今にも涙が出そうな程に嬉しかった。

「怖がりで、臆病で、間抜けで、おまけにチビのくせにいつちよま
えな事、言ってくれるじゃないの。姉ちゃんは嬉しいぞ」
本当に嬉しかった。

瑞穂はすっと立ち上がり直哉の肩を押しながら蛍の飛び交う畦道を歩きだした。

「ほら、もう行くよ。私を守るんなら女瀬川の幽霊なんかにいちいちビビってるんじゃないのよ」

瑞穂は必死で取り繕い冗談を言った。

照れた顔を見られないように、こちらを振り向かせないように直哉の肩から手を離さなかった。

「何だよ、もう離してよ」

直哉が瑞穂に肩を押され一歩、また一歩と足を踏み出す。その度に彼が握り締めているお守りの鈴がちりん、ちりと響く。

「あ、早く帰らないと母さんの雷が待ってるよ！アンタ手始めに母さんから私を守ってみなさい」

「ちよっと待って、それは無理だよ！」

再び直哉の声は子供らしいものに戻った。

「じゃあさっさと帰るわよ。急ぎなさい」

瑞穂は直哉の髪の毛をむんずと掴み、そのまま引っ張りながら歩いてくると歩きだした。

「痛てえ！何すんだよ」

直哉の声を無視してそのままぐいぐいと引っ張って行った。勿論それは直哉の逞しい言葉に対する照れ隠しだった。

急いで家に帰ったのだが、案の定二人には母の雷が襲い掛かった。
「あんた達！いったい何時だと思ってるの！」

「そんなに怒らないでよ。約束通り十時に帰って来たじゃない」

「時計を見てごらんさい。三分と四十二秒オーバーしてるでしよ
うが」

「もう、ごめんなさいってば！」

瑞穂が母と問答を繰り返している間、直哉は瑞穂の後ろに隠れながらおどおど様子を窺っていた。

どうやら守ってくれるにはまだまだ早いようだ。

瑞穂は風呂で今日一日の汗を流し、部屋着に着替えて鏡台の前に立ち、髪を乾かしている。すると愈々（いよいよ）一日が終わってしまう事を実感してどこか少し寂しい気分になる。

それは毎日思っていた事なのだが今日は楽しみにしていた夏祭りの日だった事もあり、尚更その思いは大きかった。今日が恋しい。無理をして身に纏まとった着慣れない浴衣から解放されたという思いもあったが洗濯籠に脱ぎ捨てられたその紅い浴衣を見ると、もう来年まで着る事は無いのかと切なく思う。

物にも魂があるのならこの浴衣はどう思うのだろう。

真っ暗な押し入れの中で言葉を発する事も出来ず、一年間も独りぼっちで自分を待ち続ける。

もしかすると来年はこの浴衣を着ないかもしれない。

そのまた次の年も着ないかもしれない。

もう二度と着ないかもしれない。

そうすると自分はこの浴衣の事を忘れてしまうだろう。

そんな事を考え出すとこの浴衣の事が何だか可哀想になった。

髪も大方乾いてきた所で九十九神おおかた つくも がみというものを思い出した。

誰から聞いたのかも覚えていないし、もしかすると本で読んだのかもしれない。

兎に角そんな言葉が記憶の海から浮かんで来た。

確か長い年月を経た道具には魂が宿るといふような話だった。お化けや妖怪みたいなものだろうと考えていたが霊的なものを信じな

い瑞穂は余り怖いとも思っていなかったし、はつきり云って何とも思っていなかった。

しかし、押し入れという檻の中に閉じ込められている浴衣の事を想像すると何か哀しさが込み上げてきた。

そう云えば子供の頃に持っていた人形や絵本は何処へ行ってしまったのだろうか、塵芥^{ごみ}として捨ててしまったのだろうか。そんな事を考え出すと何とも云えない罪悪感^{ざいごく}に苛^{いら}まれる。

瑞穂の足元でその紅い浴衣は主を失い、生命感無くだらりと洗濯籠^はから袖を食^はみ出させている。

忘れられるという事の辛さが何となく解ったような気がした。

もし自分が浴衣の立場にあったならと想像したら背筋がぞつとする。

主人はいつもすぐ傍^{そば}に居るのにその事に気付いてはくれない、否^{いや}、そこに居る事すら忘れられてしまっている。

悲しくて、寂しくて、私はここだよと叫びたくてもそんな事は出来^こない。

ただ凝^じとそこに居る事しか出来ないのだ。

余りに哀し過ぎる。

そう考えると死んでしまう事自体よりも忘れられてしまう事の方が怖ろしいような気がしてきた。

もしも、今自分が死んでしまったとしたら…きっと父母、直哉、それに中学の友人達は自分の葬式に出席してくれて自分の死を悼んでくれるだろうし、泣いてもくれるだろう。

しかし、家族は覚えていてくれるとしても友人達は中学を卒業したらその先の姿が無い自分の事は皆の記憶から徐々に消えてゆくのだろう。

そして何十年も経てば父母も亡くなり私を覚えている人は段々と少なくなる。直哉は覚えていてくれるだろう。大人になった彼は奥さんと子供を連れて時々お墓参りにでも来てくれるかもしれない。

やがてその直哉も死んでしまうと、どうなるのだろう。

自分の事など誰も覚えていない。

否、知らないのだ。帰る場所も無い、知っている人も居ない。
つまり自分はこの世界と無関係になる。

死んでしまったら今見ているこの鏡にも姿が映らなくなるのだろう。そして最後には自分自身ですら自分自身の事を忘れてしまうのだろうか。

「厭だな…」

瑞穂は独り言のように呟いた。

その場にへたり込み泣き出してしまいたい程の不安と悲愴感に襲われた。

―やめよう、こんな事考えるのは

乾きかけの髪を振り乱し気持ちを切り替えようとした。その時、ふと鏡の中の自分と目が合った。絶対に忘れるものかと瑞穂は鏡の中の自分の姿を睨みつけ、しかとその目に焼き付けた。

ドライヤーの電源を切って瑞穂は再び鏡をじっと見つめた。さっき直哉の言葉を聞いたときの自分はどんな顔をしていたのだろう。

姉ちゃんを守りたいんだよ

あれは本当に嬉しかった。

その言葉を頭の中で何度も繰り返して思い出しているとついつい顔が緩んでしまう。

―頼もしい事言うじゃないの、本当に
鏡に映る自分の顔を見ながらにっこりと微笑んだ。

その時、家の中に甲高い悲鳴が響いた。尋常ではない程の大きな声に瑞穂ははっと夢から覚めたようになった。

直哉の声だ。

瑞穂は悲鳴のした方に走った。

二階の子供部屋から聞こえたようだった。

直哉どうしたのと叫びながら階段を駆け上がり、子供部屋の襖を勢いよく開け放った。

そこには壁に背を凭れさせた姿勢で腰を抜かしたように畳の上へたり込んでいる直哉の姿があった。

厭に静かだ。

どうしたのよ、と襖を閉めて直哉に駆け寄り屈みこんだ。

直哉は大きく目を見開いて怯えきった様子で全身をがたがた震わせている。

「姉ちゃん。あ、あれ…」

直哉の震える指が瑞穂の背後、部屋の真ん中の方へと向けられる。瑞穂はその指が示す方にゆっくり振り返る。

畳の上に鈴の付いた紅いお守りが落ちていた。

「ん、これってさっき私が拾ったお守りね」

瑞穂が手を伸ばすとお守りは生き物のようにカタカタと震えた。

え、と驚きの声を漏らして伸ばした手を咄嗟とつさに引込めた。

「何なのよこれ、何があったの」

そう問い掛けても直哉は完全に錯乱状態に陥っていてまともな返事が出来ないでいる。唯ただ、あ、あ、と情けない声を時折漏らすだけだった。

「言いなさい、どうしたの！」

直哉の肩を両手で掴んだ。

「な、中に…お守りの中に」

更に瑞穂はまるで直哉を拷問にかけているかのように肩を乱暴に揺さぶった。

「中に何があったのよ！」

感情的になった瑞穂の怒鳴り声が辺りの不穏な空気を更に増幅する。

ぎい…

あしおと
登だ。

二人は目を見合わせ、息を飲んだ。二人の躰はそのまま硬直した。
「今の音は？」

怯えた目をした直哉が訊いて来る。しかし、そんな事は瑞穂にも解る筈はない。

ぎい：

再び、その登が鳴る。

床の軋む音が聞こえる度に二人の躰はびくりと痙攣する。どうやらそれは階段の下から聞こえて来ているようだ。

ぎい：

そして、それは。

ぎい：

一段一段。

ぎい：

木造の階段を。

ぎい：

ゆっくり、ゆっくりと。

ぎい：

上がって来ている。

「怖いよ、姉ちゃん」

恐怖に慄く直哉がしがみ付き胸元に顔を埋めて来る。
おのの

ぎい：

「大丈夫よ、きっと母さんだよ」

瑞穂は直哉の小さな躰を確りと抱き締めた。

直哉を安心させる為、強気に振舞っていたつもりだが瑞穂の手もふるふると震えていた。

どうしても戦慄を抑えきれないでいる。

ぎい：

その登は階段を登り切ってしまったらしく板張りの廊下をこちらに向かって歩いてきている、気配はすぐそこまで近付いている。

ぎい：

「姉ちゃん：」

直哉の腕に力が籠る。その腕からじわじわと恐怖が滲み出て来てそれが瑞穂の軀にも流れ込んできた。

「母さん、母さんでしょ？」

瑞穂は恐怖を振り払うように声を張り上げた。

しかし返事は無かった。

ぎい：

登は子供部屋の前でぴたりと止まった。襖の隙間からは廊下を支配する闇が部屋の中に漏れ出している。

闇の中からぬうと手が伸びて来て襖の端を掴んだ。

そして、その手は襖をすう、と少しだけ開けた。

闇の奥に青白い、能面のような女の顔が僅かに覗いた。

「か、母さんじゃあ、ない！」

瑞穂は思わず声を上げた。

それはぴくりとも動かずにじっと無表情な白い顔を瑞穂達に向いている。

それは母でもなければ人間でもない。

これが幽霊とでも言うのだろうか。

「うわあああ！来ないでよおお」

とうとう直哉の心臓は限界に達してしまっただけ余りの恐怖に耐え切れず狂ったように泣き叫んだ。

瑞穂は落着きなさい大丈夫だからと、喚く直哉を強く抱き締めた。

そして襖が大きな音を立てて勢いよく開いた。子供部屋は時間が止まったかのようにしんと静まり返った。

暗い廊下にはお多福のお面を被ってじっと立っている、

：父がいた。

「わはははは、お前ら傑作だな」

お面を外して父が腹を抱えて笑う。そこには浅黒く健康的に焼けた父の顔があった。直哉の時間はまだ止まっているようで目を円く

したまま、ぽかんと口を開いていた。

「父さん、一体何なのよ！」

瑞穂は憤慨した。あれ程怖かったのにそれを見て父がお面の奥でにやにやしていた事を想像すると無性に腹が立った。

「いや、実は父さんも仕事仲間と祭りに行っててな、そこで買ったんだ。このお多福」

「お面が何かって訊いてるんじゃないの！何のつもりでこんな事したのよ」

瑞穂が臆々的に声を荒げた。

「それはだなあ……うーん」

父は腕を組んで難しそうな顔をして考える。

「面白いからに決まってんじゃないかねえか、わはははは！」

「ちよつと、止めてよ」

まるで悪戯小僧だ。

父は人を吃驚させる悪戯が大好きで普段からよくやるのだが今回ばかりは場合が場合だけに不味かった。

「それにしても直哉。お前面白過ぎるだろ、何だよ最後の絶叫は」

父は目を細めて必死に思い出し笑いを堪えようとしている。

「へ、へんっ、あれは演技さ。姉ちゃんを怖がらせる為のね。ぼくはどうせ父さんの悪戯だろうと思ってたんだ。あはははは」

声は笑っているがその眼は瞳孔が開き切っていて全く笑えていない。本当に怖かったのだろう。

「もう父さんったら……うわ、お酒臭い」

がははと豪快に笑う父は少し酔っているようだ。顔も少し赤い。どうせ缶ビールを片手に屋台のお好み焼きでも食べていたのだろう。やれやれといった様子で瑞穂は呆れて大きな溜息を吐いた。

「あ、そうだ。これ玄関に落ちてたぞ。お前らのか？」

二人は父に注目した。

「ほら、これだよ」

ちりん

父は鈴の付いた紅いお守りを摘んでいた。

瑞穂の全身の毛がぞわっと逆立った。直哉の顔は真っ青になっている。

恐る恐る部屋の真ん中の畳の上に視線を送るとそこにはさっきまで確かにそこにあつた筈の紅いお守りが無くなっている。

何が無だか全く解らない。

「何ほかんとアホ面^{づも}してんだお前ら。兎に角もう子供は寝る時間だ、こいつはここに置いとくからさっさと寝ちまえよ」

父は瑞穂の勉強机に紅いお守りを置き、ぴしゃりと襖を閉めて騒がしい聲を立てながら階段を下りて行った。

二人はそのまま暫く動けなかった。

父に言われた通り、二人は蒲団を敷き床に就いた。直哉が怖がるので部屋の電気は柿色の白熱灯だけ点けておくことにした。

瑞穂はどうも眠る事が出来ない。その原因は勿論さっき拾った紅いお守りの所為だ。

気になって仕方がない。

独りでにカタカタ震え出したり、突然消えて父の手にあったり。絶対にただのお守りではない。

「直哉。まだ起きてる？」

うん、と隣の蒲団から声が返って来る。どうやら直哉も寝就けないらしい。

「アンタあのお守り開けたの？」

「ううん、開けよう（・・・）としたの」

掛け蒲団に潜り込んでいる直哉の声は籠っていて聞き取り難かった。

「でも見えたんでしょ、中に何が入ってたの？」

返事は返って来ない。ごそごそと蒲団を被り直す音だけが聞こえ

た。

「ねえ、教えて」

「厭だ、言いたくない…」

「お願い」

直哉が蒲団の隙間から顔だけを出した。

「じゃあ、姉ちゃんの蒲団に行ってもいい？」

「うん…」

直哉は自分の蒲団から這い出し、瑞穂の蒲団に潜り込んだ。

「さあ、何を見たの？」

「歯だよ…」

「え、何それ。歯が入ってたの？気持ち悪い」

「違うんだ！」

直哉が瑞穂にしがみついた。

「歯が…生えてたんだ」

瑞穂はぞっとなって目を剥いた。

「袋の口の所に歯が生えていたんだ。それでぼくの指を齧^{かじ}ったんだよ。それに…」

「それに？」

瑞穂が合いの手を入れるように優しく質す。

「見えたんだ…」

「見えたって中身が？」

直哉が蒲団の中で首を横に振る。

「目で見えたんじゃないなくて直接頭の中に何かが映ったような感じだったんだ…どこか、変な場所が」

同じ蒲団の中にいるので直哉の鼓動が早くなっているのがよく判る。相当怖い目にあっただろう。

「何が見えたの？」

「雪が降ってる夜。あと川が見えた。田圃の横の用水路みたいなんだけど暗くて底が見えないんだ。」

「用水路？」

※

蟬が元氣良く鳴いている。

窓からは太陽の光と一緒に乾いた風が入り込みカーテンがゆらゆらと揺れる。そして勉強机にはやりかけの夏休みの宿題と鉛筆が転がっている。

瑞穂は子供部屋の畳の上に大の字になって仰向けに寝転がっていた。黒い髪が瑞穂の頭を中心に波状にばらんと広がっている。そして右手には例の紅いお守りが握られている。

一度は午前中に目が覚めて布団を畳み宿題をしていたのだが昨日の事もあり、どうも疲れが取れていなくてうつらうつらしていた。母の作った素麺そうめんを食べて午後になっても頭は朦朧ぼんやりしたままだった。

昨夜はあれ程怯えていた直哉はまるで何事も無かったかのように小学校のプール開放に行った。

本人曰く四年生では泳ぎで自分に敵う者はいないらしい。そう云えば家族で海へ行った時も確かに直哉は妙に速く泳いでいたような気がする。

一方の瑞穂と云えば今日は友人との約束なども無く、所属している吹奏楽部の練習も休みなので丸々一日予定が無い。宿題もまだまだ残っているので暇と云ってしまおうと嘘になるのだがどうもやる気がしない。

眠たそうな目をしながら瑞穂は寝転んだままの姿勢で右手のお守りを天井に翳かざした。

ちりん、と澄んだ音が部屋に飮くだする。

これは一体何なのだろうか。昼間に見ると全く不気味な印象を受けない。

徒ただ、明るい場所ですく観察すると幾つか妙な事に気が付く。

まず袋に何も書いていない事だ。

普通のお守りなら交通安全や学業成就などといった文字が刺繍されている。しかし、この絹で出来ている袋には文字は愚か模様すら刺繍されておらず、ただその鮮やかな紅を主張しているだけだった。そして、その手触り。

お守りを袋の上から指で探ってみたら中に何か入っているような感触があった。硬くて丸い、石のような物が入っているのだろうか。因みに昨日の夜、直哉が言っていた歯ちなのような物の感触は無かった。勿論瑞穂の頭の中に変な映像が流れ込んでくる事も無い。

眉間に皺を寄せて紅いお守りを見つめていると一階から母の声が響いて来た。

「瑞穂！アンタ今どうせ暇でしょ、直哉が帰ってきたから一緒に夕飯の買い物行ってきたよ」

丁度良かった。

このままだと陽が沈むまで仰向けまま動かないでいるところだった。瑞穂は寝転んだまま深呼吸をしてから勢い良く跳ね起きて襖を開けた。分かった今行くと快活に答えてばたばたと階段を下りて行った。

置き去りにされた紅いお守りがカタカタと震える。

商店街に直哉を連れてやって来た。

直哉は学校のプール開放に毎日のように通っているので真っ黒に焼けている。今日のランニングシャツに半ズボンという小学生らしい服装が合わさると本当に絵に描いたようなやんちゃ坊主の姿になる。

母のメモを頼りに必要な食材を買っていく。

「姉ちゃん、今日の夕飯何だと思う？」

プールのカルキの所為で真っ赤に充血した目をこちらに向けて直哉が訊いてくる。母のメモに書かれている食材は牛肉、じゃが芋、人参、玉葱だった。

「カレーじゃない？」

直哉が憎たらしく、ふんと鼻で笑った。

「甘い姉ちゃんは、カレーは三日前に食べたじゃないか。」

「じゃあ何だと思うのよ」

直哉が人差し指を立てながら答える。

「ビーフシチューだよ。うん、間違いないね」

―何か憎たらしい姿勢ポーズね

「何だよ」

「姉ちゃんには考察力が足りないよ。カレーに玉葱が入っていた事があるのかな？」

考察などという言葉をどこで覚えたのだろうか。にやりと笑う生意気な直哉に対抗して瑞穂が煽る。

「賭ける？」

「何をだよ？」

「五百円」

「えっ」

一瞬、直哉が躊躇とまどった。

「あらどうしたの。自信がないのかしら？」

瑞穂もにやりと笑い直哉を横目に見た。

「よし、やってやるよ。その代わりビーフシチューだったらぼくに五百円くれよ」

「いいわよ。でもうちじゃあカレーに玉葱を入れる事もあるのよ。

あはははは。全く愉快、愉快」

瑞穂の高笑いが昼下がりの商店街に飴アメした。

真夏まなげと雖も太陽の光を受けない土管の中はひんやりしている。湾曲する冷たい壁に直哉は頬を当てる。

気持ち良い。

土管と云っても勿論公園の遊具だ。

姉の瑞穂は玉葱を買い忘れたと云って独りで八百屋に走って行った。一方の直哉はこの公園で待っているように云われた。しかし容

赦なく照りつける真夏の陽射しに耐え切れず日陰を求め蚯蚓みみずのように土管の遊具に逃げ込んだのだった。そして直哉はふうと息を吐いた。

「君も暑いからここに隠れているのかい？」

直哉の隣には着物の女の子が座っている。

「君は昨日、お祭りのときにいた子だよね？」

女の子は膝を抱えたまま黙り込んでいる。

「そんなに照れるなよ。幾らぼくに惚れてるからといっても…」

女の子からは全く反応がなく、唯一点をじいつと見詰めているだけだった。

「ごめんって、冗談だよ怒らないでよ。」

直哉は頭をぼりぼり掻きながら謝った。

「君は独りで来たのかい、父さんや母さんは一緒じゃないの？」

直哉がそう尋ねると土管の中に音が暫くの間、無くなった。

おとうさんも おかあさんも しんでもうた

そんな声が、否、音が聞こえたような気がした。直哉はそれが女の子の声だと解釈した。

「ごめんよ…ぼく悪いこと聞いちゃったね」

どうも先程から謝ってばかりいるような気がする。直哉はこの女の子と仲良くなりたいと思っではいるのだが、なかなか話が噛み合わず難儀している。

正直、居心地は良くない。

「ああ、姉ちゃんまだかな。遅いよ」

夏祭りの日も同じ事を言っていた気がした。

ねえさん

珍しく着物の女の子が反応を示した…ようだ。

「そう、姉ちゃんを待つてゐるんだよ。もう戻つて来ると思ふんだけどな。」

ねえさん

再びそんな音が聞こえた。そして、暫く間を空けてから直哉が尋ねた。

「ねえ、本当に君はどこの子なの？」

女の子は相変わらず反応を示してくれない。

「何年生？」

何を訊いても何も答えてくれない女の子に直哉は本当に嫌われてゐるのではないかと心配した。そして、愈々覚悟を決めて直哉が一番気になっている事を質問してみる事にした。

「君は…幽霊なの？」

矢張り何の返事も無い。しかし、先程までの沈黙とは全く異質なものだ。空気が張り詰めていて息が苦しい。直哉は恐る恐る女の子の顔の方へと這わせていくようにゆっくりと視線を送った。

女の子は見ている。

着物の女の子は顔を直哉に向けて円い目を大きく開いている。薄暗い土管の中で女の子の瞳はまるで猫の目のようにぼうと光を放っていた。

直哉はぐくりと唾を飲んだ。不思議と怖いとは思わなかった。女の子の二つの瞳はじつと直哉を見つめている。直哉も視線を外す事が出来ずにいた。

その時、土管の外から直哉どこなの出て来なさいという呼び声が聞こえた。瑞穂の声だった。

直哉は金縛りがはつと解けたようになった。

「あ、姉ちゃんだ。じゃあぼくはそろそろ行くね」

バイバイと女の子に別れを告げると直哉は土管からもぞもぞと這い出て行つた。

眩しい。

久しぶりに見る太陽の光に目を細める。あ、いたいたという声のする方に顔を向けると、そこには買い物袋を両手に提げた瑞穂の姿があった。

「アイス食べる？」

瑞穂が声を掛けると甘いものに目がない直哉は飛び付くように駆け寄って行った。

二人はベンチに腰掛けた。

無機質な土管と滑り台とブランコぐらいしか遊具が無いのに公園は妙にだだっ広く風通しが良かった。公園を取り囲むように植えられた木々からは鬱陶^{うつとう}しい程に蝉の声が聞こえている。

瑞穂は足下に置いた買い物袋を探ってアイスキャンディーを一本取り出し、直哉に差し出した。

「気が利くじゃん、ぼくがミルク味好きなの知ってた？」

「やっぱりそれで良かったのね。アンタが大の甘党ってのは知ってたから一番甘ったるそうなのを買って来たのよ」

瑞穂のその予想は見事に的中した。

直哉は甘いものに本当に目がない。チョコレートや飴玉は勿論、台所の砂糖の減りが妙に早いと思っていたら実は直哉が毎日こっそり嘗めていたという事もあった。

一心不乱にアイスに齧り付く直哉を尻目に瑞穂は買い物袋の中身と母のメモを照らし合わせている。

「姉ちゃんが奢^{おご}ってくれてるなんて珍しいね。雨でも降るかな」

瑞穂は買い忘れないかと確認していて直哉に目も向けない。

「ああ、気にしないで。後でアンタから五百円も筆^{むし}り取るんだから百円のアイスなんて安いもんよ」

瑞穂が不敵な表情を作った。

「絶対ビーフシチューだよ！」

直哉が声を荒げても瑞穂は自信ありげに、にこにこ笑っているだ

けだった。瑞穂は買い物袋の中を確認し終えメモをポケットに仕舞った。

指に硬くて冷たい感触があった。何か金属のような物がポケットの中に入っている。瑞穂はそれをポケットから引っ張り出した。

ちりん

「え？」

二人は同時に声を上げ、同じように目を丸くした。

「何でそんなのまだ持ってるんだよ、気持ち悪いから捨ててくれよ」
直哉が不安そうな表情になった。昨夜の事を思い出してしまったようだ。確かにこのお守りは部屋に置いて来た筈だ。況してや自分のポケットになど断じて一度も入れていない。そもそもこんな鬼魅の悪い物を持ち歩こうとは絶対に思わない。

しかし、それは今ここにあるのだ。

矢張りこのお守りは普通ではない。

鈴が風に揺れ、ちりと澄んだ音を響かせる。

「ねえ、直哉」

「：何」

昨日と同じように直哉は怯えている。溶け出したアイスの雫が膝に零れ、ぴくりと躰を震わせる。

「歯が生えていたんだよね」

「うん」

瑞穂に一つの提案が浮かんだ。

「開けて…みない？」

直哉の食べかけのアイスが溶けて滑り、ぼとりと音を立てて地面に落ちた。

「噛まれるよ…」

幼い弟は今にも泣き出しそうになっている。

「大丈夫、今は昼間よ。だから怖くないって。それにもし噛まれて

も逆に噛みついてやるんだから」

直哉を安心させようと冗談を云ってみたものの矢張り瑞穂も不安を隠しきれない。大きく息を吸い込み、ゆっくりと吐き出した。

「よし、じゃあ開けるよ」

直哉が目を瞑り、こくりと頷く。

急に風が騒ぎ出した。それとは逆に今まで五月蠅い程に騒ぎ立っていた蝉達はしんと静まった。

瑞穂の細い指がお守りの紐にかかる。

自分の心臓の音が五月蠅くて気が散る。こめかみから頬に汗が流れる。

ゆっくりと指に力を込める。

風が更に騒ぎ出し、鈴が抵抗するかのようになりんと鳴る。

「姉ちゃん、やっぱりやめた方が良いと思うな…」

「何よ今更、じゃあアンタが開ける？」

「厭だよ！」

直哉に声を掛けられた所為で気が散ってしまった。気を取り直してお守りに向き合う。

指が震える。

直哉が言うように本当に歯が生えていて指を喰い千切られでもしたらどうしよう。不安は更に募る。

風は一層荒々しさを増し、瑞穂の髪が後ろに靡く。

雲が忙しなく前から後ろへと足早に頭上を駆け抜けて行く。その風に呼応するように鈴がちりん、ちりと暴れ出している。

ゆっくりと紐を引くとするすると結び目は解け始めた。

さて、この中には何が入っているのか。鬼が出るか蛇が出るか。どちらにしても碌な物が入っていないという事は何となく解っていた。

愈々結び目が解けお守りがその正体を現す。

ぽつり

瑞穂の指に一滴の水が落ちて来た。

突然の冷たい感覚に口から心臓が飛び出しそうになったが悲鳴を上げる事だけは我慢した。するともう一滴、二滴と水が落ちて来た。それは指だけでなく肩に、顔に、全身に襲いかかった。

「雨だ、夕立だよ！」

直哉の声で我に返り空を見上げた。

今までの晴天がまるで嘘のように空は灰色の雲に覆われていた。

そして、しとしとと降り始めていた雨はやがて風呂桶を引っ繰り返したように一気に襲いかかって来た。

「うわあ、直哉、さっさと帰ろう」

「う、うん」

瑞穂はお守りをポケットに仕舞い、買い物袋を手を持ち雨を避けるように直哉を連れて足早に家を目指した。

ポケットから食み出した鈴がちりんと鳴った。

まるで天の怒りのように雷がごろごろと唸り、狂ったような土砂降りの雨も夕方には嘘のように止んでいた。つい先程までまるで生命を得たようにごくごく喉を鳴らしながら雨水をがぶ飲みしていた雨樋も今ではすっかり大人しくなっていてしんと静まっている。あまどい

ただ、子供部屋の窓のから見える庭の草花に艶つやっぽく滴る雫や濡れたアスファルトの匂い、そして外から吹き込むじつとりと湿った風だけが雨の降っていた事を物語っている。

一階から母の瑞穂達を呼ぶ声が聞こえる。夕食が出来たようだ。二人してばたばたと階段を駆け下りて食卓に着くと肉じゃがが用意されていた。

二人の賭けは引き分けに終わった。気の抜けた二人を尻目に昨日、瑞穂が持って帰って来た金魚は電話台の上の金魚鉢の中で気持ち良さそうに泳いでいた。

「あれ、カレーじゃないの？」

「カレーに玉葱は入れないでしょ」

母が片眉を吊り上げて笑う。

「だってこの前は入ってたじゃない」

「あれはハヤシライスよ、辛くて悪かったわね」

「ぼくはシチューだと思ってたよ」

直哉が大きなじゃが芋を頬張りながらもごもご喋る。

「うふふ、直哉の方が一枚上手ね」

目を細くして母が瑞穂の方を見た。

「何だよ」

瑞穂は不満げに訊いた。

「肉じゃがってのはね、日露戦争で活躍した山本五十六って人が部下にビーフシチューを作るように言った事が始まりなのよ」

直哉が興味深そうに質問する。

「なんでビーフシチューが肉じゃがになるの？」

「イギリスで食べたビーフシチューの味が忘れられなくてね、日本に帰ってから部下に材料だけ教えて作るように言ったの」

うんうんと直哉が首を縦に振る。

「何の事かさっぱり解らない部下は取りあえず煮込んで醤油で味付けしたの。するとそれはそれで美味しかったんだって。それが肉じゃがよ」

母の豆知識にほうと直哉が感心しているところに、ちょっと待ってよと瑞穂が横やりを入れた。

「山本五十六って日露戦争じゃなくて太平洋戦争じゃなかった？ほら、真珠湾攻撃の人。この前テレビで歴史特集してたよ」

「あら、そうだったかしら。じゃあ誰だっけな。まあ誰でも良いんだけどね」

母は誤魔化すように笑って話を逸らそうとした。そこに都合良く直哉が別の話を切り出した。

「父さんは？」

「さあ、また仕事の人達とご飯でも食べに行ってるんじゃないかな」

母は淡々と答えた。

「いいなあ大人は。好きな時に好きな物を食べられるんだもん」

「それに何時に帰って来ても怒られないしね」

食卓を囲んでから初めて瑞穂と直哉の意見が一致した。

「あと勉強もしなくていいもんね」

そう直哉が付け足すと二人は顔を見合せてにいと笑った。

「私、早く大人になりたい」

「ぼくも。大人になったら色んな所を旅するんだ」

二人を見て母が優しく微笑む。

「子供は汚れがなくて良いわね。大人は大人で大変なのよ」

母の言葉に瑞穂は怪訝な表情をした。

「大人になると汚れるの？」

「まあ、色々知っちゃうとね。世の中には知らない方が良かったな
って事も沢山あるのよ」

母は苦笑いをしている。

「でも私は父さんや母さんが汚い大人だなんて思わないけどな。寧ろ理想の大人かも」

瑞穂の言葉に口元を綻ばせた母は少し安心したようだった。今度は照れ隠しの為か再び話をすり替えようとした。

「うふ。ありがとうね。ところで直哉はどんな大人になりたいの？」

「父さんみたいになりたい」

快活に直哉が答えたその時、ほんの一瞬母の表情に翳^{かげ}が差した、ように見えた。それを瑞穂は見逃さなかった。しかしそれは本当に一瞬だった為、見間違いか気の所為だったのかもしれない。

もう一度母の方を見ると先程までと同じ、にこにこ微笑む母の顔があった。

「だって父さんカッコいいじゃん。なんか男らしくてさ」

直哉は本当に父に憧れている。

昨日のように父に押われてもそれでも父の姿を心のどこかで追いつけているのだ。同じ男として直哉にとって父が理想の姿なのだろ

う。

「父さんの事、好きかい？」

「もちろん！」

「そう…」

母の声は少し塞ぎ込んでるように聞こえた。流石に気になった瑞穂が問い掛けた。

「ちょっと、どうしてそんな事訊くのよ」

母は瑞穂の声で目が覚めたかのようにはっとした。

「あ、うん。母さんちよつとだけ父さんにやきもち妬いちゃったな。直哉があんまり父さんばかり褒めるもんだからさ」

「何言ってるのよ。もちろん私は父さんも母さんも好きだよ。この際だから正直に言っちゃうと母さんみたいな大人になりたいと思ってるよ」

照れ臭かったが母の様子が少しおかしいのでそんな事を云った。

「ありがとう、本当に嬉しいわ」

再び母に笑顔が戻った。しかし、その笑顔は矢張りどこか翳を含んでいるようでぎこちなかった。気の所為だとは思うが態わざと笑顔をとり繕っているのだろうか。瑞穂はそんな印象を受けた。

夕食を済ませ風呂で今日一日の汗を流した後、子供部屋に戻ると珍しく直哉が勉強机に向かっている。どうやら宿題の絵日記をつけているらしい。瑞穂が後ろから覗き込むと丁度絵を描き終えた所だったようだ。

二人の子供が描かれている。

一人は白いランニングシャツを着ている。これは直哉だろう。小学生の描く絵なので決して上手くはないが特徴は良く表せている。そしてもう一人。

―誰だろう

^{だいたい}鼠色の服を着たおっぱ頭の女の子だろうか、その女の子の瞳は橙色に塗られている。

「この子は誰？」

瑞穂は絵の中の女の子を指差した。

「昨日言ってた子だよ」

直哉が座ったまま体を仰け反らせて瑞穂を見上げる。

「ああ、鳥居の前にいたって子か」

「あら仲良くなれて良かったね。さっき公園で遊んでたの？」

直哉は前を向き直して、うんと頷く。

「こんな可愛い幽霊ならぜひ私も会ってみたいわ」

瑞穂は適当に話を合わせるように云うと、直哉は不気味な薄ら笑いを浮かべた。

「な、何よ。気持ち悪いわね」

「そっか、姉ちゃんには見えないんだよね…」

抑揚の無い声で直哉がぼそぼそと呟く。

「会いたいですよ？」

直哉が一言何かを言う度に瑞穂はぞわぞわと悪寒がして来た。鳥肌が立つのを抑えるように腕をさす摩る。

「何を言ってるの」

直哉は直ぐに返事をせず、一呼吸置いた。

「そこに居るじゃないか」

冷や汗が瑞穂の頬を滴る。

「姉ちゃんの後ろだよ…」

ひっ、と短い悲鳴を上げた。

後ろに。

本当に後ろに居るのだろうか。絵の少女はその橙色の瞳をじっと自分の背中に向けているのだろうか。

瑞穂は冷たい水を被ったような寒気がした。直哉は相変わらず不気味にくすくす笑っている。

瑞穂はごくりと生唾を飲んだ。

覚悟を決めて素早く後ろを振り返った。しかしその姿はどこにも無い。

「どこ…なのよ」

引き攣った声を何も居ない方へ投げかける。その声に答える者はおらず部屋の中には無音が充滿していて、瑞穂自身の心臓の音すら五月蠅く感じた。恐怖と緊張で息が詰まる。苦しい。その時、瑞穂の足下で何かが蠢く気配があった。そして足に何かが触った。

瑞穂は息を飲んだ。

ゆっくりと視線を下へと持って行くと瑞穂の太腿を子供の手が攫つかんでいた。

きやあ、と大きな悲鳴を上げた。

「あはははは。やーい、引っ掛かった！」

悪戯小僧が瑞穂の太腿を攫みながら大きな口を開けて笑っている。瑞穂は振り返り直哉を睨みつけた。

「まったく単純だねえ。まさかこんな手に引っ掛か…」

直哉が云い終わる前に瑞穂は悪戯小僧の頭を叩はたいていた。悔しかったので一寸強めに力を込めた。

「いってえ！冗談だよ」

「何言ってるのよ、本当に怖かったんだからね！驚かした罰よ！」
瑞穂の鬼のような凄まじい剣幕に押されて直哉はごめんごめんと詫びるだけだった。

「でも姉ちゃんも女らしい所あるんだね、ちよっとは可愛かったぜ」
直哉は目を細めてにやけている。口では謝っているがいまいち懲りていない様子の弟にもう一度鉄槌を下した。

「いってえよ！もう許して！」

夏の夜に子供部屋の直哉と庭の鈴虫の鳴き声が響き渡る。

その後、瑞穂も夏休みの宿題を少し片付けていたら思ったより遅い時間になっていたのもう今日は眠る事にした。直哉はというと日記を仕上げてしまうと、さっさと蒲団を敷いて寝てしまった。

直哉の勉強机の上には今日の日記が開きっぱなしで置いてある。日記だけでなく色鉛筆や筆箱も何もかも出しっぱなしだ。まるで宿

題をしている途中で神隠しにでも遭ってしまったかのようだ。

別に勝手に見るつもりなど更々無かったがこれ見よがしに日記が開かれているので厭でも目に入る。

つつい読んできました。

8月9日 はれときどき雨

朝はプールでおよいだ

たのしかったです

そのあと、ねえちゃんと買いものに行った

ばんごはんが何か当てるしょう負をした

ねえちゃんはカレーでぼくはシチューと思った

ほんとは肉じゃがだったけどね

ねえちゃんが玉ねぎを買いわすれたから公えんで買ってた

そのとき女の子と友だちになりました

名まえとかは知らないけどいい子です

ばんごはんを食べたあとねえちゃんをびっくりさせた

おぼけの話をしたらきゅーって言ってとび上がった

とてもおもしろかったです

「もう、直哉ったら」

最後の三行を読んで苦笑した。

瑞穂も押し入れから蒲団を出して直哉の寝ている隣に敷き、電気を消した。

暗くて何も見えなくなった。

手探りで足元にある自分の蒲団を見つけ出し、そこに潜り込んだ。
目を瞑り、今日一日の出来事を反芻^{はんすう}し始める。

直哉の憎たらしい悪戯も印象深いが最も気になるのは矢張り紅いお守りの事だ。

絶対に普通ではない。

昼間、買い物に出かける時には間違いなくあれは家に置いて来た筈だった。しかし、気が付いたら自分のポケットに入っていた。まさか自分を追ってきたとでも云うのだろうか。ある一つの言葉が穂の脳裏を過った。

九十九神。

あのお守りはまさか九十九神なのだろうか。誰からも忘れ去られたお守りが寂しさの余り寄り添って来るのだろうか。

それともあのお守りには何者かの幽霊が取り憑いていてこの世の者を黄泉の^{よみ}世界へ引きずり込もうとしているのだろうか。

どちらにしろ^{なまぐさ}腥い事には変わりない。不安が更なる不安を呼び、その不安がまた別の不安を呼び込んでいる。悪循環の繰り返しだ。

次に気になる事といえば直哉の日記の事だ。

橙色の瞳の少女。

先程、直哉に投げられた事もあってか余り気持の良い話ではない。

自分には姿が見えない分、ある意味でお守りの事よりも不気味な存在だ。

先ず橙色の瞳という時点で普通ではない。まるで暗闇で妖しく光る猫の目のようではないか。

それはもう人間ではない。

直哉はその子の事を幽霊だと言っているが自分にはそれが見えないので、どうともはつきり云えない。いつもは幽霊を怖がっている直哉が幽霊と仲良くなろうとしているのは今回が初めてだ。その幽霊とは余程気が合っているのだろうか。

幽霊と気が合う。我ながら変な表現だと思った。

確か昨日も直哉は惚れたの腫れたの嬉しそうにその幽霊の話をしていた。

―昨日？

何かを思い付いたように目を大きく開いた。暫く目を瞑っていたので暗闇に目が慣れてきていた。横を向くと直哉の寝顔が暗闇から浮かび上がる。

直哉が橙色の瞳の少女と初めて会ったのは昨日の夜。そして、鈴付きのお守りを拾ったのも…。

昨日の夜。

先程、自分で考えたお守りの正体の事を思い出した。九十九神の方ではない、何者かの霊が取り付いているという方だ。

お守りも少女の幽霊もほぼ時を同じくして、更に同じ神社の参道に出現した。

もしかすると、お守りにはその少女の幽霊が取り憑いているのではないだろうか。そして、もしその少女は生きている者をあの世に引き摺り込もうと虎視眈々と狙っているとすれば…。

直哉が危ない。

ちりん

瑞穂は吃驚^{びっくり}して飛び起きた。

まどろみの中を彷徨っていたがその甲高い金属音の所為で一氣に現実に戻って来た。暗闇の中で目を大きく見開き音のした方向を睨む。

鈴が畳の上でカーテンの隙間から洩れる月明かりに照らされぼんやりと光を放っている。

それは勉強机の上に置いてあった筈だ。何かの拍子に落ちたのだろうか。否、窓も閉まっっていて風などが吹き込む筈も無い。もし風が吹いたとしても落ちている場所が机から離れ過ぎている。

まるで机の上から瑞穂に向かって跳んで来たような所にそれは落ちていた。

瑞穂の息遣いが荒くなる。心臓が口から飛び出そうな程に激しく脈打つ。躰が金縛りに遭ったように動かない。

一階から何かが割れるような音が聞こえた。その音をきっかけに瑞穂の躰に自由が戻った。

「母さん、大丈夫？何があったの」

瑞穂は弾かれるように立ち上がり電気を点けてそう云うと足早に階段を駆け下り一階に向かった。

「ああ、父さん。帰ってたんだ」

台所には父と割れた皿を片づける母がいた。

「ごめんね。起しちゃった？」

母が屈み込んだ姿勢のまま云った。

「ううん、まだ寝てなかったから大丈夫だよ」

「何でもねえからお前はもう寝てな」

父がぶっきらぼうに云う。少し呂律が回っていないし、心なしに顔も赤く火照っている。

また酔っているのだろうか。

「ほら、子供はもう寝ろって。俺は風呂にでも入って来るわ」

父は一人、風呂場の方へと消えて行った。

「母さん……」

割れた皿の破片の片付けを手伝おうとした瑞穂を母が制止した。

「ほら、父さんも言ってるでしょ。アンタはもう寝てなさい」

「う、うん」

半ば追い返されるようにして部屋に戻った。

何も知らない弟は口を半分開けたまま、すやすや眠っている。直哉は寝相が悪いので掛蒲団が肌蹴はだけてしまっていた。

「悔しいけど正直、今日はアンタに一本取られたな」

瑞穂はそっと掛蒲団を掛け直してやった。

畳の上に横たわる鬼魅の悪いお守りも机の上に戻し瑞穂も床に就いた。

※

教室の窓の外からは今日も蝉の声が聞こえて来る。その声が夏の暑さを更に倍増させているような気がして瑞穂は少し鬱陶しく思っていた。

今日は中学校の登校日という事で夏休みだと云うのに朝から教室の自分の席に座っている。提出期限が今日までの宿題を提出し、担任からはちゃんと勉強しているか、夜遊びはしていないかなどと、生活態度をくどくどと注意された。

しかし、級友達の顔を見られた事は嬉しかった。部活以外の級友と会うのは久しぶりでどこか懐かしさすら感じた。

説教じみた話は昼前まで続いたので部活は午後から始める事になった。

吹奏楽というのは意外と体力を使うもので、特に金管楽器は大きくて重い物が多く持っているだけでもなかなか疲れる。幸い瑞穂の担当するクラリネットはトランペットやチューバなどと比べるとそれ程重量がある物ではない。

しかしどの管楽器を演奏するにしても相当の肺活量が必要だ。一曲演奏すると五十米メートルのプールを全力で泳いだ時と同じ位息が切れる。瑞穂も慣れるまでは少し演奏するだけでも顔が真っ赤になっていた。だから体力作りも必要になってくるのだ。瑞穂達の吹奏楽部では冬場、体操服に着替えてランニングや筋力トレーニングなどを行うようにしている。文化部ではあるが運動部のような側面も持ち合わせている。

しかし流石に真夏に体力作りという事はせず、今日は三時間程の全体練習の後、来る秋の文化祭きたでの演奏会へ向けてのミーティングを行っていた。年に一度の大きな晴れ舞台なので綿密に計画を練っていた為にミーティングもかなり長引いてしまった。

帰る頃には夕方になっていた。

クラリネットを抱えて、疲れてくたくたになりながら下駄箱まで

やってきた。

深く息を吐いて下駄箱の取っ手に手を掛ける。ふと正面玄関から外の様子を窺うともう随分陽が傾き始めているようだった。早く帰ろうと下駄箱を開けた。

「白川先輩：」

後ろから声を掛けられて、はっとしてそちらを向いた。おさげ髪の女生徒が重たそうにトランペットを抱えて立っている。吹奏楽部の後輩だった。

ちりん

瑞穂はぞくりとした。

「これって先輩のすよね？」

おさげ髪の後輩はスカートのポケットから件のお守りを取り出して云った。瑞穂の血の気が引いた。勿論態々こんな気持ち悪い物を持ち歩く筈も無く、家に置いて来た筈だ。また、付いて来たのだろうか。

「これ：これどこにあったの？」

「ミーティングのときに先輩が座ってた席の下に落ちてましたよ」

「そ、そう。態々（わざわざ）ありがとう」

必死に気丈を取り繕い、後輩からお守りを受け取った。瑞穂は靴を履き替えて後輩に一瞥してから立ち去ろうとした。

「ちよっと待って下さい先輩」

「どうしたの？」

後輩の明るい声に瑞穂の足が止まる。

「それってもしかして例のお守りじゃないですか？」

おさげの後輩は首を傾けながら瑞穂の持っているお守りを熟と観察するように見ている。

「例のって何？」

「噂ですよ」

おさげを揺らしながら興味深そうな顔で歩み寄って来た。

「何でも願いが叶う幸せのお守りです」

「願いが…叶う？」

瑞穂は怪訝そうに眉を顰める。

「なんでも鈴の付いた紅いお守りが目の前に現れて、それが持ち主の願いを何でも一つだけ叶えてくれるんですよ。先輩のお守りってもしかしてそれなんじゃないですか？」

おさげの少女は目を細めて笑った。

絶対に幸せ（・・）と銘打たれるような気持ち良い代物ではないと瑞穂は心の中で呟いた。しかしこの少女は目を爛々（らんらん）と輝かせて更に問い掛けて来る。

「ねえ、これどこかで買ったんですか？」

「買ったんじゃないのよ。お祭りのときにご神木の前におちてたの」少女は目を大きく開いてはしゃぎ出した。

「うわあ、それじゃ絶対に幸せのお守りですよ！いいなあ先輩」その少女がはしゃぐ姿はまるで子供のように幼く見えた。まあ、つい数ヶ月前までは本当に小学生だった訳なのでそう見えても無理はないだろう。

「文化祭の演奏会が上手くいきますようにってお願いしてくださいよ。あ、私掃除の途中だったんでそろそろ戻りますね。それじゃあ失礼します」

そう云っておさげ髪の後輩はそそくさと校舎の奥へと走って行った。リノリウムの床の上を駆けて行く彼女の軽快な跣がだんだんと離れてゆく。

そして瑞穂は一人下駄箱の前に取り残された。外から差し込む斜陽が瑞穂の影を不気味に長く伸ばしている。

歯が生えていて噛みついてきたり、夜中にひとりで動き出したリするような不気味な物が幸せのお守りの訳がない。寧ろ不幸のお守りとか呪いのお守りと云われた方がまだ信憑性がある。どうせ捨てても無駄なのだろうと半ば諦めながらお守りをシャツの胸ポケット

トに仕舞い、正面玄関から校舎を出た。

太陽が紅い。真夏だというのに今日は陽の傾くのが厭に早いような気がする。瑞穂は家路を急いだ。

おさげ髪の後輩は持ち主の願いを叶えると言っていた。
持ち主。

瑞穂は夜の畦道でこのお守りを直哉に譲った…つもりだ。

しかし実際にお守りを拾ったのは瑞穂自身だ。そして今までの事を良く思い返してみるとこの鈴の音はどうも直哉ではなく瑞穂を追いかけて来ているようだ。

もし所持者云々（うんぬん）の概念が本当にあるのだとすればこのお守りの今の持ち主は…瑞穂。

瑞穂がお守りの紐を解こうとしたときは特になにも無かった。一方の直哉が触った時は噛みつかれたという。それは持ち主以外に触れられた事に対する抵抗なのだろうか。

昨日の夜は直哉がお守りに狙われていると思っていたが、そう考えると危ないのは直哉ではなく自分ではないか。

しかし、そうなると今度は直哉の周りに現れるという橙色の瞳の少女の存在が朦朧としてくる。何故直哉に付き纏うのだろうか。

また夕立を予感させる生温い風が瑞穂の身に纏わり付いた。

その少女の目的が分からない分、余計に不気味だ。新たな不安が産声を上げた。

瑞穂は頭を横に振り余計な事は考えないようにした。

そして、例の場所に差しかかったとき瑞穂の足はぴたりと止まった。

女瀬川。
によぜ

川岸をアスファルトで固められた無機質なその姿はとても自然物とは思えない。

生活排水でも含んでいるのか水は澱み酷く濁っている。流れに段差のあるところでは毒々しい葉のように泡立っている。

直哉の怯える姿を思い出し、幽霊の见えない瑞穂も何か不気味な
ものを感じた。

おうまがとき
今は逢魔時。

昼から夜へと世界がその姿を変貌させつつある夕方は闇の住民達
が目覚ます時間だと云われている。

直哉が云うその女瀬川の女の幽霊が出て来て澱んだ川の底から自
分に向かって手招きをしたらどうしよう。

想像するだけで背筋がひやりと背中が冷たくなる。

瑞穂は自然と駆け足になった。

漸く我が家が見えてきたのでほっと一安心して走るのを止めた。
随分な距離を走って来たので肩で息をしながら家の門を開けた。

すると玄関の前に誰かがいる。直哉だった。

直哉が寂しそうに膝を抱えて座っている。瑞穂が駆け寄り、こん
な所で何してるのと呼び掛けると直哉は力なく上目遣いに顔を上げ
た。

「あ、お帰り」

瑞穂は直哉の顔を見て眉を顰めた。

「ちよつと、直哉…」

直哉の頬は赤く腫れていて口元には薄ら血が滲んでいる。

「どうしたのよ、その顔」

心配になって直哉の顔に手を差し出した。すると直哉は何でも無
いと言って顔を背ける。

余計に心配になった。

「友達と喧嘩したの？」

そう訊くと直哉はこくりと頷いた。

「アンタねえ、私は暴力とかそんなの駄目って言ったでしょ。そん
な事は止めてよね…もう」

男の子は喧嘩の一つや二つやって当たり前だとは瑞穂も何となく
解ってはいるのだがどうしても受け付けない。

直哉はごめんなさいと謝りそのまま俯いた。まるで顔を隠すようだった。

瑞穂はその直哉の態度に僅かな違和感を覚えた。

「アンタ、本当に喧嘩なの？」

「そうだよ」

「私の目を見なさい」

瑞穂は語気を強めると直哉はゆっくりと顔を上げ瑞穂の目を上目遣いに見た。

「嘘じゃないわね」

すると直哉の視線は逃げるように右下に泳いで行った。矢張り彼は何かを隠しているらしい。何があったかは知らないが男の子の誇^{プライド}を傷付けないようにしてやろうと、それ以上は何も訊かなかった。

「兎に角、中に入ろう。腫れてるんだから冷やさないよね」

「ま、待ってよ」

瑞穂が扉に手を掛けると直哉がそれを引き止めた。

「何よ！」

「まだ今日は遊び足りないんだよ、そうだ姉ちゃん、公園に行こうよ」

直哉は何か焦っているようだ。

「何を馬鹿な事言ってるのよ」

瑞穂は直哉の考えている事がよく分からなかった。唯、何かを隠そうとしているのは間違いなく、家に入る事を頑なに阻止しようとしているようだ。家の中に瑞穂に知られたくない秘密でもあるのだろうか。

直哉が瑞穂に隠し事をするなど今まで一度も無かった。それだけでも普段では在り得ない事なのに、この直哉の焦り方は只事ではない。

その時、玄関の扉の向こう側からがしんと硝子^{ガラス}か何かが割れる音がした。

「姉ちゃん、行こうよ……」

不穏な空気が辺りを包む。

何か厭な予感がする。

直哉がぐいぐいと手を引っ張るのを無視して瑞穂は玄関の扉に凝じっと注意を集中させていた。

二人を包む空間はしんと寂寥せきりょうに支配された。

その静けさを破ったのは父の怒声だった。

引き留める直哉の手を振り払い、瑞穂は重い玄関の扉を勢いよく開けた。

右側には二階へ上がる階段がある。

左側には居間、その奥には食卓のある台所へ繋がる入口がある。

そして今はいつもと同じ玄関にいる。

しかし、まるで別の世界に迷い込んでしまったかのような違和感がある。見た目はいつも生活している家と同じなのだが何かが違うような気がした。

何か聞こえた。

父の声だ。何を云っているのかよく判らないが語気を荒げている。穏やかでない雰囲気だ。声は台所の方から聞こえた。何か物々しい空気が台所から滲み出ている。

瑞穂は玄関で靴を脱ぎ、あしおと襪わを立てないようにゆっくりと摺り足で台所に歩み寄って行った。

再び硝子が割れる音がして、瑞穂の躰はぴくりと引き攣ひきった。台所から漏れ出す空気は瘴氣しょうきと云い表しても正しいように思えた。息が苦しい。台所には何か禍々（まがまが）しい物がある。

そんな予感がした。

ごくりと唾を飲み、覚悟を決めてそろりと台所を片目で覗き込んだ。

そこに広がっていたのは…地獄だった。

瑞穂は大きく目を剥いた。

夕陽も碌ろくに届かない台所は電気も点けていない所為でどんよりと

した黒い靄^{もや}がかかったように薄暗く、割れた皿や食卓の上にあった調味料の壘^{びん}が床に散乱している。そして、何か酒臭い。空気が腐っている。割れた金魚鉢の残骸も散らばっており無残にも冷たい床に投げ出された金魚が苦しそうにひたひたと^{もが}いていた。

倒れた椅子の傍^{うずくま}らに蹲^{うずくま}って力なく俯いている母がいた。

目の前に広がる常軌を逸した光景に瑞穂は胸の中に濁った水がどくどくと流れ込んできたような暗い気分になった。

蹲る母の横に父が底の割れたビール瓶を握って立っていた。

「何…してるの」

瑞穂の声に反応して四つの眼がぎょろりとこちらに向けられると瑞穂は小さな悲鳴を上げた。その眼は総て酷く濁っている。

汚い…。

これが…大人。

瑞穂がいた事に気付いた父は一瞬正氣に戻ったのかビール瓶^{おもむろ}を徐々に床に捨てた。

重く冷たい音を響かせて瓶は床に転がった。

「お、おう。瑞穂か…」

父の姿を前にして瑞穂は目を見開いて痙攣^{けいれん}したように首を横に振る。

「い、厭…」

怒気か酒気かは判らないがその所為で真っ赤になった顔をこちらに向ける父を自分と同じ人間だと思いたくなかった。

その赤い顔はまるで鬼だ。

瑞穂は父を穢^{けが}れたもののよう拒絶した。

これが…大人。

「待て、話を聞け！」

父が声を荒げながら近付いて来ようとする瑞穂は身を護るように胸の前で腕を交差させ、震える足で廊下にあとずさった。

「来ないで！」

瑞穂の悲鳴にも似た金切り声に驚いた父の足が止まる。

乱れた呼吸を整えながら瑞穂は床で蹲る母に視線を滑らせた。それはまるで生命の罔い塵芥ちみのように動く事なく、唯その濁った眼をこちらに向けている。

これが…大人。

—何なの、この人達。

—気持ち悪い…。

これが…大人。

瑞穂の心の中で亀裂のようなものが走った。

「違うんだ、ぼくが悪いんだ！」

直哉が玄関の扉を開け、靴を履いたまま瑞穂の横に駆け寄って来た。

「直哉…」

「ぼくが我儘わがまま言ったからいけないんだよ」

直哉がわんわん泣きながら瑞穂にしがみ付く。

今ここにある彼の二つの眼だけは水晶のように澄んでいる。どんな我儘を云ったのかは知らないが直哉はこんなにも泣いている。

非道い。

父はこんなにも直哉を怯えさせている。

「母さんも父さんを止めようとして…」

「うるせえよ！」

落着きを取り戻しかけていた父が再び激昂し怒声を上げると直哉は身を震わせた。

「直哉、お前は向こうに行ってる！また引っ叩かれてえのか！」

父の荒々しい言葉で瑞穂に流れる時間が止まった。

頬が冷たくなった。

喉がからからに乾いた。

胸の中に黒い渦が巻いた。

「直哉を打ぶったの？何で…」

「こいつが云う事を聞かねえからだよ！」

父が醜く言い訳をする。

激しく脈打つ心臓の音で頭が痛くなる。まるで心臓が頭に移動して来たかのように鼓動が五月蠅い。

「非道い。こんなに腫れてるじゃない」

瑞穂は泣きじやくる直哉の赤く腫れた頬を優しく擦った。

そして二人の大人を蔑んだ目で睨みつける。

「何なの、あなた達は…厭…本当に厭」

これが…大人。

瑞穂の中で何かが音を立てて崩れて行った。

瑞穂が抱いていた大人への憧れや理想も何もかも粉々に崩れ去った。大きく見開かれた瑞穂の目からつうと一筋の涙が零れた。

やがて床の上で苦しそうに跳ねていた金魚は動かなくなった。

ちりん

「父さんも、母さんも…大人なんて」

鼻を^{すす}吸りながら手の甲で涙を拭い、瑞穂は確りと二人の大人を睨みつけて咆哮のような声を上げた。

「大嫌い！」

その場にいた全員が凍りついた。

普段から太陽のように明るく爽やかな質^{たち}の瑞穂がまさかこんな憎悪の籠った言葉を獣のように叫ぶとは想像すら出来なかった。

瑞穂は立ち竦む直哉を退けて徐に玄関に向かう。その瑞穂の行動を誰一人として質す事も咎める事も出来ずにいた。そして瑞穂は厭に落ち着いた様子で靴を履き、玄関の扉の前でふと立ち止まる。

「私、大人になんかなりたくない」

ちりん

まるで瑞穂の持っているお守りが返事をしたようだった。瑞穂は乱暴に玄関の扉を開け、外に飛び出して行った。

「姉ちゃん！」

一番早く動いたのは直哉だった。直哉も玄関の扉を開け、そのまま瑞穂を追いかけて行った。

静まり返った玄関には紅い夕陽が差しこんでいた。

どこへ行こうと云う訳でもない。どこでも良いから一人になりたい。誰にも会いたくない。瑞穂は唯我武者羅^{がむしゃら}に走った。

「待ってよ！」

直哉が追いかけて来るが今は直哉にも会いたくない。瑞穂はその声を見殺して田圃の畦道に駆け込んだ。

「もう帰ろうよ！」

「厭：あんな人達なんかもう見たくない！」

「姉ちゃん！」

直哉も涙声になっている。

「私は齢を取って汚い大人になんかなりたくない」

「そんなのお化けじゃないか！」

直哉は声が裏返ってしまふ程必死になって叫んでいる。

「それでもいい！」

また鈴がちりと返事をする。

夕陽に照らし出された田圃はまるで絵画のように完成された風景だった。瑞穂にも、それを追う直哉にもそんな事など全くお構い無しだった。

瑞穂は田圃を抜け、神社の参道に差しかった。

先日賑やかな夏祭りがまるで夢か幻だったかのように寂々としている。

瑞穂は鳥居の前で足を止めた。随分と直哉を引き離したようだが追いついて来る気配は無い。

鳥居の向こうには薄暗い鎮守の森が続いており、その先の石段を

登ると境内がある。昼間でもまともに日光が当たらない鎮守の森は夕方にもなると更に暗くなり、生命の気配すらなくなってしまう。

この先はまるで別世界だ。

鳥居は大きな口を開け瑞穂を暗闇の世界に誘い込んでいるように見えた。

陽は更に傾いて行き空は紅みを失い、夜と混ざり合って紫色に姿を変えつつあった。

もうすぐ夜がやって来る。

※

足場の悪い畦道の泥濘ぬかるみに足を取られ直哉は何度も転びそうになったが、それでも遠くに離れて行く姉の背中を必死になって追いかけている。直哉は涙を噛み殺していた。

姉ちゃんが困っていたらぼくが助けるんだ、ぼくが守るんだと心の中で自分に喝を入れ、自らを奮い立たせていた。

やがて直哉は鳥居の前までやって来た。

とうとう姉の姿を見失ってしまった。

もう姉に会えないのではないかというどうしようもない絶望感に苛まれた。それを振り払おうとするように姉の姿を求めて辺りを見回したがどこにも姉はいない。徐々に夜に兆したどが現れ始め、喩えよたとうの無い不安が直哉の軀を蝕み出す。

ふと鳥居の奥に目を向けるとそこはもう完全な漆黒だ。徒ただならぬ瘴気がそこから漏れ出している。

その中に朧げな光が二つ、宙に浮かんでいた。

「君は…」

鳥居の先に鼠色の着物の女の子が闇に溶け込むようにぽつんと立っている。

その橙色の瞳だけが闇を拒絶し、ぼうと浮き上がっている。

「ぼくの：ぼくの姉ちゃんを見なかった？」

直哉は目に涙を浮かべながら女の子に駆け寄った。しかしその女の子は黙ったまま直哉の目を見詰めているだけだ。

「何でもいいよ、知ってる事があったら教えて…」

祈るような気持で直哉が訊く。それでも女の子からは何の答えも返って来ず、唯々仄かに光る瞳を向けられるだけだった。

そのまま空白の時間が流れてゆく。森の木々が風に吹かれてざわめいたかと思うと再び静まった。

着物の女の子は直哉の目を見詰めたまま静かに森の奥を指差した。直哉はその小さな手が示す方向に目を向けた。

ちりん

姉の持つお守りの鈴の音が聞こえた。

直哉の視界に飛び込んで来たのは姉の後姿だった。姉は森の奥へ奥へと歩いて行っている。

「姉ちゃん…」

直哉も姉の後を追おうと身構えた。

あなたもいくの

全く存在を感じさせないような不思議な声だ。恐らくこの女の子のものなのだろう。声が耳朶じだに響いたのではなく、まるで頭に文字を直接書き込まれたような感覚だった。

「うん、ぼくが姉ちゃんを守るんだから」
女の子はどこか寂しげな表情になった。

「そんな顔しないでよ。そうだ、今度ぼくの家遊びに来なよ。君とぼくと姉ちゃんと三人で遊ぼうよ」

再び女の子はいつもの無表情に戻った。直哉はそれを肯定と受け取った。

「約束だよ。ゆびきりげんまん」

直哉は女の子に向かって小指を差し出した。女の子は不思議そうな顔をして躊躇している。俯き加減に恐る恐る女の子も小指を差し出し、そして直哉は自分の小指と女の子の小指とを絡ませた。

「ゆびきりげんまん嘘ついたら」

はりせんぼんのます

「ゆびきった」

まるで血が通っていないような冷たい感触だった。

「やっぱり君は幽霊なんだね。ぼくには判るよ」

女の子は相も変わらず無表情に直哉の目を真っ直ぐ見据えている。何も答えない。

しかし直哉にとって彼女が普通の人間であろうが幽霊であろうがもうどちらでも良かった。

「じゃあもう行くね。ありがとう」

相変わらず鳥居の向こうは禍々しい瘴気で溢れている。直哉は大きく息を吸い込んだ。胆はらを括り、息を止めて姉の後姿を求めて暗闇の世界へと飛び込んだ。

森の中は直哉の想像を遥かに凌ぐ鬼魅の悪さで、まるで魔物の体内にいるようだ。直哉はその不気味さに飲み込まれないように目を固く閉ざしながら無我夢中に走っている。

真っ暗で目を開けていても殆ど何も見えない。それならば逆に目を瞑っている方が何となく安心出来た。同じ暗闇でも目を開いていたら森に暗闇を与えられているようで圧迫感がある。しかし瞼を閉じたら自分に暗闇を与えているのは自分自身だ。そう考えたら暗闇を飼い慣らしたようで少しは気が楽だった。

鈴の音が断続的に聞こえる。

その音のする方に姉がいる。直哉はそう信じて全神経を耳に集中

させる。薄弱な鈴の音は少しでも気を抜くと聞き逃してしまっていた。

直哉は鈴の音を辿って一心不乱に瘴気の渦巻く森を駆け抜けた。音が少しずつはつきりとした輪郭を帯びて来た。

近付いている、もう少しで姉に追いつける。

その音に励まされたかのように直哉は更に速く走った。

突然、体に纏わり付いていた瘴気が解ほどけていったような気がした。直哉はふと立ち止まり、肩を竦め軀を強張らせたまま薄眼を開けた。どうやら森を抜けたようだ。

ぜえぜえと肩で息をしながら恐る恐る後ろを振り返ってみた。そこには獲物を逃がしてしまった怪物のように暗闇が悔しそうに口を開けていた。直哉は身震いをして前に向き直った。

目の前には急な石段が続いている。

ちりん

鈴の音は石段の上から聞こえて来た。

「姉ちゃん！」

直哉が見上げると、とぼとぼと石段を登る姉の後姿があった。追い付いた。

直哉はほっとして表情を緩め、いそいそと石段を駆け上がって行った。

「ぼくだよ、待って」

姉は直哉の声を無視するかのように石段を黙々と登って行く。

急な石段は直哉の小さな軀には随分と酷で、一段登るだけでも相当辛く、直哉は懸命に足を持ち上げていた。

姉はゆっくり歩いている筈なのに直哉との距離が一向に縮まらない。まるで自分の影か蜃気楼を追いかけているようだ。

直哉は妙な胸騒ぎを覚えた。

やがて姉は石段を登り切り直哉の視界から消えて行った。

ちりんと鳴っている鈴の音も遠ざかって行くようだった。冷たい石段には直哉以外誰もいなくなった。

姉の姿を見失った途端、直哉の胸の内にどす黒い不安が溢れて来た。

冷汗が頬を滴る^{したた}。

云いようの無い寂しさと虚無感に苛まれ、直哉の顔から血の気が引いた。

「行かないでよ…」

鈴の音が更に遠くなっていく。

「行かないで！」

悲痛な叫びを上げた直哉は石段に手を着き、這うようにして駆け上がった。

石段を登り切って境内に辿り着くと一気に視界が開けた。紫色の空から降る太陽の名残のような弱々しい光が仄かに境内を照らしている。

そこには姉の姿は無かった。

直哉は自分の血液が凍りついていくのが分かった。

直哉が立っている場所から二体の狛犬を従えた本殿まで石畳が真っ直ぐに敷かれている。

もう鈴の音は聞こえない。

聞こえて来るのはちよろちよろと手水が流れ出る音だけだった。

直哉は姉を呼ぶのが怖かった。

もし返事が返って来なかったらどうしよう。そう考えると大声で姉ちゃんと叫ぶ事などなかなか出来ない。

辺りを見回しながら石灯籠が両脇に並ぶ石畳の上を歩いて行った。

いない。

境内を隈なく探しても姉はいなかった。本殿をぐるりと一周回った、賽銭箱の裏も見た、本殿の縁の下も覗いた、手水舎の陰も調べた。

しかし、姉の姿は無かった。

境内から出るには必ず石段を通らなくてはいけない、しかし一度も姉とすれ違ったりなどしていない。

手を尽くした直哉は賽銭箱の傍らに腰を下ろして徐々に夜に近付きつつある空を見上げながら涙を懸命に堪えていた。

姉が消えた。

姉とはもう会えない。

そんな事が脳裏を過り、寂しさが更に直哉の心を支配していった。

ちりん

突如として聞こえた鈴の音に目を剥いて驚き、心臓が止まりそうになった。乱れた呼吸を整えながらゆっくりと鈴の音がした方を向いた。

石畳の上に鈴付きの紅いお守りがぽつんと落ちていた。

「姉ちゃん…」

よろよろとお守りに駆け寄ると膝を着いてお守りを手に取った。

鈴がちりんと澄んだ音で鳴く。

我慢して抑えつけていた筈の涙がほろりと直哉の頬を濡らす。

「どこだよ」

両手でお守りを握り締めて胸に当てた。

今まで堪えていた涙が次から次へと溢れ出し、直哉は嗚咽を漏らしながらその場にへたり込んだ。

「姉ちゃん！」

とうとう直哉は声を張り上げて叫んだ。

辺りはしんと静まり返ったままだった。

もしかしたら姉がひょっこり顔を出すのではないかと期待していたが何も変わったことは起こらない。直哉が恐れていた事は現実のものとなった。

姉の返事は返って来ない。

守れなかった。直哉は悲しみと悔しさの余りその場に泣き崩れ、お守りをぎゅうと力いっぱい握り締めた。境内に直哉の悲しい泣声だけが響き渡る。

直哉は身を起こし慟哭どうこくした。

しかしその悲痛な叫びも紫色の虚空に吸い込まれ、空しく消えていった。

空には一番星が煌々くわんくわんと…寂しげに輝いている。

鬼の事

木々の檻は漸く出口を見せた。

檻の閉塞感から解放され呼吸が楽になった。僕は大きく伸びをする。

少し疲れたのでその先にあった階段に腰を下ろし何の気なしに空を見上げた。空には月はなく、そこどころか星さえ一つも輝いていない。森の中と同じく唯暗^{ただ}いだけだった。

階段の冷たい石の感触が軀に伝わって来る。

ここまで長い時間ずっと暗闇の中にいると流石に気が滅入って来る。胸が苦しい。僕は大きく深呼吸をして下を向いた。

僕の座っているすぐ隣でこそと物音がした。

暗いと謂う事もあるが下を向いているのですぐに物音の正体は解らなかった。しかし僕のすぐ左側に何か空気の流れを遮る物がある。何かあるのか：否。

誰かいる。

僕は顔を伏せた姿勢のまま恐る恐る視線だけを左に這わせていった。こんな不気味な森の出口だ、森から這い出てきた化け物がいてもおかしくない。

ゆっくりと視線を滑らせていくと白い棒のような物が暗闇に浮かび上がっている。

違う、これは人の足だ。

白い足は随分小さく子供のものようだ。今時珍しく草履を履いている。そのまま視線を上の方に持つていくとその白い足の主は鼠色の着物を着ているらしい。更に顔まで視線を上げる、整った白い顔をした女の子の横顔があった。

女の子は市松人形のようなおかつぱ頭をしていて、本当に人形の

ように凝^じと前を向いたまま僕の隣で座っている。

不思議と怖くはなかった。

「き、君。いつからそこにいたのかな？」

女の子は全く反応を示さない。

「何でこんな所に一人でいるんだい？」

まるで人形に話しかけているようだった。女の子は矢張り何も答えてくれない。

「もう夜だし早く帰りなよ」

すると女の子の手が突然動いた。

市松人形が急に動き出したようでかなり吃驚した。ごそごそと着物の懷を手で探り何かを探しているようだ。

女の子は丁寧^{おもむろ}に折り畳まれた紙風船を取り出した。

そしてそれをくしゃくしゃと音を立てながら徐に広げ、口元に当てた。ふうと息を吹き込んで紙風船を膨らまそうとしている。僕の横から女の子の小さな吐息が聞こえてくる。

しかし、なかなか上手くいかないようで紙風船は全く膨らんでいない。

「貸してごらん」

僕は女の子の手から紙風船を取って、空気穴に息を吹き込んで紙風船を膨らませた。懐かしい紙の香りがした。

漆黒の世界に色鮮やかな紙風船が一際映える。

「はい、どうぞ」

僕はそう言って丸く膨らんだ紙風船を女の子に差し出した。すると女の子は僕の方を向いた。

その瞳を見た時、僕は凍りついた。

「君のその眼は……」

僕の声は情けなくも引き攣っていた。

猫だ。

女の子の瞳は暗闇の中で仄かな橙色の光を放っていて、まるで猫のようだ。

その光は宝石が放つ輝きのように美しく、同時に艶めかしい妖気を放っているようでもあった。余り長く見つめているとこの少女に心を飲み込まれてしまうような気がした。

女の子は凍りついて動けない僕の手から紙風船を取って正面を向き直した。

僕はぽかんと口を開いたまま女の子を見ている。

「君は…まさか」

焦る僕を尻目に女の子は無表情のまま黙々と紙風船を手でぽんぽんと跳ね上げて遊んでいる。

—この瞳は…

「そうだ…君は」

僕はごくりと生唾を飲んだ。

僕はこの子を知っている。

※

《女子大生2人変死 他殺と自殺の両面で捜査》

十二月二十二日午後八時頃、市内の女子大に通う女性から『友人が川に落ちた』との119番通報があった。

駆けつけた救急隊員は七メートル下の川底でぐったりとしている女性と川沿いの遊歩道で首から血を流して仰向けに倒れている女性を発見した。

どちらの女性も通報者の友人で『三人で一緒に帰宅している途中だった』とのことだった。通報者が少しの間、二人から離れている時に事故は起こったと思われる。

川底に転落した女性（十九）は転落の際にアスファルトの堤と川底に全身を激しく打ち付けて、足の骨を折るなどの重傷を負った上、冷たい川に長時間晒され続けていたため酷く衰弱していた。

女性は搬送された病院で間もなく死亡が確認された。

一方、首から血を流して倒れていた女性（十八）は隊員が発見した時には既に死亡していた。解剖の結果、喉に鈍い刃物で抉られたような痕が残っていた事が分かった。女性の手や衣服の袖口にも夥しい量の血液が付着していた事や周囲にも他に何者かがいた形跡なども確認されなかった事から自殺の線が強いと思われる。

しかし、現場に喉を刺したと思われる刃物等が残されていない事から県警は他殺と自殺の両面で捜査を進めている。

※

締め切られた車の中というのは余り気持の良いものではない。

幾ら外で強い風が吹こうとも激しい雨が降ろうともこの中には無関係だ。寒くも無ければ、濡れたりする事も無い。しかし車という空間は温かな陽射しも、心地好い涼風さえも遮ってしまう。外の音も窓を開けている時の半分も聞こえない。

外界と隔絶された空間。

矢張りどうも居心地が悪い。

車内で一人、運転席に座っている井上亮は流石にその息苦しさに耐え切れなくなり窓を開けた。外界との関わりを求めたのだ。

外の世界からは春の暖かい風と陽射しが入り込んで来た。

窓から外を眺めているとぶかぶかの学生服を着た少年たちが眩しい程の笑顔を振り撒きながら駆けてゆく姿が見えた。

中学生だろう…もしそうならこの春に入学したばかりの一年生であらう。

彼らの軀はまだまだ小さく、顔もまるで小学生のように幼い。ぶかぶかの学生服も彼らの親が子供の成長を見越して、そして期待して大きめの寸法の物を着させているのだろう。

自分も昔はああった筈なのだが気が付けばいつの間にか身も心

も大人になっていた。

いつからだろうか、彼らのように無邪気に笑う事が出来なくなつたのは。

桜の花弁の舞う下を駆け抜けてゆく初々しい中学生の姿を車内から少し羨ましそうに眺めながら井上は懷から煙草を取り出して火を点ける。そして窓を閉め意識を車の中に戻し、鞆の中から三枚の写真を取り出した。

一枚目は四人の男性が並んで写っている写真だ。

恐らく記念撮影でもしたのだろう。青い海を背に皆、燦々と輝く太陽にも負けない程の眩しい笑顔をファインダーに向けている。彼らの肌は小麦色に焼けていて、とても健康的な印象を受ける。

ただ、向かって一番左に立っている男性の左手の肘から先が消えてしまい、奥の景色が透けて写っている。

二枚目の写真は夜の川を撮影したものだ。

そもそもこれは川なのだろうか。間違っても景勝地とは呼べないような薄汚いもので川と呼ぶよりは用水路や溝どぶと呼ぶべきなのかもしれない。淵をアスファルトで固められていて生命観の無い冷たい印象を受ける。シャッターはその溝の深淵に向けて切られているのだが、焦点には特に何も写っておらず何を狙って写真機カメラを向けたのか撮影者の真意が解らない。

写真全体に浮かんでいる光の玉のようなもの以外は特に変わった物も写っていない。

そして三枚目は鳥居を正面から撮影したものだ。

立派な明神鳥居だ、どこかの神社なのだろうか。額束がくづかに神社の名前らしきものが書かれているように見えるがこの写真からではそこまで明瞭には確認する事が出来ない。

撮影した時間帯の所為もあるのだろうが鳥居の奥は薄暗く何があるのかも解らない。被写体である鳥居の影が随分長く左側へ伸びている事から夕方か若しくは明け方に撮影されたと思われる。撮影時

間さえ判れば影の向きからこの鳥居が建っている方角ぐらゐは推測出来るのだが…。

左側の柱の傍らに地味な色の着物を着た少女がレンズを見詰めて佇んでいる。閃光フラッシュの所為で少女に赤目効果が窺える。たったそれだけの何の変哲も無い写真だ。

井上は崩れかけた煙草の灰を灰皿に落としてから一口吸った。吐き出す煙が密室である車内に充満する。

こんこん。

誰かが助手席の窓をたた敲く音がしたのでふと目を向けた。

「おお、開いてるから入れよ」

助手席の窓を少し開けて窓の外にいる女性に向かってそう促した。

「もう、井上さん煙草臭いですよ！窓開けて下さい」

車の戸を開けるや否や小林朱音こばやし あかねはまるで母親のように小言を洩らしながら助手席に座る。そして車内に備え付けられている灰皿を見てぎょつとしている。

「何ですかこれ！吸い過ぎです。肺癌がんになりますよ！」

「うるせえな、日本人って大概は生活習慣病、癌で死ぬもんなんだ。煙草止めたって胃やらどこやらが癌になんだよ」

「また屁理屈言って…、毎日毎日こんなに吸ってたら早く癌になります」

「そうか？オレの祖父じいさんは尋常小学校に通ってる時からずっと吸ってるらしいけど今も齡八十にして健在だがな」

井上は鼻から煙を吐き出して馬鹿にしたように答える。

「もういいですよ！ほら、ご注文の珈琲コーヒーですよ、要らないんですか」
ああ、と覇気の無い返事をして缶珈琲を受け取る。小林は明らかに苛立っていた。

「もう！井上さんったらお礼の一言も言えないんですか！大体いつも人を遣い走りみたいにな…」

「ほら、これ」

井上は小林の小言にうんざりしてそれを遮るように三枚の写真を見せた。いきなり目の前に鬼魅きみの悪い写真を突き付けられた小林は思わず押し黙った。

「これって、この前編集部に届いた写真ですよ」

そうだよ、と目線さえも向けずに返事をした井上は珈琲の缶を開ける。

「で、お前は思うんだ？」

「どれも立派な心霊写真じゃないですか」

真剣な顔をした小林が膝の上に写真を広げて見比べる。

井上はその様子を見て無愛想に鼻で笑い、煙草を灰皿に乱暴に押し付けて火を消した。

「心霊写真ねえ。さて、どうかな…」

珈琲を一口啜ってからその写真の中の一枚を指差す。

「これはどうだ？」

「そんな…突然どうだと言われても」

朦朧ぼんやりと窓の外を眺めながら小林の見解に耳を傾ける。

「手が消えちゃってますね。これって牀の前を霊が通過したときに起こるっていう怪奇現象じゃないんですか？」

軽く頷いた井上はぶっきらぼうに答える。

「お前は面白いな。そんなもん写真機カメラのシャッターを暫く開きっぱなしにしといて手だけブラブラ動かしとけば誰だって簡単に作れんだよ」

「自分から訊いておいて…」

小林がぶつぶつと文句を云っている姿を見て井上はにやにやと嗤っている。

「じゃあこの写真はもうなんですか？」

「お前はと思うんだ？」

眉間に皺を寄せ小林が答える。

「これはオーブって言われてるやつじゃないですか？ほら、所謂いわゆる霊魂とか人魂とかいうものですよ」

「馬鹿…」

間髪入れずに井上は鼻で笑い一蹴した。

「これはさっきのやつよりひでえよ。多分レンズに埃が付いてるだけだな」

はい残念でしたと井上がからかうと小林はむすつとした顔になり自分の分の缶珈琲を開けた。

「井上さんはこんな仕事をしているのに幽霊を信じてないんですか？」

「こんな仕事だからこそ信じてねえんだよ、お前もにせものは随分と見てきただろ」

井上は深くシートにもた凭れ掛かり大きく息を吐いた。

雑誌記者という仕事は決して楽なものではない。朝も夜も無く奔走して生活の調子も無茶苦茶に崩れ、場合によっては眠る時間すら無い日もある。労働時間と収入が安定しない事から大変な割りに世間の目は余り温かいものでもない。取材される側からは煙たがられる事もしょっちゅうだ。娯楽誌の記者は徒でさえ風当たりがきついのには怪奇雑誌の記者である井上達は殊更である。明瞭としないものを記事にする訳なのでいつも端から如何わしい目で見られる。

しかし、いざ雑誌が出版されるとそこそこの部数が売れる。

人間とは好奇心の塊のようなものだ。密林の奥や深海の底、最近では宇宙の事まで研究し始めた。そして、神や悪魔など見えないものまで勝手に作り出してそれに好奇心を注ぎ込み知ろうとする、解ろうとする。

見えないものほど気になるものだ。

形式や人々の嗜好は変化すれども怪談というものの自体が衰える事は無い。幾ら科学が発達しても流行が変わろうとも怪談というものは時代の変化に合わせながらその形を自在に変えて、常に大衆文化という範疇にカテゴリー確りと根を下ろしているのである。それは様々に形を変化させて実に千年以上の歴史を持っている。

恐怖とは負の感情であり、余り味わいたくないものである筈だが怪談を聞いたり読んだりするだけで身の危険に晒されるような事は無い。

恐怖と脅威の違いだろう。

矛盾した表現かもしれないが人は安全な恐怖を求めている。

小林は三枚目の写真を手に取った。

「井上さんの考え方ならこの写真なんか完全に作り物でしょう？下手をすると偶々（たまたま）そこにいた女の子の目が閃光フラッシュの所為で赤っぽくなっていたからこの女の子を化け物だとか幽霊だとか無理矢理こじ付けてるだけですよね」

一息に小林が云う。

「まあな…」

井上は鳥居の写真を小林の指からするりと抜き取ると、それを見ながら目を細める。

「確かに一番嘘くせえよ…だけどな。一番気にはなるんだ」

それを小林が怪訝そうに見ている。

「何、格好つけてるんですか？」

「うるせえよ、そんな事より高村の野郎からはまだ連絡ねえのか？」

「ああ、彼なら井上さんがさっきひでえって馬鹿にしていた夜の川の写真の事を調べに行ったきり音沙汰無しですね」

井上が呆れたように溜息を吐いた。

「あの写真の投稿者と会って来るって張り切ってましたからね…あの子の性格じゃ当分連絡すら遣よこさないかもしれませんよ」

小林も困った顔をしてぼりぼりと頭を掻いている。

「ったく…新卒の小僧は暑苦しくてかなわねえよ」

その高村という男はこの春大学を卒業したばかりで高村達の編集部編集部に配属されてきた。

景気も悪くない今なら新卒だともっと安定した仕事があればいいが、ただだろうがどうした事か彼はこんな不安定な仕事を選んだのだ。

まあ、それも一度その男と会ってみれば何となく納得出来た。

高村という男は典型的な猪突猛進型、否、回遊魚いゃと表現した方が近いかもしれない。

彼は止まったら死ぬかのように常に動き回っている。若さの所為もあるのだろうが思い立ったら直ぐに行動し、持前の体力を武器に常にあちらこちらを奔走している。

そして今日も、例の溝川の写真に浮かぶ光の玉の正体を求めて一人で奔り去ってしまったのだった。

「さて、オレらも鳥居の写真から調べに行くか、小僧に負けてらねえからな」

「行くなって私達も鳥居の投稿者にインタビューしに行くんですか？」

小林が躰ごと井上の方を向いて尋ねた。知らねえのかと云った井上は少し困った顔をして髪の生え際辺りを人差し指で掻く。

「実はな、この鳥居の写真だけは投稿者が分からねえんだ」

「え？」

「写真の送り主は解説の手紙どころか名前すら書かずに写真だけ一枚封筒に入れて送って来やがったんだよ」

井上が懷から煙草を一本取り出して火を点ける。すると小林があらさまに苦い顔をして煙を厭がるように窓を開ける。

「要するに消印がこの町の郊外の郵便局だって事しか手掛かりがねえんだ、だからそこらへんで聞き込みでもするしかねえんだよ」

井上が鍵キを回すとエンジンが咳込んだような音を上げながら目を覚ました。

「何だかんだ言って井上さんもなかなか行動的アクティブなんですね」

小林が車に乗ってから初めて笑顔を見せた。

「まあオレも未だぎりぎり二十代にしがみ付けてる齡だからな…新卒の小僧にはまだまだ負けてられねえしよ」

「何か知ってる人…いますかね？」

「さあな、消印通り写真自体もその辺りで撮られた物なら神社の名

前は判らなくても場所ぐらいは判るだろうよ」

井上はアクセルをゆっくりと踏み込んで車を進ませていった。

※

昼下がりの公園では子供達が元気よく走り回っている。彼らを連れて来ている母親達は母親達だけで楽しそうにお喋りをしている。同じ空間にいるのに大人と子供では全く違う世界にいるようだ。た。第三者の目から全体を見るとその世界の境界線が良く解る。

子供には子供の、大人には大人の、それぞれの世界があるのだ。公園の隅のベンチに座っている青年からはそれが良く解る。

青年は静かに手帳を閉じた。

「はい、じゃあ今日は態々（わざわざ）ありがとうね」

青年が立ち上がり張りのある爽やかな声で礼を云った。

「あ、いえ、こちらこそすいません…」

「おいおい、何で謝るんだい」

同じように腰を上げ、おどおどする少年に青年は笑い掛ける。

「だって…折角来て貰ったのに…おれ、結局分らない事ばかりで…」

「良いんだよ、気にしないで」

青年は自然な笑顔を絶やさない。自然と少年の表情も綻ぶ。

「おれ、怪奇雑誌の記者さんって怖い人と思ってました。でもお兄さんみたいな人で良かったです」

青年は髪の毛をくしゃくしゃと掻き回して照れ笑いを浮かべる。

青年の目の前にいる少年は果たして子供なのだろうか大人なのだろうか。いったいどちらに属するのだろうか。

「君はどっちだい？」

少年は突拍子の無い質問に意表を突かれたように目を丸くする。思った事を良く考えもせず口にするのがこの青年の悪い癖だ。

「つまり：その、君は大人かい、それとも未だ子供なのかい？」
暫く考えた末に少年は答える。

「おれは多分子供です」

そうか、と青年が頷く。

「じゃあ君は砂場で泥遊びをしてる子供と一緒に遊べるかな？」

「それはちよつと：」

苦笑いをする少年に質問を続ける。

「あのお母さん達の輪に混じってお喋り出来る？」

「いえ、それも：」

質問の意図を掴めずに困惑する少年の顔を覗き込み笑いかける。

「僕といっしょだね」

青年の笑顔で少しだけ場の空気が和んだ。

少年は深く頭を下げて立ち去った。

「好感の持てる子だったな」

青年、高村司は再びベンチに腰かけた。
たかむらつかさ

―僕もさっきの子も同じだ。自分がどちらか判らない。

高村も少年と同じく精神的にも年齢的にも大人と子供の丁度その狭間に漂っている不安定な存在だった。

ただ高村と少年が違う点があるとすれば、高村は自分が大人か子供かと尋ねられると自分は大人だと答える事ぐらいだろう。しかしその本質はその少年と大差は無くどちらにも属する事の出来ない中性的なものなのだ。

成人を迎えて、大学も卒業して世間では大人だと云われる存在なのだが自分自身では大人になったという実感は全く無い、だからと云って子供扱いされると少し腹が立つ。

自分の存在がばやけている。

高村はその臃がむしやげな存在を必死に主張する為、我武者羅がむしやになって動き回る。自分という存在を周りの人間に示す為ではなく自分自身に示す為だ。

奔り回って必死になっているときは自分という存在を確認出来るのだ。

高村は深呼吸をしてから腰を上げ、桜の舞い散る春の公園を後にした。

そこまでは歩いて十分程で着いた。

ついさっきまで燦々（さんさん）と照っていた太陽は何処へやら、いつの間にか空は灰色の雲に覆われていた。

どうしても自分の目で見ないと気が済まない高村は一人で例の川までやって来た。

先程の投稿者の少年によると昔、この川で転落事故があったらしく彼の周りでも奇怪な噂話があるのだそうだ。部活からの帰りにこの川の横を通りかかったときに偶々（たまたま）インスタントカメラを持っていたので試しに一枚撮影してみたら光の玉が無数に浮いているのが写り込んだと云うのだ。

高村は鉄柵に肘を乗せて川底を覗き込んだ。

—うわあ、汚いなあ

底は暗いと云うよりかは黒い。

明るいうちに見るとよく解る。川底自体の色が黒いのだ。元々は壁面のアスファルトと同じ灰色をしていたのだろうが長い間生活排水などを流し続けている内にそうなってしまったのだろう。

ふと少し上流の方に目を遣ると梯子はしこがある。

—どうする：

高村は思い立ったら直ぐにそれを行動に移してしまう。

—降りてみるか

鉄柵を乗り越えて後ろ向きになり高村は梯子に足を掛けた。梯子と云っても垂直に近いアスファルトの壁に鋸状かすがいの鉄を打ち付けただけの簡素な物で、しかも長い間使われていなかったのか随分と錆びている。梯子を握る高村の手にも赤茶けた錆が付いた。

自分の背丈の何倍もある壁面を下り、ぴちあしおとちやという聲を立てて川

底に降り立った。

―もし梯子が崩れたら戻れないな

壁面を見上げながら最悪の事態を想像して高村は苦笑いをする。暫く晴れの日が続いていた事もあり川は水溜りのように浅くなっている。普通に歩いても靴の中に水が浸みてこない程だった。

―それにしても汚いなあ

川底には空き缶、ビニール袋、果ては自転車の車輪などありとあらゆる塵芥が捨てられている。そして壁面から無数に口を開けている管からは汚水を垂れ流したような跡が壁面を伝っている。何より酷く生臭い。

市街地から離れた郊外の長閑で美しい町の汚い部分がこの川に総て押し込まれているようだった。曇天の空模様が更にその背徳感を煽る。高村は余り見てはいけけないものを見てしまったようで少し後ろめたい気持ちになった。

気を取り直して少し探索してみる事にした。

辺りを見回しても特に変わった所はないようだが、それにしても妙に暗くて湿気ていてどうも鬼魅が悪い印象を受ける。特に夜には怪奇現象が起こる起こらないを別にしてもこの川には余り近寄りたくない。

滑らないように注意しながらゆっくりと向かい側の壁面の方まで歩いて行く。水気と粘着性を孕んだ跄が響く。

何の気なしに足下に視線を落とすと何か目を惹く物があった。

白い固形物：小石だろうか。黒い川底でその白さは妙に目立つ。

―何だこれは

その場に屈み込んで水面が顔に近づくと鼻を衝く生臭さは一段と増して少し吐き気がした。揺れる激んだ水面に邪魔をされて、まだその白い石の正体がはっきり判らない。

こんな徒の白い石ころなど普通ならどうでもよく思う筈なのだがそれでも高村は別だ、少しでも気になると確認するまで気になって仕方無くなる。

―あんまり触りたくないんだけどな：

出来る事なら水に手を浸けたりはしたくなかったが好奇心には勝てなかった。

高村は露骨に厭な顔をしながら手で口元を押さえてもう一方の手を水底の石に向けて伸ばした。妙に生温かい水が指先を撫でる。

―うう、気持ち悪い

水底に触れた時の藻がぬるりと指に絡み付く不快な感触の所為で高村の腕は肩まで鳥肌が立った。

その石を抓み上げ、振って水を切ってから掌に載せた。

それは小指の先ほども無いような小さな物だ。その白い石は先が尖っていて石にしてはやけに軽い。

これは、小石と云うよりは、

―骨：かな

そう思うともう骨にしか見えなくなってくる。

―何の骨だろうか。魚じゃなさそうだけど：鳥かな？

その骨のような物の形は高村も普段からよく目にする物に似ている。

高村は目を凝らす。

―これってもしかして

歯だ。

それが本当に歯なのだとしたらどう見ても人間のものだ。

前歯だろうか、大きさからしても乳歯ではなさそうだ。

根元はへし折れたかのように歪いびつに尖っている。

―何だよ、気持ち悪いな：

背筋が寒くなった。汚い川底に触れてしまった不快感の鳥肌とはまた別の種類の鳥肌がざわざわと立った。

いつ、誰が、どのようにしてこの歯を落としたのか気にはなるが今ここでは何も判らない。

幾ら見詰めていてもその歯は何も語らない。

「おい、あんたそんな所で何してんだ」

突然頭上からしわが噎れた男の声がした。

驚いたその拍子に歯が掌から零れ落ちた。

―しまった！

その歯は波紋を作り水底へと消えて行った。深い所へ落ちたのか、もうどこにあるのかも判らなくなった。

高村は声のした方をゆっくりと見上げる。

壁面の上、鉄柵の向こうには白髪混じりの少し恐そうな中年の男が眉間に皺を作り訝いぶかしげな表情をして川底の高村を覗き込んでいた。

―拙ますいな、怒られるかも

「すいません、ちょっと調べ事をしていたんです。迷惑でしたら直ぐに上がります。」

「否いやあ、別に俺は構わねえんだけどよ」

高村は男の返事を聞く前から梯子に手を掛けて壁面を登り始めていた。

今にも雨が降り出しそうな程に曇ってきた事、川底は吐気を覚える程に生臭い事、そして鬼魅の悪い歯を見つけてしまった事もあった。もう川から出たいと思っていた所だった。

「こんな所で調べ事とはご苦労なこった」

男はぶつぶつと独り言を呟いている。きつと話好きなのだろう。

梯子を登り切って鉄柵を乗り越えると元いた世界に戻って来たような懐かしさを覚えた。それこそ川底は本当に別世界のように居心地が悪かったのだ。

「心配かけてすいません」

「別に心配して声掛けた訳じゃねえんだけどよ…」

男は照れ臭そうに笑った。厳いかつい顔とは裏腹に意外と優しい人なのかかもしれないと高村は思った。

「おじさんはこの近くに住んでるんですか？」

「ああ、そうだ」

―少し訊いてみようか

「この川って名前あるんですか？」

「ええと、確か女瀬川によぜって言ったっけなあ」

「によぜ……？」

「おう、くノ一の女に瀬戸物の瀬だ」

「ああ、女瀬か」

高村が続ける。

「以前この川で転落事故ってありました？」

男は太い腕を組んで斜め上に視線を遊ばせながら記憶を手繰っている。

「ううん、あったっけなあ……そんな事」

「最近の事でなくても良いんです、何か知りませんか？」

「あ、そう言えば」

男は口を大きく開けた。何か思い出したようだ。

「もう二十年ぐらい前の話だけだよ、女が落ちたって話は聞いたことがあったな」

「それだ！」

「その人はどうなったんですか！」

高村が興奮したように声を荒げる。

「そんなもん知らねえよ、随分昔の話だしな。まあこんな浅い川なんだから溺れる事はねえだろ、きっと大したこと無かっただろうよ」

「そうですか……」

高村はがつくりと肩を落とした。噂話を裏付ける決定的な情報を期待していたのだがそれにしては未だ曖昧過ぎた。

「二十年前か……調べてみようかな」

「調べ事も良いけど気を付けろよ」

不意に男が口を開いた。

「気を付ける？」

「この川は浅いけど藻やら何やらでぬるぬるして滑りやすいんだ。転んだりしたら汚いだろ？」

この男は少しお節介な所もあるが矢張り優しい人なのだろう。

「態々（わざわざ）ご忠告ありがとうございます」

高村は軽く会釈した。

「そう畏まんなよ、兎に角あんたらも気を付けろよ」

男は再び照れ臭そうな素振りを見せながら高村にそう諭した。

しかし高村は今の言葉に違和感を覚えた。

「このおじさん。今何て言った？」

気になった高村は今、男が言った言葉を反芻^{はんすう}する。

「そう畏まんなよ、兎に角あんたらも気を付けろよ」

「兎に角あんたらも気を付けろよ」

「あんたらも気を付けろ」

「あんたら（・）？」

高村の覚えた違和感はこれだ。すかさず高村は思った事を口にする。

「あんたら（・）って？」

高村はら（・）に強調^{アクセント}を置いて質した。

「ああ、もう一人一緒にいただろ？」

「いいえ、僕一人ですよ」

男が眉に皺を寄せる。

「嘘吐け。下であんたら二人石ころみたいなの見てたじゃねえか」

「え……？」

高村は冷たい水を被せられたように寒気がした。

「あのとき……僕の横に……誰かが」

言葉が続かない……

ごくりと唾を飲み込んだ。

「僕には見えない……誰かが」

頬が厭に冷たくなってきた。

「僕の……隣に？」

「そんな筈は……」

漸く言葉が出た。

「おかしいな、やっぱり俺の見間違えか」

男の独り言に高村は、はあと気の抜けた相槌を打つ事しか出来なかった。

「どおりで逢引^{デート}にしちゃあ洒落っ気のねえ場所に来てやがると思ってたんだ」

男は誤魔化すように表情を緩めて云った。

―逢引^{デート}…女が見えたのか

「あ、そう言えば俺の息子がこんな小せえガキだった頃なんだけだな」

男が自分の腰辺りの高さに手を置いた。

「何かここで幽霊見たって大騒ぎしてやがったんだ」

―幽霊…女の幽霊か

「あんたも気持ち悪いもん連れて帰らねえように気を付けな、兄ちゃんもなかなかの男前なんだから幽霊とやらの惚れられちまうかも知れねえからなあ」

男は豪快に笑う。

「こ、怖い事言わないで下さいよ」

高村が引き攣^つった笑いをする一方で男が愉快そうに声を上げて笑っている。

その大きな笑い声に驚き、逃げて行くかのように雲は北の方へと足早に流れて行く。

※

郊外の町と雖も流石に駅前ともなるとそこそこ人通りも多い。喫茶店も満席と云う程ではないがそれなりに賑やかだ。

運良く窓際の席が空いていた。

ウェイトレスが三人分の珈琲^{トレイ}を盆に載せて運んで来た。洋卓^{テーブル}に置

かれた珈琲が芳ばしい香りを漂わせている。

「よし、じゃあ君の話を聞かせてくれないか」

そう云って井上は洋卓の上に置いた録音機レコーダーの釦ボタンを押した。

洋卓を隔てた先にいる少女は豪えらく緊張しているらしく、おどおどしている。

「そんなに緊張しないで。このおじさんの顔が怖いならどこかに行かせるから」

小林が横から冗談を云って場の雰囲気のを和ませようとすると、少女は困った顔で笑う。

「愛想笑いされてるじゃねえか」

井上が咳払いをして横にいる小林を睨む。

「おい、俺は未だおじさんじゃねえぞ。お兄さんだ…二十代だからな」

そう井上が云うと、

「でも四捨五入すると三十代でしょ？」

と直ぐに切り返された。

「そんな事言い出したらお前もおばさんだぞ…」

「いいえ。私は四捨五入すると二十歳になりますから」

小林が勝ち誇ったようににやにやする。井上は悔しいがぐうの音も出ない。

その二人の遣り取りを見て少女がくすくす笑っている。

「結果オーライだがちよつとは警戒解いてくれたかな」

井上も表情を緩めて熱い珈琲を一口啜る。

意外と早く知っている者を見つけた。

駅前で例の鳥居の写真を見せて聞き込みをしていたのだが僅か一時間程度で知っているという者がいた。

それがこの少女だ。

彼女は市内の高校の制服を着ている。高校生はこの手の噂話に詳しいと山を張ったらこれが的中した。

詳細を伺おうと少女を連れて喫茶店に入ったのだった。

もしこれが井上と少女だけなら周りから拙い誤解まちがひをされるところだが間に小林を挟む事によって冷たい非難の視線が送られる事はなくなっている。まあそこは小林のお陰と考えておくことにした。

井上が手帳を開いて洋卓の上に置き、話を切り出す。

「そろそろ本題に入ろうか」

「は、はい」

未だ少し緊張しているようだが先程までと比べると随分と警戒を解いてくれた方だろう。

井上は質問に入る。

「君の名前は？」

「かみや しほも神谷桃子です」

先ず少女の名前を手帳に記した。

「神谷さんはこの写真の鳥居を知っているんだね」

鳥居の写真を洋卓の上に載せた。

神谷桃子と名乗った少女はこくりと頷く。

「どこにあるんだい？」

「これは確か町外れの神社の鳥居です」

「この町にあるんだね？」

再び神谷桃子は静かに首を縦に振る。

「何て神社かな？」

「ごめんなさい。名前まではちよつと…」

「そうか…」

井上が残念そうにそう云うと一瞬少女が申し訳なさそうな顔をしたので、良いんだ気にしないでと井上は付け足した。

「鳥居の柱の所に着物を着た小さい女の子がいるだろう？」

「はい」

「この子は見た事があるかな？」

「いいえ、見た事ありませんねえ」

少女が不安そうに訊く。

「これって…もしかして心霊写真ってやつですか…」

「そうかもしれないし、そうじゃないかもしれないんだ。君は何故これが心霊写真だと思ったんだい？」

少女が細い指を差し出して写真の中の女の子を示した。

「だって、この子…目が」

―猫みたいに光ってるって言いたいんだろ

「まあ、普通に写真撮っても目が光るって事はよくある事なんだよ」
井上がそう云うと少女は少しほっとしたようだった。

「ところでその神社で何かその…変な噂とかある？例えばそれこそ幽霊が出るとか」

「まあ、そんな噂はあるにはあるんですが…」

何か云い難そうだ。あるんだねと井上が続きを云うように促す。

「はい…」

神谷桃子は重い口を開く。

「白川瑞穂しらかわ みずほって女の子を知ってますか？」

「しらかわ…みずほ？」

井上は首を傾げる。

―何か聞いたことある名前だ。でも思い出せない…

今まで黙って横で様子を窺っていた小林が突然口を開いた。

「知ってる！確か六、七年前に行方不明になったって女の子ですよ」

―ああ、思い出した

「ほら井上さん、今でも搜索願が出ていて全国の警察署や交番でも張り紙が出ている子ですよ」

「ああ、有力情報には報奨金が出るほどの大騒ぎになってるやつだろ」

少女ははいと返事をして目を伏せる。

「親族の方は未だどこかで生きていると信じているでしょうから余りこんな事言いたくないんですが…あくまでも噂ですけどね」

井上は一応書き留めておこうとペンを手に取る。

「その神社には白川瑞穂さんの幽霊が出るって噂があるんです」

「死んだって決まった訳じゃないのに非道い話だな。それになんてその神社なんだい？」

「白川瑞穂さんが最後に目撃されたのはその神社だそうなんです」
—そう云えば白川瑞穂の弟が最後の目撃者って話だったっけな。確か失踪当時の白川瑞穂は中学生だった筈だ。

写真の中の鳥居の傍らに佇んでいる着物の少女はどう見てもそれより更に幼い。せいぜい七つか八つぐらいの齡だろう。

それに井上も駅や交番の張り紙で何度も顔写真を見た事があるが、鳥居の少女と白川瑞穂は似ても似つかない。これを白川瑞穂の幽霊とはどうも云い難い。

—まあ、別モンだろうな…

煙草を取り出そうと井上は懷に手を伸ばした。

「あと…白川瑞穂さんの話でもう一つ噂があるんです」

—何だ、まだあるのか

井上と小林は神谷桃子の話に耳を傾けた。

「白川瑞穂さんは幸せのお守りを持っていたらしいんです」

—幸せのお守り？

「何だいそれは？」

「もう、井上さんったらこの仕事をしてるくせにそんな事も知らないんですか？」

小林が呆れたように口を挟んだ。

—悪かったなあ

井上は不貞腐れて煙草を銜える。

「持っていたら願いが叶うっていう鈴の付いた紅いお守りですよ。

有名な都市伝説じゃないですか」

「そうです…」

二人は少女の方に向き直った。

「そのお守りについてちょっと教えてくれないか？」

「私も噂でしか聞いた事は無いんですが…」

「知っているだけで構わないよ」

井上が煙草に火を点ける。

「金色の鈴が付いた紅いお守りらしいんです。お守りって言っても袋には何も書いて無いんです」

―それじゃそもそもお守りかどうかとも判らねえな

「ある日突然目の前に現れて、それを持っていると願い事が叶うんです」

「それを白川瑞穂が持っていたって話か…」

煙草の煙が神谷桃子の方に漂って行くと僅かに彼女は顔を顰めた。
井上は少し悪い事をしてしまった気がして未だ半分以上残っている煙草を灰皿にゆっくりと押し当てて火を消した。

「そんなもん持っていたのに失踪なんかしちゃって…どこが幸せ（・
・）のお守りなんだよ」

井上は皮肉っぽく云った。

神谷桃子もそうですねと云って少し笑った。

―もし白川瑞穂の願いが叶ったんだとすると…

目の前の少女が珈琲を一口含んでいる間に井上は少し考える。

―そうだとすると何て願ったんだ

―どこか遠くへ行きたい

―否、これなら六年も七年もあれば日本中どこにいても大概は発見される

―誰にも会いたくない

これは近いような気がした。

―そう云えば、幽霊の噂があるんだな。幽霊…そうになると井上の頭の中で一つの考えが纏まった。

―死にたい…か

―まったく、縁起でもねえな

井上も珈琲を一口飲んだ。少し温ぬるくなっている。

「すみれ…」

神谷桃子が唐突に口を開いた。

「ん、何だい？」

「そのお守り。すみれって呼ばれてるんです」

「何でお守りがすみれなんだ？」

「お前知ってたか？」

井上が小林にそう質したが、小林はこちらを横目に見て首を横に振っている。

今度は小林が神谷桃子に訊く。

「すみれって植物の堇草すみれの意味かな？」

「さあ、私もそこまでは……」

「そっか……」

小林は少し残念そうに云った。

少しの間、洋卓の周りを沈黙が支配していたがその沈黙を破ったのは意外にも目の前にいる少女だった。

「そう言えば私の友達澄んだ鈴すの音の事だと言ってました」

「どういう事だ？」

耳で聴いただけでは意味が良く解らなかったがそれを手帳に書く
と解った。

「なるほど、澄んだ鈴すの音。澄み鈴れい……」

「澄鈴すみれって事か」

「ふうん、それですみれ（……）なんだね」

小林も意味を理解出来たようだ。一方で井上は、最近の高校生としての洒落た事考え付くんだなあ、と半ば感心していた。

「まあ、こんなもんだろう」

恐らくこの少女からはこれ以上情報を得る事は出来ないだろう。
鳥居の場所も大体解ったしそろそろ引き上げる事にしよう。井上は
そう判断して手帳を閉じた。

その時一枚の写真が手帳から滑り落ちた。

「あ、その写真も……」

写真は洋卓の上を滑り少女の方まで行った。

「それは心霊写真じゃないよ。徒^{ただ}レンズに埃^たが付いてるだけさ、全然怖くないだろ？」

「違うんです。この川って…女瀬川ですか？」

少女は井上の目を見て恐る恐る質す。

―何か知ってるのか…

「オレ達も名前は知らないんだ。見覚えがあるのかい？」

「はい…」

帰り支度を始めかけていた井上はもう一度席に深く座り直した。

「それは多分この町に流れている用水路です…母に聞いた話なんです」

「ちよつと待ってくれよ」

再び録音機^{レコーダー}を回し、井上は手帳を開く。そして少女に続きを話すように促した。

「昔、母の友人がそこで死んだそうです」

井上と小林は少女の口から急に不穏な言葉が飛び出してきた目を剥いた。この少女は鳥居の事よりもこの川についての事の方が確実に知っている。

「…死んだ？」

小林も思わず少女の口から零^{こぼ}れた不穏な言葉を繰り返した。

「はい…」

神谷桃子がそう云って頷くと暫くそのまま誰も口を開かなくなつた。隣の席の客がカップを置く音すら気になる程の静けさが三人を包んだ。

井上が口火を切る。

「死んだって事故か何かかい？」

「一人は多分事故です」

―一人はって。何人か死んでんのかよ…

「その時、母も一緒にいたらしいんですが目を離している十分程の間にその人は川に落ちてしまっていたんだそうです。多分足を滑ら

せたのでしよう。それからもう一人は…」

少女は眉間に皺を寄せて一瞬口籠った。

「もう一人は川の横の遊歩道で倒れていたんだそうです」

「そっちの人は事故じゃないのかい？」

「ええ…多分違います…だって」

「だって？」

小林が少女に合の手を入れるようにして訊く。

「その人、喉を刺されて死んでいたんですよ」

「なんでだ？その状況が全く読めない

考え込んでいる井上に代わって小林が苦い顔をしながら少女に問いかける。

「それって、誰かに殺されたって事？」

「それが解らないんですよ。母はその後、慌てて救急車を呼んだそうです。友人が二人もそんな事になってしまったので気が動転していてよく覚えていないらしいんですが、少なくとも周りには犯人らしい者はいなかったそうです」

「十分の間で一人殺してその場から痕跡も消して立ち去るなんて出来んのかよ？」

「もしそうだとしたらもう一人もその犯人に突き落とされたって考えた方が自然か…」

「二人殺すって事か…：しかしそうになると余計に時間がかかるな
—ってことは自殺か？」

「その事件は新聞にも載ったそうです。現場に刃物のような物は残されていなかったので殺人事件としても扱われたんだそうですが…
犯人、捕ま^{あつかひ}ってないんですよ」

少女は昨に厭^{あからい}な顔をした。同じように小林も相変わらず苦虫を噛み潰したような顔をしている。怖いというよりも鬼魅が悪いのだろう。

「なるほど、そいつは確かに気持ち悪い話だなあ」

井上は少女の話に相槌を打つ。

―刃物が無いんじややっぱ他殺か？自分で首刺しといてそれを隠すなんて事は出来るわけがねえ

―況^ましてやそんな事は刃物も使わずに出来るわけねえしな。人間は獣とは違って肉を引き裂く鋭い牙も爪もねえんだ。

―爪で喉を引き裂くだと？

―んなもんまるで化け物：鬼じゃねえか

井上はその女瀬川と呼ばれた川の写った写真を手帳に閉じた。ついさっきまで馬鹿にしていた写真が酷く腥^{なまぐさ}い物に思えてしまった。

※

昔、男ありけり。

女の、え得^うまじかりけるを、年を経てよばわたりけるを、辛うじて盗み出でて、いと暗きに來けり。

芥川といふ河を率^ゐて行きければ、草の上に置きたりける露を、

「かれは何ぞ」

となむ男に問ひける。

行く先多く、夜も更けにければ、鬼ある所とも知らで、神さへいといみじう鳴り、雨もいたう降りければ、あばらなる蔵に、女をば奥に押し入れて、男、弓、胡^{やぐなひ}を負いて、戸口にをり。

はや夜も明けなむと思ひつつゐたりけるに、鬼はや一口に喰いてけり。

「あなや」

と言ひけれど、神鳴るさわぎに、え聞かざりけり。

やうやう夜も明けゆくに、みれば、率て來し女もなし。足ずりをして泣けどもかひなし。

白玉か何ぞと人の問ひしとき

露と答へて消えなましものを

※

「あった！」

高村は思わず声を出してしまった。すると周囲の人々の視線が高村に集中した。

申し訳ないという気持ちを顔全体で表現して高村は怖おず怖おずと顔を伏せた。そして今見つけたという古びた新聞記事を持ってこそそこと席に着いた。

図書館では少し声を出しただけでもかなり目立つ。

——うう、何か息が苦しい……

高村は図書館が苦手だ。否、図書館と限定せずとも病院でも教会でも映画館でも静粛にしなければならない場所は総て苦手なのだ。頭で思った事が自然に口から零れてしまう程のお喋りな彼はこんな場所に来るといつも顰ひんしゆく蹙を買ってしまう。勿論、高村本人には全く悪気は無いのだが。

——二十六年前か……

高村は例の女瀬川という川で起きた転落事故についての記事を読んでいた。あの気さくな中年の男が云っていた通り確かに女瀬川で転落事故は起こっていた。しかも死者まで出ている。

——しかも……どういふ事だよ

高村が記事にある物騒な文字を目で追っていく。

「死んだのは……一人じゃないのか」

また口に出してしまった。案の定、再び高村に視線が集中する。しかも今度は死などと云う不吉な言葉が含まれていたので高村に突き刺さる非難の視線は先程よりも更に棘々しく冷たいものだった。

高村は誤魔化し笑いと、照れ笑いと、苦笑いを同時に浮かべなが

ら四方に頭を下げた。

矢張り高村は図書館が苦手だ。

目的の物も見つかったので早々に図書館を後にする事にした。逃げるように階段を下りて正面玄関を出るとよく分からない閉塞感から解放されたような気がしてとても気分が良い。思わずわあと大声を上げたくなった。

高村にとってあの空間は檻のようなものだった。

―夕日が眩しいな…

西日に目を細めながら高村は大きく背伸びをして猫のようにごろごろ唸る。^{うな}

「あれ、司君^{つかさ}じゃない？」

不意に後ろから名前を呼ばれた高村は両腕を上げたまま振り返ると、そこには小林の姿があった。

「あ、朱音^{あかね}さん」

「お、ほんとだ。高村じゃねえか。お前も調べ物か？」

小林の後ろから分厚い本を抱えた男が正面玄関から出て来た。彼の先輩である井上だ。

「やっぱりイノさんも一緒だったんですか。お前もって事は…」

「ああそうだよ、オレ達も調べ物だ」

井上は手元の分厚い本に目を配らせて云った。

「お前も乗って行けよ、どうせもう編集部に戻るんだろ？」

高村は井上の車に乗り込んだ。

煙草臭い。

井上は筋金入りの愛煙家らしく車の中では常に煙草を銜えている。お陰で車全体に煙草の臭いが染み付いてしまっているようだ。高村は非喫煙者だが嫌煙家という訳ではなく、それ程煙草の臭いには抵抗が無い：しかしここまでじつとりとこびり付くように車内に残っているとなると流石に抵抗がある。

そしてまた運転席でハンドルを握る井上が煙草に火を点けると、

それを横目に助手席の小林が何かを訴えるように不快な顔をする。
数ヶ月一緒に仕事をしてきたが彼らのこの姿はもうお決まりだった。

「で、お前は何を調べてたんだ？」

井上が煙草の煙を吐きながら訊いてくる。

「あの川の事で過去の新聞記事を探してたんですよ。そしたらですね…」

「二十年以上前に死者が二人も出ていた…だろ？」

高村の言葉を先読みしたかのように井上が遮った。

「なんで…知ってるんですか」

―超能力者かよ
（エスパー）

「へへ、一人は事故でもう一人は変死ってところか？」

井上はバックミラー越しに高村を見て、得意げに笑いながら続けた。

駭然^{がいぜん}として目を見開いている井上を振り返って小林も愉快そうに笑っている。

「実はね、私達が聞き込みしてたらその川の事を知っている子がいたのよ」

「何だ、そうだったんですか」

高村は安堵^{あんど}とも落胆とも取れない溜息を洩らした。

「ところでイノさん達は何を調べてたんですか？」

「オレらは郷土資料を探してたんだよ」

「郷土資料ですか？」

「ああ、あの鳥居にもちよつと腥^{なまぐさ}い噂^{うわさ}ってのがあってな…まあ火の無い所には何とやらと言うだろう？だから一応昔の事も調べとくんだよ」

そう云い切って井上は山盛りになった煙草の灰を灰皿^たに敲^{たた}いて落とした。

「でもそんな昔の事って心靈写真とかにも関係あるんですかねえ」
「解^とってねえなお前は。古い事でも知ってる方が原稿も書き易いだ

ろが。江戸時代やら戦国時代の伝承なんかを織り交ぜた方が記事にも現実味リアリティってモンが増すんだよ」

高村が難しそうな顔をしている。

「例えば？」

「例えばだな。幽霊みたいなのが写ったとしよう、『ここは古戦場跡です』とか但し書きがあれば『これは落ち武者か何かの幽霊なのか』って具合に勝手に想像力を掻き立てられて俄然現実味を帯びるだろ？」

井上が一口に面倒くさそうに云い放つと、高村はなるほど手を敲き頷いて感心していた。

「これも資料ですか？」

高村が車内に置かれていた一冊の本に手を伸ばした。

「否いや、そいつは郷土資料じゃなくて論文なんだ。」

興味あり気にふうんと鼻を鳴らして高村はその本を手にとった。

表題は『鬼と伝承』とあり、著者名は佐倉誠一郎さくらせいいちろうと記されている。

―鬼？

「鬼ですか、何でまた？」

高村が怪訝そうに訊く。

「まあ、ちよつと気になってな：個人的な話だけだよ」

煙草を吸い終わった井上は赤信号の間にゆっくりと火を押し消した。

編集部は市街地にあり、戻って来た頃にはもう陽は暮れていた。

電気を点けると写真や筆記具、資料集などが机の上にそのままになっっているいつも通りの雑然とした編集部の姿が現れた。

お世辞にも綺麗とは云えず狭苦しいだけなのだが、高村は不思議と家にいる時と同じ位に落ち着くのだ。

高村と小林はそれぞれ自分の机に荷物を置き、腰掛ける。

少し遅れて井上も二冊の本を抱えてやって来た。本を乗せた重みで机が僅かにぎいと軋む音がした。本がそこそこ重い所為もあるの

だろうが恐らく机がかなり古くなっている事の方が理由になっているのだろう。

「イノさんその本もう読んだんですか？」

井上が自分の席にどっかりと腰掛けた。机と同じように椅子も軋んだがこれは椅子が古いのではなく井上の扱いが乱暴だからだ。

「鬼の論文は未だ読んでねえけど、郷土資料の方は図書館でちょっとだけ読んだぞ」

「鳥居についての事は何か書いてありましたか？」

小林が尋ねる。井上もその答えに耳を^{そはだ}欹てる。

「否、鳥居の事については今のところ未だ分からねえ…」

「なんだ…残念ね」

「まあそう云うな、面白い事も書いてあったんだ」

「面白い事？」

その言葉は好奇心の旺盛な青年の琴線^{きんせん}に触れた。

「面白い事と言っても笑い話じゃねえぞ」

「分かってますよ！」

冗談に対して少しむきになって云い返してくる小林を見て井上は鼻で笑う。

そして井上は話し始める。

「巫女がいたんだとさ…」

「みこって神社とかにいるあの巫女さんですか？」

目を丸くして尋ねる高村には直ぐに答えが返ってきた。

「まあそんなところだな。大昔、あの地域には土地には^{ましな}振りかかる災いを鎮める巫女の家系があったそうでな、要するに呪い師^{まじな}みたいなもんだな」

井上の話を聞く二人はうんうんと頷いている。

「でな、その巫女は災いを山に封じるらしいんだ」

「山ってどこの山ですか？」

小林が口を挟むと井上が顔を顰めた。

「否、オレも全部読んでねえんだからそこまでは知らねえんだ」

井上は続ける。

「それでな、その巫女の家系にも時々とんでもない者が生まれる事があったんだと」

「とんでもないって？」

小林が質した。

「まあ世の中は天秤って事だな。総ての物は均衡バランスが取れている事で保ってるんだ。何でも良い事ばかりじゃ均衡は取れねえ…小林、天秤が片方に傾かないように均衡を保つにはどうしたら良いんだ？」

「もう片方に同じ重さの物を乗せるんですね」

「そうだよな」

井上は腕を組んで満足そうに頷く。

「回りくどい話になってきたな…」

「世の中ってのは都合の良い事ばかりじゃねえ、だから良い事と同じだけ悪い事もあるんだよな」

「良い事と悪い事？」

「その巫女の家系ってのもそうさ」

「巫女は災いを封じる…ということとは」

高村は何か閃いたように口を開いた。

「逆に災いを齎もたらす巫女が生まれるんですか？」

小林が高村の方に目を遣り、井上はその答えに感心して顔を綻ばせる。

「そうだ。天災や疫病を人々に齎す災厄の巫女…否、この場合は神の使いである巫女という呼び方は相応しくないな。そうやってしまえば悪魔とか化け物とか鬼と言った方が良いのか」

「そこで、鬼か」

「その災厄の巫女ってのは他の巫女と違って災いを封じる力が無いんだよ。そして成長するに従って人々に災いを齎すようになる。だからその家系に生まれながら子供の頃から封じる力を使えない者はやがて災厄を齎すであろう者…所謂鬼いわゆると見做みなされた。で、その災厄の巫女とされた者は…未だ幼い内に封じられたんだよ」

「封じる？」

小林の問い掛けにああそうだと相槌を打ちながら井上は煙草を銜えて火を点けた。紫色の煙が風に流されること無く真っ直ぐに上っていく。

―封じるってどういう意味だ

「封じるって云っちゃあ聞こえは良いんだが平たく云っちゃったら…」

井上は少し溜めてから、

「殺すって事だ」

と続けた。

暫く編集部の狭い空間は静まり返った。そして小林が声を震わせ
て云う。

「そんな…非道い^{ひど}です。子供を殺してしまうなんて」

「昔はそれも珍しくない風習だったんだよ。国内各地の山村でも天災が起るとそれを鎮める為に子供を生贄やら人柱^{ひとかじ}なんかにする人身御供^{とみごけう}の類が行われていた事も少なくねえんだ。科学の発達してねえ大昔じゃあ天災ってのは神の怒りや化け物の仕業と信じられて畏れられていたんだ。だからこの地域だけにそんな因習があったわけじゃねえ」

まあお前の言う通り確かに非道い話だけどな、と付け足して井上は静かに話を結んだ。

「その巫女の家系ってのはどうなったんですか？」

終わりがけた話を高村が再び続けさせようと尋ねた。少しでも気になる事が残っている内は話を終わらせる事に抵抗があった。

井上は煙草の煙を悠々と宙に吐き出してから答える。

「さあな、明治維新や近代化の波に飲まれて今では有耶無耶^{うやむや}になっちまってるそうさ。尤も^{もつと}そういう伝承が残ってるってだけで巫女を見た奴ってのはもういねえ。」

「そうですか…」

高村ががっくりと肩を落とした。疑問を残したままになってしま

い、どうも後味が悪く胸にかかった靄もやが払いきれない。

「でもな。さっきも言ったら？火の無い所になんとやらってな」

井上が机に肘を掛け、偉そうに足を組んだ。

手懸りが罔なくなつてすっかり意気消沈していた高村だったがその言葉を聞いてふと顔を上げた。

「ほら、どうだ？知ってる方が記事も書き易いだろ」

灰皿に煙草を押し当てながら井上は幽かすかに微笑んだ。

※

我ながら散らかった部屋だと井上は呆れて辺りを見回す。

ここ最近うは片付けも碌ろくにしていなかった所為で脱いだままの衣服や飲み終わったビールの空き缶が部屋中に散乱している。

井上が家に着いたのは丁度時計が午前零時を示した頃だった。

あの後、編集部で少し記事をまとめてから家路についた。高村だけは気になる事があるのでもう少し残って調べ事をすると云って机に向かつていた。もしかすると今も未だ夢中になって仕事をしているかもしれない。

—ほんとに新卒の小僧は暑苦しくてかなわねえな

シャワーを浴びた後、体の火照りが未だ冷めぬ内からソファアに腰を下ろして早速煙草に火を点けた。

洋卓の上に備えられた硝子製の大きな灰皿には吸殻が山盛りになっている。

井上は肺の奥深くまで煙を吸い込み、天井に向かって静かに煙を吐き出した。

—白川瑞穂か：

もちろん彼女の事は新聞などでも幾度となく目にして耳にした事がある。今でも張り紙が街の至る所に張つてあるのでそれなりに知っている。世間では『白川瑞穂ちゃん失踪事件』と号され、当時は

豪く騒がれていた。

—ええと、確か

当時は十四歳、中学二年だ。失踪時の服装は中学の制服だった。そして、最後に目撃したのは彼女の弟、小学生だという事までは井上も覚えているが確か名前までは報道されていない筈だ。

眠りかけた深夜の頭に血を巡らせようと、井上はこめかみを指の腹でぐりぐりと押し回している。

—そうだ、弟だ。弟がいたんだ。

弟の証言では彼女は酒に酔った父親と口論になって家を飛び出した。それを弟は追って行った。その時、彼女はこう云ったそうだ。大人になんかなりたくない。

実に思春期の女の子らしい台詞だ。子供のままでいたいという意識がある反面、早く自由な大人になりたいという矛盾した意識の間で葛藤^{ジレンマ}が生じ、彼らは思い悩む。そんな中学生ぐらいの、所謂反抗期と呼ばれている時期は総ての大人を敵対視してしまうものだ。そこで手始めに矛先が向くのは最も身近な大人である両親だ。

井上はふと少年時代を思い出して苦笑した。

今思えば自分自身も随分と親に迷惑を掛けた。こうして燻^{くゆ}らせている煙草もその頃から吸っている。

そして白川瑞穂は神社の境内で姿を消した。

彼女の弟が後を追って神社の本殿の前まで駆けつけた時には既に白川瑞穂の姿はどこにもなかったそうだ。それ以来彼女の姿を見た者は誰もいないらしい。

テレビのワイドショーなどでもその失踪事件の事をよく扱われていた。郊外の町の都市伝説である白川瑞穂の幽霊の件も、どこぞの者とも知れない誰かが何の気に無しに云った事が噂として流布してしまったのだろう。

死んだと決まった訳でもないのに非道い話だ。

その後、警察の搜索も空しく何一つ手掛かりが掴めないまま七年もの歳月が経ってしまっていた。

唯一の手掛かりと云えば…。

唯一の手掛かり…。

唯一の…。

井上の頭に電流が走った。

手繰り寄せた記憶にはとんでもない物が絡みついていた。眠りかけていた頭も一気に醒めた。

—そうだ…遺留品だ…

煙草の灰がぼろりと床に零れる。

彼女の弟が駆けつけた時には彼女の物と思われる遺留品が境内に落ちていたと云う。

それは…。

確か。

鈴の付いた紅いお守りだ。

—まさか

—それが

—すみれ…か

井上は煙草の火を消して弾かれたように立ち上がった。

そのすみれの事が急に気になり出して昼間の少女、神谷桃子の話してくれたすみれの話をもう一度確認しようと鞆の中から録音機レコーダーを取り出した。

再びソファ―に座り、テープを再生させた。

…金色の鈴が付いた紅いお守りらしいんです。お守りって言うても袋には何も書いて無いんです。

…ある日突然目の前に現れて、それを持っていると願い事が叶うんです。

小さな機械の箱の中から神谷桃子の声が聞こえて来る。頭の中で昼間の喫茶店での情景が蘇る。

井上は真剣に音のする箱と向き合っていた。

…それを白川瑞穂が持っていたって話か。

…そんなもん持っていたのに失踪なんかしちまって…どこが幸せのお守りなんだよ。

自分の声を聞くと不思議な気分になる。

一番知っている筈の声なのだが、こうして機械を通して聞いてみると本当に自分の声なのかと疑問に思う。自分が思っている声と他人が聞こえている自分の声とは随分違うようだ。

…そのお守り。すみれって呼ばれてるんです。

…お前知ってたか？

…すみれって植物の葶草の意味かな？

…そう言えば私の友達は澄んだ鈴の音の事だと言ってました。

…ふうん、それですみれなんだね。

小林の声は相変わらずいつもと同じだ。矢張り自分の声は違って聞こえるものなのだろう。

改めてお守りの話を聞いてみても特に新しい印象を受ける事は無かった。テープを再生させたまま気を抜いてソファーに凭れかけた。

半分無視されているにも関わらず機械の箱は喋り続ける。

…違うんです。この川って…女瀬川ですか？

…オレ達も名前は知らないんだ。見覚えがあるのかい？

…はい

いつの間にか例の川の話になっていた。この件は高村に任せよう
と思っている。彼の若さと情熱があれば難無くそこその記事に仕
上がるだろう。

井上は高村にはそれなりに期待と信頼を持っている。

…もう一人は川の横の遊歩道で倒れていたんだそうです。

…そっちの人は事故じゃないのかい？

…ええ…多分違います…だって。

神谷桃子が血腥い話を始めた。これはこれで記事が書けそうな程
に鬼魅が悪い。都市伝説や怪談になるには十分な要素を携えている。
フアクター

…その人、喉を刺されて死んでいたんですよ。

…それって、誰かに殺されたって事？

…それが解らないんですよ。

…殺人事件としても扱われたんだそうですが…犯人、捕まってい
んですよ。

…

…なるほど、そいつは確かに気持ち悪い話だなあ。

井上は何か違和感を覚えた。

話の内容にではない。

音だ。

妙な音が割り込んできている。

井上ははっとしてテープを巻き戻した。

…犯人、捕まっていないんですよ。

…

…なるほど、そいつは確かに気持ち悪い話だなあ

それは声ではない。金属音、甲高く良く響く音だ。
再びテープを巻き戻し、そして再生する。

…捕まってるんでしょ。

…

…なるほど

カップか洋匙スプーンを置いた音だろうか、しかし今は妙な先入観がある
所為か、

…り

鈴の音に聞こえてならない。

…ちりん

その時、突如として部屋の中にけたたましい音が響いた。
井上は驚愕し背筋が引き攣たった。しかしその音の正体は徒の電話
の呼び出し音だった。

―くそっ、吃驚びっくりしちゃったじゃねえか

井上は不愉快そうに人騒がせな電子音を発する電話の受話器を取
る。もしもし、と少しどすの利いた声で常套の挨拶をすると電話口
の相手は酷く狼狽ろうばいしている様子で、あ、イノさんですか、と云った。
高村だった。

相手が判るや否や井上は目一杯声に不機嫌を練り込んで云う。

「おい、お前今何時だと思ってやがんだ」

「え？あ、午前一時十二分です」

きっと本人は全く擲からっているつもりはないのだろう。しかしこう
して真面目に時間を答えられると流石に腹が立つ。

苛立ちを抑えながら井上が要件を訊くと、受話器から信じられない答えが返ってきた。

「今から編集部に来て下さい」

「ああ？ 巫山戯んな！」

井上は一蹴する。

「解った事があるんです」

「そんなもん明日で良いだろ、兎に角オレはもう眠いんだ」

「今が良いんです！」

「厭だよ」

井上がその頼みを断固として拒絶すると受話器は沈黙する。井上も暫く黙り込んでいた。

「どうしても：駄目ですか？」

高村の声に少し元気が無くなった。どこか哀しそうだ。

「悪いな。もう明日にしてくれ」

そう云うとまた高村は黙り込んだ。気不味い沈黙が受話器越しに流れる。

耐え切れなくなり井上から口火を切る。

「もう、切るぞ…」

「待って下さい」

「ああ？」

「僕、真剣なんです…」

高村らしくない。

鬼気迫るが如く真摯な声だ。思わず井上は気圧されて言葉が出なかった。すると高村の声が畳みかけてきた。

「お願いします！」

―厭になっちまうな。この野郎

井上は溜息を吐いた。

―糞真面目過ぎるんだよ

電話の向こうで潔く黙って返事を待つ、馬鹿が付く程に直向きな男に井上は漸く声を掛ける。

「下らねえ話だったら承知しねえからな、覚悟しとけよ」

―まあ、ちょっとは期待しといてやるか

「今から向うから珈琲でも用意して待ってるよ」

井上が投げ捨てるようにそう云い放つと高村はありがとうございますと殷懃に礼を云った。井上は徐に受話器を置いて机の上にあった車の鍵キを手にとった。

そしてお決まりのように煙草を一本銜える。

―我儘わがままなガキだ：

―ったくよ、新卒の小僧は暑苦しくてかなわねえよ

そんな事を思いながらも井上は口元を綻ばせていた。

編集部の扉を開けると夜中だと云うのに精悍せいかんな顔をした高村の姿があった。高村は井上の到着に気付くと手元の資料から視線を外して軽く会釈をした。

―何だよこの野郎。妙に凜々しいじゃねえか

今までの小僧という印象とは少し違う。どうも一皮剥けたようだ。一夜にしてこの高村と云う男はまるで別人のように大きく成長していた。

その傍らで小林が眠たそうな目をして座っている。どうやら彼女も急に呼び出されたらしい。

「イノさん、急に呼び出したりしてすいません。どうしても今が良かったんです」

「ああ。で、解った事って何なんだ？」

文句の一つでも云ってやろうと思っていたのだが青年の熱意のある瞳に押されて何も云えなかった。

「はい。実はイノさんが置いて行った本、あの後僕も読んだんです」

高村の机の上には井上が昼間に図書館で借りた郷土資料と、あの

『鬼と伝承』が置かれていた。

「それか：それがどうしたんだ？」

高村は徐に『鬼と伝承』を手にとった。

「イノさん、朱音さん。鬼一口って：知ってますか？」

高村の口から発せられた鬼という言葉は妙に耳に残った。

―鬼一口：聞いた事があるぞ

小林の方が先に思い出したようだ。

「鬼一口って：伊勢物語の話だっけ？」

高村は小林の方を向き静かに頷く。

―思い出した！

「芥川か！」

「そうです」

高村は本の頁をぱらぱらと捲^{めく}っていく。

「確か高校の時に古典で習った話ですよ。ほら、助詞やら助動詞の文法とか縁語がややこしかったやつじゃないですか。内容は、ええと…」

小林が一気に喋る。井上よりも若い分よく覚えている。

―確かあの話は

「女が行方不明になる話じゃなかったか？」

井上も漸く思い出してきた。頁を捲るのを止めた高村が、そうですと答えた。

「結局、女がいなくなったのは人為的なものだったって話だが作中では蔵に潜んでた鬼が女を一口で丸飲みにしたって事だったよな」

高村は何も答えずに開いた本を差し出した。井上と小林は二人してそれを覗き込む。

「そうです。伊勢物語の第六段にもあるように鬼の口とは異世界への入り口。そして鬼と云う存在自体も異世界の者という解釈もあったそうです」

高村が差し出した頁には女性を飲み込もうとしている鬼の物と思われる牙の生えた禍々しい口の挿絵があった。その口からは着物が食^はみ出し、傍らに落ちている扇が厭に生々しい。

「その鬼は人の怨みの念そのもの：そして災厄の象徴だともされていました。そうですよね井上さん？」

「ああ：そうだよ」

―そう云えばオレ自身さつき災厄の巫女を鬼と喩たとえていたからな
―そしてオレも知らなかった：鬼とは人の怨みの念か

―この小僧、吸収が早い

高村は少し気持ちが昂もって来たのか目を輝かせて身を乗り出してくる。

「じゃあその鬼の口、つまり災厄の出入り口は何て呼ばれているか分かりますか？」

―こいつは教師かよ。いちいちオレ達を生徒みたいに質問してきやがって

井上は少し不服に思いながらもこの青年の成長を嬉しく思っている。生意気だがなかなか頼り甲斐が顕れてきた。

そんな事を井上が思っている内に小林が何か閃ひらいたようで人差し指を立てて答える。

「分かった、鬼門ってやつでしょ？」

高村はにやりと笑う。どうやら彼の求めていた回答だったらしい。

「そうです、鬼門です。その鬼門はどこにあるか分かりますか？」

小林が首を傾しんげて考えていると高村は助言しんを与えた。

「朱音さん、鬼ってどんな格好ですか？漠然とした質問でごめんなさい」

「ええと、角が生えていて虎柄の腰巻じゃない？」

顎に人差し指を乗せて小林が答えると高村が再び頷く。

「その角は動物に喩たとえると何に似ていますか？」

「そうねえ。鹿ではないし：牛かな？」

―何が言いたいんだ？

「そうです、牛の角に虎の腰巻ですよね」

―牛と虎：

―そうか！

「丑寅うしとらの方角か！」

井上は声を張った。

「丑寅。鬼門とはつまり北東の方角です」

「鬼門がどうしたって言うんだよ」

「郷土資料によれば巫女は災厄、つまり鬼を山に封じるとありましたよね」

「司君、何が言いたいのか？」

首を傾げて小林が質すと高村は机の上に地図を広げた。

「見て下さい」

「これはあの郊外の町の地図か」

何となく覚えがある地名が記されている。

今日聞き込みをしていた駅、神谷桃子が通っていると云っていた高校、唯一敷かれている国道、そして蛇の如くうねりながら南北に流れる女瀬川。

高村の指が地図の中心に置かれる。その指は右上、地図上で云うと北東へとゆっくり滑ってゆく。行く手には間隔の広い等高線が何本も通っている。緩い傾斜になっているようだ。

高村の指はどんどん傾斜を登ってゆく。傾斜は急になり出し、もう山と呼ぶ事が出来るようになっていた。山頂付近の三角点辺りで指が止まる。

「ここです」

そう云って高村は地図から指を離れた。するとその下には鳥居を模した地図記号が記されている。

神社だ。

雑然とした編集部に云いようの無い緊張感が漂い出した。

「鬼の口である鬼門の方角、巫女はこの山に鬼を押し返したんじゃないでしょうか。そしてこの神社…気になりませんか？」

井上は無言のまま目だけで返事した。高村もそれを感じ取ったようだ。

この青年は思い立ったら直ぐに行動に移す癖があり、井上もそれをよく理解している。

「イノさん、朱音さん…」

井上には次にこの青年が発する言葉が何となく予想出来た。

「今から行ってみませんか？」

「今から行ってみませんか？」

見事な程に的中した。

「ほら来た。」

何となく何を云い出すか予想出来ていた井上とは対照的に小林はぼかんと口を開いていた。無理も無い、いきなりこんな夜中に呼び出されたかと思ったら次は鬼門だの何だのと云われている神社に行くなどという話になったのだ。

呆然としていた小林が漸く口を開いた。

「何言い出すのよ、もう夜中じゃない。明日にすればいいでしょ？」

「何を言ってもこいつはもう聞かねえよ」

井上は呆れながら髪を掻き上げ、苦笑した。

「どうせオレ達が厭がってもお前は一人で行くんだろ？いいぜ、付き合ってやるよ」

「井上さん！」

「小林、お前は残ったって良いんだぜ。オレはこの小僧がいつもみてえに暴走しねえようにみはってなきゃならねえから行くけどよ」

小林は眉間に皺を寄せて暫く考えた末に、

「分かりました：私も行きますよ」

と、しぶしぶ了承した。

ふと井上が高村に視線を送ると彼はまるで少年のような笑みを見せた。

田圃の横に車を停めて三人は参道を歩いていた。

郊外の町の更に町外れと云う事もあって駅前とは違い、街灯も疎らで人の気配など全く無い。唯ひたすら暗い道が続くだけだ。

音と云えば時々吹く風に木や草がざわざわと揺られる音だけで自分たち以外に生き物などいないように思える。

その静寂に飲まれてしまったように誰も口を開くことなく黙々と

歩いている。普段は気さくで陽気な青年ですら今は黙りこくっている。

暫くすると目的の場所に着いた。思ったよりも直ぐだった。

地図が示す神社の前に来て井上は言葉を失った。

「井上さん：こ、これって」

「ああ：そうだ。間違いない」

井上は例の写真を取り出して目の前に広がる光景と見比べる。

―全く、同じじゃねえか

写真に写っていた鳥居はこの場所で撮られたもので間違いなかった。

相違する点があるとすればそれは二つだけ。太陽が出ているか否か、そして鳥居の傍らに着物を着た不思議な目の少女がいるか否か。

それだけだった。

寂寥に支配され人々に忘れ去られてしまったような参道で、息も

詰まる程の闇夜の黒を背にその鳥居だけが紅く仄かに浮かび上がっている。そして、その奥に続く森のような空間は完全な闇だ。

まるで化け物が口を開けているようだ。

正しくこれは：

―鬼：一口か

あの『鬼と伝承』にあった化け物の口から女の着物が食み出ている挿絵が井上の脳裏に蘇った。

「い、井上さん：」

小林がぽつりと名前を呼んだ。震えている。

「ああ？どうした？」

「この奥に入るんですか：」

「折角来たんだしな、ちよつとぐらい調べてみようぜ」

小林は何も返事をせず、何か寒そうに自分の肩を抱いて俯いた。様子がおかしい。

「急にどうしたんですか、朱音さん？」

「司君は分らないの？」

高村は怪訝な表情をして小林を見詰めた。分からない（・・・・・・）とは何を指しているのだろうか、先ずそこが解らなかった。

「井上さんも：聞こえませんか？」

井上に話が振られた。

―聞こえるかだと？

「何の事だ？」

小林の指がゆっくりと鳥居の奥の闇を示す。

―この奥がどうしたんだ

そして一言。

「鈴：」

と、震える声で呟いた。

井上は身の毛が弥立よだった。

今、鈴と云われるとあの鈴の事しか思いつかない。

―すみれ：か

「何言ってやがる、何も聞こえなかったぞ」

そうですよきつと気の所為ですよ朱音さん、と高村も井上の後に続ける。唯、この男は井上とは違い妙に落ち着ただいている。そう云えば今日別行動をしていた高村はすみれの事を知らないのだ。

鈴と聞いても落ち着いていられる筈だ。

―そう言えば白川瑞穂もすみれを持っていたんだな

―そして：

井上は鳥居の奥に視線を遣った。

―ここで消えた

白川瑞穂、すみれ、そして写真の少女。

その三つ総てがこの鳥居の奥に関係している。そんな予感がした。

「じゃあ行こうか：」

高村が先頭に立ち鬼の口に向かおうとする。

「ちょっと待ってよ」

「どうかしたんですか？」

高村は目を丸めて小林に振り返る。小林は苦い顔をしている。

「行かない方がいいんじゃない…？」

「お前今更何言い出すんだよ！」

「だって…」

井上に怒鳴られても弱気な姿勢のままだ。どうやら小林は鳥居の奥から漏れ出す異様な瘴気しょうきに圧倒されてしまっているらしい。

「私は行きたくないです」

小林が弱々しくそう云ってその場を動こうとしない。普段から毅然としている小林がここまで及び腰になるのは珍しい。

「わかりました。小林さんは待っていて下さい、僕達だけで少し調べて来ます」

「え、危ないよ！井上さんも何とか言ってお下さい！」

話は井上に振られた。

―無駄だ。この男は行くって言い出したら絶対に行くんだ

―例えオレが行かねえって言っても一人で行くんだろうよ

井上はくしゃくしゃと髪を掻き回し、小林の方を見て苦笑いをした。

「こいつの言う通りにしてやろうや。オレらも直ぐ戻るからよ、お前は車でちょっと待ってろ」

そう云って車の鍵キを差し出す。それを受け取り小林は暫く黙っていた。

「よし、行こうぜ」

「はい」

高村が暗闇に懐中電灯を向ける。しかしその光すらも鬼の口に喰われてしまっているように先を照らし出す事は出来ない。

井上が後を振り返る。

「お前は仮眠でも取ってろ。夜が明けるまでには帰って来るからよ」
「気を付けて下さい…」

はい、と高村が凛々しく答えた。

二人は鳥居をくぐり、鬼の体内へと歩き出した。

その時、生温かい風が吹き抜けて木々がざわめく。まるで鬼が二匹の獲物を歓迎しているようだ。

枝葉が擦れる音に紛れてどこかで小さく鈴が鳴った。

…ような気がした。

思っていた通りだ。

目を閉じていようが開いていようが大差は無い程に暗い。高村が懐中電灯で足元を照らしていなければ歩く事すら儘ならぬだろう。静かにしなければいけない謂れは無い筈だ。しかし鳥居をくぐって、身の回りを完全な暗闇に包まれてから二人は一切口を開いていない。しんと静まり返った雰囲氣に飲み込まれ声が出ないのだ。

それにここは鬼門なのだ。

無意識の内にそれが脳裏に刷り込まれていて、闇夜の隙間に潜んでいるやも知れぬ魍魎魍魎に自分達の氣配を悟られぬようにと息を殺して歩いていた。

鳥居の奥からは一本道になっていて、車が一台通れるか通れないか程の幅はあった。しかし道の両側には木々が所狭しと生い茂り、枝が複雑に絡み合っていて酷く息苦しい。

まるで檻の中だ。

その檻の中は厭に静まり返っていて二人の聲以外は何も聞こえない。

井上は半歩前を歩く高村の顔に視線を送る。薄い闇の先に青年の顔が見え隠れしていた。彼には表情が無く、暗くて何も見えない筈の闇の先を熟と睨みながら何かに取り憑かれたように黙々と歩みを進めている。

「おい、高村！」

思わず井上は呼びかけた。すると高村ははいと淡泊な返事をした。

「お前何ぼーつとしてんだ？」

「いやあ、真っ暗になるとどうも考え事とかしちゃうんですよ」

いつもの気さくな青年に戻った。場所が場所だけに鬼にでも取り憑かれたのではないかと心配していた井上もほっと胸を撫で下ろした。

「何だよ…呆れた奴だな」

「井上さんもしませんか？電気消して眠る前に昔の事とか思い出したり」

「まあ、あるにはあるな…」

井上が顎に手を置いて上を向くと、そうでしょと云って高村が笑いかける。

「お前も昔の事を思い出してたって訳か？」

高村はこくりと頷いた。

「あんな顔して何を思い出してやがったんだ

碌な事ではないだろう。

寧ろこんな檻のように陰鬱な空間で楽しい事を考える方が難しい。

「イノさんは後悔ってした事ありますか？」

余りに唐突な質問だ。後悔など誰だって多少はして生きているものだ。人生を左右するような大きな悔いは無いにしろ井上にも小さな後悔なら幾らでもあった。

「二日酔いの朝に、昨日はあんなに飲むんじゃなかった。とかぐらいいかな」

高村が楽しげに笑う。突然後悔した事はあるかと訊かれても誰でもこの程度の答えしか出ないだろう。

「僕も後悔している事があるんです。それは多分この先ずっと、僕が死ぬまで忘れられない事なんです」

井上が青年の顔に視線を戻すと、彼は珍しく哀しい顔をしていた。「もしも過去に戻って一つだけやり直す事が出来るなら僕はその事を修正しますよ」

「どうしたんだよ」

「聞いてくれますか」

「言ってみろよ」

高村は歩きながら大きく深呼吸をする。話だけでそれ程までに覚悟が要る内容なのだろうか。

青年の唇が小さく動く。

「僕は友達を殺したんです」

井上は冷たい水を被ったように寒気がした。

「殺しただと」

そう云ったとき高村は口を閉ざしてしまっていた。

「殺した…のか？」

暗闇の向こうで青年の首がゆっくりと縦に振られる。

「お、お前…どういう事だよ」

井上が震える声で訊くと、高村は淡々と続きを話し始めた。

「僕が小学二年の頃です。僕はその友達と大雨で増水した川を見に行っただんです。勿論遊び半分でした」

「川…か」

「普段はちよろちよろとしか流れていない川がその日は土色に濁った水が溢れそうな程になって渦を巻いていました。僕達は川にぎりぎりまで近付いていつもとは違う濁流を覗き込んでいたんです。すると…友達が足を滑らせて川に落ちてしまったんです」

柔らかい表情をしているものの高村の声は少し曇り始めた。

「僕は怖くなって声も出ませんでした。でも足下を見るとその友達が川岸に必死になって？まっていたんです。僕が手を伸ばせば届く距離でした…友達は恐怖に満ち溢れた目で僕を見ていました」

高村はここでもう一度大きく息を吐いた。井上も急かす事無く頷いている。そして高村は続ける。

「手を伸ばせば彼を助けられる、でも僕まで一緒に川に飲み込まれてしまうかもしれない。近くの大人に助けを求めれば良い、でも近

くには僕ら以外誰もいないかもしれない。警察を呼ぶんだ、でもそれじゃあ間に合わないかもしれない：僕はどうしたんだと思いますか？」

井上に質問が振られた。突然だったのでは？とした。

「：分からねえな、取り敢えず大人を探そうと周りを見渡したりでもしたのか？」

久しく声を発していなかったので喉に痰が絡んでいた。咳払いをしながら高村の方を見ると彼は静かに首を横に振っていた。

「僕は本当に駄目な奴です。僕はそこで：何もしなかったんです」

高村の踏んだ木の枝が乾いた音を立てて折れる。

「どうすればいいかも決められずに呆然としてずっと軀を濁流に奪われそうになっていいる友達を見下ろしながら立っていたんです。友達はつかさ司助けてと僕の名前を呼んで助けを求めてましたが、それでも僕はぴくりとも動く事が出来ませんでした」

高村の語気が強まっている。恐らく話し手である彼の頭の中ではその時の絶望的な情景が生々しく再生されているのだろう。

「やがて友達は力尽きて川岸から手を離してしまっただんです。その時彼の目にあったのは恐怖ではありません：悲しみでした。彼はその悲しい瞳をずっと僕に向け続けながら濁流に飲まれ。消えていきました：。友達の姿が見えなくなると漸く僕の軀に自由が戻りました。その瞬間僕は怖くなって泣きました。怖かったです：あの悲しい瞳が」

―殺したってのはこういう事か

井上は何となく理解出来た。

「それはお前が殺したんじゃないよ、事故だ」

そう云っても高村は目を瞑って首を横に振る。

「この話を聞いてくれた人はみんなそう言いますが、僕の中ではやっぱりその友達は僕が殺してしまっただんです」

気にするな、などと無責任な事も云えないので井上は黙って青年の話の続きを聞いていた。

「友達の遺体は二日後に下流の町で発見されました。それを聞いた時、僕は改めて罪の意識に押し潰されそうになりました。僕は彼が流されそうになっている時ずっと一緒だったんです。例えば自力で引き上げる事は出来なかったとしてもあれだけ時間があれば大人を探しても、警察を呼んでも絶対に間に合っていたんです。僕がうじうじ迷っていたから、僕が何もしなかったから友達は死んだんです：そう、だから」

高村は溜めに溜めてから云った。

「僕が：その友達を殺したんです。僕の『でも』と『かもしれない』が彼を殺したんです」

―なるほど、それでこの男は、

「だから迷っていて何もしないまま後悔するぐらいなら間違った選択をしてでも何かをする方がよっぽどましなんです」

―この性格なのか：

高村司という男の事が少し解ったような気がした。

「今でも目を閉じるとその友達が悲しい瞳を僕に向けているんです。常に何かをしていないと、気を抜いたらその瞳に押し潰されてしまいうそうになるんです」

―この男はそんな恐ろしい念に

―鬼に：

―追われながら過ごしているのか

「だから一人で凝じっとしてるのはあんまり好きじゃないんですよ。子供みたいです、あはは」

高村は最後だけ少しお道化どけて話を結んだ。

ふと前の方を見ると檻の出口が見えてきた。

陰鬱な暗い森を抜け、長い石段を上がると月明かりに朦朧ぼんやりと照らし出された境内が姿を現した。真夜中の神社に手水ていずの流れる音だけが不気味に響き亘わたっている。妙に湿っぽい空気が漂ただよっていて幽霊や妖怪が出ないのが不思議な程に妖しい。

―白川瑞穂が姿を消したのも

―この境内だ

余りの鬼魅の悪さに井上の足が止まる。

今まで怪奇雑誌の記者として色々な如何わしい場所に足を踏み入れて来たが、それらとこの神社は全くの別物だ。幽霊が出るトンネルや病院などにも行ったが矢張り違う。

ここに出るのは幽霊ではない。

鬼だ。

躊躇する井上を尻目に高村はつかつかと石畳の上を進んで行く。

「ここが境内ですか、って事はこれ以上奥には何も無いって事です
ね」

高村がこちらを振り返る。月明かりに照らされて彼の顔は青白く見えた。まるで高村ではないようだ。

「ちっ、少し広いな…」

「じゃあ、二手に分かれて調べてみますか」

「ああ、そうだな」

高村の提案を受け入れて手分けして調べる事にした。二人は写真機^ラの準備をする。石畳は真っ直ぐ本殿まで伸びている。石畳を挟んで左側を井上、右側を高村が調べる事になった。

一旦ここで別行動になる。井上は手水舎の方へ向かった。月が出ているのである程度目が慣れて来ると懐中電灯が無くても十分見える。

手水舎を通り過ぎると先は視界の開けた急な土手になっていた。

―ほう、なかなか良い眺めだ

この郊外の町から市街地までを一望する事が出来た。

今はもう深夜どころか明け方に近い時間の筈なのだが所々に明かりの灯っている建物もある。余程の早起きか遅寝のどちらかなのだろう。

こうして高い所から眺めると一つ一つの輝きは米粒のように小さいがその一つ一つに誰かの生活があるのだと考えると何か不思議な

気持ちになる。

背後で閃光が焚かれた。
ストロボ

「イノさん、何やってるんですか？」

高村が写真を撮っていた。

「ああすまねえ。夜景に見惚れちゃってたんだ」

つい感傷的になっていたが気を取り直して井上も写真機カメラを握った。

ちりん

井上は素早く音のした方に向き直り、身構えた。

足元で土埃が舞う。

耳に残響だけを残して辺りは再び静まり返っていた。

—どこだ—

呼吸が荒くなる。

—どこにいやがる—

鼓動が早まる。

—小林の言っていた事は

冷汗が滴る。

—満更、気の所為って訳じゃなかったようだな

気の所為などではない。

今の音は—

確実に—

鈴だ。

—澄んだ鈴の音

—澄鈴すみれか—

「おい、高村！」

井上が怒鳴る。名前を呼ばれた高村は直ぐに駆けつけて来た。

「どうしたんですか？」

珍しく取り乱している井上を見てしまった所為で高村にも不安と動揺が伝染したらしい。

「お前：今、何か聞こえなかったか？」

「何がです？」

高村が真剣な表情で訊き返してくる。

「だから、その…音だ！」

「音ですか？」

「そうだ。鈴の音だよ！」

ちりん

「これですか？」

息を飲んだ井上は目を剥き、高村がポケットから取り出して指で摘まんでいる物を凝視する。

「こ、これが…」

ちりん

高村がそれを揺るとそれは澄んだ鈴の音を響かせる。

それは燐寸箱程の大きさの紅い袋。そして袋の口には、

…金色の鈴が結えつけられている。

―すみれ：

「イノさん、どうしたんですか？」

井上の軀はがたと震えだした。それは恐怖と云うより緊張に近い。

井上は言葉を失った。

―何で、こいつが…

「イノさん、イノさんってば！」

無理矢理に声帯を震わせ、声を絞り出した。

「お：お前。それをどこで…」

高村は少年のように爽やかな笑みを見せる。

そして彼の持っている鈴の付いたお守り、すみれは暗闇の黒にも

月明かりの青白さにも染まらずに唯その真紅を主張していた。
高村の口が静かに動き出す。

※

その日は厭に早く目が覚めた。
井上は散らかった部屋の、散らかったソファアーの上でもぞもぞと
軀を起こした。

時計を見ると未だ早朝と呼べる時間だ。

―うげえ、気持ち悪い：頭も痛い

あれから二日。

非常識な時間に仕事をしていたので昨日は流石に休みを取った。

良い気になって夕方からずっと浴びるように酒を飲み続けた所為で
頭が割れるように痛い。

床には火酒ウイスキーの空瓶が転がっている。

―飲み過ぎちまったな：

これが井上の後悔だ。ソファアーに座り直し煙草に火を点けた。

井上はあの日の事を反芻はんすうする。

先ずあのお守り、すみれの事だ。高村はすみれを―まああれがすみれだと云う確証は全く無いのだが―女瀬川に取材しに行った時に遊歩道で拾ったと云っていた。

―通りで鈴の音がちらちら聞こえた訳だ

高村はすみれについての情報を全く持っていなかったようなので石段を降りながら大体の事は一応伝えておいた。それなりの警戒を促すためだ。

すみれと呼ばれている事。

過去に持っている者が失踪している事。

そして、持ち主の願いを叶えるという事。

願いを叶えると云った時に高村は妙に真剣な顔をしたような気がしたが全く何を考えているのやら。どうせ碌な事を考えていないのだろうと井上はその時顔を顰めた。

気持ち悪いから捨てろと云ったのだが、好奇心旺盛な青年はいつもの気になる（・・・）という決まり文句を残してその紅いお守りを持って帰ってしまった。

何事も無ければ良いのだが：

そもそも鬼門と聞いてあの神社に行ったものの鬼も例の写真の少女も姿を現さなかった。それどころか何の手掛かりも得ていない。

―鬼か：

鬼とは災厄であり、異世界の者であり、人の念でもある。

ややこしい…。

―人の念：

高村は亡き友人の念に今も尚苦しめられているのだ。彼の友人は高村の事を恨んでなどいなかったのかも知れない、その友人の意思とは別に念だけが乖離かいりして高村を縛り付けている。

つまり肉体は滅びても残された念だけはこの世の者に影響を与え続ける事が出来るという事か。その念がこの世に悪影響を与えるのならそれは怨念であり云い替えれば：怨霊と云う事だ。

怨念とは人の念。怨霊とは異世界の者。悪影響とは災厄。

―なるほど。そう考えると総てが繋がる。全部：鬼だな。

井上は一人納得して煙草を一口吸う。

―ところでオレは災厄の巫女も鬼と喩えたよな

妙に頭が冴えてきた。

高村は徒ただの子供が残した鬼にすらじわじわと心を食い潰もたらされているのだ。人々に疫病と天災を齎もたらす禍わざわいの象徴。そんな災厄を起こす者がこの世に鬼を残して行ったのならそれはとんでもないものだろう。

もし災厄の巫女が鬼を残していたのなら心だけでなく躰ごと：

―躰ごと：食い潰されるってのか？

―何か：繋がりそうだ

―この世に念を留める、異世界、鬼門、躰ごと喰われる、失踪？
点在する物同士が井上の頭の中で一つの線に繋がりそうになっている。
しい。しかい、あと一步のところで上手くいかない。もう少しで考
えが纏まりそうなのだが：

井上の思考を電話の機械的な呼出音が遮った。

―何だよこんな朝っぱらから：

座り心地の良いソファーから這い出して受話器を取る。

「もしもし」

「あ、井上さんですか」

電話口の相手は小林だった。心なしか慌てているように思えた。

「どうしたんだよ、こんな時間から」

「今、司君と一緒にですか？」

―高村？

「否、今はオレ一人だ」

「そうですか：

あの日、車で二人を家の近所まで送って以来、高村とは会っていない。
眠たそうにしながらアパートの階段を上がっていったのを覚えて
いる。

「実は司君、昨日無断欠勤してるんです」

「ああ？」

高村は今まで欠勤はおろか遅刻すらした事がない。

妙な胸騒ぎを覚えた。

「心配になって家に電話したんですが誰も出ないんです。それに実
家の方にも連絡入れてみたんですが：帰ってきていないらしいんで
すよ」

「なんだと：

井上はそう云ったきり口が塞がらなかった。

―高村が：

―消えた？

付き合いはそれほど長くはないがあの男は信頼の置ける人間だ。
況^ましてや仕事を途中で投げ出すなど考えられない。

何かあったのだろうか。

―まさか：すみれ

あの妙な曰^{いわ}くの付いたお守りの事を思い出した。

「兎に角、私は司君の仲の良い友達にも当たってみます。井上さんも何か思い当たる節があったら探してみてください。」

小林はお願いしますと云って結んだ。

ああ、と空返事をして井上は受話器を静かに置いた。

井上の頭の中で雑然と散らばっていた単語が今一列に並ぼうとしている。総ての点が線として整列し、思案が再構築されてゆく。

―あれは幸せのお守りなんかじゃねえ

―幸せ（・・）なんて代物じゃねえよ

指に挟んでいたまま忘れかけていた煙草を銜^{くわ}える。

―きつと白川瑞穂も消える事を望んだわけじゃねえんだ

眩しい朝日が差し込む窓際に歩み寄り目を細める。

―人を存在ごと丸飲みしやがったんだ

―あのお守りは鬼の念だけが籠ったもの：

井上は窓を開け放った。

流れ込んでくる涼しい春風が部屋の中の空気をかき混ぜる。

―鬼一口だ

春の明け方は美しい。

空がだんだんと白んでゆき、あの神社のあった山の方も少し明るくなってきた。そして紫がかった煙のような雲が空を泳ぐように細くたなびいている。

すみれの事

幾ら登っても終わりが見えない。

石段の固く冷たく生命感の無い感覚が僕の足に伝わってきて必要以上に体力の消耗と焦燥感を覚える。

相変わらず辺りは真っ暗で見通しは良くない。

僕はあの紅い浴衣の少女を探してこの石段を登っている。自分でも何故あの少女を探しているのかは判らない。唯、会わなければいけないような気がしていた。

ふと振り向き石段の下を見下ろした。

つい先程まで石段に腰掛けていた少女：橙^{だいだい}色の瞳をした少女の姿はいつの間にか消えていた。

何故か心細かった。

再び前を向き、いつ終わりを見せるかも知れない冷たい石段を登る。矢張りここでも僕の躰^{あしおと}以外は何も聞こえない。

もう随分と登った。

漸く石段の終わりが遠くに見え出した。これだけ登ったのだからさぞ見晴らしが良いのだろうと再び振り返った。

僕は絶望した。

そこに在るのは、

黒。

徒^{ただ}の黒い色だった。

僕の後ろには見晴らしの良い風景など何も広がっておらず、暗闇しかなかった。

石段の下などと云う物は存在せず僕の一步後ろには奥行きの無い闇があるだけなのだった。

もしこのまま引き返したら僕の躰は闇に溶けてしまうのだろう。そんな気がした。

こんな闇に飲み込まれるのは厭だ。
退路は断たれた。
進むしかない。

大口を開けて追いかけて来る闇から逃げるようにして僕は足早に石段を登っていった。

すると何か懐かしい匂いが僕の鼻先を撫でる。

暗くて目が利かない分、嗅覚は敏感に働いていた。…今の匂いは覚えがある。

とても心が安らぐ匂いだ。

食べ物などの良い匂いとは違う。かと云って無論香水などの鼻を衝くような作り物の良い匂いでもない。

いい匂いだ。

この匂いは…懐かしい

これは懐かしい人の匂いだ。

僕はかつて、この優しい香りに包まれていた。

※

椿はたった一人の妹です。

冬が去り、春が近付いて来ると幼い妹の椿は家の庭で春を探します。

小さな軀を懸命に草叢の奥へと押し込んで行く姿を祖母が心配そうに見ています。

まるで猫でもいるかのように草叢がごそと蠢いているかと思うと、椿がその中からひょっこり顔を出しました。何やらこちらを不思議そうに見ています。その姿を見て祖母も思わず微笑んでいました。

草叢なんか頭に突っ込んだ所為で椿の白い顔が泥で汚れてしまっています。椿は口を尖らせ、頬をぷくと膨らませて目一杯不機嫌な表情を作りました。

どうやら草叢の中には春は未だ無かったようです。

椿は再び草叢の中に潜り込みました。そしてまた草叢がごそごと蠢きます。

漸く諦めたのか草叢から四つん這いの姿勢で椿は出て来ました。相変わらず不機嫌そうな顔をしていましたが、これが不思議とどこか微笑ましいのです。

ふと、椿は地面に手を付いたままぴたりと動きを止めて地面を熟（じつ）と見ています。

どうしたのでしょうか。

すると椿はにっこりと満面に笑みを浮かべました。

どうやら椿の手元に蒲公英たんぽぽが咲いているようです。

おや、さっきまではそこには何も無かった筈なのですが：不思議ですね。もしかしたら椿の不思議な力が花を咲かせたのかもしれないね。

こうして椿は春を見つける事が出来ました。

椿はそっと蒲公英を一輪摘んで、ねえさん、ねえさんと言いながら満面の笑みを崩さないままこちらに駆け寄って来ます。庭を這い回った所為でお気に入りの着物に土が沢山付いしまっています。

椿は何でも祖母の真似をしましたがります。

祖母がいつも着物を着ているので椿も無理を言って子供用の着物を作って貰いました。女の子なのだから赤や青の可愛い色にすれば良いと思ったのですが、色も祖母と同じにしたかったらしく地味な鼠色を選んでいました。

そして着物が出来て初めて袖を通したとき、それはとても喜んで飛び跳ねてながら家中を駆け回っていた程でした。

それからというと椿はいつもその鼠色の着物を着ていました。それ程祖母の事が大好きだったのです。

さて、椿がとことここちらにやって来ました。

そして色素の薄いその円い瞳をこちらに向けながら蒲公英を差し出します。ねえさんこれどうぞ、と言ってにいと小さな口を横に広げて笑いました。

椿は本当によく笑う子です。その笑顔は周りにいる人達まで幸せな気分になります。

椿の小さな掌てのひらから蒲公英を掴つまみ取ってありがとうと言うと、椿は歯を見せて笑いながらどういたしましてと答えるのです。

すると椿が懐を探り出しました。

何やら探しているようです。困った顔をして右上に視線を遊ばせながらごそごそと懐を探っています。

椿の動きがぴたりと止まりました。どうやら探し物が見つかったようです。

そして色素の薄い瞳を再びこちらに向けました。

ねえさん、これもどうぞ

椿は懐から青く透き通ったビー玉を取り出しました。ありがとうと言って両手でそれを受け取りました。

椿は再びにいと笑って、また春を探しに庭の方へ元気に走って行ったのでした。

このビー玉は宝物になりました。

※

窓の外には深々しんしんと降り積もる雪。

冬の朝の冷たい外気は部屋の中にもじわじわと凍しみ込んで来る。ベッドの上で蒲団から顔だけを覗かせて桐生堇きりゆうすみれは大きな瞳をぱっちり開き、窓の外を朦朧ぼんやりと眺めていた。

大学の授業が一時間目からあり、もうそろそろ起きて支度を始めなければならぬのだが窓の外に映る白い世界に見惚れてしまいいかなかなか動き出せずにいる。

窓から見える町の形はいつもと同じなのだが色が何もかも真っ白に変わっている。まるで別世界に迷い込んで来たかのように堇は不思議な気持ちになっていた。

雪は桜の花弁のようにはらりと舞い散っている。

堇はそろそろとベッドから抜け出し窓を開けた。すると身を切るような冷たい空気が部屋に流れ込んで来て半覚醒状態だった堇の頭を叩き起こした。雪も少し部屋に舞い込んで来た。

窓の外に向かって掌を差し出す。

一片の雪が堇の掌に舞い降りて来たかと思うと、それは幽かな冷たい感覚だけを残して跡形も無く消え去った。

立ち上がった事をきっかけに堇はそろそろ大学へ行く支度を始める事にした。窓を閉めて着替えを済ませ、今まで着ていた寝間着を丁寧に畳んでベッドの上に置いた。

姿見の前に正座して髪を梳かしながら鏡に映る自分の姿を熟と見詰める。

「今日も冴えない顔だぞ、あたし」

堇は時々鏡の中の自分とお喋りをする。

そして大概の場合はこのように自分に冗談混じりに文句を云っている。

まあ朝一番の寝起きで凜とした顔をしていろと云われても鏡の中の堇にとっては堪ったものではない。

堇はそれなりに端正な顔立ちで、円く大きな瞳をしている。どちらかと云うと美人に部類するだろう。

しかし内気で遠慮がちな性格の為、当の本人は容姿に全く自信が無いらしい。それに運動嫌いで余り外には出ないので冬でなくても肌は真っ白だ。

背中まである黒い髪を梳くのは少し時間がかかり、流石に足が

痺れて来たので胡坐あぐらを掻いた。鏡に映るだらしない姿勢の自分を見て余計に劣等感を覚えて嫌気が差す。

はあ、と大きく溜息を吐いた。

結局そのだらしない姿勢のまま髪を梳かし終え、最後に眉のあたりで切り揃えた前髪を指で少し直した。

再び鏡の中の自分を大きな瞳で熟と見詰める。

「よし、今日もよろしくね」

そう云って鏡に向かってにっこり笑いかけると、同じように鏡の中の堇も笑い返してくれた。

立ち上がり机の上に立て掛けてある教科書やレポートの中から今日使う物を取り分けて鞆ひきだしの中に押し込む。筆箱に鉛筆を一本足しておこうと机の抽斗ひきだしを開けた。

すると机の奥から青く透き通ったビー玉が転がり出て来た。

そのビー玉を掴み上げ、堇は優しく微笑んでシャツの胸ポケットにそれを仕舞った。

堇は部屋の扉を開けた。

廊下の床はひんやりと冷えていて一步步く度に足元から体温が奪われていくようだ。階段まで来ると下から味噌汁の良い香りが漂って来た。その香りの所為で急に食欲が沸いてきたのでいそいそと階段を下りて行った。

一階では着物姿の祖母が朝食の準備をしていた。

「あら、おはよう。遅いお目覚めね」

祖母が堇に気付いて振り向いた。

「おはよう。起きてから雪を見てたの」

「うふ、堇ちゃんもロマンティックなところあるのね」

テレビをよく見ているらしく祖母は齡の割に外来語をよく知っている。

「ご飯の支度、手伝うね」

「ああ、今丁度終わったから大丈夫よ。あなたは洋卓テーブルに着いていな

さい」

堇は祖母に云われるがまま食卓に着く、すると祖母が次々と食事を運んで来てくれた。良い匂いを漂わせていた味噌汁も目の前に置かれた。

二人分の朝食を配膳すると祖母も自分の食卓に着いた。そして堇の格好を見て心配そうな顔をした。

「幾らなんでもその服装だと風邪引くよ」

堇の今の服装はシャツを一枚着ているだけだった。確かに家の中と雖も流石にこれでは肌寒い。

「うん、出掛ける時には何かもう一枚と外套コートも着て行くよ」

そう云って味噌汁を一口啜った。冷えた躰が芯から暖まった気がする。堇は大きな目を細めてにっこりと表情を緩めて、ああと幸せな溜息を洩らした。

「ねえ堇ちゃん、テレビ点けていい？」

うん、と堇が答える前に祖母はテレビをリモコンで点けた。朝食の時間に朝のニュースを見るのは祖母の日課になっているらしい。

「あら、今日一日雪なの。珍しい…」

天気予報を見ながら祖母が感心しているような、実はどうでも良いようなどちらとも取れるような口調で云った。

堇もテレビに目を向けながら再び味噌汁を啜った。

「近年では稀に見る大雪なんですって。通学の時、気を付けなさいよ。滑って転んだりしたら大変よ」

祖母は相変わらず堇の事を心配している。

「大丈夫だって…」

炊き立てのご飯は美味しいな、などと全く関係の無い事を考えながら適当な返事をした。

次は週間天気予報です。とテレビの中のキャスターが云っている。

「ちよっと凄いわね。三日間もずっと雪が降るじゃない」

祖母は少し感心して天気予報を見ているが堇にはそこまで興味がある事ではなかった。

天気予報が終わり、芸能ニュースが始まった。

堇は普段から余りテレビを見ないのでこの手のニュースはさっぱり解らないので食べる事に没頭した。そんな堇を尻目に祖母はニュースを熱心に見ている。

着物姿でテレビのリモコンを握り締めている祖母の姿が少し滑稽に思えて、ふと口元が綻ほころんだ。

「ごちそうさま」

堇は早々と食事を終えた。食器を片付けようと席を立つと祖母がちょっと待ってと制止し冷蔵庫を開けた。

「デザートに食べていきなさい」

祖母は蜜柑みかんを二つ取り出した。

「蜜柑はビタミンが豊富なのよ」

そう云って祖母は人差し指をぴんと立てた。

祖母から蜜柑を受け取るとうんと頷いて再び席に着き蜜柑の皮を剥き始めた。

甘酸っぱい香りが漂う。

きれいに皮を剥き一粒口に運ぶ。

―甘くて美味しい

甘い蜜柑を食べると愈々（いよいよ）冬がやって来たのだと改めて実感させられる。

他にも冬を予感させる物は沢山ある。

堇が思い付く冬の気配と云えば押入れの中から引っ張り出した羽毛蒲団の匂い、坂道を上っている時に吹き付けてくる冷たい風の匂い、ストーブの石油の匂いなどがある。

不思議と見事なまでに総て嗅覚が頼りになっている。

気が弱くて内気だという事の代償という訳ではないが堇は感受性が強く、四季の気配というものを敏感に感じ取る事が出来る。

「あ、一人で二つも食べられないから一つは椿つばきにあげよう。椿って甘い物が好きなんだよ」

堇がそう云うと祖母は眼尻に皺しわを作りながら微笑んだ。

「堇ちゃんは本当に優しい子だね」

蜜柑を一つ平らげ堇が席を立った。

「えへ、椿はたった一人の妹だからね」

堇はもう一つの蜜柑を手にとって立ち上がり奥の部屋の襖を開けた。

「おはよう、椿」

戸を少しだけ開けて電気を点け、するりと滑り込むように部屋に入る。

その部屋の中は暖房器具を点けていなかった為か居間とは打って変わってとても同じ家の中とは思えない程にひんやりとした空気が充満している。

「うわあ、寒いね。蜜柑持って来たよ」

堇は肩を竦めながら仏壇の前に座り、蜜柑を一つ供えた。

仏壇には一枚の少女の写真が立て掛けられている。おかっぱ頭でくりんとした大きな瞳の女の子だ。お気に入りだった着物の地味な鼠色との対照コントラストの所為で徒ただでも白い肌が余計に白く見える。

その少女ははにかんだような笑みで写真機カメラを覗いている。

少女の名前は桐生椿つばき。

堇と椿の両親は二人が幼い頃、それこそ椿が未だ赤ん坊だった頃に交通事故で亡くなっている。それから二人は祖母の家に引き取られた。

年の離れた幼い妹を堇は可愛がり、よく面倒を見た。

堇と椿は良く似ていて、特に円く大きな瞳と雪のように白い肌は全く同じとも云えそうだった。

しかし性格は正反対でとても血を分けた姉妹とは思えなかった。内気で引っ込み思案な堇とは対照的に椿はいつも外を駆け回り擦り傷を沢山作っていた。祖母と堇はそんな椿をいつも心配そうに見守っていた。

椿が亡くなったのも冬だった。

肺炎だった。

徒の風邪だと思って家で療養させていたが一向に良くならなかった。たので医者に連れて行くとそう診断された。

普段は活発に走り回っていたが幼く小さな抵抗力の無い椿の躰はじわじわと病魔に蝕まれてゆき、やがてお粥も食べなくなってしまう。蒲団の中で凝じつとしていただけの日々が続いた。けほけほと苦しそうに咳をする椿は日を追う毎にやつれていった。

堇が中学校から急いで帰って来た時、椿は愈々（いよいよ）峠を迎えていた。堇が横になっている椿に駆け寄ると、椿は虚ろな目で堇の顔を見てにっこりと笑った。

そうして椿は静かに息を引き取った。

未だ八才だった。

それから四年が経ったが堇は今でも毎日欠かさず仏壇の前に座って椿と話している。

「じゃあ、ねえさんは大学へ行って来るね」

仏壇に手を合わせてから立ち上がって仏間を後にした。

堇は食卓に戻り朝食の後片付けを済ませてから自分の部屋に戻って灰色のカーデガンを一枚上に羽織グレイった。すると躰からだに凍み込んでくる寒さは随分と和らいだ。

振り返り、姿見に自分の姿を映した。

「あたしって地味だな…」

今いち冴えない自分の姿を見て少し落胆した。

―あ、でもこの格好は

しかし黒髪に白い肌、更に灰色の服という色合いで仏壇の写真にあった椿の姿と重なり思わず顔が緩んだ。

鞆コートをを手に取り玄関に向かった。祖母に行ってきますと声を掛けると外套を上から羽織って、首にマフラーを巻き玄関の扉を開ける。家の前で一瞬立ち止まってしまった。

世界が白い。

部屋の中から眺めるのとは全く印象が違う。周りを見渡すといつもの町が総て真っ白に染まっている。毎日見ている自分の家すらも真っ白になっていて本当に別の世界へ来たかのような新鮮な気分になった。

しかし身を切るような寒さによってそんな幻想から一気に現実へと引き戻された。

「うう、寒い…」

堇は身を縮こまらせてマフラーで口元を覆い、小走りで駅に向かって行った。

駅舎の中にまで雪が入り込んでいる。その上を人が歩くので地面の雪は灰色とも茶色とも云えない汚い色をしている。

水っぽい雪の上をぴちゃぴちゃと^{あしおと}音を立てながら堇もその上を滑らないように慎重に歩き、改札口を通してホームにやって来た。

どうやら電車はついさっき行ってしまったばかりのようで暫く待たないといけないらしい。しかしこの寒さの中、次の電車が来るまで凝^{じっ}としているのもかなり辛い。

堇は待合室にそそくさと駆け込んだ。

暖かい。

待合室は石油ストーブが点けられている。所謂^{いわゆる}冬の匂いがした。木製の椅子に腰掛けて堇は着ていた外套^{コート}で身を包み^{くる}蛹^{さなぎ}のように丸くなる。

―気持ち良い

―何だが眠くなってきたな

堇の瞼は次第に重くなっていき段々とうつらうつらしてきた。

こんこん

窓硝子を叩く音が意識の淵から聞こえたような気がした。薄く眼を開けて音のした方を見ると誰かがこちらに微笑みかけている。

堇は寝惚けた目を擦りその姿をよく確認した。

「あ、柚子^{ゆず}ちゃん」

窓硝子の向こう側に居る少女は神谷柚子^{かみや ゆず}。引っ込み思案な堇の少ない友人だ。

柚子は笑顔のまま容赦なく待合室の扉を開け放った。すると石油ストーブの必死の抵抗も空しく、外の冷気が待合室の温もりを奪い去った。突然の温度の変化に反応して堇の躰^{からだ}は更に丸くなった。

「寒い。何て事するの、非道いよ柚子ちゃん…」

「何言ってるの、不健康だよ！」

柚子は腰に手を当て扉の前で仁王立ちし、快活に云い放った。

「うう、閉めてよ。凍えちゃう」

「駄目！このままほっといたら堇ちゃん寝ちゃうでしょ」

「寝ないよ」

堇はマフラーで口を覆ったままふると首を横に振った。

「嘘。だいたい今寝てたじゃない。気持ち良さそうに…」

「寝てないよお」

堇は今にも泣き出しそうだ。

「外で待とうよ」

柚子のとんでもない提案に堇は目を丸くして啞然とした。

「さあおいで」

柚子は澄んだ目を輝かせ堇に手を差し伸べた。

「そんなあ、非道いよお」

柚子は堇の手を取り、殆ど無理矢理雪のちらつくホームに引っぱり出した。

「ああ、寒い…」

堇は手を擦り合わせて真っ白な息を吐きかけた。

「よし偉いぞ堇ちゃん」

柚子がまるで子供をあやすように堇の頭を撫でる。堇もそれを全く厭がる様子も無い。

「もう柚子ちゃんは強引すぎるよ」

そう云って堇は身を預けるように柚子の躰に寄り掛かった。その

姿はまるで仔犬とその飼い主のようだ。

「だってこうでもしないと堇ちゃんたちは春になるまで温室から出て来ない質たちでしょ」

堇の頬を軽く抓まんで柚子は愉快そうに笑う。

柚子とは高校からの友達で、内向的な性格である堇の良き理解者でもある。遠慮がちな堇も彼女になら不思議と何でも話す事が出来て、堇にとって唯一の友達と云っても良い程の存在だ。

幸い柚子と同じ大学に合格して今でも友人関係は続いており、いつも一緒に通学している。

柚子は堇とは違った種類の美人だ。

化粧気が無くて素朴な所は二人とも同じなのだが、雪のように白くしっとりとした印象の堇とは対照的に柚子は明朗快活、太陽の下が似合う健康的な美人だ。所謂いわゆる嫌味の無い美しさと云うものを持っている。いつも笑顔を絶やさない柚子は高校の時から異性にも人気があった。柚子は堇に無いものを沢山持っている。

そんな柚子に堇はいつも憧れている。

そして大好きだった。

深々と雪は振り続けている。

「本当に冬の朝って寒くて厭だな」

「堇ちゃんは解ってないねえ」

堇は訝いぶかしげに柚子の顔を覗き込んだ。

「冬の朝は寒いからこそ良いんだから、こんなふうに雪が降っている朝なんて尚更素敵じゃないの」

堇は眉を顰める。全く共感出来ないようだ。

「雪が積もってなくても屋根にうっすら白い霜が降ってたりするのが冬らしいよね」

柚子は一人でうんうんと頷いている。

「それにさ、朝起きて寒い寒いって文句言いながら急いでストーブ点けるのも冬って感じがしない？」

「そうかな：あたしはお昼ぐらいになってちよつとぽかぽかしてきたぐらいが良いんだけどなあ」

柚子が呆れたように溜息を吐く。

「もう、それじゃあ冬って感じがしないじゃない。良くないよ」

矢張りいま一つ堇には柚子の云う冬の良さが良く理解出来ないようだ。

「柚子ちゃんは寒いのが好きなの？変なの：」

「寒いのも云うか冬らしさが好きなのよ。うーん、あんまり解ってなさそうね：」

再び柚子は堇の左右の頬を掴まんで横に引っ張る。

「痛いよお柚子ちゃん」

横に伸びた堇の顔を見て柚子はくすりと笑う。

「ふふ、ほらもう電車が来るよ」

そう云って柚子は堇の頭に積もった雪を払った。

遠くの方から電車の警笛が聞こえた。

※

「ほら起きなさい」

誰かが頬を引っ張る。

「もう着くよ」

頬を引っ張っていたのは柚子だったようだ。

眠たい目を擦りながら開けると柚子の顔が目の前にあった。

「やっぱり寝ちゃってたじゃない」

「あれ、あたし寝てた？」

どうやら柚子に凭もたれて寝ていたようだ。

「もう堇ちゃんすみれってば熟睡しちゃうんだもん」

大学のある駅まで僅か十五分程だがその間にぐっすり眠ってしまったらしい。

電車は駅に停まり扉が開く。

冷たい空気が堇の眠気を覚ました。暫く眠った所為か先程よりも少し頭が冴えて来た気がする。

「ほら立てる？」

柚子が先に立ち上がり堇に手を差し伸べた。

「うん、ありがと」

堇は柚子の手に両手で？まり立ち上がった。

駅に降りると忘れかけていた寒さが再び身に凍みた。相変わらず雪も降り続けている。

改札を通り駅舎を出ると自宅の近所と同じく、いつも見慣れた道が雪化粧をして真っ白になっていた。矢張り今日は何か新鮮な気分がする。

堇は不思議そうに辺りを見回しながら歩いている。

「ねえ？」

不意に声を掛けられた堇は思わず、はいと畏かしこまった返事をした。

「堇ちゃんは可愛いね」

「へっ？」

唐突に褒められて堇の頬は赤くなった。

「さっきの寝顔とかね…」

「えっ、もしかして涎よだれとか出てた…？」

堇が円い目を向けて心配そうに尋ねる。

「違う違う」

柚子が笑いながら手を横に振る。

「堇ちゃんの寝顔って、なんて言うかね。赤ちゃんて言うか天使て言うか…兎に角とっても可愛いんだよ」

憧れの柚子が自分を褒めている。

堇の白い顔はみるみるうちに桃色に染まっていった。

「天使だなんて…そんな事ないよ。柚子ちゃんの方が男の子にも人氣あるし、あたしなんか…そんな…」

言葉の尻が詰まってしまった。

堇は照れて火照った顔を伏せて足早に歩く。

「ほっぺだって触り心地良いしね。あはは」

堇は両手で自分の頬を押さえる。

「何だかすごく恥ずかしいよ」

胸ポケットの上に手を遣った。堇は動揺したときにはいつも椿に貰ったビー玉に触れる。そうしていると少し気持ちが落ち着くような気がするのだ。

目を閉じてふうと大きく息を吐いた。

「何してるの、それ」

横から柚子が顔を覗き込んでくる。幸い顔の火照りはだいぶ引いていた。

「おまじないなの」

堇が胸ポケットからビー玉を取り出す。それは雪化粧をした白と黒の単色の^{モノクローム}世界で唯一の青を主張した。

「何それ？ラムネの瓶に入ってるやつ？」

柚子は目を丸くしている。

「うん、たぶんそう。妹に貰ったんだ」

「妹？」

「形見なんだ。これをぎゅっと握るとね、何かこう…落ち着くんだよね」

拙い事を聞いてしまったと柚子の表情が幽かに曇る。^{かす}

「気にしないで。こうして妹はいつも一緒だから寂しいとは思ってないんだ」

「強いねえ堇ちゃんは」

表情を歪めていたかと思うと柚子はもう気持ち良いほどの笑顔に変わっていた。

柚子の表情の種類は多い。怒ったり、困ったり、悲しんだり、笑ったりと、くるとくると変わる顔を見ていると堇も何だか楽しくなってくる。

堇と柚子の表情が一致した。

二人はにこにこしながらビー玉を眺めている。

堇はビー玉を目元に翳^{かざ}しながら柚子の顔を見てくすくす笑う。

「何なのよ」

「だって柚子ちゃんの顔ぐにゃぐにゃだもん」

「全く、もう……」

「それでも柚子ちゃんの方があたしなんかよりずっと可愛いな。うん、ほんとに」

「馬鹿な事言っ……」

二人は新雪を踏みしめながら川沿いの路を歩いて行った。

「こんなに寒いのに川の水は凍らないんだね」

「流れてるからじゃない？」

柚子はあまり興味が無さそうだ。

「こんな小さな川にも名前ってあるのかな？」

柚子が話を合わせるようにそう云ってふと川の方を見た。

「そりゃそうだよ、あたし達にもあるんだから川にも名前が無いと可哀想だよ」

「ところで堇ちゃんはこの川の名前知ってるの？」

「さあ……そう言えば知らないな」

その川は川と呼ぶよりも用水路といった方が正しいような気がした。

余りきれいとは云えない。周りの風景とは違って雪の白に染まるのを拒否するかのようにな気味な湯気を放ちながら川底は暗い黒を主張している。

「名前か、言われてみるとあたしも気になってきたな」

ビー玉をポケットに直して堇も川の方に目を遣った。

アスファルトで固められた川の堤は急で川岸と云うか寧ろ^{むし}壁だ。

もし落ちてしまったりすれば蟻地獄のように上がって来る事は出来そうにない。

一応胸ぐらいの高さの鉄柵で遮られてはいるがその風貌の所為もあり、余り近寄りたくも無い。

「ねえ堇ちゃん、あの橋のところに川の名前が書いてあるんじゃないかな？」

柚子がすぐ先にある小さな橋を指差した。

「あ、ほんとだ。何か建ってるね」

橋の傍らに何か碑のような物があった。

二人はいそいそとそれに歩み寄り積もった雪を払った。

そして川が無言の内に名乗る。

「ううん、何て読むんだろう」

柚子が顎に指を置いて首を傾げる。

「知ってる漢字なんだけどね…」

堇も顔を顰める。

「ジョゼかな？」

「メセじゃないの？」

二人で色々と読み方を試行錯誤したがどれもしっくり来ない名前だった。

結論が出ない。

愈々（いよいよ）柚子が苛立ってきたようだ。

「ああもういいよ！」

柚子が頭を掻きながら声を上げた。丁度堇がオンナセと新しい読み方を口にした時だった。

「兎に角。雪女の女に、瀬戸内海の瀬って名前の川なのよ」

ニョと堇が言いかけたところで柚子が痺れを切らしてしまった。

堇がふと柚子の方を見た。

「ほらほらもう行くよ。一時間目始まっちゃう」

柚子がそそくさと歩き始める。

「ねえ柚子ちゃん。なんで雪女なの？」

「どうでも良いからそんな事！」

ヒステリック
臆躁的に柚子が言い放ち堇を置いて先々歩いて行く。

「ねえねえ妖怪好きなの？」

無邪気に目を輝かせながら堇が追いかけて行く。

堇は妖怪や幽霊の類の話、所謂怪談には目が無い。

「はいはい、早く行くよ」

「柚子ちゃんほどの妖怪が好き？ あたしはね、座敷童子とか可愛くて好きだけどな」

堇が大きな瞳を輝かせて柚子の歩く周りを仔犬のようにくるくると回る。相当妖怪の話題に飢えていたようだ。

「あとね、あとね、ぬりかべとか肉人にくじんとかのっぺりしてるのも可愛いかも。のっぺりしていると云えばのっぺら坊…」

「分かった分かった。ほら来なさい」

柚子はまるで兎か猫でも持つように堇の襟首を掴んで大学へと引っ張って行った。堇はあれえと情けない声を上げながら引き摺られて行った。

堇は大学が好きだった。

中学や高校と違って自分の好きな授業を選択出来るし、居眠りしていてもそれ程怒られない。何より柚子と一緒にいられる時間が多かったからだ。

特に今日の二時間目の日本文化史の授業は大好きだった。民俗学を基調にして主に死後の世界や幽霊などを扱っている内容だ。堇にしてみれば涎よだれが出そうな授業だ。

内気な堇は手を上げて質問する事などはとても出来ないが教授の話を熱心に聴いている。

柚子は眠そうにしているが一方の堇は目を爛々（らんらん）と輝かせてノートを取っていた。

特に今日の授業は興味深い。

三途の川の話だ。

教授曰く、三途の川の渡し賃は六文でそれが無いと脱衣だつぎ爺、脱衣婆に衣服を奪われるそうだ。要するに地獄の沙汰も金次第と云う事だろう。だから昔は棺桶の中に六文銭を入れてから墓に埋葬する風習があったそうだ。

そして、幼くして死んだ子供は極楽浄土へ行く事が出来ないらしい。

三途の川の辺、賽ほとりの河原で石を積み続け塔を完成させなくてはならない。

積み終わっても直ぐに鬼が石の塔を崩しにやって来るそうだ。

永遠に終わりが無い石積み。報われない努力。

―椿…。

堇は胸のビー玉を握り締めた。

―大丈夫…だよ

授業が終わって隣でうつらうつらしている柚子の肩を揺すり、目を覚まさせた。

寝惚け眼の柚子を連れて中庭で昼食を摂ることにした。

「ほら、言ったでしょ。解る？ 堇ちゃんは」

「え、何が？」

堇はまるで草食動物のようにサンドイッチを前歯でちびちびと齧っている。

「さっき言ったでしょ。昼になると冬らしくなくなるって」

空を見ると僅かに太陽が覗いている。

そう云えば朝に比べると随分暖かくなっている。中庭の草木に積もった雪も少しずつ解けだして雫を滴らせている。

「冬らしくないわね」

そう云いながら柚子は学食から持ち出したカレーライスをがつがつと頬張っている。堇とは逆にこちらは肉食動物のようだ。

「堇ちゃん午後は授業無かったんじゃない？ 家でご飯食べないの？」

口の周りを舐めながら柚子がこちらを向く。

「うん、そうなんだけどちょっとまだ用事があったさ」

「何、男の子？」

「ち、違うよ！」

堇は首をぶんぶん横に振りながら否定した。

「怪しいな。私に何か隠し事かな？」

柚子が上目遣いに堇の顔を怪訝そうに見る。

「ちょっと調べ事だよ。気になる事があって…」

「ふうん、まあ良いや。兎に角、彼氏が出来たら私に報告しなさいよ」

柚子は顔を近付けて人差し指で堇の鼻を押さえる。

「だから…違うって」

「まあ困った事があったらいつでも私に相談しなさい！そうかそうか…。とうとう堇ちゃんも恋する乙女になったのね。」

柚子が目を閉じて頷いている。

「ちよつと柚子ちゃん！」

「じゃあ私は午後の授業があるから行って来るね。堇ちゃんは可愛いから何とかなると思うけど頑張ってね！」

空になったカレーライスの皿を持って柚子は校舎の方へ歩いて行った。

何か勘違いをされたまま堇は一人取り残されてしまった

「もう…柚子ちゃんったら」

堇は残ったサンドイッチを口に押し込み、手を払って立ち上がる。そして柚子とは逆方向の東棟に向かった。

大学構内は午後にもなると学生の数も多くなり賑やかになって来るのだが東棟だけはいつも閑散としている。

一階と二階は図書館、三階から五階までは教授の研究室となっている。要するに殆どの学生はこの棟に用が無いのだ。

堇は図書館を通り過ぎ三階まで階段を上った。

三階ロビーには簡素な受付があり、そこで事務員が淡々と職務をこなしている。

「あ、あの…」

堇が恐縮しながら声を掛けると事務員は無表情のまま顔を向けて来た。

「レポートの提出ですか？」

事務員は機械音声のように問い掛ける。

「いえ、その…面会を」

我ながら云っている事が恥ずかしかった。面会などまるで病院ではあるまいし。

「ああ、面談ですね」

事務員にあっさりと云い正されて堇の顔は真っ赤になる。穴があれば入りたい程恥ずかしかった。

「その名簿にあなたの学籍番号、氏名と訪問先を記入して下さい」
事務員は目だけで名簿の位置を指示する。

口調は丁寧な敬語なのだが本当に事務的で全く感情が籠っていない。堇は何か馬鹿にでもされているような気持になった。

「えっと、確か日本文化史の教授の名前は…」

あれ程夢中になって聴いていた授業であるのにそう言えば教授の名前も知らなかった。

鞆の中を探り、時間割を取り出す。

日本文化史の担当は…佐倉誠一郎さくらせいいちろうという名前になっている。

名簿の訪問先の欄に佐倉教授と記して堇は奥の廊下へと進んで行った。

こうして見ると面会と表現したのも強ち間違いではなかったような気もする。

左右に整然と名札の掛かった扉が並んでいてまるで個人病棟のようだ。きよろきよろと辺りを見回しながら廊下を歩いて行くと、佐倉誠一郎という札の掛かった研究室を見つけた。

磨り硝子の向こう側には電灯が点いている。どうやら教授は研究室の中にいるようだ。

堇は扉を二回叩いた。

しんと静まり返った廊下にその音は良く響いた。

暫く間を開けて扉の向こうからどうぞと低い声がした。

「し、失礼します…」

扉を少しだけ開けてそつと中を覗き込むと線の細い神経質そうな丸眼鏡を掛けた男が机に向かって何やら分厚い本を読んでいる。

―教授だ

「何をしてるんだい、入るんなら早く入りなさい」

佐倉は机に肘を付いたままの姿勢で扉の方へ目を遣り、その視線は扉の隙間から半分だけ覗かせている堇の顔を捉えた。

「はい。す、すいません」

堇は胆はらを括って研究室内に入った。

ばたんと大きな音を立てて扉が閉まる。

研究室の壁は総て本棚で埋め尽くされていて、その本棚も難しそうな本がみっしりと詰まっている。中には佐倉が著した本も混じっている。

部屋の真ん中で珍しそうに視線をあちらこちらに向けている堇の姿は不審者のようでもあった。

「君は？」

佐倉は堇に一瞥もくれる事も無く問い掛けた。不意に声を掛けられ驚いた堇の背筋はぴんと伸びた。

「一回生の桐生堇です。日本文化史の授業の事で質問がありますです！」

緊張の余り日本語がおかしくなってしまった。丸眼鏡を掛けて分厚い本を読んでいる佐倉は如何にも学者といった雰囲気漂わせていて：少し恐かった。

まあ座りなさいと佐倉が堇を応接用のソファに促す。堇はからくり人形のようなぎこちない動きでソファに腰を下ろした。

「珈琲コーヒーで良いかな」

「は、はいです！」

未だ緊張は解けていないようだ。

佐倉は上品に笑いながら珈琲を淹いれている。香ばしい匂いが堇の鼻を擽くすぐる。

「砂糖は？」

「大好きです！」

「否、だから何杯入れるんだい？」

「え、あ。七杯です！」

どうも会話に齟齬がある。

本棚を見ると民俗学や民族学や歴史学、宗教に関する本が殆どを占めている。中には堇も興味がある幽霊や妖怪の伝承に関する本もちらほらとある。

「外は寒かっただろう、珈琲でも飲んで温まりなさい」

佐倉がカップを二つ持って来た。一つを堇の前の洋卓テーブルに置いた。

堇は両手で包むようにカップを持ち一口含んだ。

「甘くて美味しい」

冷えた躰に沁み亘わたっていくようだった。

はあ、と幸せな溜息を吐いた。

「ところで質問と云うのは？」

一気に現実に戻って来た。

見ると堇の前のソファで佐倉が長い足を組みながら座っている。

「あの…今日の三途の川の話なんですけど」

佐倉は真剣な顔つきで堇の目を見据えてふむふむと頷く。その真剣な顔が堇にとっては少し恐いのだ。

「その…三途の川って本当にあるんですか？」

佐倉は静かに深く頷いた。

「私はね、死んだ事が無いからはっきりとは云い切れないけど…桐生さん。君はどう思うんだい？」

珈琲を啜すすりながら佐倉が堇の方に視線を送る。

「あたしは…分かりません」

堇は不甲斐無さそうに顔を伏せた。

「そう云うものなんだよ、死後の世界と云うのは」

佐倉の口元が少し綻んだ。

「徒ね、三途ただの川のように死後の世界で川を渡るといふ概念を持つ宗教は世界中至る所にあるんだよ」

堇がふと顔を上げる。

「例えばエジプトの太陽信仰。古代エジプトでは太陽は毎日生まれ変わるとされていたんだ。人々はその太陽を輪廻転生の象徴として崇めていた。ところで桐生さん、エジプトで有名な川と言えれば何か知っているかい？」

「え、ええと。そうですね…ナイル川ですか？」
寧ろそれしか知らない。

「正解。それだよ」

佐倉がにやりと微笑むと堇は何か安心した。

「そのナイル川がね、境界線になっているんだ。あの世とこの世のとのね」

堇の耳があのだと云う単語に反応してぴくりと動く。

「古代エジプトではナイル川の東にしか住居は殆ど無かったんだよ。西側をネクロポリスと呼んでね、ピラミッドや墓地があるんだ。所謂死者の都と云うものだ」

「教授、何で死者の都が西なんですか？」

不思議そうな顔をして堇が問い掛ける。話に興味が沸いてきて緊張も解け始めたようだ。

「太陽の沈む方角は？」

「あ、西ですね」

「そう、太陽は西で死に、東から生まれ変わる。つまりネクロポリスは転生を待つ為の場所でもあるんだ」

興味深そうに目を丸くしながら堇は頷いている。

「他にはインドのガンジスもそうだね。厳密に云うとこれは死後の世界とは少し違うかもしれないな。ヒンドゥー教でガンジスは聖なる川とされていてね、死者を火葬した遺灰をガンジスに流すんだ」

「え、埋めたりしないんですか？」

「否、ヒンドゥー教ではガンジスに還す事が死者への最大の弔いになるんだよ」

へえと感心しながら堇は珈琲を一口啜った。

「教授、他には？」

堇は当初の目的を忘れて話に夢中だ。完全に取り込まれてしまっている。

「ああ、特に日本と似ているものであればギリシャ神話だね。死者はステュクスと云うあの世との境界になっている川を渡るんだ。」

「三途の川：みたいですね」

「ああ、ステュクスと云う単語を三途の川と和訳する場合もあるぐらいだからね」

佐倉も珈琲を啜る。ここまで立て板に水の如く一気に喋ったので流石に喉も渇くのだろう。

「ステュクスはプレゲドン、レーテ、コキュトス、アケロンという支流があつてね、それも渡らないといけないんだ」

「わあ、三途の川より大変ですね」

完全に緊張は解けたようで堇はいつものおっとりとした顔つきに戻っている。

「特に最後に言ったアケロンを渡るときが本邦の三途の川の伝承と良く似ていてね、川の辺にカロンという渡し守がいるんだ」

佐倉は足を組むのを止め、両膝に両肘を置いて少し前のめりになった。

「ここで渡し守カロンに渡し賃の一オボロスを支払う…」

佐倉の云い方が妙に妙に低い声で不気味だったので堇はぞっとして身を竦めた。

「三途の川の六文と一緒にじゃないですか！」

「似ているのはそれだけではない。古代ギリシャではその一オボロス銅貨を死者の口の中に入れて葬る風習があった」

堇は徒でも大きい目を更に大きく見開いた。

「そう言えば日本でも棺桶に六文銭を入れてたんですよ…」

「似ているだろう？」

堇は黙ったまま円い目を見開き、激しく首を縦に振って同意している。相当驚いているらしい。

「ところで三途の川は仏教のお話なんですか？」

堇が質問すると坂本は顎を指で触り、視線を斜め下に落として肯定とも否定とも取れない顔をした。

「極楽や地獄は仏典にも載っているけど、実は三途の川は正確に云うと仏教を基にした民間信仰だね。三途の川は平安時代から広まっている信仰なんだが仏教の古い歴史と比べると遥かに浅いんだ。」

自分の予想が外れて堇は少し残念な気持ちになった。

「でも実在する川で三途川と名付けられているものは三大霊場の一つの恐山をはじめとして国内に四つもあるんだ。民間信仰と雖もそれなりに古い歴史があるからね。それに賽さいの河原と云う名前の場所も日本各地に……」

「ああ！それ、それです！」

堇が珍しく声を張り佐倉の熱弁を遮った。急に話を止められた佐倉は少し不服そうにしながら身を引いた。

「賽の河原の質問をしに来たんです。」

堇は洋卓に手を着いて身を乗り出す。

「子供は……賽の河原で、虐められちゃうんですか……」

真剣な堇の表情に坂本は面喰ってしまった。

「あくまでも伝承だがね、親より先に死んだ子供は親を悲しませた罰として賽の河原で石積みをさせられるとされているよ」

佐倉は眉間に皺を寄せてネクタイを直しながら云った。

「親より先……ですか」

「そうだ、親不幸の報いとしてね」

「じゃあ椿は……」

「本当に親より先の場合なんですか？」

「私が識しっている限りではそうだね」

「椿は……大丈夫だ！」

堇の不安は氷解した。

「ああよかった！」

立ち上がり再び堇は大声を上げた。それを見ている佐倉はぼかん

としている。

「あたしね、すごい不安だったんですよ。でも安心しました」

「いいから座りなさい桐生さん」

苦虫を噛み潰したような顔をして佐倉が堇の顔を見上げている。

「す、すいません…」

佐倉の冷たい視線を浴びて冷静になった堇はおずおずとソファに腰を下ろした。

目の前にある珈琲に手を伸ばし一口啜るが、それはもうすっかり冷めてしまっていた。

気味悪い沈黙が流れる。

その沈黙を破ったのは佐倉の咳払いだった。

「まあ良く解らないが私も微力ながら役に立てて嬉しいよ」
いつもの学者らしい表情に戻った。

「はい。ありがとうございます」

「また質問があったらいつでも来なさい…それじゃあ」
そう云って佐倉は立ち上がり自分の机に戻ろうとした。

「あ、あの…」

堇の声に佐倉が足を止めて振り返る。

「教授は…妖怪とか幽霊…好きですか？」

遠慮がちに堇が問う。

すると佐倉はそそくさと堇の前のソファに戻って来た。背凭れにゆったりと体重を預けて足を組んだ。

そして佐倉は堇の顔に視線を注ぐ。

「ああ、大好きだ！」

三十代半ば程の男はまるで少年のような笑顔を浮かべている。どうやら堇と同じく佐倉もこの手の話題に飢えていたようだ。

佐倉が二人分の珈琲のおかわりを淹れに行った。

気が付けば一時間も経っていた。

堇は佐倉に深く頭を下げて礼をして研究室を後にした。

白い空は一旦雪を降らすのを止めていた。堇は時計塔に目を向ける。

—もうすぐ三時間目が終わる時間だ

このまま一人で帰るのも癪しゃくだと思い柚子の授業が終わるのを待って一緒に帰る事にした。午後になっても太陽が一向に姿を見せないので普段よりも外は寒かった。堇は外套コートの襟しつかを確りと握って柚子の授業のある校舎へとぼとぼと歩いて行った。

冬場、校舎の外を歩く学生は殆どいない。皆授業が終わるとさっさと帰ってしまうのだ。だだっ広いキャンパスに唯一人取り残されたように少し寂しい気分だった。

堇は誰ともすれ違わないうちに校舎の前に辿り着いた。

本当は暖かい校舎内で待ちたいのだが生憎あいにく柚子がどの教室にいるのか分からない。下手に中で待っていては行き違いになってしまいかもしれない。

寒空の下、堇は校舎の入り口の前の中庭で待つ事にした。

中庭は深閑として全く人の気配が無い。堇はこの世界に自分一人だけになってしまったような錯覚すら覚えた。

時間がゆっくりと流れている。

キャンパス内の地面は石造りになっていて余計に冷たい感じがする。堇は校舎の壁際に雪に濡れてない場所を見つけ、そこに腰を下ろした。

凭れた壁から背中に冷たさが伝わって来る。

—やっぱり寒いなあ

堇は白い息を吐いて両手を温める。

空を見上げると今にも雪がまた降って来そうだった。研究室で飲んだ甘い珈琲の味を思い出して暖かい部屋が恋しくなる。

思い出したように胸のポケットからビー玉を取り出した。

—椿：

顔の前にビー玉を持って来て心配そうに見つめる。

—椿は大丈夫なんだよね

―鬼に虐められてなんかないよね

堇はビー玉を握りしめ額に当てた。

椿には不思議な力があつた：ような気がする。

昔、堇が転んで膝に擦り傷を作ってしまった事があつた。そこに心配そうに駆け寄って来た椿が傷口に触れるとたちどころに痛みが引いた。

どうやったのと問い質すと、^{ただ}いたいのはおやまにとんでいったよと云って白い歯を見せてにこにこ笑っていた。

まるで魔法使いのようだった。

椿が消すのは肉体の痛みだけではなかった。

おとなしい性格の堇は小学生の頃、学校で苛められて泣きながら帰って来る事もよくあつた。そんな時も椿がしくしくと泣いている堇に触れると不思議と悲しさがどこかに消し飛んで楽しい気分になった。確かその時も椿はこう云っていた。

かなしいのはおやまにとんでいったよ、と。

その事を祖母に聞くと何か納得したように頷いていた。

祖母の話では亡くなった父にもそんな力があつたそうだ。堇の両親は交通事故で亡くなったのだが母の亡骸だけには傷一つ無く、安らかに眠っているようだったそうだ。

もしかすると父は最期の力を振り絞って母の傷と痛みと苦しみを消し去ったのかもしれない。

ところが堇にはそんな力などまるでない。何だか少し椿や父が羨ましくなった。

そして椿の力は今でもここにある。

こうして椿の残したビー玉に手を当てていると厭な事や悲しい事も全部消えていくようだ。

椿の云うお山に飛んで行くのだろうか。

椿はこのビー玉にその力を込めて残していたのかもしれない。

―やっぱりこれはあたしの宝物だ

ビー玉越しに辺りを覗く。積もっている白い雪はビー玉と云うフ

アインダーを通すと鮮やかな青に姿を変えている。そのまま上を向くと白い雪雲に覆われた空も忽ち爽やかな青空になってしまう。

―これも椿の魔法かな

堇はしだいに寒さも忘れて幸せそうに青い世界を覗き込んでいた。

校舎からちらほらと学生が出て来た。どうやら三時間目の授業が終わったようだ。

膝を抱えて座ったままの姿勢で入口から柚子が出て来るのをまだかまだかと待っていると、そう待たないうちに柚子の姿を見つけた。

「柚子ちゃん！」

大きく手を振りながら柚子の名前を呼んだ。堇の声に気付いた柚子がこちらを向いた。

「あれ、堇ちゃんもう授業なかったんじゃないの？」

「うん、でもちよつと今まで用事があったんだ」

「こんなに寒いのに何で外にいるのよ」

「柚子ちゃんを待ってたんだ。一緒に帰ろ」

柚子は少し苦い顔をした。

「ゴメン。今日はちよつと…」

「え…」

「今日はこの後この子と買い物に行くんだ」

柚子の横には堇の知らない女ひとがいた。

整った顔立ちの切れ長の目をした、化粧の濃い女。

動物系香料の淫靡いんぴな匂いが鼻腔を擽る。

綺麗ではあるが少しけばけばしい。

堇の苦手な人種だ。

「同じ授業の子なの。久野杏奈くの あんなっていうのよ」

柚子に紹介された杏奈という女ひとはちらつと堇を見ただけで無愛想な表情のままにいる。

―なんか恐そう…

「よ、よろしく…」

上目遣いに杏奈の方を見ながらそう云ったが杏奈はもう堇の方をちらりとも目を向けず、ぞんざいに鼻であしらった。

—なんか厭だひてなこの女

流行りの服に身を包んで両肘を抱えるように腕を組んでいる杏奈の佇まいはまるで百貨店の飾人形マネキンのようだ。

どうも堇はこの手の人とは仲良くなれる気がしない。

みんな同じような服を着て同じような化粧をしていて見分けがつかない。流行に疎い堇にはお洒落をどうこう云おうにもよく分からないがこんな格好はしたくないと思っている。

徒でさえおっとりしていて存在感の薄い自分がこのように皆と同じような格好をしてしまうと本当に自分の存在が消えてしまい兼ねないと堇は思っている。

何よりこの手の人はみんな地味な格好の自分に対して見下したような態度をとる…ような気がする。

堇はそんな気がしていた。

「杏奈はね、今の授業で隣の席なんだ。すっごいお洒落でしょ、憧れちゃうよね」

柚子がまるで自分の事のように自慢げに云う。

—お洒落…か

よく似た服装をした人なら今日だけでも大学内で少なくとも十人ほど見ている。駅や電車の中も合わせれば二十人を超えているだろうか。その中に杏奈も含まれているかもしれないが違いが判らないのでどうかは分からない。

周りと同じ格好をする事がお洒落なのだろうか。大多数と同調する事が善しとされるのだろうか。

堇にはよく解らない。

その時、持っていたビー玉てのひらが掌から零れ落ちた。

—あっ…

それは石造りの地面を乾いた音を響かせながら一度二度と跳ねて堇の手を離れて行った。

ビー玉は真っ直ぐに転がって行った。

よりによってそれは杏奈の靴に当たって止まった。

「ごめん…ごめんなさい！」

堇は立ち上がり慌てて杏奈の足下に駆け寄る。香水の匂いがきつくなった。

「えへへ。これあたしの宝物なんだ」

杏奈の前で膝を着いてそろりとビー玉に手を伸ばした。精一杯媚びるように笑っている堇の頭上で、見下すように鼻で笑う声が聞こえた。

杏奈の足がビー玉を蹴り飛ばした。

「ああ！」

堇は吃驚したような声を上げて転がって行くビー玉を目で追った。ビー玉は校舎の縁の溝に落ちた。

四つん這いのまま一目散に落ちた溝まで這うようにして駆け寄った。

解けて泥と汚水の混じって茶色く濁った雪とも泥水とも云えない液体の中に手をつっ込んでビー玉を探した。堇は躊躇せず^{ちゅうちよ}に汚い溝を素手で掻き分ける。

我ながら惨めな姿だと思った。

「あ、あった！」

泣きそうになりながら汚く濁った液体の中からビー玉を取り出して自分の服でそれを拭った。

冷たい雪解け水は堇の肩までじんと痺れさせていた。

「あなた、汚いわね」

杏奈が初めて口を開いた。思った通り人を蔑むような冷たい声をしていた。

地面に膝を着いたまま堇は杏奈の方に振り返った。その目を見て堇の背筋は凍りついた。

「何…この目は」

杏奈はこれでもかと云う程の軽蔑と卑下の眼差しを堇に向けてい

た。堇は蛇に睨まれた蛙の如く動けない。

否応なしに服従を強いるこの目。

―この目はまるで…鬼…

「ちよつと、杏奈…」

柚子が糾^{ただ}そうとするが杏奈はお構い無しに堇を攻撃し続ける。

「あなた今、地べたに座っていたでしょ。本当に汚いわね、信じられない」

杏奈が腕を組んだままの姿勢で斜めに堇を見下ろす。その眼には侮蔑がたつぷりと含まれていた。

「…ご、ごめんなさい」

堇の声が震えている。

―怖い…

「ふん、あなた自身が汚いから平気で溝^{どぶ}にも手を突っ込むのね。気易く近寄って来ないでよね」

―あたしは汚いの…?

気の弱い堇は杏奈の言葉通りに自分という存在に疑問を持ってしまった。そして自己嫌悪に陥った。

―あたしは汚い…

自分が杏奈と、そして柚子と比べて遥かに下賤で穢^{けが}れた身分の間なのだと思った。何か死んでしまいたい程に自分が嫌いになりそうになった。

自分という存在が揺らぐ。

―あたしは卑しい…

「本当にごめんなさい…もう近付いたりしません…赦^{ゆる}して…下さい…」

堇は涙を浮かべて赦しを乞う。その姿はまるで杏奈の卑しい奴隷のようだ。

「ちよつと堇ちゃん、何言ってるの!そこまで…やめなよそんなの」
柚子が慌てて仲裁に入ろうとする。

堇のその惨めな姿を悠々と眺めて満足したように杏奈は嘲笑して

踵^{きびす}を返し立ち去った。

その時の杏奈の表情はまるで冷血な鬼のようだった。

「杏奈、待ってよ！」

立ち去る杏奈と膝を付いたままの堇との間に板挟みになった柚子は申し訳なさそうに

「ご、ごめんね。堇ちゃん……」

と云って堇をその場に残し杏奈を追って行った。

― 柚子ちゃん……

堇は唯一人寂しいキャンパスに取り残された。雪の上に膝をついたまま涙ぐんだ目を大きく見開いたまま暫く動くことが出来なかった。

膝からじわりじわりと雪の冷たさが凍みあがって来る。

― あたしは……

天も堇を嘲笑うかのように冷たい雪を降らせてきた。

― あたしはそんなに……汚いの……？ 卑しいの……？

家に着く頃には陽も落ち、もう薄暗くなっていた。

雪の日は夕方でも空が紅く染まる事はない。白い雲に隠された太陽は徒力^{ただ}を失ってゆき徐々に暗くなるだけだ。寂しい気分を増幅させるから矢張り冬は嫌いだ。柚子の云っていた冬の風情など欠片ほども解らない。

暗い気持ちを抑えながら漸く家に辿り着き、玄関の扉を力なく開けた。靴を雑に脱ぎ捨て、堇は摺り足で幽霊のようにふらふらと廊下を歩くゆく。

祖母はいつものように居間でテレビを見ているようだ。

「堇ちゃん？ おかえり」

堇はただいま、と沈んだ声で返事をするそのまま居間を奥へ奥へと進んで行った。

「どうしかたの？」

大丈夫、何でもないよと云って堇は仏間の襖をゆっくりと開けた。

逃げ込むように仏間に入って電気も点けないまま仏壇の前に座り込む。

薄暗い仏間の中で仏壇の金色の金具が朦朧ぼんやりと光を放っているかのように映えている。

堪えていた感情も愈々限界を向かえて抑えきれなくなり溢れ出して来た。堇は両手で顔を包み、声を出さずに泣いた。

—なんでこんなに悲しいんだろう

拭っても拭っても、次から次へと涙は泉のように滾々（こんこん）と湧き出て来る。自分でもなぜこれ程に涙が溢れるのか解らない。

仲の良い友人を取られたからだろうか？

汚いと蔑まれたからだろうか？

椿を、ビー玉を足蹴にされたからだろうか？

それともそれらに対して何も言う事が出来ない自分が情けないからだろうか？

総て正解のような気もするが逆に総て違うような気もする。よく解らないが兎に角：悲しい。

泣いていると更に悲しくなり自分の感情も制御出来なくなってくる。

堇は正座したままの姿勢で仏壇の前に頭を抱えて蹲つまずくまり、絹のようなしなやかな黒髪をくしゃくしゃと掻き回した。

泣いている堇とは対照的に仏壇の写真の少女は眩しい笑顔を振り撒いている。仏間には堇の嗚咽おえつだけが聞こえる。

—あたし、何だか格好悪いよ

どういう訳か堇は泣き崩れる自分を客観的に見ていた。まるで肉体から心だけが乖離かいりしたような不思議な気分だ。声を漏らして泣いている自分を情けなく思う。

小学生の頃とまるで同じだ。また苛められて帰って来て椿の前で泣いている。

—何も変わっていないんだね、あたしは。

堇の躰の方は蹲つまずくったままで椿のビー玉を握り締めて泣き続けてい

る。

その時、堇の頭に何かが触れた。

堇の心は再び肉体の方に戻った。

―何だろう

手だ。

小さな手に頭を撫でられているような気がする。何か慰められているようだった。すると不思議な事に悲しい気持は少しだけどこかへ飛んで行ったような気がした。

―もしかして…椿？

はっと堇は顔を上げた。

仏間を見回したが矢張り誰もいなかった。薄暗い仏間はしんと静まり返っている。この部屋に椿はいない。

椿なら目の前の写真の中で照れ臭そうに微笑んでいる。

しかし確かに誰かが頭を撫でてくれた。確りと堇にはその感覚が残っている。お陰で気持ちが少し落ち着いた。

―きっと椿が心配してくれたんだ。ありがとう

堇は涙を拭い写真の中の椿に笑いかけた。

暫くの間仏壇の前に座したままいたずらで徒に時間が過ぎていった。

堇の背後ですうと襖の開く音が聞こえたかと思うと外から仄かな光が漏れて入って来た。

「堇ちゃん…何してるの？」

心配そうな祖母の声がした。堇は声のした方に振り向いた。

「おばあちゃん…」

「雪で濡れたままじゃないの、早くお風呂に入らないと風邪を引いてしまうよ」

祖母はそう云って仏間の電気を点けて堇の隣に座った。そして堇の顔を覗き込んだ。

「泣いてたのかい？」

「うん…ちよっとね」

「何があったのかは訊かないけど、もう大丈夫なの？」

「うん…」

祖母は少し安心した顔をして無言のまま董の額に手を置いた。

—温かい…

まるで風呂に入っているみたいに体が温かくなってきた。董は余りの心地良さに眠ってしまいそうになった。

「おばあちゃん」

「何だい？」

董は薄眼を開けて祖母に訊く。

「おばあちゃんにも不思議な力があるんだね。何かすごく温かくなってきた、幸せな気分になってきたよ。」

「さあ、それはどうかねえ。不思議な力なんておばあちゃん解らないよ…」

祖母は自分ではそう云っているが祖母に触れられる事によって董の心は憑き物が落ちたように軽くなっていった。胸の中に巣食っていた悪霊がどこかへ飛んで行ったようだ。

「椿やお父さんにはそんな力があつたんだよね？」

「ああ、椿ちゃんもあなたのお父さんもそうだったね」

気持ちが安らいで少し眠くなった董は体を預けるように祖母に凭れかかった。祖母は董の頭を優しく撫でた。

—おばあちゃんの手、さっき頭を撫でた手とよく似てる…やっぱりおばあちゃんも椿やお父さんと一緒だ

—でも…

「でも。あたしにはそんな力なんて…無い」

仏壇の椿に目を遣った。着物姿の幼い妹も矢張り祖母とよく似たものがある。

—あたしだけ仲間外れだ

董は疎外感を覚えて表情が幽かに曇った。その僅かな変化を汲んだのか祖母は慰めるように董の肩を抱いた。

「董ちゃん…あなたは自分で気付いていないかもしれないけど、あなたは椿ちゃんやお父さんよりもずっと強い力を持っているのよ。」

堇は顔を上げ祖母に目を向けた。

「そんなのあたしには無いよ…」

―無いよ…いつもあたしは泣いてるだけだもん

祖母は暖かく笑った。

「堇ちゃんは誰よりも優しいのよ」

―違う。あたしは誰よりも弱いだけ

「それが堇ちゃんの力なんだよ」

祖母はそう云って堇の肩を優しく敲たたいた。同じように椿の写真もこちらに向かつて優しく微笑みかけているようだった。

「おばあちゃん…」

堇には祖母の云っている事がよく解らず、ぽかんとしているだけだった。しかし一人でも自分の事を認めてくれている人がいるように思えて何か少し嬉しかった。

「さあ、お風呂にでも入って来なさい。風邪ひくよ」

うんと頷いて堇はゆっくりと立ち上がり仏間を後にした。その頃にはもう陽はすっかり落ちていた。

この日は随分疲れていたので夕食の後、自分の部屋に戻って直ぐに眠る事にした。

―椿…今日は非道い目に合わせちゃったね…ごめんね

机の上に置きっぱなしにしていたビー玉も机の抽斗ひきだしに仕舞った。

堇は乾かしたての未だ温かい髪を手で梳きながら姿見の前に立つ。

部屋の電気を消したままで日課のように自分に向かって話しかける。

「今夜は…ちょっと良い顔してるね。あたし」

窓の外から脆弱な月明かりが差しこんで来ているだけの部屋は殆ど真っ暗なのだが少しずつ目が慣れて来る。

今日は厭な事があった筈なのにどこか嬉しそうな顔をしている自分が不思議だった。多分これも祖母のお蔭なのだろう。まるで大学での自分とは別の生き物のようだ。

「ねえ、あたし。あたしに不思議な力なんてあるのかな？」

鏡に怪訝な表情けげんを向けたあと堇は照れ臭そうに自嘲して笑った。

「無いよねえ。そんなの」

堇は椿や父が羨ましかった。

それは不思議な力ではなく明るい性格の事だ。

自分はじめじめていて暗い性格なのだと思い込んでいる所為もあって人と上手く話す事も出来ない。結果として恰好の苛めの標的になってしまふ事もあった。

特に長く一緒にいた椿には自分の妹ながら憧れすらあった。否、それは嫉妬に近かったかもしれない。

—そう。それは嫉妬だよ

「え、何。今の…」

まただ。

また堇の心が躰から抜け出したようになった。今のはまるで鏡の中の自分が語りかけて来たようだった。しかも仏間にいたときよりも更に自分の手を離れた所から聞こえたように思える。

鏡の中の堇は今の堇と同じように驚いた顔をしている。しかしどこか演技臭いような気がする。

「あたし…だよね？」

—あたしだよ

「名前は？」

—桐生堇。よく解っている事じゃないの

堇は自分から抜け出そうとした自分を手繰り寄せるように頭の中で奇妙な問答を一人でしていた。

別の人間が頭の中に住んでいるような感覚だったがどちらの言葉も自分が考えた台詞だという事は実感出来ている。不思議な感覚だった。

頭の中の自分が訊いてくる。

―久野杏奈さんをどう思う？

自分で思い出しておいて堇は吐きそうになって口元を手で覆った。

「あれはあたしが悪かったの…久野さん綺麗好きだったんだから」

―あたしは悪くない

「え…」

―悪いのは久野さんじゃないの？

自分自身の問いに堇は答えられなかった。

―椿を蹴ったんだよ…許せる？

「もうお終いよ…こんな事考えるのはもう止めよう」

堇は対話を切り上げようとした。

―逃げるの？

目を見開いて鏡の中の自分を見た。

今の考えは完全に自分のものではない。

自分の中に違う人間が取り憑いたような…否、違う。寧ろ自分の中から別の人間が生まれてその意識だけが乖離して独立したと表現した方が正しいかもしれない。

鬼魅きみが悪い。

鏡の中の堇は怯えているような様子だ。それを見た堇は少し安心した。

「あたしはあたしなんだ」

鏡を壁に向けて堇は床に就いた。

―あるよ。力はあたしにもあるんだよ

夢と現実の狭間で堇が堇に語りかける。

※

雪の日。

灰色がかった空から冷たい雪が視界を遮る程に降る日。

解けかけた雪でぬかるんだ道を何度も転びそうになりながら必死になってあたしは走りました。

中学校に祖母から電話が掛かって来たのでした。

椿が危篤状態だと…。

あたしはその知らせを受けて午後の授業など投げ出して一目散に椿の元へと駆け出しました。上着も羽織らずに雪のちらつく寒空の下を走っていたのですが寒いなどとは思いませんでした。それどころかシャツが肌に張り付く程に酷く汗をかきました。

視界が狭くなり前しか見えません。

視界が悪いのは勿論必死だった事もありますが涙で目の前がぼやけていた所為もあります。揺らいで定まらない視界、これ程取り乱したのは人生で初めてでした。

やっとあたしの家が見えました。

あたしは扉を突き破らん勢いで家の中に駆け込みました。

椿、椿と妹の名を喚きながら彼女の寝ている部屋の戸を慌ただしく開けました。部屋の中には重々しい空気が充満しています。畳の上に呆然と座している祖母と白衣を着た医者の姿がありました。

そして椿はその小さな軀を蒲団の上に横たえています。

あたしは妹の名前を叫び椿の傍に駆け寄りました。苦しそうに咳をしながら椿は虚ろな瞳をあたしに向けました。そして椿は白い歯を見せて力なく笑いました…精一杯あたしを心配させないようにしているのでしょうか。その健気な姿が余計にあたしの涙を誘い、視界をぼやけさせます。

いつも活発に庭を走り回っていた椿は見る影も無く弱々しくなっていました。

椿はあたしにその白い手を差し伸べました。

あたしはその手を強く握りしめました。

温かい…。

そして悲しい気持が少し薄れたのです。

こんな時でも椿はあたしの悲しい気持を取り除こうとしているの

でしょうか。そう思うと余計に胸が痛くなります。

椿の頬に手を触れました。すると椿は嬉しそうな顔をしました。

ねえさん　かなしいのはおやまへとんでいったよ
だから　なかないでね

満面の笑みです。

その名の通り椿の花のようでした。

そう云って椿は静かに目を閉じました。

医者は目を背けるように俯きました。

祖母は手で顔を覆い、出来る事なら代わってやりたかったと嘆き
その場に泣き崩れました。

あたしはそのまま固まっていました。

最初は目の前で何が起こっているのかが理解出来ませんでした。

でも少しずつ今何が起こっているのかが解ってきたのです。

それはとても悲しい事でした。

それは満ちてくる潮のようにざわざわとあたしの胸に打ち寄せて
来るのです。

椿はもう笑いません。

椿はもう怒りません。

椿はもう泣きません。

椿はもう喋りません。

椿はもう動きません。

あたしは椿の躰を抱き寄せました。力いっぱい抱き締めました。

椿の魂が躰から逃げ出さないようにきつく抱き締めました。

しかしもう遅かったようです。

椿の躰はみるみる内に冷たくなっていったのです。

あたしの腕の隙間からまるで乾いた砂漠の砂のように体温が、魂

が零れ落ちていつているようでした。

冷たい死の香りがしました。

椿の亡骸を強く抱き締めてあたしは慟哭どいつくしました。

椿はもう二度と動かないのです。

※

昨日に引き続き、予報通り今朝も雪が降っている。はらはらと風に揺れる雪は暖かい部屋の中から眺めている限りでは桜の花弁のようで春を彷彿する。

「何ぼうつとしてるの？学校に遅れるわよ」

祖母の声で気が付いた。

今は朝食を食べている途中だったのだ。堇すみれは玉子焼きを箸で摘まんだまま口を開けて止まっていた。

毎朝祖母は判で押したようにテレビのニュース番組を見ながら食事をしている。矢張りこれが日課なのだろう。

「う、うん」

空返事をして堇は箸を進めた。

祖母はいつもの堇との微妙な違いを感じ取ったらしい。

「あら。何だか今日は元気ないわね…」

祖母はテレビから目を逸らして堇の顔を心配そうに覗き込んだ。ニュースキャスターが淡々と独り言のように難しい政治の事を喋っている。

「うん。ちょっと厭な夢を見たんだ」

「夢？」

祖母は首を傾げる。

「椿の…あの日の夢」

堇の言葉が詰まった。あの日とは勿論椿が亡くなった日の事を指している。

「もう落ち込んだりしないと思ってたんだけど…ほんとに弱いね。あたしって」

祖母に気を遣わせないように無理して笑顔を取り繕ったのだが、それすら見抜かれてしまい余計に気を遣わせてしまったようだ。昨日から祖母には心配を掛けてばかりだ。

「大丈夫、大丈夫。心配しないで」

堇は胸の前で掌をばたばたと振った。

「堇ちゃんは人に気を遣い過ぎなんだよ…」

そう云って祖母もにっこり微笑んだ。

まるで心の中を読んでいるかのようだ。祖母には堇の考えている事など総てお見通しなのだろう。

堇は味噌汁を一口啜ってあぁと幸せな溜息を吐いた。こちらもこれが日課のようになっていく。

祖母がブラウン管に向き直ると、堇も同じようにテレビに目を向けた。ニュースキャスターが神妙な面持ちで原稿を読んでいる。

ついさっきまでは漫画のような笑顔で動物園のパンダのニュースを読んでいたのに、本当に忙しい顔だなあ、などと堇は呑気な事を考えていた。

ブラウン管越しのキャスターの口からは殺人や包丁で刺した、金が欲しかったなどのおぞましい言葉が淡々と流れ出している。

―朝から厭な言葉聞いちゃったな

「本当に物騒な世の中だね」

「あたし人が人を殺すなんて信じられないよ…」

祖母は持っていた湯呑を食卓に置いた。そして目だけを堇の方に向けた。

堇はテレビを見つめながら不安げな声で呟く。

「そんな事するなんて人間じゃないよ」

―人間じゃないなら何？

「そんなの…」

―鬼？

「鬼だよ」

また誰かが頭の中に割り込んで来たような感覚があった。

堇は鬼という言葉とその何者かに選択させられたようだ。穏やかではあるが妙に力の籠った堇の言葉に祖母は気圧されたように押し黙ってしまった。

堇自身も驚いている。

堇は自らを鎮めるように目の前にあった湯呑のお茶を一気に飲み干した。お茶はすっかり冷めていて苦味だけが口の中に残った。

キヤスターの滑らかに原稿を読む声だけが響き渡る。

暫く間を置いて祖母が口を開いた。

「鬼…ねえ…」

祖母は堇の方に身を向けて座り直し、確りと目を見据える。

「堇ちゃん、鬼って何か知ってる？」

堇は返答に困った。

よく聞くし、口にもする言葉だけあって余計に上手く答え難い。

「人に非道い事をする悪い妖怪みたいなのかな」

祖母は堇の返答を深く噛みしめるように長い瞬きまばたをしてから静かに続ける。

「鬼はね。人なんだよ」

堇は目を剥いて祖母を見た。

「鬼とは人間の心の中に巣食う者。誰の心の中にも鬼は居るんだよ。」

その刹那、祖母の瞳の色が不気味に変化したように見えた。その瞳は朦朧ぼんやりと橙色だいだいの光を放っているようだった。堇の身に悪寒が走った。

祖母は何かを隠すように目を閉じた。

「おばあちゃん？」

次に祖母が目を開けた時には何ともなかった。矢張り堇の気の所為だったのかもしれない。

祖母は淡々と話を続ける。

「心の中の鬼に負けると人は本当の鬼になってしまう」

「ニュースの殺人犯みたいに？」

ゆっくりと大きく祖母は頷いた。

「あ、あたしの中にも…鬼がいるの？」

不安げな声で堇が質すが祖母は黙ったまま再び目を瞑った。無言の空気が緊張感を孕んで張り詰めていくのを感じる。無視され続けているテレビからは部屋の空気とは対照的に楽しげな宣伝コマーシャルの音が流れている。

時間がねっとり流れっていく。

「でも堇ちゃんの中にはいないかもしれないね」

「え？」

祖母は目を開けて眼尻に皺を作りながら微笑んでいた。堇は拍子抜けしたようにぽかんと円い目を祖母に向けている。

「だって堇ちゃんには鬼が入り込むスペースなんてないんじゃないの。全部椿ちゃんに埋まってるんだから」

矢張り祖母は総てお見通しのようだ。祖母の云うとおり堇の頭の中は殆ど椿の事で占められている。

呆然とする堇を見て祖母が上品に口元を押さえて笑う。実に愉快そうだ。堇も釣られて口元が綻ばせる。

「それに堇ちゃんは本当に優しい子だからね。鬼や悪魔じゃなくて天使でもあるんじゃないかしら」

「おばあちゃんたら。それは言い過ぎよ」

「第一こんな可愛い鬼がいますか？ちっとも怖くないわ。肝心の金棒だって重くて持てなそうじゃないの」

祖母は目を細めて堇の細い腕を見た。

「もう。おばあちゃん！」

堇は頬をぷくと膨らませて両手の人差し指で頭の上に角つのを作った。「あはは。何よそれ兎の耳かしら？可愛いいわね。弱そうな鬼だこと」

二人きりの食卓は妙に賑やかでとても温かく、堇は幸せだった。

無視されているテレビは機械的に言葉を放ち続ける。

天気予報では今日も雪だそうだ。

家の外は昨日と同じく耳が千切れそうになる程寒い。

白い息を吐きながら駅に向かう。

毎日同じ事の繰り返し。しかしその繰り返しが堇にとっては一番の幸せだった。跳び上がって喜ぶ程の幸福は訪れなくてもものた打ち回る程の不幸も訪れない。そんな静かな湖のように波の無い穏やかな生活が幸せだった。

―もう椿を失った時のようなどす黒い不幸は味わいたくない

昨日と同じように雪を踏みしめながら駅へ向かい、昨日と同じように改札を通った。

ホームには柚子がいた。

柚子は雪のちらつくホームに一人立っていた。

昨日の事もあって少し気不味い。あれ程取り乱し、惨めで情けない姿を見せてしまったのだ。もしかすると^{ひんしゅく}顰蹙を買ってしまったかもしれないと思い堇は遠目に柚子の姿を見ている。声を掛けるべきか堇は躊躇^{ためど}っていた。

―柚子ちゃんに避けられたらどうしよう

しかし同じような毎日ではここで柚子に声を掛けなければいけない。そうしなければ同じような毎日は崩れてしまう。今度は柚子を失ってしまう。

堇は胸に手を当て深呼吸をする。

覚悟を決めて柚子の許へということ駆け出して行った。堇が一步步へ進む度に艶のある黒い髪が揺れる。

「あの…柚子ちゃん」

柚子の傍まで来て気不味そうに上目遣いで柚子の顔を見上げる。

柚子がゆっくりとこちらに顔を向ける。

「あら堇ちゃん。おはよう！」

柚子が太陽のような笑顔を堇に向ける。

―いつもと同じだ：

「お、おはよ：

堇がもじもじと柚子の爽やかな挨拶に応える。すると柚子が首を傾げて堇の顔を覗き込んだ。

「なんだあ？元気がないぞ堇ちゃん。ちゃんと朝ご飯食べたのかあ？」

柚子は歯を見せて笑って堇の頭を掴んで細い指でがさがと掻き回す。そしていつもと同じように堇の頬を抓んだ。

「痛いよお」

―なんだ。いつもと同じだ

柚子にぼさぼさ掻き乱された頭のまま堇は嬉しそうに微笑む。

―なんか幸せだな

堇にはこれが良いのだ。この毎日の繰り返しが幸せなのだ。

「何嬉しそうな顔してんのよ、本当に変な子ね」

柚子は優しく微笑んで堇の乱れた髪を手櫛で整える。堇は猫のような甘えた声で唸っている。

「昨日はなんか：その：ごめんね」

柚子が申し訳なさそうにそう云うと髪を撫でられている堇は柚子に円い目を向けた。

「いや：その。杏奈がね」

その名前を耳にして僅かに気持ちが曇った。

「あの子。すごい綺麗好きなんだよ」

柚子は慎重に言葉を選んでいうようだった。恐らく杏奈本人はあの後自分の言動に対して何も云わなかったのだろう。柚子は杏奈を弁護しているつもりなのだろう。

―柚子ちゃんが謝る必要なんて無いのに

「良いんだよ：もう」

堇はこの話を早く終わらせたかった。

「綺麗好きなら仕方無いよね。あたしが地べたに座ってたからいけないんだよね。うん、あたしが悪い」

堇は目を伏せる。

「なんでそんなの事言うのよ！」

柚子が声を荒げる。堇は驚いて柚子の顔を見た。

「だって柚子ちゃんは久野さんと仲が良いから…あたし柚子ちゃんに嫌われたくないから…」

堇は目を潤ませて今にも泣き出しそうになっている。

「馬鹿…私が堇ちゃんの事を嫌いになるわけないでしょ！」

そう云って柚子は堇の華奢な臍を抱き寄せた。

―ああ。暖かい…幸せだな

「堇ちゃんは何も悪い事なんてしてないよ」

柚子は子供をあやすように穏やかに云った。

―うん。あたしは悪くないんだ

―そうだよ。悪いのは…あの女だよ

怪鳥の鳴き声のようなけたたましい警笛を鳴らしながら電車がやって来る。

※

今日も授業は午前中だけで終わりだった。柚子は更に早く、朝の一時間しかなかったそうなので多分先に帰っているのだろう。もしかしたらまた杏奈とどこかへ行ったのかもしれないが考えたくも無かった。

早く帰る理由も無かったし少し気になる事もあったので学食で菓子パンを買って昨日と同じように佐倉の研究室へ行く事にした。

人見知りがちな堇にしては珍しく佐倉には直ぐに心を開いたようだ。堇は雪の降り続けているキャンパスを歩いて行った。

佐倉の研究室は暖房がきいていて外とは別世界だった。

「確かにいつでも来なさいとは言ったが二日連続で来るとは思わな

かったよ」

佐倉は二人分の珈琲を淹れながら迷惑そうではあるが反面嬉しそうに云った。堇は上着を脱いで定位置のソファで菓子パンを頬張りながら珈琲の香りを味わっている。

「教授、あたしのは七杯ですよ」

堇は砂糖の量を指定して幸せそうにメロンパンをちびちびと齧っている。分かっていると佐倉が云いながら珈琲を運んで来た。

「妖怪の話を訊きたいんです」

眼鏡の奥で佐倉の目の色が変わった。また少年のような表情をしている。

「何だい。河童か？妖狐？それとも鵺ぬえかい？」

佐倉の挙げたどの妖怪とも堇の要望は違った。

「あの…鬼って何ですか」

鬼という言葉聞いた途端に佐倉は厳めしい学者の顔に戻った。

何か拙い事でも聞いたのだろうかと堇は口籠る。そして佐倉は静かにカップを置いて堇の前に腰かけた。ゆったりとソファに凭れると佐倉は足を組み腹の上で手を組んだ。

ふうと息を吐き人差し指で眼鏡を上げる。

「鬼か：一番古くて、難しい妖怪だね」

静かな口振りではあるがどこか迫力がある。

「桐生さん、鬼と云われて何を想像する？」

佐倉の鋭い眼に気圧されながらも堇は懸命にまともな答えを用意しようとする。

「桃太郎とかに出て来る角の生えた怪物ですよね」

「まあそうだな」

佐倉は静かに頷く。どうやら佐倉の期待からそう遠くない答えを選べていたようだ。

「じゃあ幽霊というのは？」

「はい、死んだ人が透けてふわふわ浮いているようなのですか。うん、難しいですね。何かその人の思いがこの世に残っているよう

な感じですかね」

指に付いた菓子パンの砂糖を舐めながら答えた。

「なるほど。その幽霊はいつ頃から人の世に登場し出したか分かるかな？」

佐倉は顎に人差し指を置き堇の目を熟^{じゅ}と見据える。何か試されているようだ。

「ううん、そうですねえ、お菊さんとかお岩さんも江戸時代が舞台だから丁度それぐらいですか？」

正解と通る声で云って佐倉は手で拳銃の形を作って堇の顔を指した。銃口を向けられた堇はぴくりと引き攣^{ひきこ}った。菓子パンを頬張ってもごもごする顎の動きもぴたりと止まった。

「因みにさっき桐生さんが云った鬼の姿は様々^{イメージ}な怪物や妖怪の姿を元にして平安時代に完成されたものなんだ。ではその幽霊と鬼……どこか似ているかな？」

「全く似ていません。鬼は怪物で幽霊はやっぱり幽霊です。」

堇は明瞭に云い切った。

「実はその幽霊というのも元々は鬼から分離した存在なのだよ」

意外な話に堇は目を丸くする。

「先ず幽霊の話からしようか。戦国時代以前は悪事を働くと人は地獄へ堕ちて永遠に等しい時間責め苦を受けると信じられていた。しかし戦国時代になると世は乱れ盗みや人殺しが横行してね。例えば人を殺しても裁かれるのは死んでからの話だ、まだまだ先の事だ。寧ろ地獄など本当にあるのか。そうして人々の心から地獄への畏れは弱まっていった」

堇は佐倉から目を逸らさないまま鞆から二つ目の菓子パンを取り出し一口食べた。

「世間の英雄である源義経が閻魔大王を討ち義経が地獄を統治するようになったり、果ては閻魔が同性愛者で美僧^{しとね}を誘ったりといった地獄を揶揄^{やゆ}する物語も描かれるようになってしまい人々は地獄を畏れなくなった。すると世は更に乱れる。そこで考え出されたの

が…」

「幽霊…ですか」

佐倉はにやりと表情を緩め再び堇に銃口を向ける。例の如く堇はぴたりとパンを噛むのを止める。

「彼岸に赴いてから裁かれるのではなく此岸にいる内に裁かれる仕組みが考え出された。自分に恨みを残して死んだ者に因ってね。だから幽霊はお菊やお岩のような生前の姿を残しながらも不気味に變形^{オルメ}された姿で完成された。幽霊の誕生だ。」

佐倉は肘掛に肘を乗せ、頬杖をついた。

「鬼の話に戻ろうか。人々に災厄を齎^{もたら}す者として頭に角を生やし金棒を持つ恐ろしい顔をした異形の者と描かれた鬼なのだが、さっき私はこのはっきりした姿を持つ鬼と実体を持たない幽霊を同じものだと言ったね」

「はい、私は別物だと思っていましたけど」

佐倉は上機嫌^{おぬ}そうに鼻をふんと鳴らした。

「鬼の語源は隠^{おぬ}と云ってね、隠れるという字を書くんだ。元々はその文字が表す通り見えないもの、つまり実体の無い恐ろしいものとして認識されていたんだ…更に平安時代に入ってもその感覚は深く残っていてね、紫式部の著したあの源氏物語では鬼を怨念として扱っていた。鬼は実体の無い恨みの念の集合体なんだ」

「幽霊みたいですね…」

いとも容易^{たやす}く堇の意見は覆された。

そこまで一息に云うと佐倉は音も無くすうと立ち上がり自分の机に歩いて行った。堇はその姿を目で追う。

「鬼という呼び名についても諸説あってね…」

机の前で何かを手にとって振り返った。佐倉はメモ紙と鉛筆を持って戻ってきた。

そして徐に席に着くと紙に『女』という文字を書いた。佐倉によって書かれた字は書き崩してあるり決して達筆という訳ではないが、なぜか雑さを感じさせない知識人特有の字だった。

「これを何と読む？」

「ジョかメかオンナですよね」

余りにも簡単な質問をされたので堇は^{からか}揶われているような気がして少し不服そうに答えた。

—そういえば：

大学の近くを流れるあの用水路のような無機質な気持ち悪い川の名前にもこの字が使われていた事を思い出したが、取り敢えず今は鬼の事の方が気になるので関係の無い記憶は頭の抽斗^{ひきだし}の奥に仕舞い込んだ。

「そう、この字はオンナと読むだろう」

そう云って女という文字の隣に次の文字を書き始めた。佐倉の手で隠れていて何という字を書いているのかは判らないがそこそこ画数の多い字のようだ。静まり返った研究室に鉛筆が洋卓の上を走る音と堇が珈琲を啜る音が響く。

紙には『怨』と書かれていた。

「これは？」

鉛筆が文字をこんと^{たた}敲く。どうやら堇に読む事を催促しているらしい。

「ウラミ：です」

漢字とは文字自体が意味を持つ表意文字である。その怨という文字からも沸々と禍々しい気が湧き出ているように感じて堇は発音する事を一瞬躊躇した。

「音読みは分かるかい？」

「ええと、オンでしたっけ：」

堇がそう答えると佐倉は黙ったまま頷いた。そしてその読みを紙に書き並べる。堇はというと佐倉の隙を見つけてこっそりと菓子パンを齧っている。オンナ、オン。そして最後に鬼の訓読みもその横に書き加えた。

オンナ

オン
オニ

―あっ…

齧^{げっし}歯類のように前歯でパンを齧る動きがぴたりと止まった。董はパンを銜^{くわ}えたまま徒^{ただ}でも大きな目を眼球が零れ落ちそうになる程見開いて三つ言葉を見比べていた。

―何か似てる

固まっている董の目を覚まさせるように佐倉は小さく咳払いをする。

「気付いたかい？」

董は大きな瞳を佐倉の顔に向けて深く頷いた。すると佐倉は再びゆったりと足を組んだ。董は頷いただけで何も答えてはいないのだから何に気付いたかを何となく佐倉は酌^{イメー}んでくれたらしい。

「そう。鬼の姿^{イメー}が出来始めた頃はね、鬼は女性であるとされていたんだ」

「そうなんですか、鬼ってどう見ても筋肉もりもりの大男なんて信じられませんよ」

見た事も無い空想上の怪物に対してどう見てもと云うのは流石に自分でも可笑しく思った。

「この三つの言葉の通りだ。鬼とは怨みの念の化身。女の怨みが鬼になる、言い換えれば怨みが女を鬼にするという事だ」

―本当だ。お菊さんもお岩さんも女の人、そして怨みの念から悪霊になったんだっけ。だとするとそれも…鬼なんだ

佐倉がふと視線を落として短く息を吐き出す。自分の中で話の区切りを付けたようだ。そして佐倉は足を組みかえて真剣な顔をしたので董もその改まった空気に飲まれてしまった。

「そろそろ鬼の正体について話そうか」

愈々話は本題に突入する。妙な緊張感が部屋中に充満した。

「桐生さん」

堇は突然名前を呼ばれて畏まったように、弾かれたようにはいと通る声で返事をした。

「君は幽霊を見た事があるかい？」

唐突な質問だ。

「い：いいえ」

「じゃあ神は？」

「ありません」

「妖怪はどうだい？」

「いたらず是非会いたいのですが残念ながら……」

佐倉は立て続けに質問を投げかけてきたがそれに対しての堇の答えは悉く総て否であった。構わず佐倉は質問を続ける。

「それじゃあ：鬼は？」

「それも見た事ありません」

そうか、と佐倉は質問を結んで顎に拳を置いた。丁度ロダンの『考える人』の彫刻のような姿勢だった。その印象の通り本当に何かを考えているのだろう。

一つも肯定の返事を堇から貰えなかったのだがまるでそれを予想していた通りだと云わんばかりに佐倉は全く表情を乱さない。

暫く黙っていた後、佐倉は次の質問を投げかける。

「今、私が挙げた者達は誰が創り出したか。分かるかな？」

今までで最も難解で答え辛い質問だ。堇は頭をこつこつと敲きながら眉間に皺を寄せて目一杯難しい顔を作って考えている。

今、佐倉が口にしたのは総て堇が見た事の無い者だ。つまり空想上の生物だ。

――空想？

空想をするのは：それをする者と云えば。

「人間：ですか？」

堇は自信なさげに答えた。しかし堇なりにかなり頭を使った。

正解だ、と云って佐倉は満足したように手を敲いた。

「総ては人間の心から生まれた者だ。桐生さんはなかなか鋭い。否、^{いや}

思考能力が優れていると言わなければならない」

どうやら堇は正解の回答を選んでいたらしい。褒められて少し嬉しくなった堇は照れ隠しに食べかけの菓子パンを一気にその小さな口に押し込んだ。それこそ食事中の栗鼠リスが如くぱんぱんに頬が膨らんで余計に恥ずかしい顔になってしまっている。

構わず佐倉は続ける。

「そう、神は救いを求める希望の心から。幽霊は復讐を危惧した恐怖の心から。妖怪は天災などに対する畏怖の心から。そして…」

堇はぐくりと口の中のパンを飲み込んだ。喉が詰まりそうになったので熱いのを堪えて珈琲で胃に流し込んだ。

「鬼は嫉妬と怨みの心が生み出したんだよ。謂いわば人間の負の感情そのものだ…鬼の正体が解るかな？」

先程の質問よりも更に難解だ。今度ばかりは佐倉が何を云おうとしているのか皆目見当が付かない。

「解りません…」

申し訳なさそうに堇は降参した。すると佐倉は自分の頭を人差し指でとんと押さえて、

「鬼は人の心の中にいる」と云った。

その佐倉の視線は刃物のように鋭い。

堇はぞくりと身の毛が弥よ立った。今朝、祖母が云っていた事と全くと云って良い程同じだ。ここまで理論付けて説明されると厭に信憑性がある。納得せざるを得ない。

矢張り鬼は…。

―あたしの中にもいるのかな

堇は指一本動かす事が出来ない。

「そして心の中に潜む闇に理性や良心が負けてしまうと人は鬼そのものになってしまうんだよ」

佐倉が続けざまに云った言葉に寒気がした。堇は身を守るように胸の前に両腕を交差させ自分の臍を抱き締めた。どうしたんだい、

と佐倉が心配そうに声を掛けてきたが頭を小刻みに横に震わせる事でしか反応出来なかった。

「まあ今のは比喩だレトリックがね、怨みの念が増幅して手に負えなくなると人は背徳的な行為、例えば端的に云ってしまおうと人を殺したりしてしまおうという事だ。ほら、殺人鬼という言葉もあるだろう」

何となく鬼と云うものが理解出来たような気がした。しかしそんな怪物が自分の中にも潜んでいるのかと思うと鬼魅きみが悪くて堪らなかった。

「教授。その…」

佐倉の目がぎろりとこちらに向く。

「あの、鬼って。あたしの中にもいるんですか？」

堇が恐る恐る問うと佐倉は足を組むのを止め、テーブルの上の鉛筆とメモ紙を持って立ち上がった。堇の顔を見ずに本棚や天井に視線を泳がせながら云う。

「鬼は人間の負の感情なんだよ。君は怒ったり泣いたりしないのかな？」

堇は口元を両手で覆いながら俯いて頭の中を探し回った。再び佐倉は机の方にゆっくり歩み寄る。

「些細な事でも良いんだよ」

―些細な事か：そりゃちよつとぐらいは

「ちよつとぐらいはありますよ。例えばお腹が減って苛々したりするのぐらいはあたしだって：そんな事誰だって」

くしゃと音がした。

佐倉がメモ紙を握りつぶした音だった。指先を向けられた時よりも、鋭い目で見詰められた時よりも、背広を着ている佐倉の後ろ姿からは迫力が感じられた。

「誰だって？」

背中を向けたまま佐倉が問い掛ける。

堇は自分が発言した事の意味が解った。口籠ったまま答える事が出来ない。

佐倉は堇の放ちかけた言葉を掬い取る。

「そうだ。誰だって小さな負の感情は持っている。掛け算は片方の数が零^{ゼロ}でない限り多かれ少なかれ程度の差はあれどその式の効力を発揮するだろう。例えばその空腹が一日、二日、更に一週間続けばどうなるだろうか？」

堇は自分の発言の重大さに気付いた。唇が震えだし、頬が冷たくなるのを自分でも分かった。堇は自分自身の鬼を認めてしまったのだ。

「念と云う物は増幅する。一週間も満足に食事を摂れないような状況に陥れば人の食べ物^{食べ物}を奪うかもしれない。更なる極限状態であれば他の人間自体を喰うかもしれない、実際にそういった状況での食人も事実としてあるんだ。それは怪物で喩^{たと}えれば餓鬼や屍食鬼^{グール}と云えるかな。そのどちらも鬼だ。つまり…」

鼓動が速くなる。奇妙なざわめきが心を支配し始めた。

佐倉は暫く溜めてから言い放った。

「鬼は誰の中にでもいるという事なんだよ」

その言葉を聞きたくなかったのだ。

「やっぱりあたしの中にもいるんだ。鬼は…」

堇は自分でもどちらかと云うと穏やかな人間に部類すると思っていた。争い事が嫌いなので人との諍^{いさか}いや衝突を避けて、周りとの意見を合わせるように生きて来た。それでも争いの象徴でもある鬼は自分の中に住んでいるのだと思うと愕然とした。堇は大して何もしていないのにも関わらず憔悴している。

「おい。桐生さん、大丈夫かい？ 具合でも悪いのか」

青白い顔をして俯いている堇を見て佐倉が心配そうに堇の座るソファの傍に屈みこむ。

「大丈夫、大丈夫です。あたしはこの通り健康です」

堇は細い腕で出来もしない力瘤^{ちからこぶ}を作る真似をして目を細めて笑った。勿論無理をしている。

「じゃあ、あたしはそろそろ失礼します。やっぱり教授の話は面白

いなあ…」

堇はよろよろと立ち上がって首にマフラーを巻いた。

「待ちたまえ！」

珍しく佐倉が声を荒げた。

普段滅多に感情を露わにしないのか大声を発しても余り迫力が無い。変な表現だが叫び慣れていないのだろう。これなら無言であの鋭い目を向けられている方が余程圧迫感も威厳もある。

「鬼と云っても私の云っているのは高々（たかだか）感情の一つに過ぎない、十分に飼い慣らせる代物だ。それ程恐れる事はない。まあ、その…何だ。そんなに気にする必要は無い。だから安心しなさい」

佐倉は難しそうな顔をしながら人差し指でこめかみを掻いている。授業中は勿論の事、今日と昨日の研究室でもこんな何とも云えない微妙な顔をしたのは見た事が無い。女の子を困らせたのは初めてなのだろうか。少し面白かった。

堇は慇懃いんぎんに頭を下げて、ありがとうございましたと云ってから研究室を後にした。

研究室の扉を閉めて外に出ると相も変わらず深閑とした廊下が続いている。天井に等間隔に設置された薄明るく光を放つ蛍光灯が堇を外に誘う道標となっているかのようだった。

三階ロビーを通りかかる時、受付の事務員に軽く会釈をしたが堇に気付く様子も無く何か仕事をしていたのでそのまま通り過ぎた。

三階廊下にも増して階段は静かで人の気配は全く無かった。締め切られた空間なので風通しは良くないが一階から吹き抜けになっている為に音だけは良く響く。堇の跫あしおとだけがこつんこつんこだまと飮こしている。

—鬼は誰の心の中にもいる…か

堇は佐倉の言葉を反芻はんすうしている。気の弱い自分に限って鬼になるなどと想像も出来ないのだが可能性は少なくともあるのだと思うとどうしても心配になる。

三階と二階の間の踊り場で足を止めて倒れそうになりながらも壁に凭れた。そして胸ポケットに入れてある椿のビー玉に手を当てた。
―椿、あたしは鬼になるのかな？ 違うよね

深呼吸をして暫くそのまま凝^{じっ}としてしていると少し不安が和らいできた。堇の頭の中から鬼と云うものが霧消してゆくようだ。

―ああ、椿。ありがとうね

堇は安心したように目を瞑った。僅かに開いている踊り場の小窓から空気が流れて来て堇の長く黒い髪がひらりと靡^{なび}く。寒いが不思議と心地良い、心に潜んでいると云われた鬼が浄化されてゆく気がした。

吹き抜けの階段を走り抜ける冬の風は笛のような音を鳴らして慌ただしく駆けて行った。その澄んだ音にも、冷たさにも心が清く浄化されるようだった。

そして静かに目を開けた。

小窓からは四角く区切られた写真のような外の世界が覗いている。朝から相も変わらず雪は深々と降り続いているらしい。堇は自分の心も降り積もる雪のように真っ白なのだと信じたかった。

朦朧^{ぼんやり}と小窓から外を眺めているとどこか見覚えのある人影があった。堇はそれに向かって目を凝らした。

―あ、柚子ちゃんだ

柚子は寒そうに上着の襟を立てて冷氣から身を守ろうとしているようだ。堇は小窓の隙間から柚子に声を掛けようと窓から身を乗り出した。冷たい外気が堇の頬を撫でる。

ちらつく雪が顔に当たる。冷たい。しかし寒さとは対照的に矢張り柚子の姿は眩しい。

柚子の笑顔は太陽のように暖かい。

―笑顔？

おかしい事に気付いた。

―笑顔って…誰に向けているの？

確かに一人で笑うのは変だ。誰に笑いかけているのだろうか。

校舎の死角から見覚えのある後姿が躍り出た。

あれは：あのけばけばしさは忘れもしない。

杏奈だ。

確か柚子は朝の一時間、十時半以降は授業が無い筈だがなぜこんな昼過ぎまで大学内にいたのだろう。

まさか杏奈を待っていたのか。三時間近くも。一人で。

杏奈が足早に歩いて行くのに対して柚子は金魚の糞のようにふわふわとその後を辿って付いて行く。今、堇がいるような高い場所から見るとより顕著に二人の力関係が解る。間違はなく柚子は杏奈より立場が下なのだ。太陽という恒星であるべき筈の柚子が杏奈の月という衛星に成り下がってしまったている。

――駄目だよ、柚子ちゃん。そんなのやめてよ

云うまでも無く堇は杏奈の事が苦手だった。

サディスティック

あの加虐嗜好的な態度で迫られると否応無しに杏奈の奴隷になる事を強いられ、云いなりになってしまう。本当に卑屈な気持ちになってしまう。それも堇は昨日厭と云う程に実感した。そして今、その瘴気には柚子もあてられそうになっている。

杏奈のような者こそ鬼と形容すべきなのではないのだろうか。

堇は声を掛ける事が出来ずに二人の姿を見送った。

――やっぱりあの人はあたしから柚子ちゃんを取り上げた

杏奈とそれを追う柚子の姿はみるみる内に小さくなっていった。

厭に質量のある雪が二人の姿を覆い隠してゆく。堇だけは蚊帳の外に取り残される。柚子がどんどん遠くへ行ってしまう。

雪は柚子と堇の間を遮るかのように降り続ける。

冬の太陽は怠け者だ。

未だ午後四時を回ったところだというのに、もう眠りに就こうと身を傾けている。太陽が仕事を怠けている所為で一日が早く終わってしまう気がするし、おまけに寒い。堇は矢張り冬が嫌いだ。

電車内も暖房が効いているにも関わらず人足が疎^{まば}らな為に妙に寒

さを引き立てられている。窓から脆弱な陽射しが差し込む寂しい雰
囲気と、線路の繋ぎ目に合わせて律動良^{リズム}く揺れる車両は否応無しに
堇を眠りの世界へと誘う。堇は揺り籠のように優しく揺れる柔らか
い座席に座って寂しそうに目を閉じていた。

仕方なく堇は今日も一人で帰って来た。

玄関で靴を脱いで、居間でテレビを見ているであろう祖母に向か
ってただいまと声を掛ける。案の定、祖母は居間にいるらしくそこ
から、おかえりと返事が返ってきた。

きっと今の自分はまた落ち込んだ顔をしているのだろう。そんな顔
を見せて祖母を心配させないように気を遣ってそそくさと階段を上
がって自分の部屋に戻った。

ゆっくりと背中を凭れさせるようにして部屋の戸を閉める。戸の
留め金の乾いた金属音が閉ざされた空間に響いた。窓もカーテンも
閉め切られていて少し息苦しく思えたが不思議な事にその閉塞感^{たちま}は
忽ち安心感に変わってしまった。

堇はそのまま背中を下に滑らせてその場に座り込む。鞆を床に置
き大きく息を吐いた。薄暗く空気の流れない部屋の中ではそんな呼
吸音ですら直ぐに充満する。気持ちを落ち着けてから部屋の電気を
点けて椅子に座り机に向かった。

堇は鞆の中をこそごとと探り、中から紅い布と紐を取り出した。

大学から帰る途中に洋裁店に寄って買った物だ。

「えへへ。落としちゃ可哀想だもんね」

堇は独り言を呟きながら抽斗の中から針と糸だけしか無い簡素な
裁縫箱を出して机の上に置く。シャツの袖を捲り上げ、買って来た
布を机の上に敷いた。定規を使って布の上に鉛筆で線を引いた。生
憎裁ち鋏は無かったので工作鋏でその線に沿って難しそうな顔をし
ながら慎重に布を裁ってゆく。

つい先程まで暗い顔をしていた堇はどこへ行ってしまったのか、
今は笑顔を浮かべ澁刺^{はっらっ}としている。

「やっぱり普通の鋏だと切り難いなあ」

ぶつぶつと文句を云って苦戦しながらも漸く布を裁ち終わった。再び定規で寸法を確認しながら布を折り畳み鉛筆で印を付けて待ち針で留める。堇はそこで額に滲んだ汗を腕で拭い一息着いた。

縫い針を手にとって糸を通す。そして印の上を器用に縫い進めていく。

裁縫など中学校の家庭科の時間以来やったことが無かったが意外と段取りは覚えているものだと思っても感心していた。

「痛っ」

指を刺してしまった。堇は咄嗟に針を手放し刺した親指を庇うようにして見詰める。

白い指から紅い血が滲み出した。

「痛いのはお山に飛んで行け……」

堇は椿の真似をしてそう唱えてみた。しかし痛みは指に留まったままで紅い血液は滲み続けている。

「椿みたいには出来ないな。やっぱりあたしには力は無いんだよね」残念そうな顔をして傷口を舐めると鉄臭い味が舌の上に広がる。

大した怪我でもなかったので暫く指を舐めていると血は直ぐに止まった。

堇は続きを縫い進めていく。

印を付けた個所を総て縫い終わり、糸を噛み切る。折り畳んだ淵を縫った布を裏返すと掌程の大きさの小さな袋が出来た。仕上げに袋の口に紐を通して絞りを作った。

「よし、完成！」

堇は嬉しそうに作り上げた袋を手を取った。

袋を机に置いて胸のポケットから椿のビー玉を取り出す。相変わらず椿は澄んだ青色をしていた。

「昨日はごめんね、痛かったでしょ。姉さんはもう椿を落としたりしないからね」

ビー玉をその紅い袋の中に入れて愛おしそうに抱き締めた。
「でもなんか地味だなあ」

自分自身も地味な堇がそう云うのも変だがどうも飾り気が無さ過ぎた。ちょっと待っててね、と袋の中の椿に云って何か良い物は無いかと抽斗の中を探す。

「あ、これを付けてあげよう」

抽斗の中から金色の鈴を見付けた。

そしてその鈴を口紐に結えつけた。

「うん、良いね」

満足げな表情をして指で鈴を弾くとちりんと澄んだ音が響く。堇は椿の入った袋を宙に掲げて話し掛ける。

「あたしは椿が大好き。椿は姉さんの事、好き？」

ちりん

椿が鈴を通して返事をしたようだった。

堇は嬉しくなって袋に向かってにっこり笑った。

「ありがとう、椿。これからもずっと一緒だからね」

その鈴付きの袋は堇のお守りになった。

その夜、堇は電気を消してベッドに横になりながら作ったばかりの椿のお守りを握り締めていた。普段ぼんやりしている堇の頭も風呂に入っている時と寝る前には活発に回転し、その日の情報を整理し始める。

― 柚子ちゃん：

矢張り柚子の事が気になる。

今朝柚子は堇の事を嫌いになる訳など無いと明瞭に云い切っていたが少し今までより距離が開いたような気がしている。このまま柚子は自分の前から消えてしまうのではないだろうか。堇は不安になる。

堇にとって柚子は唯一の友達だ。

― 柚子ちゃんを失いたくないよ

柚子はいつも堇を守ってくれた。独りぼっちで寂しい時も柚子が慰めてくれると平気だった。しかし今はその柚子とも距離を感じる。何が原因なのだろうか。

―久野さん：かな

ふとその名前が浮かんだ。堇は杏奈の事を考えるだけでも寒気がする。

杏奈の発するあの美しくも恐ろしい蜘蛛のような雰囲気はどうも受け付けない。このままでは柚子がその蜘蛛の糸に絡め取られてしまい二度と堇の前には戻って来ないようになるような予感がする。

掛け蒲団を頭まで被り蛹のように丸くなり、蒲団と云う繭の中で堇は夢と現実とを行き来しながら不安の原因を探していた。

高校生の頃から柚子とはいっても一緒だった。このまま永遠に柚子とは友達でいられると信じて疑いもしなかった。世界中の総ての人が堇の前からいなくなろうとしても柚子だけは最後まで一緒だと思っていた。その柚子が堇から奪われてゆくような気がしてならない。

柚子が奪われる。

―あたしから柚子ちゃんを奪うのは誰なんだろうね？

堇ははっとなって目を剥いた。

蒲団の中では目を開いていても閉じていてもそこには暗闇しかない。まるで暗闇の檻に閉じ込められているようだった。

そして今脳裏を過った言葉は堇のものではない。

また心が二つに割れて話しかけてきたのだ。

今夜も頭の中で対話が始まる。

―ねえ、柚子ちゃんをあたしから奪うのは誰だと思う？

―そんなの分からないよ：

―嘘ばかり。分かっているくせに

―本当に分からないよ。きっとあたしが悪いんだよ。あたしが地味で暗くて面白くないから愛想を尽かされたんだよ。

―本当にそう思う？

—うん：

—ほら、またそうやって嘘を吐くでしょ。もしそうだとしても柚子ちゃんは今までずっと友達だったじゃない

—そうだけど：

—あなたは悪くないよ

—とうとう頭の中の声は堇の事をあなた（・・・）と呼んだ。堇は身の毛が弥立って蒲団を更にきつく軀に巻き付けた。

—あなたは誰なの？

—堇は恐る恐る自分自身に問いかける。堇もあなた（・・・）と呼んでしまっている。知らず知らずの内に自分の心から乖離した何者かの存在を認めてしまったのだ。

—うふふ、何を言っているのよ。そんなの解っている事でしょ。勿論あたしはあなた、あなたはあたし。生まれた時から一緒じゃないの。何でいつもあたしを閉じ込めようとするのよ。

—頭の中の声は意味の解らない事を云い始めた。閉じ込めるとはいったいどういう事なのだろうか。

—あたしは今まであなたの事なんて知らなかった。誰なの？

—寂しい事言ってくれるのね：

—あなたはまさか：鬼？

—なかなか返事が返って来なくなった。堇の意志が肯定を拒絶している所為もあるのだろうかそれがそれにしても遅い。

—ベッドを通して堇の鼓動が大きく響く。

—恐ろしくなった堇は椿のお守りを強く握りしめるが今度ばかりは全く効果が無い。頭の中の声の主は椿の力を遥かに凌駕しているとても云うのだろうか。

—漸く返事が返って来る。

—さあ。どうなんだろうね

—曖昧な返事だった。

—矢張り正体が掴めない。しかし鬼という言葉に僅かな反応を示したようだった。その声は更に堇の心の奥を抉るえぐように続ける。

―あなたが認めたくないのなら教えてあげる。あたしは柚子ちゃん
が離れていくのは総て久野さんの所為だと思う。勿論あなたもそう
思っているんじゃないのかな。

―違うよ。あたしが、あたしが悪いんだよ

堇は両手で耳を塞いでベッドの上を苦しそうにのた打ち回るがそ
れでも声は逃がしてはくれない。

―何を言ってるのよ。久野さんが現れるまではこんなに苦しい思い
はしなかったでしょ？あなたが昨日みたいに惨めな思いをしたもの
久野さんの所為じゃないの。

―あれはあたしにも原因があったんだよ…

堇が反論しようとする声は畳みかけてくる。

―でも辛かったでしょ？

―恥ずかしかったでしょ？

―情けなかったでしょ？

―惨めだったでしょ？

―怖かったでしょ？

―悲しかったでしょ？

―冷たかったでしょ？

―痛かったでしょ？

―悔しかったでしょ？

―腹が立ったでしょ？

―憎かったでしょ？

声は堇の触れられたくない想いにも容赦なく突いてくる。正直図
星と云わざるを得ない部分もあった。

―そうでしょ？あたしの言ってる事が間違ってる？

堇はその声の的確さに慄いた。おのの間違っではない…。

―ねえ、そうでしょ？

堇は何も答える事が出来なかった。

―改めて訊くよ。久野さんの事どう思う？

姿は見えないがその声の主は何か意味有りげに笑っているように思えた。

―柚子ちゃんが奪われちゃうんだよね？じゃあやっぱり怖いな…

―本当に怖いと思っっているだけかな。本当にそれだけ？

―どういう意味？

―久野さんさえいなければ今まで通りの生活が続いたんだよ。

―何が言いたいの？

―あなたはよく解ってるくせに

―解らないよ！

堇は蒲団に丸まったまま生唾を飲んだ。ごくりという音が軀の中に響き亘った。

―今あなたが不安に思っている事の原因は総て久野さんなんだよ

声は徐々に大きくなる。自分の触れられたくない部分を自分自身で穿ほじくっているようだ。

―あの女ひとなんて

声は結論を云わんとしている。

その声は明瞭に、そしてどこか楽しげに云い放った。

―死んじゃえばいいのにね

堇は蒲団を払い除け飛び起きた。

今のは絶対に自分ではない。

未だ嘗て無い程に心臓が激しく脈打つ、その心臓は口から飛び出て来そうだった。冷汗で前髪が額に張り付いている。全力で走った時のように呼吸が乱れている。

堇は蛇のようにベッドから這い出て床に転がり込んだ。ふと前にあった姿見を覗いた。

…見るべきではなかった。

鏡に映ったのはいつもの堇ではない。

幽鬼だ。

鏡の中には青白い顔をした化け物がいた。暗闇の中で瞳だけが仄かに橙色の光を放っていたように見えた。

鏡の中の幽鬼は徐々に堇の姿に戻っていった。しかし堇は今まで映っていたのがとても自分だとは信じられない。

「お前は誰だ！」

堇は柄にもなく声を荒げて鏡の中の自分に問い質した。

鏡に映る堇は鏡の前の堇と同じように酷く怯えた顔をしている。しかし今の堇にはそれも演技にしか思えない。

自分が自分に嘘を吐いているようだ。

鏡の前に蹲り、自分が蝕まれてゆく恐怖に嗚咽を漏らしながら堇は鏡に向かって弱々しく訊いた。

「お前は…誰だ…」

矢張り同じ答えしか返って来ない。

―あたしはあなただよ

※

今朝も雪は容赦なく降り続けている。

その雪は深々と積み重なり町の姿を覆い隠してゆく。今日の夜にはこの冬一番の冷え込みになるそうだ。そう祖母がテレビの天気予報の台詞をそのまま引用して云っていた。

十二月二十二日。愈々今年も終わろうとしている。

あれから数日が経った。東棟の窓から柚子の姿を見た以来、柚子とは会っていない。彼女の横に杏奈の姿があると考えると親友である柚子に会う事すら恐ろしく思っていた。寧ろ堇すみれの方から柚子に会うのを避けていたのかもしれない。

杏奈自体が最も恐いわけではない。勿論杏奈は恐いのだが、それ

よりも杏奈に毒されて変わってゆく柚子を見る方が遥かに恐ろしかった。堇は無意識の内に電車の時間をいつもとずらしたり柚子と同じ授業を休んだりしていたのだ。

大学は今日の授業を以て二週間の冬休みに入る。

今年最後の授業である五時間目が終わる頃には六時を回っており陽はすっかり沈んでしまつて完全な夜となつてしまつていた。

今日も柚子と顔を合わせる事はなかった。

堇は一人寂しく校舎の階段を下りていた。人氣の無い閑散とした夜の校舎は不気味な程に^{あしおと}登が良く響く。石造りの壁が音を反射させ山彦のように少し遅れて登が返つて来る。まるで自分の背後にぴつたりと何者かが着いて来ているようだ。

その時、背後から桐生さんと堇を呼ぶ声が聞こえた。

堇は不意に呼び掛けられたその声に驚きぴくりと軀を引き攣らせて立ち止まった。そして恐る恐る声のした方に振り向くと背の高い、背広を着た男が分厚い本を持って立っている。

佐倉だ。

「教授……」

学内に気の置けない人間が少ない堇は佐倉の姿を見て少しほつとしたように表情を緩ませた。堇は階段の下から佐倉を見上げる、佐倉の眼鏡が光を反射していてその表情を読み取る事は出来なかった。「今帰るか？」

佐倉は落ち着いた大人の声で堇に問いかける、その声には妙に安心感を与えられる。

「はい。教授は今まで授業があつたんですか？」

「ああ、そうだ」

堇は思い切つて佐倉に悩みを打ち明ける事にした。

「あの……あたしの中にもやっぱり鬼がいるみたいなんです」

一瞬驚いたような顔をしたが佐倉は直ぐに立て直した。

「鬼というのはね、誰の心の中に居ても当然なんだよ。つまり総ての人間が持つ抗うべき敵なのだ」

「あたしは鬼に勝てますか……」

堇はポケットに忍ばせてあるお守りを握り締めて上目遣いに尋ねる。

「大丈夫。人に潜む鬼はね、その媒体と同じ位の強さしかない。だから君が鬼に負けまいと云う意志さえあれば十分に抑え込めるんだよ」

堇は少し溜めてから次の質問を佐倉に投げかけた。

「教授は……誰かが死んで欲しいと思った事がありますか？」

眼鏡の奥で大きく目を剥きながら佐倉は堇を見据える。思いがけない質問に酷く驚いているかのようだった。

佐倉は何も答えずに階段の上から堇の姿を真っ直ぐに見ている。

堇は佐倉から目を逸らし俯いて胸のお守りに手を当てた。

「教授。あたし鬼に負けちゃいそうなんです……怖いです」

吹き抜けの階段は堇の小さな声でもよく響かせる。しかし声が途切れた途端にその空間は居心地の悪い静寂に包み込まれた。

長い沈黙を破ったのは佐倉の声だった。佐倉は人差し指で眼鏡を上げながら云った。

「私は鬼の事を識っているだけで解ってはいなかったのかもしれない……その証拠にこないだは得意げに鬼について語っていたのに今は何も答える事が出来ない。鬼とは私が想像していた以上に恐ろしい者なのだな」

佐倉はたいそう落ち込んでいる様子だった。

「私は鬼を侮っていたようだ。君に巢食う鬼を私にはどうする事も出来ないのかもしれない。だがもし私に出来る事があるのならいつでも相談に来てくれ、まあ私には話を聞くぐらいしか出来ないかもしれないがね」

堇はその言葉を聞いて安心した。その心強い言葉を聞いただけで鬼が少し鎮まってくれたような気がする。

「じゃあ、明日研究室に行ってもいいですか？」

「私は構わないがね、明日から学生は冬休みの筈ではないのか？」

「冬休みですけど相談を聞いて貰えるのなら大丈夫です」

頭をぽりぽりと掻きながら佐倉はそうかと呟いた。

「休みの日に態々（わざわざ）来てくれるのだから何か持成しもてなをしないとな」

「いえ、お構いなく…」

堇が遠慮して首を横に振る。

「そうだな。桐生さんは甘い物が好きなのだろう？ 研究室の冷蔵庫にケーキやらプリンやら洋菓子があったな。貰い物なのだが私は甘い物が好きではないからね、君が総て食べると良いだろう」

魅力的な洋菓子の名前に敏感に反応して堇の瞳がざらりと輝く。普段は草食動物のようにおっとりしている堇もこの時ばかりは肉食獣のような雰囲気放っていた。

「ホントですか！」

佐倉は堇の勢いに思わずたじろいってしまった。

「ああ：ホントだ」

「じゃあ明日またお邪魔しますね。お菓子、約束ですよ！」

よろしくお願いしますと云って頭を深く下げてから堇は階段を駆け下りて行った。

※

校舎から出ると冷たい風が吹き付けた。

今年一番の冷え込みと云うだけあって本当に寒い。露出した肌の部分を尖った氷で刺されているようだ。おまけにまた雪も降っている。このまま外にしていると冗談ではなく本当に凍死しかねない。

堇はマフラーすみれで口まで隠し、外套コートの襟を立てて身を寒さから守っていた。

完全に陽は沈み切ったキャンパス内は弱々しい電燈に照らされてはいるものの昼間とは別世界のように暗く、鬼魅が悪い。

昼間は何とも思わなかった校舎もたつぷりと夜気を取り込み不気味な姿を見せている。そこに聳え立つその姿はまるで巨大な化粧物の影のようだ。

「うわあ、でえだらばっちだよ…」

一人で訳の分からない事を呟いて堇は足早に校舎の前から立ち去って行った。冷たい風が校舎の間を縫って笛のような音を立てながら吹きつけて来る。

石造りの地面を乾いた落着きの無い聲と立てて歩いていると

「堇ちゃん？」

と名前を呼ぶ声がした。

堇は驚いて身を強張らせた。よく聞いた事のある声だ。

声のした方にゆっくりと顔を向けると柚子の姿があった。

柚子は北棟の出入り口から顔を覗かせていた。どうやら柚子も今授業が終わったところだったようだ。

「柚子ちゃんも今帰りなんだ」

堇は満面の笑みで柚子のいる方へと駆け寄る。暗くて寒くて心細い冬の夜道には太陽のような柚子の存在は心強い。それにここ数日柚子の顔を見ていなかったので久しぶりに会えて嬉しかった。

柚子に近寄っていくと妙な違和感を覚えた。

確かに目の前に立っているのは堇もよく知っている柚子の姿であり、それは間違いなかった。しかし何かが違う。どこかいつもの柚子とは雰囲気が違う…。

「あれ、柚子ちゃんってこんな顔だっけ？」

仄かな電燈の光に照らされた柚子の顔を近くでよく見ると何が違うかが分かった。

「お化粧…」

柚子のふつくらと形の整った唇には薄く紅が引かれていた。

健康的な肌も白く塗られていていつもの柚子とは別人のようだ。

心なしか睫毛も長くなっているように見える。元々整った顔立ちの柚子は化粧映えが良く、その姿はとても美しかった。しかし堇が知

っている柚子の本来の美しさとは全くの別物だ。

柚子がどんどん自分から遠く離れてゆく。やがて自分の手の届かないところに行ってしまうかもしれない。堇はそう危惧した。

「柚子ちゃん：お化粧してるの？」

「うん、ちよつとね！」

そう答えて柚子は照れ臭そうに片目を閉じてにっこり笑った。

柚子の笑顔は美しい、しかしそれはどこか作り物のようだ。

柚子は堇にとって太陽であるはずだったが今そこにある姿は決して太陽とは喻える事が出来ない。同じ天体だとしても喻えるのなら太陽ではなく月だ。

今の柚子の姿のように月は銀色の光を放ち夜の闇を美しく飾る。しかしその光は自らが放っているものではなく恒星の発する光を反射させて輝いているに過ぎない。

月は夜空を飾る事は出来ても世界を照らす事は出来ない。

目の前にある柚子の姿は美しいが今までのように堇の心を照らす事は出来ない。

「まあ、私ももう直ぐ十九歳だし少しはお洒落もしないといけない
と思っ
てね」

「今までしてなかったのに？」

「うん。でももう子供じゃないもんね」

「そんなもんなのかなあ」

堇は眉間に皺を寄せて納得いかない表情をした。柚子が変わってゆく。柚子が離れていく。目の前に柚子がいるにもかかわらず見えない程遠くにいるような気がして酷く寂しく思えた。

「堇ちゃんは何もしなくても可愛いから良いよね。憧れちゃうよ」
大きく首を横に振って堇は否定する。

「そんな事無い！柚子ちゃんこそ美人だよ、お化粧なんてしなくても十分だよ」

「今の私：変かな。似合ってない？」

眉尻を下げて柚子が悲しそうに問いかけてくる。

「いや、変じゃないよ！とっても綺麗だよ…」

その先を云おうとして堇は口籠った。

「綺麗だよ…でも、そんなの本当の柚子ちゃんじゃない

「そうだ、堇ちゃん。久しぶりに一緒に帰ろうよ」

柚子がそう云って堇の髪を撫でた。

その言葉と、その手の温もりによつて変わってゆく柚子に対する不快感は太陽の光を当てられた氷のように解けていった。

「うん、一緒に帰る」

そう云って堇は子供のように柚子に抱きついた。

「もう、どうしたのよ…やっぱり変な子ねえ」

「えへ。あたしは変な子だよ」

困った顔をした柚子は半ば呆れたように微笑んで堇の白い顔に頬を寄せた。

温かい。

化粧品を鼻を衝くようなきつい匂いの奥底に柚子本来の優しい香りがする。姿勢は変われど柚子は柚子である事には変わりはないのだ。柚子が変わってしまうというのは矢張り杞憂きゆうに過ぎなかったらしい。

柚子という時間が最も幸せを感じられた。

堇は顔を上げて柚子の手を取り微笑みを返す。

「行こ、柚子ちゃん」

「待って！」

柚子が堇の行動を封じるように手を強く握った。思わず立ち止まり堇が怪訝な面持ちで振り返る。

「どうしたの？忘れ物？」

堇は首を四十五度程傾げて不思議そうな顔をしている。

「もう来るからちょっと待ってよ」

「来る？何が…？」

柚子が身を反らせて後ろの出入り口を覗き込む。

「あ、来たみたいね」

柚子の背後にある北棟出入口の奥から鋭く響く靴音が聞こえてくる。

女性のものだろうか：誰かが階段を下りて来ているようだ。

靴音は徐々に大きくなってゆく、その音の主が近付いて来ているのだ。音は柚子のすぐ後ろまでやって来ている。

柚子の背後で背の高い女性の影が動いた。

「遅かったね、ちよっと待ったよ」

後ろの陰に向かって柚子が振り返って声を掛けた。

その影はゆっくりとこちらに向かって来ている。もう少しで電燈の光が当たって顔が見えそうだ。

麝香じゃこうのようなきつい香水の匂いが漂ってきて思わず堇は鼻と口を手で隠した。電燈に照らされその女性の口元が露あらわになる。血の通っていない飾人形マネキンのような白い頬、それとは対照的に血液そのものを彷彿させるような紅ルージュに彩られた唇。

堇の顔から血の気が引いて、みるみる頬が青ざめてゆく。

―この人は：久野さん

完璧と云って良い程真っ直ぐに通った形の良い鼻筋、濡れているような長い睫毛に相手を虜にする妖艶な光と相手を屈服させる強大な力とを兼ね備えた切れ長の瞳。そして色素の薄い栗色の長い髪。

久野杏奈は容姿の総てが完璧で、総てが作り物のようだった。

黒いコート、真っ赤なショールを白い首に巻いたその姿は恐ろしい程に夜の闇が良く似合う。夜が杏奈を引き立て、また杏奈が夜を引き立てる。

まさに吸血鬼ヴァンパイアだ。

夜の吸血鬼はその力を陽が出ている時間の何倍にも増幅させる。

その姿は美しくはあるが麻薬のような中毒性のある恐ろしいものだ。その凄艶せいえんな化け物の姿を眼前にして堇はこれでもかとう程に大きく目を剥き慄おそいていた。出来る事なら今直ぐにでも逃げ出したかったのだが足が震えて堇の命令を無視する。少しでも動く喉笛を喰い千切られるように思えて吸血鬼から目を逸らす事すら出来ないでいた。

「今日は堇も一緒に帰ろうよ。良いよね、杏奈」

柚子がとんでもない提案をする。

「いいよ、柚子ちゃん。あたしは一人で帰るよ

頭の中で返答を作ってもそれを口にする事が出来ない。

「だってこんなに暗くなってるんだから女の子一人で夜道を歩くのは危ないでしょ？ここは三人で帰ろうよ」

更に柚子が続ける。堇にしてみれば夜道で変質者に出くわす方が吸血鬼と並んで歩くより遥かにましと思えた。堇はそれほどまでに杏奈を恐れていた。

「構わないわよ」

杏奈が口を開いた。

その声もしつとりと濡れているように妖しかった。そしてその声よりも更に妖艶な瞳で堇の目を見た。

堇は息を飲んだ。

杏奈と目が合った瞬間、軀の総ての動きが制止させられた。呼吸の自由さえも奪われて窒息死してしまいそうな程苦しい。矢張り杏奈は鬼だ、事実そのような恐ろしい力に堇は脅かされている。

その眼は服従を強いる眼だ。

そして杏奈が怯える堇に悠々と優越感を含んだ視線を送りながらにやりと紅い唇を綻^{わら}ばせて晒^{しもべ}った。

僕を、奴隷を物色している。

堇という奴隷を使ってどのように楽しめるか考えているようだ。

品定めを終えた杏奈は不気味に嘲笑して堇から視線を外した。

「さあ、行きましょうか」

そう結んで杏奈は歩き出す。

「もう、待ってよ！」

強要された訳でもないのに柚子もその後を当然のように付いて行く。柚子も既に杏奈の奴隷に成り下がってしまったているのだろうか。仕方なく堇もその柚子の後を付いて行く。

夜空の奥底から舞い落ちてくる雪は更にその量を増し堇の視界を、柚子の後姿を朧げにする。

―楽しくない：柚子ちゃんと一緒なのに楽しくない

地面を再び薄く覆った新雪は踏むとぎゅっと音を立てて沈む。堇の後ろには三人の足跡、前には二人の足跡。

堇は杏奈と柚子の後を二歩程離れて付いて行っている。伏し目で歩いているのだが時々上目遣いに並んで歩く二人の背中を見たりする。暗い夜道では僅か前を歩く二人の後姿さえもはっきりとしない。唯、街灯の真下に差しかった時のみ闇の中から二人の背中が浮かび上がってまた闇に吸い込まれる。

前を歩く二人は楽しそうに喋っている。

しかし堇にはその会話の内容がまるで外国語であるかのように解らない。柚子は笑ったり驚いたり感心したりしているが何が面白いのか堇にはさっぱりだ。柚子の口から零れる言葉も理解出来ない。

柚子が変わってゆく。

柚子が離れてゆく。

柚子が消えてゆく。

今までの柚子は、堇の親友だった柚子はもういないのかもしれない。声や姿形がよく似ているだけで目の前にいるのは柚子ではないような気すらしていた。

闇の中に見え隠れする柚子の影は首を傾げたり、手を敲いたりとても楽しそうによく動く。それに対して杏奈の動きは全くと云って良い程に無い。同じ姿勢で歩を進めながら淡々と言葉を選んでいただけ。その後姿はまるで吸血鬼が無垢な少女を拐し、闇の世界に連れて行こうとしているようだ。

杏奈の香水の匂いが鼻を擦る。

三人の眼前にあの川が姿を現した。例の雪女の女に瀬戸内海の瀬と漢字を充てられた読み方すら分らない川だ。

いつもと同じ場所を流れる、いつもと同じ川の筈なのだが陽の落ちた時間に見ると昼間とは全く印象が違う。深い川底は闇に紛れてその姿を隠し、暗闇が大きく口を開いている。辺りを覆う雪の白が

余計に川底の黒を強調して、より不浄なものなのだという意識を植え付けてくる。

全く底が見えない。これはもう川というより亀裂、大地を切り裂いた深い穴だ。

堇と柚子は余りの鬼魅の悪さに思わず足を止めた。

「どうしたの？」

杏奈が振り返らずにしつとりと濡れた声で問い掛けてくる。

「だって…気持ち悪いじゃん、この川。それにこの川沿いの道って真っ暗で怖くない？」

柚子はそう答える。堇も酷く怯えた様子で胸ポケットから紅いお守りを取り出して強く握りしめた。ちりと澄んだ音を響かせて鈴が揺れる。

―椿、助けて

祈るようにして椿を胸に当てて堇は荒くなった呼吸を整えようとしていた。口から白い息が次々と出てくる。堇が最も恐れているのは川などではない。

目の前にいる吸血鬼が恐ろしいのだ。

「うふふ。大丈夫。さあ、行くわよ」

吸血鬼が囁^{ささ}っている。

杏奈の背中は躊躇する事無く暗い川沿いの道へ吸い込まれてゆく。まるでその暗闇こそが自分の住む世界であるかのように自然だった。堇と柚子は覚悟を決めて暗闇に向かって歩き出す。

堇は柚子の手を取り、お守りを持ったままの手できつく握りしめた。柚子も前を向いたまま堇の手を握り返す。

―椿、どうかあたしを、そして柚子ちゃんを…護って下さい
二人でお守りを握りしめた。

川沿いの遊歩道に差ししかかってから先程までとは隊列が変わった。一人毅然として前を歩く杏奈と、身を寄せ合いながらその後を付いてゆく堇と柚子。

柚子の手からは生命の温かさを感じられた。堇はその温かさに勇気づけられている。しかしこの状況は良くない事もあった。

「ねえ、あなた桐生さんだっけ？」

吸血鬼が堇にも声を掛けてくるのだ。堇は慎重に言葉を選びながら答える。

「は、はい：そうです」

「この前はごめんなさいね。私も帰ってから非道い事をしてしまったと反省したの」

杏奈は決してこちらを振り向くことなく堇に言葉を投げかける。

その声は厭に樂しげでとても本心から謝罪しているようには思えない。何か別のねらいを胸に秘めているようだ。

「いえ、もういいんです。気にしてませんから：はい」

傍らの柚子が畏まった堇を見て愉快そうに笑う。

「もう、堇ちゃんったら。そんなに気を遣う事ないんだよ、杏奈も私達と同じ年なんだしもっと仲良くすればいいじゃないの」

また柚子がとんでもない事を云う。杏奈が目の前にいるだけでも息ができなくなる程だというのに仲良くなるなど出来る筈が無い。

「良かった。あなたを深く傷付けてしまったんじゃないかと心配していたの」

妙に上品なその口調が逆に棘々（とげとげ）しい。そして嘘臭い。

そして突然杏奈が立ち止まった。それに合わせて後を歩いていた二人も止まる。

「桐生さん：」

吸血鬼に名を呼ばれた堇は軀を強張らせる。矢張り杏奈の発する言葉には魔力があるようだ。その妖艶な濡れた声で名前を呼ばれるとまるで杏奈の傀儡人形にでもされてしまったかのように軀の自由が奪われ、言いなりになってしまいうさだ。

はい、と堇は慇懃に返事をした。

すると目の前の杏奈はぴたりと立ち止まりゆっくりとこちらを振り返る。その動きで空気が動き杏奈の香水の匂いが再び堇の鼻を掠

める。

そして杏奈の瞳が堇の目を見据えた。

堇は恐怖の余り指一本動かす事が出来なくなった。

「桐生さんって…本当に可愛いわねえ」

杏奈は堇の顔に粘着性のある視線を送りながら首を少し傾けてゆつくりと堇の横に回り込んだ。吸血鬼が獲物を品定めしている。

堇は全く動く事が出来ず、呼吸を乱しながら誰もいなくなった闇の先に目を向け続けていた。

「そうでしょ、堇ちゃん可愛いよね」

柚子が嬉しそうにしている。そして不意に握っていた手を離れた。柚子には今堇の置かれている状況が解らないようだ。しかしその柚子の声のお陰で堇の身に僅かな自由が戻った。堇は自分の身に精一杯命令を下し、杏奈の方に身を向け身構えた。

―動けた！

しかし杏奈の瞳から再び強い力を感じると身の自由は忽ち奪われた。そして杏奈は堇に向かってゆつくりと近付いて来る。

「うん、桐生さんは可愛いわ」

堇は逃げるように後ずさった。しかし背中に川の鉄柵が悶える、柵を隔てた堇の背後には暗闇が大きく口を開けて待っている。

追い詰められた。

杏奈は艶めかしく微笑んで容赦無く一步一步距離を詰めてくる。

「髪も真っ黒ですごく綺麗」

「目も真ん丸で可愛い」

「唇もふっくらしていて柔らかそうよね」

「それに肌も真っ白で…美味しそう」

「背も小さくて本当に可愛い…食べてしまいたい」

とうとう杏奈は堇の目の前まで近付いて来た。息がかかる程の距離に杏奈の顔がある。堇は身を後ろに反り返らせるように背筋を伸ばして杏奈から逃れようとしている。

杏奈は今までにない程の妖しげな視線を送り堇の抵抗を制した。

そして堇の肩が杏奈に掴まれた。その力は人間のものではない程強く感じられた。そして杏奈は上目遣いに堇の白くふつくらした美味しそうな顔を眺めながら堇の首に巻かれたマフラーに指をかけて引き下げた。

堇の細く白い首が露わになる。

首元から侵り込んで来る寒さと恐怖に堇は身を震わせる。しかし抵抗出来ない。

「杏奈、何してるのよ！」

いまいち鈍い柚子も流石にこの状況の異常さを酌んだらしい。

「ねえ、桐生さん：あなたを食べちゃってもいい？」

そう云って杏奈が堇の胸元に頬を寄せる。堇の心臓は弾けてしまいような程激しく動いている。

―怖い：殺されちゃう

堇はぐくりと唾を飲んだ。

「まあ可愛い。鼓動がすぐ早くなっている：トクトク、トクトクって桐生さんの小さな心臓が必死で血を全身に廻らせているのね」
そして堇の白い首筋を杏奈の舌がなぞった。

―厭っ！

堇は声にならない悲鳴を上げて杏奈を振り払い、よろよろとその場にへたり込んだ。マフラーを巻き直してそのままの姿勢でお守りを額に当てて呼吸を整えようとする。杏奈は新しい玩具おもちゃを手に入れたように嬉しそうな顔をして堇を見下ろしている。柚子は困った顔をしてちよつと、ちよつと云ってうろたえているだけだった。

堇の抵抗で杏奈の首に巻かれていたショールが乱れていた。

柚子が堇に駆け寄り肩を貸した。堇は柚子の躰に凭れる事でやっと立つ事が出来た。柚子が心配そうに堇の華奢な躰を抱え込む。

「あら、ごめんなさい。驚かせちゃったわね」

杏奈が口元を手の甲で拭う。

「桐生さん、私あなたの事気に入ったわ」

吸血鬼の品定めが完了した。堇を獲物として見据えている。

「私と友達にならない？」

杏奈のしつとりとした声が闇夜に響く。

堇は怯えたように杏奈の顔を見つめたまま何も答える事が出来ない。口では友達と云い表しているものの決して対等な関係を求めているのではないだろう。杏奈が求めているのは主従関係、隷属する者、奴隷。否、そのどれとも違う、目の前にいる妖艶な吸血鬼が求めているものはそういった人間ですらない。

遊び道具、玩具だ。おもちゃ

そしてこの魔の契約に応じてしまうと自分は杏奈の玩具になってしまう。杏奈を楽しませる為だけの存在になってしまう。そして飽きられてしまったらきつと塵芥ごみのように捨てられてしまうのだろう。「どうしたの？私の事が嫌いなのか？」

杏奈は催促する。

静かで落ち着いた口調だが肯定を強要する強い圧力の籠った声だ。否応無しに堇は口を開かざるを得なかった。

「そんな…嫌いななんて事は無いんです」

堇の後ろで柚子が堇の乱れた髪を整えながら心配そうになりゆきを見守っている。

呼吸が上手く出来ない。杏奈の目に捕えられているとまるで黒い水の中に顔を突き込まれて溺れさせられている気分になる。

―この人は…本物の鬼だ

堇の意志が揺らぎ始める。

「ねえ、どうして良い返事が貰えないのかしら…」

杏奈は瞳に更に妖しい光を込める。

これは催促でも強要でもない…脅迫だ。

―怖い…赦して…もう厭だよ

眼尻に涙が溢れてきた。堇は今にも泣き出しそうだ。

この恐怖から早く解放されたい、このまま杏奈の魔力にあてられ続けるぐらいならいっそ杏奈の玩具として可愛がられている方がまだましかもしれない…。そんな考えが堇の脳裏を過った。

「友達になりましょう、桐生さん」

魔の契約書を再び目の前にちらつかせられる。調印^{サイン}する代わりに軽く頷くだけで契約は成立する。たったそれだけで今の状況から解放されるのだ。

堇は人であることを捨てようとしている。

目に涙を浮かべて堇が首を縦に振ろうとした時、一陣の風が三人の間を吹き抜けた。

その風に杏奈の纏っている真紅のショールが奪い去られ、ふわふわと靡きながら川の鉄柵を飛び越えて暗闇の底に誘われて行った。

杏奈はショールを飛ばされた事より、堇という玩具を手に入れるのを邪魔された事に苛立っていた。結果的に堇は首の皮一枚で未だ人間でいる事が出来ていた。

不機嫌そうに目を細めて黙ったまま杏奈は川の下を覗き込む。堇と柚子も同じようにそろりと川底を覗いた。すると闇の亀裂の淵に鮮やかな紅がたなびいている。ショールは柵の直ぐ下に引っ掛かっていた。

柵を乗り越えて手を伸ばせば届きそうだ…。

「あれは取れないよ…落ちたら危ないからね」

柚子が眉間に皺を寄せ気の毒そうな顔で杏奈を見る。杏奈は柵に手を掛けて無表情に闇の底を眺めていたかと思うと不意に口元を綻ばせて笑った。

そして堇に目を向ける。

「桐生さん、あなたが取ってよ」

堇と柚子は固まった。杏奈は刃物のように鋭い瞳を堇に突き付けている。

堇は震えるように首を横に振って拒絶を主張する。

「命令よ…桐生さん」

杏奈が淡々と言葉を連ね脅迫する。堇は恐怖に全身を震わせている。

「杏奈！それは駄目よ」

柚子が凜とした声で杏奈に反論して堇を護った。

― 柚子ちゃん：

柚子は堇の躰を強く抱き締める。

この上なく心強かった。

杏奈の顔の筋肉がぴくりと痙攣する。面白くないらしい。

「冗談よ。自分で取るわ」

杏奈は再び魔性の笑みを見せてから真っ黒なコートを翻して柵を乗り越えた。

「無茶しないで、危ないよ」

柚子は心配そうにしているが杏奈は全く物怖じしている様子もない。

背中越しに両手で鉄柵を掴みその躰で十字架を描いているようだ。

吸血鬼が十字架を模している姿は不気味だった。

また風が吹き始め杏奈から麝香のような匂いが漂ってくる。杏奈が闇の深淵に立ち、その香りよりも更に不気味な雰囲気漂わせている。

「桐生さん、私が怖いかしら？」

堇の心臓がまた激しく騒ぎ出す。

吸血鬼が顔だけを半分こちらに向け堇を睨んだ。

「私を殺すなら今よ。あなたが今、私の背中を押せば良いだけ…それだけであなたは私から逃げる事が出来るのよ」

「杏奈、馬鹿な事言わないで！」

「うふふ。だから冗談だって！」

柚子が杏奈の言葉を糾そうとするが杏奈は妖しく笑ってそれを受け流す。しかし堇の胸には今の杏奈の言葉が滑り込んでしまった。

杏奈は再び色気のある声で上品に笑って柵を握ったままその場に屈んだ。アスファルトで固められた川岸は僅かな傾斜はあるもの^{ほん}殆ど垂直に近い、川岸と云うよりは壁と表した方が正しいのかもしれない。杏奈はショールに手を伸ばすがあと少しの所で届かない、

その姿を二人が心配そうに見詰めている。

杏奈が立ち上がったってこちらを向く。

「あと少しなんだけど…棒か何かが良いのに」

髪を掻き上げて杏奈が柚子に目を向ける。

「そうだ神谷さん、ちょっと探してきてくれないかしら？」

その役には柚子が指名された。柚子はうん分かったと二つ返事でその頼みを承り、堇の躰から手を離れた。

「あたしも行く！」

柚子の体温から投げ出された堇もそれに同行しようと杏奈に背を向ける。

「堇ちゃんは杏奈に付いていてあげてよ。杏奈も女の子なんだからこんな所に一人にしちゃ可哀想でしょ」

「でも柚子ちゃんも一人になっちゃうじゃない…」

「私は大丈夫だよ！直ぐに戻って来るし、それより杏奈をよろしくね」

柚子は太陽のように笑う。

「それから杏奈。堇ちゃんをイジメちゃ駄目だよ！」

冗談混じりにそう云って柚子は暗闇の彼方に消えて行った。

「待って。あたしを置いて行かないで！」

柚子は唯一人夜の闇に吸い込まれて行った。悲しげに柚子の後姿を見送っていると、これが柚子との永遠の別れとさえ思えた。

そして堇の背後には…

「桐生さん…」

吸血鬼がいる。

「少し…お話しましょうよ」

堇の背筋が凍り付く。

今直ぐにでも逃げ出したいが暗闇に逃げ場を塞がれている。まるで闇という檻に化け物と一緒に閉じ込められているようだ。

慌てて堇は杏奈の方に向き直る。

吸血鬼が柵越しに虚ろな瞳で堇の躰を舐めまわすように見ている。

そしてその焦点は堇の目に合わせられた。堇は身を守るように軀を抱え込み、警戒態勢をとる。

手に持っていたお守りの鈴が澄んだ音で響いた。

「久野さん！」

堇は声を振り絞って吸血鬼の名を呼んだ。

「何かしら？」

「柚子ちゃんの事…好きですか」

柚子がこの吸血鬼の玩具になっているとなど考えたことも無かったが彼女はたった一人の親友だ、心配だった。だが、もし杏奈も柚子の事を対等な立場の友達とと思っているのならそれでも良かった。

頬を撫でながら降る雪が堇の視界を曖昧にし、杏奈の表情をぼやけさせる。

杏奈は口元を手で隠し、上品に薄く笑う。

「ああ、神谷さんか」

「そうです。友達なんですか？」

少し溜めてから杏奈は答えた。

「ええ、大好きよ」

杏奈は今までには見たことも無い優しい笑顔を満面に浮かべ翳^{かげ}の無い確りとした口調で云った。

どうやらその言葉に嘘は無いように思えた。

―あれ、久野さんの顔って…

杏奈は目を細め、口の端を上げてにこにこしている。こうして見ると杏奈も可愛らしい顔をしている。

柚子の名を出した途端に杏奈の笑みに含まれていた悪魔のような恐ろしさが罔^なくなり、その無邪気な表情には無垢な少女のような純潔さや清楚さが溢れていた。

―何か優しい笑顔だなあ

堇はつい今までは吸血鬼とその姿を重ねて恐れ慄いていたが目の前にいる杏奈をもう吸血鬼や悪魔と喻えるには少し違うように思えた。

花卉^{はなびら}の如く舞う粉雪の向こうで優しく微笑む栗色の髪の少女。

…天使だ。

「ほ、本当ですか？」

心配そうに訊く堇に天使が笑顔を絶やさぬままゆっくり頷いた。

堇に絡み付いていた恐怖や憂慮はその返事に因^よってすると解けた。堇は杏奈に対して何か勘違いをしていたのかもしれない。

第一印象が最悪だった為、堇は最初から杏奈の事を鬼だとか悪魔だとかおっかない生き物と決めてかかっていた。確かに目の前にいる女性は一寸^{ちよつと}怖いかもしれない、一寸^{ちよつと}意地悪かもしれない。

しかし今の杏奈は鬼でも悪魔でもない。

「本当よ、神谷さんて良い子よねえ」

堇の不安がまた一つ解けていく。

―久野さんにも杏奈の良さが解るんだ。あたしと同じだ

堇の表情が自然と明るくなる。

鬼は誰の中にもいる。今まで見ていたのは杏奈の鬼の部分であって目の前で微笑みを投げかけている姿が杏奈の本質なのかもしれない。いつもの棘々しい態度も自分を大きく見せるために背伸びをしているだけで本当は優しい人なのだ。

人を寄せ付けない普段の態度は少し過激だが照れ隠しなのだろう。

「い、良い子でしょ、柚子ちゃん！今度、いいこいこしてあげて下さいよ…」

「うふふ。そうね。頭でも撫でてあげないとね」

天使の顔は子を慈しむ聖母のようになった。

柚子の事を好きな人で悪い人はいない。堇はそう思っているのです。杏奈にも徐々に心を開き始めた。

―なんだ…久野さんってすごく優しい人じゃない。あたし勘違いしてた

「あたし…あたしね！実はいつも柚子ちゃんに頭撫でて貰ってるんですよ。ちょっと恥ずかしいけどあれって結構嬉しいもんなんですよ！」

「何それ、可笑しいね」

天使が澄んだ声で笑うと堇も釣られて一緒に笑った。

「この女、ちょっと好きになってきたかもしれないな」

堇の頬に赤みが差す。堇は美人に弱い。

「柚子ちゃんね、久野さんの事すごい褒めてた。お洒落だって、美人だって。よく柚子ちゃんと遊んだりするんですか？」

「そうね、最近をよく遊ぶわね」

「へえ、そうなんですか…」

複雑な気分だった。

杏奈も柚子も一緒にいて楽しそうなのは良かったのだが、最近柚子が堇と遊んでくれない。そこは少し寂しいような気もする。

「ところで桐生さんが握っているそれ（・・・）は何かしら？」

杏奈の視線は堇の持っている鈴付きの紅いお守りに向けられた。

「ああ、これですか？これはね、あたしのお守りなんです」

「お守り？」

「うん、この中にはあたしの妹の形見のビー玉が入っているんです」

「形見…ビー玉って、まさか…」

杏奈が驚いたような表情をして口元を覆った。みるみる内に杏奈の天使の笑みが曇ってゆく。

「それってこの前、私が蹴った…」

「はい…」

天使の笑顔は失われ、杏奈は目に涙を浮かべ懺悔する。

「ごめんなさい、そんな大切なものだとは思わなくて…」

「いいんですよ、もう」

堇は涙を滲ませた杏奈の贖罪を遮る。

「久野さんは謝ってくれたんだしもう良いですよ、椿も怒ってませんよ」

「つばき？」

「妹の名前です。木偏きへんに春きって書きます」

「へえ、良い名前ね」

杏奈が親指で眼尻に溜まった涙を拭いながら云った。堇は椿を褒められて自分まで嬉しくなった。

「じゃあそのお守りは桐生さんにとってとても大切な物なのね」

「うん、あたしの鬼を祓う大切なお守りです」

そう云って堇はお守りに頬擦りをする。堇の動きに合わせてお守りが返事をするように鈴を鳴らせる。

「鬼って？」

「んん、あたしもよく解らないんだけどこれを持っていると厭な事が起きてもそんなに落ち込まないんですよ」

堇は齒を見せて笑った。堇がこんな笑顔を見せるのは今まで柚子以外にはいなかった。

「このお守りは柚子ちゃんと同じ位大切な物なんです。柚子ちゃんはあたしの数少ない、いや唯一の友達なんですよ。あたし、ちよつと暗いですから…」

堇は若干自嘲気味に云った。

「友達…か」

「久野さんも柚子ちゃんと友達なんでしょ？」

「友達？」

杏奈が堇の顔を不思議そうに見る。

堇の胸中に一滴の黒い洋墨インクの雫こぼが零れ落ち、滲む。

厭に冷たい夜風が雪を孕んで吹き抜ける。堇は寒さに顔を背けたが天使はこちらを見たまま微動だにせず栗色の髪を靡なびかせているだけだった。

「あのね桐生さん…それは少し意味が違うの」

「え…だって久野さん、柚子ちゃんの事好きだって…」

「その好きの意味がね…」

天使の顔に小さな罅ひびが入った。否、あれは顔では無い。あれは矢張り…

仮面だ。

どうやら今まで二人の会話には齟齬そごがあったらしい。堇の躰に再

びじわじわと恐怖が蘇ってくる。

「どういう意味ですか…」

罅の入った天使は無邪気に笑う。

「あのね桐生さん、好き（・・・）にも色々あるでしょ？」

杏奈が妖しげに髪を掻き上げる。天使の仮面もぽろぽろと欠け落ちていく。

「異性が好き、家族が好き、友達が好き、それに食べ物が好き、愛玩動物ペットが好き、玩具おもちゃが好き…とかね」

杏奈は天使の笑顔を絶やさぬまま淡々と言葉を連ねる。しかし今までの笑顔とは全く印象が違う。

花卉はなびらの如く舞う粉雪の向こうで優しく微笑む栗色の髪の少女。

…天使だ。

…そしてその向こうには魔界へと繋がる深淵が大きく口を開いている。

その闇を背にした姿はよく似合う。天使などではない。矢張りこの女ひとは、

…吸血鬼だ。

震える足を精一杯動かして董は一步後ずさる。

「いきなり何言い出すんですか、だって久野さんはよく柚子ちゃんと遊んでるんでしょ？仲良しなんでしょ？」

また杏奈の顔が引き攣る。その際に仮面も更に欠け落ち、その下から吸血鬼の顔が見え隠れする。

「確かに遊んでるけどそれも少し意味が違うのよ…意味が解る？」
全身が痺れているように動けない。

吸血鬼の云うその意味というものを察する事は出来るかもしれないがそれは決して信じたくないものだ。

「私は…神谷さんと遊んでる（・・・）んじゃないのよ」

―柚子ちゃんと遊んであげてる（・・・）って言いたいなの？

天使の仮面が剥がれかかった吸血鬼が微笑む。

「私は神谷さんで（・）遊んでるのよ」

天使の仮面の下の吸血鬼が口の端を吊り上げてにいと笑うと天使の仮面は完全に剥がれ落ちた。

菫は口元を手で覆い大きく目を剥いた。その視線の先にいる悪魔、吸血鬼は魔性の笑みを浮かべながら嬉しそうに続ける。

「神谷さんはあなたの言う通り本当に良い子よね」

―止めて…

「私の言う事は何でも聞くのよ」

―何も云わないで…

「二人でいる時あの子がどんなに卑しい姿を見せてくれるか教えてあげようか？」

―厭、聞きたくない

菫は手で顔を総て覆いがたと肩を震わせている。

「髪を引っ張ったりね」

―お願い…

「踏みつけたりするとね、あの子ったらうっとりした顔をして喜ぶの」

―止めて 何も聞きたくない！

「床に溢した水をね、私が舐めなさいって命令すると、美味しそうに床を舐めているのよ」

―柚子ちゃん：柚子ちゃん！

涙が溢れてくる。ぽたぽたと涙を零しながら菫は頭を掻き毟る。

「今度試しに御器嚙でも食べさせてみようかしら」

「厭ああああ！」

頭を抱えて菫が悲鳴にも似た金切り声を上げる。

その姿を見て吸血鬼は加虐嗜好的に北叟笑む。

菫は無我夢中で弾かれるように杏奈の胸ぐらに掴みかかった。

「もう止めて！止めてよお！」

菫が喚く。こんなに大声を上げたのは生まれて初めてだ。菫もど

こかが壊れ始めている。杏奈はにやにやと邪悪な笑みを堇に向けている。

「お願い！ 柚子ちゃんを、あたしに柚子ちゃんを返してよ！」

杏奈が邪魔そうに堇の細い腕を振り払う。

バランス
平衡を崩した堇は力無くその場に膝を付き蹲った。

まるで塵芥ごみでも見るかのように杏奈が堇を見下ろしている。

「あなたの（・・・）柚子ちゃん（・・・）は私の命令を何でも聞くのよ。良かったら今度見てみる？ 私の可愛い玩具を…」

吸血鬼が囁く。

―胸が気持ち悪い

―頭が痛い

―息が苦しい

堇は胸を掻き篁り、その場に嘔吐した。

「あははは、やっぱり汚い子ね…でもあなたを見ているととても愉快よ」

杏奈が高笑いをしながら堇を詰る。

真冬と云うのに汗だくになりながら堇は必死に呼吸を整えようとしている。

―まだ我慢するの？

堇の躰が硬直した。

まただ。

またこの声だ。

この声は…。

鬼…。

―助けて欲しい？

鬼が頭の中で語りかけてくる。

―あなたには関係ない、来ないでよ

―なんでそんな事言うの？

―黙ってて！

―でもこのままだと柚子ちゃんだけじゃなくてあなたまであの女の玩具にされるよ？

―あなたには関係ないって言ってるでしょ、あたしの問題なの！

堇は鬼に心を驚ぐなど絶対に厭だった。

―関係なくなんかないよ、だって…

―あたしはあなたなんだから

堇は口に付いた吐瀉物としゃぶつと汗を手で拭い、そして頭を振って正気を保とうとする。

―椿、椿は？

手元からお守りがお守りが無くなっている。あれが無ければ鬼に對抗する術すべも無い。

―椿はどこ！

堇は四つん這いになったまま雪の上を探し回った。

手が冷たい。寧ろ冷たくて感覚が薄らいできた。

―お願い。出て来て…椿

きよろきよろと辺りを見回すと鉄柵の辺りに紅い影が落ちている。
―あつた！

泣き出しそうになりながらお守りに向かって犬のように駆け寄った。どうやら杏奈に掴みかかったときに落としてしまったのだろう。
―ごめんね、椿。そんなの所に落としちゃって…寒かったでしょ

堇の手はお守りに向かって迷うこと無く伸びてゆく。

「なんだ。これを探してたのね…」

頭上からは吸血鬼の声。

柵の隙間から杏奈の脚が伸びてきて勢いよく、無慈悲にお守りを

踏みつけた。

堇の手はぴたりと止まる。

胸の中からよく解らない感情が沸々と沸き上がってきた。その感情は悲しみや恐怖とも違う、今まで感じた事の無い気持ちだ。

ふと声のする方を見上げると切れ長の目を大きく見開き、堇を見下ろして嗤っている吸血鬼の姿があった。

「大切な物なんでしょう？返して欲しい？返して欲しいのなら私にお願いしてみなさいよ…」

杏奈がお守りをすり潰すように踵で踏みにじった。

杏奈の踵の動きに合わせて鈴が苦しそうに、助けを求めるように弱々しく鳴く。

―つば…き

「やめてええええ！」

堇は杏奈の脚にしがみ付いて制止させようとする。

鼓動が大きく、速くなる。

血液と一緒に初めて感じたその感情も全身に巡りだす。

何となく、朧げにその感情の正体が解ってきた。

内気で、おっとりしていて、人見知りで、優しい堇はこの気持ちを今まで心の奥底に隠していて気付かないようにしていたのかもしれない。

この感情は…

怒りだ。

―あたしが取り返してあげようか

―…。

―この女から椿を、そして柚子ちゃんを

―…うん

―分かった。直ぐ終わらせるね

※

あれ程激しく降っていた雪が突然止んだ。

そして灰色の雲の切れ間から漆黒の夜空が顔を見せる。その漆黒の中から銀色の月が浮かび上がり辺りを仄かに照らし出した。

世界は水を打ったように静まり返る。

堇は質量の罔い幽霊すみれのようにすうと音も立てずに立ち上がり、目を瞑ったまま杏奈に顔を向けた。

「あらあら、どうしたの？この汚い袋はあなたの宝物じゃなかったかしら、要らないの？」

目の前から杏奈の声がする。息がかかる程の距離に杏奈の顔がある。

堇はゆっくりと閉じられたその目を開け始める。

「あ、あなた……」

杏奈の声の調子が明らかに変わった。

「何なの……」

杏奈が目を剥いて驚いている。否、これは恐怖している。

「何なのよ……あなたのそ、その」

全身をがたがたと震わせている。顎も震えていて上手く喋る事が出来ないらしい、杏奈の全身の筋肉が弛緩し始めているのがよく解る。

堇は大きな円い瞳を杏奈に向けてにっこりと優しく笑った。そして鈴のように美しく澄んだ声で囁いた。

「死ね」

堇が杏奈の軀を優しく押した。

杏奈は抵抗する事無く悲鳴すら上げる事無く、不思議そうな顔をしながら暗闇の淵に吸い込まれてゆく。

華奢な杏奈の軀はアスファルトの急な傾斜の壁面に何度も打ち付けられながら闇に向かって転がり落ちてゆく、その勢いのまま浅い

水底に叩きつけられ不自然な方向に四肢を捻じ曲げながら転がり向こう側の壁面に打つかつて漸く止まった。丁度壁面に凭れ掛りこちらを向いて座っている姿勢になった。

菫はその姿を悠々と見下ろしている。

そして紅いお守りを拾い上げて泥を払い、優しく接吻をした。

杏奈は汚い川に腰まで浸かりながら力無く四肢を投げ出しぐったりとしている。全身を打ち付けて至る所に打撲や擦り傷、切り傷を負っているらしい。そして左足は完全に折れてしまっているようだ。膝から下はあらぬ方向へぐにやりと曲がってしまっている。

まるで主人に捨てられた傀儡人形だ。

意識は有るらしいが苦痛と恐怖と驚愕の余りまともな判断力は失っているだろう。視線を上手く定める事が出来ず、そこここに視線を泳がせている。

杏奈はもう吸血鬼ではない、悪魔でもない。決してや天使や聖母など以ての外だ。施された化粧が汚い川の水で洗い流され顔がどろりと溶けたようになっていいる。

悪魔でも天使でもない。

羊だ。恐怖に怯える徒の羊だ。

そして化粧という魔力を失ったその顔には雀斑や皸もある。菫や柚子の素顔に比べると杏奈のそれは遥かに劣る。あれ程紅く妖しかった唇も恐怖と苦痛と水の冷たさに苛まれ紫がかっている。

その顔は酷く、

―醜いね

対照的に菫は天使のような微笑みでその姿を眺めている。

汚れた羊はぱくぱくと口を鰹のように動かして掠れた声で問い掛けてくる。

「あなた…何なのよ…その目は！」

円く大きな菫の瞳は夜の闇と、銀色の月の光が混ぜ合わさったような仄かな光を放っている。

それはまるで…猫の瞳のようだ。

橙色^{だいだい}に輝く瞳を杏奈に向けながら堇は静かに闇の淵に立っている。
堇は怒りと云う感情を受け入れた。

堇の中の鬼が目を醒^さました。

「痛っ」

杏奈のこめかみに硬くて冷たいものが当たった。

石だ…

堇が杏奈に向かって石を投げつけた。

杏奈のこめかみから紅い血がつうと一筋流れる。

「あれ、化け物も紅い血を流すんだね…」

堇は不思議そうな顔をしながらも笑顔を絶やさない。

「今度は…あたしが虐めてあげよっか？」

堇がそう云って無表情になる、全く感情を消し去ってしまった。

すると羊の表情は恐怖一色に染まった。

堇は足下に掌程の大きさの石を集めた。

「塵芥^{ちしみ}」

「淫売」

「虫けら」

「黴菌^{ばいきん}」

堇は一つ呪詛^{じゆそ}を吐き出す度に一つ杏奈に石を投げつける。杏奈は

痛い痛い^{なぶ}と泣いても堇は構いもせず、否、逆に楽しそうに^{なぶ}続^{つづ}ける。

「豚」

「蛆虫^{ばいした}」

「売女^{くす}」

「屑」

堇はまるで機械のように抑揚無く淡々と、呪詛を口にしながら冷たい石を投げ続ける。「痛い…お願い、もう止めて…」

石をぶつけられた個所が青く腫れあがってきている。その姿を見

て満足そうに堇は天使のように優しく微笑む。

「その足じゃ自分で上がって来れないでしょ。助けて欲しい？」

杏奈は一筋の希望を見たかのように虚ろな目を堇に向ける。冷たい水に晒され続けて明らかに杏奈は衰弱している。

そして杏奈は小刻みに首を縦に振った。

「じゃあ、あたしにお願いしてみれば」

堇は可愛らしく語尾を吊り上げて云った。

「嘘よ。神谷さんを虐めてただなんて嘘なの…あなたをちょっと怖がらせてみようと思っただけなのよ。だから…助けて…下さい」

杏奈は醜く弁解しながら今ある残された力を振り絞って迷わず堇に縫^{すが}った。

その杏奈の言葉に応えるように堇もにっこり笑いかけた。総てを赦す優しい慈母の頬笑みだ。

杏奈は目に涙を浮かべながら喜んだ。

…助かる。

きっとそう思っていたのだろう。

羊は天から真っ直ぐに降りてくる救いの蜘蛛の糸にしがみ付いた。

羊は安堵する。

その刹那、安心して表情を綻ばせた杏奈の顔に拳ほどの大きさのある石が飛んで来た。杏奈の歯が三本程折れて落ち、川面に波紋を作る。

「厭よ」

川の上で月を背にした鬼が優しく微笑んでいた。夜気をたっぷりと染み込ませた夜の闇よりも黒い美しい髪を風に揺蕩^{たゆと}わせて鬼が笑う。

羊が手繰り寄せた蜘蛛の糸の先にいたのは。矢張り鬼だった。

羊は絶望した。そして川に体温を奪われ続けている杏奈の体力も愈々限界に近付いてきている。

堇が、鬼が静かに囁きかける。

「あなたなんかね…」

堇の表情に見え隠れしていた天使は完全に姿を消した。

「そのまま死んじゃえばいいんだよ」

橙色の瞳を杏奈に向けた鬼は無邪気にくすくすと笑う。

絶望に打ちひしがれた杏奈は助かる事を、生きる事を諦めたように暗い目を開いたまま人形のように力無く項垂れた。その壊れた傀儡人形は黒い水面を見つめたまま、糸が切れたように動かなくなつた。

橙色の瞳の鬼はその姿を見て豪く愉快な気分になった。

鬼は闇夜に向かって凄艶な高嗤い^{せいえん たかわら}を上げる。

その禍々しさは夜空をも切り裂かん程だった。

―あたし…なんて事してんだろう

―ああ、もう直ぐ柚子ちゃんが戻って来ちゃう

―厭だ。柚子ちゃんにこんな姿なんか見せたくないよ

―あたし…もうここには、柚子ちゃんの前には居られないな

堇は自らの頸元^{くび}に手を置き、爪を立てる。

―ごめんなさい。椿…

ちりん

鈴が、椿が悲しそうに鳴いた。

運命の事

空が開けた。

円い月が深い藍色の空に浮かんでいる。

長い石段を登り切り、僕は鳥居の下に立っている。汗で衣服が身に張り付いて気持ち悪い。

そして。僕の立つ石畳の先には紅い浴衣の少女の後姿。

その少女は神社のお堂に向かって立ち尽くしている。少女の背中を前にして僕の時間はそのまま止まっていた。

いい匂いがする。

すごく懐かしい匂いだ。その匂いに鼻を擦られて僕は何か切ないような寂しいような不思議な気持ちになった。胸が締め付けられるように苦しくなり歯の奥が疼く。

声を掛けようにも言葉が出ない。

時折吹く優しい風に少女の髪が揺蕩う布のようにふわりと靡く。

あなたは わたしを おぼえてる

風が止んだ。

澄んだ鈴の音のような声が僕の耳に吸い込まれてきた。その声を聞いて漸く僕の体は動くようになった。

何だか懐かしい声だ。

「君は…いたい」

僕の言葉はそこで詰まってしまった。確かにこの少女を知っているような気がするが、どうも明瞭…思い出せない。しかしこの声、この匂い。…覚えがある。

随分と遠い昔、子供の頃だろうか。

少女の背中は酷く悲しんでいるようだ。

「あの。違うんだ…その…」

僕は見苦しくも弁解しようとしたが上手い言葉が見当たらない。
少女の背中からはより悲しさが滲み出してきた。
背を向けたままの少女は再び澄んだ声で話す。

みんな わたしを わすれてしまう
わたしは ここから でられない
わたしは いつも ひとり
だれも わたしを おぼえていない
あなたも わたしを わすれたの

少女の言葉は僕の胸に直接刻み込まれるように伝わってくる。胸が痛い。やがて言葉だけでなく少女の悲痛な思いまでもが流れ込んできたようで、何故か涙が溢れてきた。

何か：すごく悲しい。

次から次へと泉のように湧いてくる涙を拭いもせず僕に少女の背中を見据えていた。

なきむし

わたしは あたなを おぼえてる

不意に強い風が吹き抜ける。僕は舞い上がる砂埃から顔を背け、目を瞑る。その時、ちりと鈴の音が辺りに響き渡った。

風が止んで目を開けようとしたとき、僕の耳元で少女の吐息混じりのか細い声がした。

あなたは わたしを おぼえてる

※

西日が差し込む中学校の教室に男子生徒の音読が聞こえる。

六時間目と云う事もあり、どの生徒も眠たそうにしている。子供達はもう授業などどうでも良いといった様子で、この後の部活や放課後の寄り道の事を考えているのだろう。そんな中で急に音読を指名されたこの男子生徒は災難だったと云えよう。

若い教師は教科書を片手に彼らの机の間を巡視して行く。すると教師の通る周りの席の生徒だけが面白いように背筋を真っ直ぐに伸ばす。そして通り過ぎるた途端に塩をかけた青菜のようにへなへなと萎れてしまう。

その様子を横目に見て教師は心の中でくすくすと笑っていた。まるで自分の軀からだが磁石にでもなったようで可笑しかった。

教師は再び教卓を前にして立ち、教室全体を見渡してにっこりと微笑んだ。

音読を命じられていた男子生徒が難しそうな顔をしている。

「ゆきのふりたるは、ええっと。…いふべき？ ううん…」

男子生徒が詰まると教室の皆の口元も綻ぶ。彼はわかりませーんと照れ臭そうに舌を出して降参した。

彼が男らしく白旗を振る様子を見て教師は清々しく笑って助言ヒントを与える。

「古文ではハ行がワ行になるから？」

「あ、いうべき…ゆうべき！」

教師は目を閉じてうんうんと頷く。

終業の鐘チャイムが鳴った。

授業が終わるや否や彼らは水を得た魚のように元気になる。授業中は疲労困憊しんぱいしている様子だったのがまるで嘘のようだ。教師は呆れたように苦笑いをする。

ホームルーム
終礼もそこそこにして早い目に彼らを解放した。ある者は部活に、ある者は友達と遊びに、彼らは正に脱兎の如く教室から飛び出して

いった。

自分の授業はそこまで退屈だったのかと少し傷心しながらも彼らには勉強とは違う彼らの楽しみがあるのだと自分に云い聞かせて彼らの後姿を見送った。

誰もいなくなり閑散とした教室は妙に広く感じる。こうして誰もいなくなると少し寂しい。教師も出席簿を持ってしんとした教室を後にした。

放課後は廊下もやけに静かだ。自分の登だけが細長い空間に飢している。窓から運動場を覗くと野球部が気合の入った掛声を発しながらランニングをしている。

「あいつら：授業中と全然違うじゃないか。輝いてるなあ」
はっらっ
潑刺とした子供達の姿を窓から眺めながら教師は独り言を云っていた。

隣の窓の前で教師と同じく運動場を眺めている女子生徒がいた。

「何を見ているんだい？」

教師が優しく声を掛ける。

「あ、先生。あれです」

女子生徒が指差した先では庭球部が練習試合をしていた。

「へえ、庭球好きなの？」

「はい：」

彼女は恭しく返事をした。今時珍しい礼儀正しい子だ。

「よくここから庭球部の練習を見てるの？」

「はい。でもみんなまだまだですね」

「なかなか生意気な事を言うね」

教師は声を出して笑った。それに釣られて女子生徒も口元に手の甲を置いて上品に笑う。

「あの男の子は上手いけど直ぐに体力切れしちゃうし、手前の女の子は我が強すぎてダブルスはてんで駄目ですから：ううん、皆良い物持ってるんですけどねえ」

腕を組みながら大仰に評論する少女を見ながら教師は愉快そうに

笑っていた。

「へえ、じゃあ君は相当上手いんだね」

「ええ、自信ありますよ」

そう云って女子生徒は教師に腕を突き出した。腕は白くてか細いが彼女の態度からは言葉通りの自信が満ち溢れている。

「先生？よかったら今度私と一セットだけ勝負しますか？」

「ははは、先生もそこそこの運動は得意だから覚悟しときなよ！」

教師がそう嘯く^{うそぶく}とお互いに自信満々の笑みを見せながら頷いた。

「ところで君は何年生だい？」

教師が顔を覗き込んで訊いた。

「二年です」

へえ、そうかと答えてから教師は続けた。

「いつ（・・・）の二年生かな？」

女子生徒はその意味不明な質問に目を丸くして首を傾げた。教師は運動場を眺めたまま再び問う。

「だから、その・・・いつ（・・・）の？」

その質問の意味が理解出来たらしく女子生徒は悪戯っぽい笑顔を見せる。

「へえ：先生には判るんですね。珍しいですよ」

「まあ、昔から判る体質なんだよ」

女子生徒はバレちゃったと云って照れ臭そうに笑った。

「そうですね、私は三十年前の中学二年生です」

「あらあら、僕より年上だったのか：」

教師はその少女の方を向いて少し気不味い顔をした。

「先生、また今度お話して下さいね」

「うん、でもあんまりちよくちよく来たら駄目だよ。学園七不思議の一つとかになっちゃうからね」

そう云って教師が笑い掛けると女子生徒はありがとうございますと礼を云って慇懃^{いんぎん}に頭を下げた。

窓から爽やかな風が吹き込んだかと思うとその少女の姿は煙のよ

うにかき消えた。

今の少女は幽霊だ。

この教師には幽霊が見える。

「白川せんせい？」

背後から声がしたので振り返ると重そうにトロンボーンを抱えた女子生徒がぼかんと口を開けて立っていた。吹奏楽部の生徒だろう、こちらは幽霊ではない。

「今：誰と喋ってたんですか？」

「え：どこから聞いてたの？」

生徒は窓辺に肘を付いて教師の真似をしながら

「何を見ているんだい？：ってところから」と、答えた。

―最初からじゃないか：

「い、いや、その：独り言だよ」

教師が笑って誤魔化そうとする。

「白川先生：」

「どうしたんだい？」

教師は白い歯を見せて爽やかに問い掛けた。

「キモい：です」

と、云い残して吹奏楽部の生徒は立ち去っていった。

―うるせえよ：：

若い教師、白川直哉しらかわなおやは苦笑いを満面に浮かべてその場に立ち尽くした。

※

家に着いた頃にはすっかり陽が傾いていた。今日が終わろうとしている。我が家が見えて来ると直哉はだらしなくネクタイを緩めた。

白川先生の顔は影を潜め、彼はこの時一人の青年である白川直哉に戻る。

台所の窓からは夕食の香りがする。直哉は犬のように鼻をくんくん鳴らしている。

―この味醂みりんと醤油の甘辛い匂いは…

―肉じゃがかな？

探偵にでもなったように思慮を廻らせ夕食の献立を推理する。

「ただいま」

玄関の扉を開けて靴を脱ぐ。すると母が台所から顔を覗かせてお歸りと声を掛けて来た。

「今日は肉じゃが？」

「そうよ、よく判ったわね」

母が口元に皺を寄せて微笑みかける。

「アンタ知ってる？肉じゃがってのはね、山本五十六やまもと いそろくって昔の軍人がね」

「違うよ」

直哉は目を細めて笑顔を返す。

「肉じゃがを初めて作らせたのは東郷平八郎とうきょう へいはちろうだよ。日露戦争の…」
あらそうだつくと母は誤魔化すように口を押さえて笑う。

「あ、佐倉君さくら くんが来てるよ。アンタが遅いもんだから先にアンタの部屋で待つて貰ってるよ。それにしても佐倉君もなかなか男前になったもんねえ」

母は年甲斐も無く頬を染めている。

「勇人はやとが？」

「そうよ、だから早く行ってあげなさい。友達は待たせるもんじゃないよ！」

そう云って母は缶ビールを二本冷蔵庫から取り出して直哉に差し出した。

よく冷えたビールを両手に持って、ぎいと軋む階段を上がり部屋の襖を開ける。

「遅い」

聞き慣れた低い声がした。

「悪い……というかお前が連絡も無しに来るからだろ」

斜陽を背に窓枠に座って煙草を燻くゆらせる男の影シルエットがあった。

「ふん、長い付き合いだ。お前も俺が来るのは突然だと解とってるだろ？」

男は上を向いて煙草の煙をふうと吹く。この窓枠は彼の特等席だ。まるで自分の家のようにこの男は寛くわいでいる。

「まあね、昔からお前はそうだよ」

そう云って直哉が口元を綻はせると、その男も薄く笑みを浮かべる。

一見無愛想で神経質そうだが賢さくそうなこの男は佐倉勇人。

彼と直哉は中学校の頃からの付き合いで、今も尚親交のある数少ない友人だ。付き合いは長いがこの男の家族の事は実の所あまり詳しくは知らない。以前、伯父が大学で民俗学の教授をしているという話を聞いた事があるが、それ以上は直哉にも分からない。

そして今は直哉と同業者、国語の教師をしている。ただこの男は正業に就かず自由気ままに生きる方が性に合うらしく私立高校で古典の非常勤講師をしている。以前、正教員にならないかという話も来たらしいが彼は厭いやだの一言で断つたらしい。世の中には教師を目指して日夜苦勞むししている若者が多いのにこの男にはそれも興味が無いようだ。

人を見かけによらないと云うがこの男は見かけ通り愛想が悪い。

十年來の付き合いの直哉ですら彼の愛想笑いと嘲あざけり笑以外の笑顔を殆ほとんど見た事が無い。因ちなみに彼の口癖は『ふん』と人を小馬鹿にして鼻を鳴らす事だ。寧ろそれは口癖とも云えない。

「今日は何の用だい？」

直哉は畳の上に腰を下ろす。

「別にお前に用はない。お前のお母さんの顔が見たくなっただけだ。お前はついで（・・・）だな」

「ああそうかい。前もそう言ってたよな」

勇人はそんな事を云いながらもよく家に来る。文句を云いながらも結局泊まっていくなさえもしょっちゅうだ。勇人と喋るのは面白いがその時には彼から謂れの無い説教を朝方まで受ける事になるのが難点だ。

「勇人、ビール飲む？」

「ふん、これはビールじゃない、発泡酒だろ。嘘を吐くな」

悪態を付きながらも勇人は手を伸ばし、缶を開ける。この男は大人の酒好きだ。

「不味い。何だこれは。こんな物を客に出すとはお前の神経を疑うな」

「そりゃ悪かったな……うちの母さんの選択なんだよ」

すると、ああそうかと云ってから勇人は文句も云わずに安物の発泡酒をぐびぐびと飲んだ。今この家で酒を飲むのは直哉と週に三回頻度で上がり込んで来る勇人だけだ。昔は父も随分と飲んでいたのだが、父はあの日以来ぱったりと酒を辞めた。子供の頃は嫌悪し憎しみさえ覚えていた酒を今では美味しく感じる。不思議なものだ。

勇人が鋭い目で直哉を見据える。

「で、どうしたんだ？」

「はあ？」

「巫山戯るな！お前がこの前、変な夢を見ると云ってたから態々（わざわざ）来てやったんだぞ。勿論お前のお母さんに会うついでにな」

「ああ、そうだった。よく覚えてくれたな」

直哉は最近妙な夢を見る。

「ふん、当たり前だ。俺は阿呆じゃないからな……いいからさっさと話せ」

何だかんだ文句を云いながらもこの男は直哉の相談にはよく乗ってくれる。そう促された直哉はその夢について話し始める。

「本当に変な夢なんだ。何かその、懐かしいような……寂しいような。」

普通は夢なんて目が醒めたら直ぐに忘れちゃうだろ？でも、何て言うか起きてからも尾を引くんだ」

「どんな夢だ？」

「気が付いたら僕は暗い所にいるんだ。森みたいな」

「森？」

勇人は目だけを直哉に向ける。

「そうなんだ。檻のように圧迫感がある暗い森の一本道。僕の目の前には紅い浴衣を着た女の子が背中を向けて立っているんだ。僕はその女の子を追って一本道を進んで行くんだけど…」

「お前はその子を捕まえてどうする気だ？お前は変態か？」

「馬鹿、違うよ！」

直哉が少し怒ったのを見て勇人は愉快そうににやける。彼は人を揶揄やゆしたり小馬鹿にしたりするのが本当に好きらしい。

それにも慣れっこの直哉は構わず続ける。

「その子、何だか知ってるような気がしたんだ。僕はその浴衣の子を追って行くと長い石段があったんだ。その石段のところに…」

「別の女の子でもいたのか？」

「ご明答…その通りだよ」

―何で分かるんだこの男は

案の定、勇人は再び変態と云ってけたけたと嗤う。

「それはお前の願望が夢に顕あらわれてるんだろ？良かったな幼い女の子に囲つつままれて」

「五月蠅うるさい！もういい。お前には話さないよ！」

「冗談だよ、すまんすまん。続けてくれ」

この男は謝るタイミングも上手い。本気で憤慨する前に必ず自分が折れる。勇人の掌で転がされているような気がしながらも直哉は夢の続きを話す。

「その子は浴衣の子よりももっと幼い子なんだ。実はその子、知ってるんだ」

「現実に存在する子か？」

「ううん、何て言うか：僕が子供の頃に会った幽霊なんだ」

勿論直哉に幽霊が見えると云う話は勇人も知っている。中学生の頃に直哉が勇人にその変わった体質の事を打ち明けた時も、ふうん、それで？と呆気無く受け入れた。

「幽霊だけど怖くはないんだ。寧ろ僕はその子の事がちょっと好きだったから会えて嬉しかったよ：地味な着物を着てるんだけど可愛くてね、花で喩えるなら椿かな」

「随分と風流な喩えだな初恋は幽霊：か？」

直哉は照れ臭そうに笑う。

「それから僕は石段を上って行くんだ。するとそこはあの町外れの神社なんだよ、ほら毎年夏祭りをやってる神社だ：そのお堂の前に紅い浴衣の女の子がまた背中を向けて立ってるんだ」

勇人が煙草の灰を灰皿に落とす。

「すると浴衣の子は僕に問い掛けるんだ。あなたはわたしをおぼえてる？って」

「へえ。お前、その子を知ってるのか？」

「解らない：否、思い出せないだけなのかもしれない。何しろ顔は見えないんだ。でもその子の声や匂いはとても懐かしい気がするんだ」

そうかと云って勇人が静かに頷く。

「直哉。ところで夢とは何故見るか解るか？」

「記憶のおぼい^{さくら}か何かか？」

「まあそんなものかな、脳内の記憶の整理^{データ}というのが一般的な説だ。脳が自動で蓄積された情報を取捨選択する。その様を映像^{オート}としてみているのだから普段は表に出てこない所謂深層心理^{いわゆる}なども夢に映し出される訳だな。フロイトやユングが唱えていた夢分析にもあるように夢は本人の願望を映し出しているものとも言われているな」

「何が言いたいんだ？」

「つまりお前はその女の子を忘れてるだけで必ずいつかどこかで見た事があるって事さ。そして、お前はその子に会いたい：否、会

わなければいけないと思っている」

違うか？と云って勇人が再び鋭い眼を向けてくる。

直哉は頷く。

「確かに言われてみればそうかもしれない。それに……」

直哉は少し溜めてから云った。

「そう考えると僕はその紅い浴衣の子に会いたいんだろうけど、その子の顔をいつも見れないんだ。まるでその子に会えないのは運命で決まっているという事を象徴するような夢だよ」

会う運命じゃなくて会えない運命なのかもね、と直哉が話を結んだ。すると勇人は運命という言葉聞いた途端に顔を顰めた。

「運命……？」

「ああ、どうしたんだ？」

勇人の声の調子が重々しいものに変わる。直哉は自分の発言に妙な事が無かったか思い返してみた。特に思い当たる節は無い。

煙草を銜えた勇人はいつも以上に不愉快そうな顔をしている。

「運命って何だ」

「何だって……云われても」

直哉は上手く説明できなかった。

「お前はどうか足掻いても変える事の出来ない定めという物があるとしても云いたいのか？」

柔らかな秋風が部屋に吹き込んで来た。勇人の頭上に吊るされた風鈴がりんと澄んだ音を響かせる。

反骨精神の塊のようなこの男は運命や宿命と云った言葉が嫌いのだろう。

「いいか直哉。そんなものは弱者や阿呆が言い訳に使う所謂逃げの言葉だ。自分の道は自分で選ぶ事が出来る。それを放棄した者が運命という言い訳をする。これは運命だから仕方ない、変える事は出来ないってな」

勇人は熱くなったのを鎮めるように発泡酒をごくごくと飲む。

「勇人……僕はお前みたいに強くはないんだ」

直哉が弱々しくそう云うと勇人は不愉快そうにふんと鼻を鳴らす。
「馬鹿。俺が知る限りではお前はそれほど弱くもないし阿呆でもない……おかしいな、俺の買被りだったのか？」

ただ悪態をついているだけのように見えるがこの無愛想な男なりに沈んだ直哉を励ましているつもりなのだ。付き合いの長い直哉には何となくそれを察する事が出来た。

「じゃあ、もしお前がどうしようもない壁にぶち当たったりしたらどうするんだ。運命にどう抵抗するんだよ？」

夕陽を背に勇人はやりと笑う。

「まあ、この俺が壁にぶち当たるなんて事は無いとは思うが取り敢えず抗う。だって自分の人生が台本シナリオに従ってるなんて厭いやだろ」

俺は役者にはなれんなど冗談を云いながら勇人は窓の外を向いた。
「お前の言う運命とやらが俺の目の前に現れたらこう言ってやるよ」
勇人は短くなった煙草を吸い、そしてゆっくりと口を開いた。

「運命よ。そこを退け、俺が通る」

ってな、と彼は冗談ぽく結んで珍しく微笑んだ。

――運命に……抗う

この自信家の男が云うとそう難しい事でもないように聞こえるから不思議だ。

発泡酒を飲み終えて暫くした後、勇人が帰ると云い出したので散歩がてらに直哉は彼を近くまで送る事にした。

勇人は靴を履きながら母にまた来ますよと云って軽く頭を下げる。母は名残惜しそうにその姿を見送っていた。玄関を出るとさっきよりもずっと陽が傾いていた。電柱や自分の影も細く長く伸びている。
「何でお前が付いて来るんだ。俺は子供じゃないんだ、一人でも帰れる」

「お前はうちの母さんに会うついで（……）に僕の部屋にいたん

だろ？僕もビールを買いに行くついで（・・・）にお前を送ってるんだよ」

「ふん、好きにしろ」

直哉は笑いを噛み殺した。そうは云いながらも愛想の悪いこの男は少し嬉しいのだろう。

少し肌寒くなった秋の夕暮れ時を暫く無言のまま二人の若い男はとぼとぼと並んで歩いていった。直哉は無愛想だが気の置けないこの男となら無言の空気も気不味いとは思わなかった。

直哉は田圃たんぼの間の細い畦道に入ろうとした。

「おい、何でそんなとこ通るんだよ」

勇人がしかめっ面で問いかけてくる。

「近道なんだ…」

そう直哉が答えると勇人もしぶしぶついて来る。

大人になってからこの畦道を通ると酷く狭いように感じる。子供の頃は二人ぐらいなら並んで歩いても狭いとは思わなかった。しかし今となっては一人通るのがやつつのように思える。直哉はあの頃から長い年月が経ったのだと実感した。

田圃にはたわわに実る稲穂が斜陽を浴びて黄金色こがねに輝いている。

東方見聞録でこの国が黄金の国と記されていたのにも頷ける。今となっては少なくなってしまうているが昔は国中にこんな黄金色の風景があったのだろう。

秋も深まり、すっかり頭の重くなった稲穂は風に揺られて深々とお辞儀をしている。

畦道の中程まで進んだところで直哉は立ち止まり、赤く染まった夕焼け空を眺めた。そしてすうと大きく息を吸った。

「秋は夕暮れ…」

「はあ？」

勇人は怪訝けげんそうな顔をしている。

「夕陽の差して、山の端いと近うなりたるに、鳥の寢所へ行くとして三つ四つ、二つ三つなど飛び急ぐさへあはれなり。まいて雁など列

ねたるがいと小さく見ゆるは…いとをかし」

直哉はポケットに手を入れて田圃を眺め、ふうと残った息を吐きだした。

いつの間にか直哉の隣に勇人が肩を並べていた。そして、

「日入り果てて、風の音、虫の音など、はた言ふ幕べきに非あらず…だろ？
白川センセ」

と付け足した。自然と直哉の口元が綻んだ。

「勇人、お前は古典文学で何が一番好きだい？」

「何だよその質問は。あんなもんどれも古臭いだけで戴たいして面白くないだろ」

「その古臭さが良いんだよ。お前も古典の教師をしてるんならちょっとはその良さが解らないか？」

「ふん、解らんな」

勇人は興味なさげに煙草を一本取り出して銜くわえる。

「強いて言うなら何が好きなんだ？まさか知らないって事は無いだろうな佐倉センセ」

直哉は語尾を釣り上げて挑発気味に云う。この無愛想な男は人を馬鹿にするのは大好きだが馬鹿にされるのは大嫌いだ。むきになる事は無いが案の定挑発に乗ってきた。

勇人は判で押したような不愉快な顔をして答える。

「平家物語の木曾の最期。あれはちょっと好きだな…否、伊勢物語の芥川も嫌いではないかな…」

腕を組んで偉そうにする勇人を横目に直哉はにやにやしている。

「僕は枕草子、春は曙あけぼのが一番好きなんだ」

「あれは別に面白くないぞ」

「まあそう言うな。確かにあれは良いこれも良いって言うてるだけの話なんだけど僕にとっては思い出なんだ」

「良い思い出か？」

「うん、でも少し悲しい思い出でもあるんだ」

そう云うと直哉はゆっくりと畦道を歩きだした。

「昔、この畦道で夏の下りを教えてもらったんだ。その時は全く意味も解らなかったんだけどね…。今、僕が中学校の国語の教師をしているのもその思い出の影響かもしれないな。まるでその時から僕
の…」

「運命が決まった。とか言うなよ」

勇人に次の言葉を先読みされた直哉はごくりと唾を飲み込んだ。
正にその言葉を云おうとしていた所だった。

勇人が先を歩いていた直哉の横に回り込み鋭い目で睨む。

「教師になったのもお前が決めた人生なんだろう。人生には線路も標識も無いんだ。お前が切り開いた道なんだよ」

静かな畦道には勇人の静かな声も妙に響く。

「お前は運命という物が存在すると思っっているか？」

「うん…ちよつとは」

「僕はお前みたいに強くないんだよ」

直哉は弱々しく肯定した。

「そうか…」

弱々しい直哉の声に呼応するように勇人の声も小さくなる。

「なら直哉、今からお前を殺す」

そう呟いて勇人はその場で歩を止める。言葉の刃を突き付けられた直哉も勇人に背を向けたまま立ち止まった。夕暮れの畦道は静寂と妙な緊張感に包まれた。

勇人が低い声で続ける。

「そうなのとお前は運命だと納得できるか？」

暫く間が空いた。

直哉は眼を閉じた。勇人の吸っている煙草の匂いが鼻を掠める。

「全く…この男は」

直哉はくすくすと笑いを漏らした。

「何が可笑しいんだ？」

「僕は分かっているよ」

直哉は振り向く。

「お前は僕を殺したりなんかしない」

そう云って直哉は再び細い畦道を歩きだした。

「ふん、本当にお人好しな奴だ」

勇人も悪態を吐きながら後に続く。

また柔らかい風が吹き抜け、稲穂が一斉に頭^{こうべ}を垂れる。

畦道を抜けると人気の無い道に出る。夏祭りの時以外は昼間でも余り人と出会わないような道だ。

「あれ、白川先生！」

幼さの残る女の子の声がした。直哉は声のした方を向いた。

「こんな所で会うなんて思いませんでしたよ」

声の主は直哉の教え子だった。自転車に跨^{またが}った女子生徒がにこにこしながらこちらを見ている。

「ああ、奇遇だね。もうすぐ暗くなるから早く帰りなよ」

「それよりその人は先生の友達？笑顔が素敵ですう！」

「えっ？」

「笑顔…？」

ふと横を向くと満面に笑顔を浮かべた勇人がいた。

「こいつ…」

勿論作り笑顔だ。一見根っからの好青年に見えるが長い付き合いの直哉にはそれが猫を被っているという事も一目瞭然だ。

「こんにちは、君は白川先生の生徒なの？」

「何か気持ち悪いな」

はい、と女生徒は目を輝かせて返事をした。直哉は演技中の勇人に肘をこつんと当てて小声で質す。

「おい、何のつもりだよ」

その瞬間、勇人はすっといつもの仏頂面に戻る。

「職場の中学の生徒だろ？お前の顔を立ててやってるんだ。仕事用笑顔ってやつだよ、ほらお前も早く俺を紹介するなり何なりしろよ」
そう云うや否や勇人は好青年の顔に変っていた。この男の表情は

スライドショーのように瞬く間に変化する。

「彼は先生の友達だよ、高校の先生をして…」

既に女生徒はきゃっきゃと黄色い声で勇人に話しかけている。直哉の話など誰も聞いていない。

「今、夏祭りの時の写真を現像して来た所なんですよ」

と、嬉しそうに云いながら勇人に写真の束を手渡して一枚ずつ丁寧に解説し始めた。この生徒はもうすっかり勇人に懐いてしまっている。

「ああ、直ぐその神社のお祭りだね」

「そうです、私この日の為に新しい浴衣を買って貰ったんですよ」

「ふうん、よく似合ってるじゃないか」

爽やかな声と笑顔でそう云われた女生徒は頬を赤くして照れている。一方の直哉は一步離れた所で様子を見ている。完全に蚊帳の外だ。

「ほら、お前も見てみるよ」

寂しそうにする直哉を見兼ねたのか、勇人は見終わった写真を差し出してきた。

町外れにある神社の鳥居の前で浴衣を着た少女達が写真機カメラに向かってピースサインをしている。見るとどれも知っている顔だ。皆、直哉の中学校の生徒だった。しかし、彼女達は学校では見た事も無いような楽しい笑顔をしている。

これが子供…。

これは子供達だけの笑顔だ。

きっと大人には見せない顔が子供達にはあるのだろう。そこには大人が入り込む余地は無い。

直哉は少し寂しいような気もしたが彼女達の笑顔は学校で見せるそれよりもずっと輝いて見えたので嬉しく思えた。その写真を見て直哉も自然と笑みが零れるこぼ。

「へえ、美味しそうなクレープだ。実は俺も甘い物が大好きなんだよ」

―初耳だ

そう云って勇人はまた見終わった写真を差し出す。直哉は二人の会話から一枚遅れた写真を見ている。まるで一日前の新聞を読まされてる気分だ。

直哉は夏祭りのあったその神社が好きではない。なぜならそこには悪い思い出があるからだ。昔、直哉はそこで大切なものを失った。守ると約束したものを…守る事が出来なかった。

それ以来、その神社には近付こうとしなかった。悲しさ、寂しさ、悔しさ、情けなさに押し潰されそうになってしまっからだ。

重い気分になる直哉の事などお構いなしに目の前の二人は楽しそうにしている。

「ここに写ってるのは皆友達なのかい」

「はい、みんな仲良しなんです。あれ…でも…」

「どうかしたの？」

「でも…この子は知らないなあ」

「違う学年の子じゃないのか？」

「さあ…」

女生徒は首を傾けて難しそうな顔をしていた。

「直哉、お前の学校の生徒じゃないのか」

直哉は差し出された写真を受け取る。

「左奥にいる女の子です。その…赤い浴衣を着た…」

―赤い…浴衣？

件の夢の事が頭を掠める。

その写真は参道に並んでいる三人の生徒に焦点を合わせて取られている。しかしその奥、左端に熟^{じゅ}とこちらを見据^{じゅ}える少女が写っている。

―この子は…

写真を持つ直哉の手が小刻みに震える。

「白川せんせい…？」

直哉は写真から目を離せずにした。

「おい直哉。どうした」

何かを察知したように勇人はいつもの鋭い目に戻って直哉に質す。写真の中の紅い浴衣の少女は力無い瞳をこちらに向けて、何かを伝えようとしているようだ。

―僕はこの少女を：知っている。

酷く懐かしい気がする。直哉はこの少女の事をよく覚えていた。

―姉ちゃん：

※

例の如く勇人が低く通る声で文句を云っている。

「全くお前は：。忙しいのにいきなりこんな夜中に呼び出しやがって、お前のお母さんがサンドイッチを差し入れてくれてなかったらとつくに帰ってる所だぞ」

彼は夜中と云っているが未だ八時を回ったばかりでそう夜も更けているわけではない。勇人はぶつぶつと不平を洩らしながらサンドイッチを頬張っている。

窓をぱらぱらと敲く音が聞こえる。外は酷い雨模様らしい。

「おい、お前が用があるって言ったから俺は態々（わざわざ）来てやったんだぞ」

そう勇人は不愉快そうに云って直哉を睨みつけた。

それでも直哉は無気力に畳の上に寝転がり、徒天井の木目を虚ろに見詰めている。そして、うん、と空返事をした。

「ふん」

勇人は呆れて直哉から視線を外す。

あれから数日、直哉はずっとこの調子だ。

朝起きてからも、学校で授業をしていても、食事をしていてもこの通り心此処に在らずといった具合だ。目を閉じれば紅い浴衣の少

女、姉の姿が浮かんで来る。瞼の裏側にその姿が焼き付いてしまっているようだ。

写真の中にあつた姉の姿は齡を取っておらず、直哉が子供だった頃と全く変わらない姿でいた。

姉に流れる時間は止まっていた。

あの写真を見てから、姉との思い出がまるで投げ込まれた石によって水底の泥が舞い上がっているかのように直哉の頭の中をもやもやと漂っている

―姉ちゃん

それ以来、心の中でそんな呼び掛けを何十回、何百回繰り返した事だろう。

「直哉、いい加減にしろ。何の用なんだ」

愈々（いよいよ）勇人が痺れを切らした。直哉は漸く口を開く。

「お前に話しておきたい事があるんだ」

「俺に…？」

「うん」

そう云うと直哉は芋虫のようににもぞもぞと軀を動かして上半身を起こした。そして雨の雫の滴る窓硝子ガラスを見る。

「勇人：窓を開けてやってくれないか」

「何でだ、雨が入ってくるぞ」

「猫だよ…猫が雨に濡れると可哀そうだろ」

「お前猫なんか飼ってたか？」

「野良猫みたいなもんさ」

勇人はいまいちよく解らないという顔をしながらも窓を開けた。外ではしんと雨が降り続いていた。

勇人は窓から軒を覗き込む。

「猫なんかいないぞ」

窓の外からは雨樋あまどいがごくぐくと水を飲み込む音しか聞こえない。勇人は顔を顰しかめて畳の上に腰を下ろした。

「いらっしやい。寒かっただろ」

暗い窓の外から橙色に光る二つの瞳が覗く。

「さあ、入っておいで」

四角い窓の暗闇の中から少女の白い顔が浮き上がってきた。真っ黒な髪に灰色の着物という姿なので、暗い窓の外にまるで顔だけが宙に浮かんでいるように見える。その少女は雨にも濡れておらず、不思議そうな顔をして大きな円い瞳を部屋の中に向けて様子を窺っている。

少女は音も立てず窓枠にちょこんと座った。畳まで足が届かないらしく少女の白い足が宙ぶらりんになっている。

おかつぱ頭で表情は乏しいものの色白で整った顔立ちをしている。まるで地味な格好をした市松人形のようなのだ。

市松人形は硝子玉のような瞳を熟と^{じっ}勇人の方に向けている。

勇人はその視線に全く気付いていない。この無愛想な男も怪訝^{けげん}そうに窓の方を睨んでいるのだが、決して市松人形と目が合っている訳ではない。勇人にはこの少女の姿が見えていないのだ。

「彼は佐倉勇人、僕の友達さ」

少女はすうと直哉に顔を向ける。

「いつも仏頂面してるけど怖い人じゃないから大丈夫だよ」

「誰と喋ってるんだ？」

「猫さ…」

そう云って直哉は足をたたみ胡坐^{あぐら}をかいた。一方の勇人もふんと鼻を鳴らしてから姿勢を変えて壁に背を凭^{もた}れさせた。

「お化け…ってやつか」

市松人形は勇人の方を向いた。

頭の回る勇人は猫の事を直ぐに理解できた。うんと直哉は返事する。

実はこの幽霊、直哉が小学生の頃からこうして時々現れるのだ。幽霊と云ってもこの少女は特に驚かせたり悪戯か何かをするでもなく徒直哉^{ただ}の前に立っていたり、座っていたりしていつも朦朧^{ぼんやり}と一点を見つめているだけだ。特に直哉に用があるという訳でもなさそう

なのだ。自由気儘な幽霊は突然現れたかと思うと気が付けばもうどこかへ行ってしまっている。正に猫だ。

「勇人は幽霊が怖くないのか？」

また市松人形が直哉の方を向く。この少女は二人の会話に合わせて発言している方の顔を交互に見ている。

「俺は目に見えるものしか信じない：神も悪魔もお化けも一緒さ」だから怖いとは思わない、と勇人は結んだ。

「そうか…」

直哉は少し残念そうに声を洩らした。すると勇人が、それに：と再び口を開いた。

「お前の口振りからするとそんな恐ろしい怪物みたいなんじゃあなさそうだしな。もしかすると例の初恋の幽霊だったりするんじゃないのか」

「なっ…」

直哉は言葉にならない感嘆を洩らした。

そろりと窓際に視線を這わせていくと案の定、少女は真ん円な橙色の瞳を直哉に向けていた。

直哉の耳は真っ赤になった。それを見て勇人は鼻で笑った。

「もしかして正解か？」

サデイスティック

勇人は加虐嗜好的な笑みを浮かべて、照れる直哉に目線を送っている。

この男は目つきだけでなく勘も鋭い。

「良かったな。家にまで遊びに来てくれるぐらい仲良くなって…」

勇人は口元を手で覆いくすくすと笑って直哉を^{からか}擲う。人を^{やゆ}擲揃している時のこの男は実に愉快そうだ。

―あ：悪魔かよ：

そう思った。

「はい女の子の話はここまで！もうそろそろ僕の話を見せてくれ」直哉は張りのある声で仕切り直した。その声に反応して市松人形の白い顔も直哉の方に向けられた。

「それだよ。その為に俺を呼んだんだろ。で、何の話だ」
擲うだけ擲っておいて、話が戻ると勇人はい不貞腐れた顔に戻った。

開け放たれた窓からばらばらと雨が入り込んできて畳を湿らせる。その窓枠に腰掛けている少女も熟^{じゅ}と直哉の方を見ている。

漸く直哉が口を開く。

「僕の姉ちゃんの事を話そう」

直哉は十七年前に消えてしまった姉の事を語り始めた。

失踪当時は白川瑞穂^{しらかわ みずほ}ちゃん失踪事件と題されてニュースでも取り上げられたので直哉に姉がいた（・・）と云う事は勇人もニュースなどを通して知っていただろう。しかし姉の失踪について直哉自身が口にしたのはこれが初めてだ。

真剣な話をしようとする^{しんじん}と直ぐに小馬鹿にしようとする勇人もこの時ばかりは俯き加減に真摯^{しんし}な面持ちで直哉の言葉の一つ一つに耳を傾けていた。

事件は警察の必死の捜査も空しく何の手掛かりも掴めないまま時間だけが過ぎていった。そして失踪から七年が経ち、とうとう捜索も打ち切られた。その時、法律上姉は死んだ事になった。

それから更に十年が経った。それでも直哉は姉が死んだなど決して信じられない。今でもその内何事もなかったかのように『久しぶり、アンタも大きくなったわね』などと云いながらひょっこり帰って来るのではないかと期待している。

直哉は姉、瑞穂の事が好きだった。さよならも云わずに消えてしまった姉の事をいつも心のどこかで探している。

「君との約束も果たせなかったね」

窓際の少女に向かって声を掛けた。

「約束？」

勇人が首を傾げて直哉を見る。

「うん、姉ちゃんがいなくなる直前にここにいる女の子と約束したんだ。いつか僕と姉ちゃんと三人で遊ぼうってね」

そうか。と、云って勇人は再び俯いた。

「それに僕は姉ちゃんとの約束も守れなかったんだ」

直哉は姿勢を変えて片膝を抱えた。

「僕が姉ちゃんを守る……そう誓ったんだけど、駄目だった」

そう云った途端、勇人の顔に苛立ちの色が表れ出した。

「お前は本当に駄目な奴だな」

窓際の少女と直哉は同時に勇人に目を向けた。仏頂面の男が続ける。

「守れなかったとか駄目だったとか何でお前は既に完了形で物を云ってるんだ？」

「勇人……」

「お前は姉さんが生きてるって信じてるんだろ、だったら何で諦めたような言い方をするんだ」

静かだが重く響く声で勇人が云い放った。

「僕は……どうすれば」

「ふん、俺に決めて貰ってどうするんだ。姉さんと約束したんだろ？ お前が姉さんを守るって」

「うん」

「じゃあ約束は未だ続いているんだよ」

はっとして直哉は顔を上げた。

「約束は続いている？」

「どういう意味だ？」

「姉さんを探し出して守る……どうせならそれ位の心積もりでいろよ、馬鹿」

さり気無く最後に罵倒されたがこれが彼なりの励まし方なのだろう。

「急にこんな話をし出すんだ……どうせお前が姉さんの事を思い出すような何かがあったんだろ」

この男の勘は本当に鋭い。

その通りだった。

—そうだ。こないだ見た見た夏祭りの写真だ。

先日の中学生在が持っていた写真に姉らしい姿が映っていた事を伝えると勇人は抑揚無くふうんと云っていた。

「でも窓際にいる女の子も幽霊だから僕が子供の頃からずっと変わらない姿でいるんだ。写真の中の姉ちゃんの姿もいなくなった時のままだったんだ。だから…」

話しながら自分の考えを纏め上げていく内に絶望的な事が頭を過った。

「もう…」

声が震えて嗚咽が込み上げてきた。勇人は黙ったまま泣き出しそうな直哉を見つめている。

「姉ちゃんも…」

—死んでしまってるんだよ…

「言うな馬鹿者！」

勇人が一喝した。

「お前がその先を口にしてしまったらお終いだ。お前の姉さんは完全に消えてしまう。そしてお前は約束破りの嘔吐きだ」

直哉は顔を上げる。

今勇人に正されなければ確実に絶望的な事を口にしてしまった筈だ。彼の云う通りそうなってしまっていたらきっと直哉は姉の死を現実として受け入れ姉を守るという約束を放棄する事になってしまっただろう。危うく勇人が嫌う『運命』に流されてしまう所だった。直哉の約束は今、紙一重で繋がっていた。

「勇人、お前…」

無愛想な男はふんと鼻を鳴らして相変わらず不愉快そうな顔をしている。しかし今は勇人に救われた。心が不安定になっている時に彼がいると本当に心強い。

いざと云う時に頼りになる。そう云った点では勇人と姉はそっくりだった。

「分かった。僕は約束を守るよ」

云いたい事の半分も云っていなかったのだが何故か気持ちが少しすっきりした。

いつの間にか橙色の目の猫も勇人の横にちょこんと座っている。どうやら彼女もこの仏頂面の男を気に入ったようだ。じいっと勇人の顔を覗き込んでいる。

直哉は少女を見てにっこり笑う。

「ね、僕の友達はなかなか良い事を云うだろ」

「何だ。俺には見えないけど猫はここに居るのか？」

勇人が左下に目線を下ろした。直哉から見ると二人の視線はぴつたりと合わさっていた。

「でもお前は幽霊を信じてないんだろ？」

「ああ、見えないものは信じない。けど見えるものは信じる…。いるんだろ？ここにその女の子が」

勇人の云っている事がよく理解できない。

「どういう事だい？」

「解らないか：俺はお前の姿が見える。だからお前の言う事は信じるって事だ。お前がここに幽霊がいるって言うんだったら本当にいるんだろ？」

回りくどい云い方だがこれも彼なりの信頼表現なのだろう。照れ隠しのつもりか勇人は最後にふんと鼻を鳴らしてぷいと顔を背けた。

「お前の言う事は信じる…か」

正に瓢箪ひょうたんから駒だ。まさかこの男の口からそんな言葉が飛び出すとは思わなかった。驚いた半面、嬉しかった。

「何じろじろ見てるんだ。気持ち悪いな」

「否、何でも無いよ」

そう云って直哉は勇人から目線を逸らした。ふと窓を見るとそこに幽霊の少女が背を向けて立っていた。

「もう帰るのかい？」

窓から吹き込む風に少女の黒髪がふわりと揺れる。いつの間にか雨も上がっているようだった。

「じゃあまたね。あ、寒くなってきたから風邪には気を付けるんだよ」

少女は直哉に大きな瞳で橙色の一瞥をくれてから夜の闇に溶けて消えていった。直哉は立ち上がり窓の外を眺めて少女を見送り、静かに窓を閉めた。ぴしゃりと硝子の揺れる音が閉鎖された部屋に伝わる。空気の流れが止まった。

「猫は帰ったよ」

直哉は再び畳の上に腰を下ろした。すると勇人が真面目な顔をして問い掛けてくる。

「お化けも風邪に罹るのか？」

「さあ：でも別れ際の決まり文句だろ」

そうだな、と云って勇人は両手を後ろに付き臍を仰け反らせた。

ちりん

締め切った部屋の中に突如として涼しげな金属音が響いた。

―今の音は：

直哉の顔はみるみる内に青褪めていく。

―まさか：また、あれ（・・・）が

頬を冷や汗が伝う。

「何だ、何か手に当たったぞ、鈴か何かか？」

勇人は後を振り返った。

「ああ、お守りか：さっきからこんな所にあったか？」

勇人が何か見つけた。しかし直哉の位置からでは勇人の臍が邪魔になって彼が何を見つけたのか確認する事が出来ない。

―お守り！

直哉の胸に子供の頃に味わった恐怖と悲愴が蘇ってくる。恐る恐る首を伸ばして勇人の背後にあるものを確認する。

金色の鈴、紅い袋。

見間違う事など無い。

これは…。

あの時の紅いお守りだ。

「地べたになんか置いとくなよ。危うく踏み潰してしまふ所だった
だろ」

勇人がそのお守りに向かって手を伸ばす。

―ああ…駄目だ！

彼の指が今まさにお守りを抓つまもうとしている。

「勇人！それに触っちゃ駄目だ！」

直哉は怒号にも近い勢いで叫んだ。すると勇人の指はお守りに触れる直前でぴたりと止まった。

「何なんだよ…急に怒鳴り出して」

滅多に声を荒げる事のない直哉の大声を聞いて勇人はたじろいだ。直哉は息を切らして勇人とお守りを交互に見ている。視線が定まっていない。

「勇人、危ない…それから離れるんだ…」

明らかに様子のおかしい直哉の姿を目の当たりにして勇人も穏やかではない空気を敏感に察知したらしい。いつもの鋭い目に戻り、直哉の云う通りにお守りから距離を取った。

「おい、落ち着け直哉。大丈夫か？」

勇人は瞳だけを直哉に向けて声を掛ける。

「ああ…大丈夫だ」

「一体これは何なんだ？」

落ち着いた声で勇人が訊く。それに直哉は息を整えてゆっくりと答える。

「これは…化け物の口だよ」

「何だって、どういう意味だ」

「これは僕の、姉ちゃんの運命を捻じ曲げた…鬼の口だ！」

十七年という歳月を経て、運命という化け物は再び直哉の前にその姿を現した。

※

紅いお守りが姿を現わしてから一週間が経った。

一日の仕事が終わった直哉は一人、校門に向かって運動場を横切グラウンドっている。

更に秋も深まり、学校を出る頃には夕方と云うより夕暮れと表す方が良いぐらいに陽は傾いていた。

頬を撫でる風は冷たく、冬の匂いを孕はらんでいた。

あの後、例の紅いお守りについて直哉が知っていた事は総はやとて勇人にも伝えた。勿論、消えた姉がそのお守りを持っていた事も。

暫く勇人は黙っていた後、『で、お前はどうするんだ？』と漠然とした質問を投げかけてきた。その時直哉は何も答える事が出来なかった。そのままどちらも口を開く事は無かった。

お守りを捨てる事も出来ずに直哉は恐ろしいのと鬼魅が悪いのを堪えて常にそれを持ち歩いていた。

しかし、一週間考えて自分がこれからどうする幕べきか何となく纏まっていた。

このお守りを持ってもう一度あの神社に赴く。

そうすれば何がどう変わるかも何の根拠もなかった。しかし何かをしなければ何も変わらないという事は解っていた。

厭な事を思い出すだけで何も変わらないかもしれないが、このままでは姉との約束を守れなかった事を一生引き摺ひきずってしまふ気がしていた。

しかし…なかなか踏ん切りが付かない。直哉は背広ジャケットに忍ばせてあるお守りをきつく握りしめた。

俯くのをやめて直哉はふと前を向いた。

校門の所に誰かが立っている。後ろから照らす夕陽が逆光はつきりになって明瞭とは誰か解らないが小さな子供のようだ。斜陽に映る影は長くなり、直哉の足元まで伸びてきていた。

近くまで寄って行くとその正体が明らかになった。

「どうしたんだい。態々（わざわざ）学校まで来て」

大きめの市松人形が置いてあるのかと思っただけの猫、着物たすの少女がぼつんと佇たすんでいた。相変わらず少女は無表情のまま熟じゅと大きな目を向けている。

「今日は一緒に帰ろうか」

そう云って歩み寄って行くと少女は直哉に背を向けてとことこと駆け出して行った。

―あれえ、嫌われちゃったかな…

寂しそうにして直哉がその小さな後姿を見送っていた。すると少女は急に立ち止まり振り返った。そのまま少女は白い顔を直哉に向けている。

「何だよ、気が変わった？」

再び直哉が近付いて行くとまた走り出し、ある程度の距離が出来る
と立ち止まり振り返る。

―一体何がしたいんだよ

直哉もその場に立ち止まり怪訝な面持ちになる。直哉が動かないと少女もぴくりとも動かない。唯ただその硝子玉のような円い瞳を向けて立っているだけだった。

そして直哉が一歩足を踏み出すと少女はまたとことこと走り出す。

「ねえ、もしかして僕をどこかに案内しているの？」

着物の少女はその問いに答える事無く小動物のように小股で駆けて行く。

直哉は首を傾げながらも少女に誘さそわれるまま歩いて行った。

着物の少女とその後が続く直哉は女瀬川の横の遊歩道を進み、黄金色に色付いた田圃の畦道を抜け、閑静な参道を歩いていた。

「どこまで行くんだい？ 僕の家はもう過ぎちゃったよ」

矢張り何も答えてはくれない。少女は真っ黒な髪を揺らしながら一生懸命に走っている。

―この先は：

あの神社がある。

直哉がお守りを持って行こうと思っていた神社。何度も夢に出てくる神社。子供の頃、姉と夏祭りに来た神社。この少女と初めて出会った神社。そして：姉が消えてしまった神社。直哉の中で様々な思いが交錯する。

そして、直哉の中である決意が固まりつつある。

―神社：今から行ってみようかな

直哉はぐくりと唾を呑んだ。

前を走っていた少女はまた急に立ち止まった。

「今度は何だい？」

少女は直哉の目を確しっかりと見詰めた後、参道の先の方へ視線を滑らせた。少女の目配せに応じ、直哉も同じ方を向いた。

その先には例の神社の鳥居が静かに佇んでいた。

そしてその足元に若い男の姿があった。それはよく見慣れた影シルエットだった。

「勇人：お前こんな所で何やってんだよ」

腕を組んで鳥居に凭もたれて俯いていた男は徐おもむろに顔を上げ、直哉の方に鋭い目を向けた。

「別に何もしていない：ここにいればお前が来るような気がしたんだ」

直哉はふと隣にいる少女を見た。

―そうか：この子は僕を勇人の所に連れて来たのか

「それで、僕に何か用でも？」

別にいい、と気の抜けた返事をして勇人は煙草に火を点けた。

「お前こそ何か用か？こんな所を一人で散歩って事は無いだろう？」

「一人じゃない」

「なるほど：また猫と一緒にか」

「うん、僕はこの子に連れられて来ただけなんだ」

直哉は傍らの少女に目を遣ると、少女も直哉の顔を見上げていた。

「何だ：お前も用は無かったのか。そうかそうか」

直哉は黙ったまま俯いた。

「じゃあ、帰ってビールでも飲むか。一週間振りにお前のお母さんにも会いたいしな」

そう云って勇人は踵きびすを返した。

「違う：何か違うんだ」

直哉の胸に葛藤かつとうが絡み付く。

「ここで帰るのは：何か違う」

「違うんだ！」

直哉が声を張り上げて呼び止めると勇人は立ち止まった。

「そうだよな：」

勇人はゆっくり振り返った。

「お前はこの神社に用があるんだろ。漸く決心が着いたか？」
「うん」

直哉は力強く頷いた。

この愛想の悪い男は直哉が迷っている事も総てお見通しだったようだ。そして、最後は背中を押したのだ。

固まりつつあった決意は完全に固まった。

「で、何しに来たんだ？」

「戦いに来た」

「何とだ？」

直哉は大きく息を吸ってから明瞭に答えた。

「運命さ」

茜色に染まった空に向かって勇人は煙を吐いてから無言で頷いた。珍しく微笑んでいる。

「敵は強そうか？」

「ちよっとね：勝てるかどうかは判らないけど抵抗するだけしてみる」

一瞬、会話に穴が開いた。二人の間を沈黙が通り抜ける。
「直ぐ戻って来れるのか？」

勇人が少し寂しそうな調子で訊く。

「判らない：もしかしたらすごく遅くなるかもしれないから先に帰ってくれよ」

解った、と沈んだ声で答えた勇人は更に質す。

「また：会えるか？」

「ごめん。それも解らない：当分会えなくなってしまうかもしれない」

「そうか…」

勇人のこんな沈んだ声など今まで訊いた事が無かった。

「でも大丈夫。勇人が残るなら僕は大丈夫なんだよ」

「はあ？」

直哉は快活に云って満面の笑みを勇人に向けた。勇人は意味がよく解らないといった様子で眉を顰める。

「お前が僕を覚えていてくれれば大丈夫。そうすれば僕の存在は消えやしない」

「そうだったな：そう言えば俺がそんな感じの事を云ってたんだな」
勇人もくすくすと笑い出した。

「お前の物語の最終章だ。クライマックスさあ、精一杯戦って来い。運命とな！」

勇人は直哉の肩を力強く敲いた。たた

「うん、ありがとう」

深呼吸をして直哉は鳥居の奥を睨んだ。

十七年前と同じく真っ暗な空間が広がっている。本当に化け物が口を開けているように見える。

「行ってくるよ：ちよつと最終決戦にね！」

直哉はそう云い残して運命という化け物の口に飛び込んで行った。

参道に再び静寂が帰ってきた。

靴の踵で煙草の火を消して、勇人は鳥居に凭れて座り込んだ。

「なあ、猫ちゃん。居るんだろ？」

勇人は深閑とした夕暮れの誰もいなかった参道を見回して云った。

「猫ちゃんもあいつの事を覚えておいてやってくれないか」

辺りには誰もいない。勿論返事をする者など誰一人としていない。

「あいつが白川直哉しらかわなおやって男なんだ……」

いつの間にか勇人の目の前に季節外れの蒲公英たんぽぽが一輪咲いていた。

※

暗い。

ざわざわと葉が風に揺れる音が聞こえる。周りは木々に囲まれているようで酷く視界が悪い。道の両脇には堅牢な木々が行く手を塞いでいる。そしてその木々の枝葉は天まで覆い隠している。

まるで檻の中に閉じ込められているようだ。

居心地が悪い。

前も真っ暗、後ろも真っ暗。

――あの夢は僕の運命を暗示していたんじゃない。運命という檻に閉じ込められている僕を暗示していたんだ。

森の中は何から何まであの夢と同じだった。直哉は歯を食いしばって森の中を走り抜けている。未だ太陽は僅かながら出ている筈なのに木々の枝葉が織り成す天井の所為で夜のように暗い。

子供の頃、姉を追ってこの森に入った時は我武者羅がむしゃらになり過ぎていたので気付かなかったのかもしれないがここは本当に鬼魅きみが悪い。木の陰や草叢くさむらから妖怪や幽霊の類が飛び出してこないのが不思議な程だ。

それにこの冷たく湿った空気……。肺の中に禍々（まがまが）しい瘴気が流れ込んで来るようで息をするのも億劫だ。

それでも直哉は姉の存在を心の支えにして森閑とした暗い森を徒直走って行く。

―見えた！

漸く森の、檻の終わりが見えた。

先の方から僅かな光が差し込んできている。しかしそれは随分と弱々しい。どうやら太陽が今にも沈もうとしているのだろう。

直哉は自らを奮い立たせて走り続けた。

直哉は森を抜けた。

聳える石段の前で一度立ち止まり息を整え、空を見上げた。案の定、太陽はもう沈みつつあり、空は夕焼けの赤ではなく夜の深い青と混じり合い紫色をしていた。

随分と息が上がっている。汗でシャツが身にべったりと張り付いてしまつて酷く気持ち悪い。

―子供の頃はこの石段の上に：

―姉ちゃんが：

直哉は石段の上を睨みつけた。

そして、シャツの釦を一つ開けて石段を駆け登り始めた。

石段を登り切った所で直哉は膝に手を置いて俯いていた。動悸が激しい、呼吸も豪く乱れている、目も翳む。日頃の運動不足が祟っているのだろう。

額や頬、首元を流れる汗は拭っても拭っても次から次へと湧水のように限りなく滲み出してくる。

ぜえぜえと呼吸をしながら真っ直ぐ伸びる石畳の上に視線を這わせていく。ぼやける視界の中に何かを捉えた。

紅い影だ。

焦点が定まってくると徐々にその紅い影は明瞭とした輪郭を帯び

始めた。その影は人の姿を象^{かたど}り出した。

―あの夢と同じだ：

目の前に夢で見たあの紅い浴衣を着た少女の後姿が現れた。

直哉はそのまま動けなくなった。

音の無い世界でどれだけの間その後姿と対峙し続けているのだろう。一時間は経ったかもしれない、否^{いや}、もしかすると一分も経っていないのかもしれない。

直哉は紅い浴衣を見詰めたまま指一本動かす事は愚か、呼吸する事すら儘^{まま}ならない状態だった。

―僕は：

―僕はこの子を

―知っている：

―間違いない

―姉ちゃんだ

澄んだ鈴の音のような少女の声が風に運ばれて来た。

あなたは だれ？

直哉は弾かれるように動けるようになった。そして叫んだ。

「姉ちゃん！僕だ！」

な おや

「そうだよ：僕は直哉だよ！」

直哉の声は震えていた。紅い浴衣の少女は矢張り姉、白川瑞穂^{しらかわ みずほ}だった。

瑞穂はゆっくりと振り返った。

あいたかった まってたんだよ

「ね…姉ちゃん…」

瑞穂が纏まとっていたのはあの日の夏祭りに着て行った紅い浴衣だった。そして顔も身もその時の、十四歳の姿のままだった。

時間が止まっている。

瑞穂は悲しげな表情を浮かべて直哉を見詰めている。いつも活発で男勝りな頼れる姉の姿は見る影もなくなってしまっていた。

とても…弱々しい。

おおきく なったね

瑞穂は寂しさを含んだ笑みを浮かべる。

「うん…」

直哉の目からぼろぼろと涙が零こぼれ出し、頬を濡らした。瑞穂は直ぐそこにいるように見えるが何故かその声や姿は酷く臃おぼろげで頼りない。まるで画面に映し出された像のように、そこに実体を感じられない。存在自体が弱々しいのだ。

如何にもそれはこの世の者ではないという印象だった。皮肉にも普段からそのような存在の者に触れている直哉にはそれがよく解つてしまう。

直哉は涙を拭いながら云う。

「僕は…大きくなっただろ。これで姉ちゃんを守れるよね」

その姿を瑞穂は何も答えずに見詰めて微笑んでいる。

「姉ちゃん…一緒に帰ろう？」

暫く間が空いてから瑞穂の澄んだ声が返って来た。それは直哉にとってとても悲しい一言だった。

それは できない

「何でだよ：僕はこの十七年間ずっと姉ちゃんに会いたかったんだよ。こうしてやっと会えたんだ。これから一緒にいてよ！」
直哉の呼び掛けは悲痛なものになってきた。そんな弟を優しく宥^{なだ}めるように瑞穂が寂しげに云った。

ごめん ね

その悲しげな言葉を聞いた直哉はまるで子供が駄々を捏^こねるように喚き散らした。

「厭だよそんなの厭だよ！姉ちゃんは僕と一緒に帰るんだ！」
変わらない姉の姿を見ているとまるであの頃に戻ってしまったようだ。小学生の頃の我儘で甘えたで怖がりで泣き虫な自分が蘇ってくる。

瑞穂は懐かしそうに微笑む。

おまもり おぼえてる？

「鈴の付いてるやつかい？」
瑞穂は静かに頷いた。

わたしは それに のみこまれた
だから ここまでしか でてこれない
ここから うごけない

あれは しあわせのおまもり なんかないの

―解ってるよ：このお守りはそんな良いものじゃないよ
直哉はポケットの中のお守りに憎しみを籠めて握りしめた。

あれは ひとを たべる

おにのくち　だよ

瑞穂はすうと空を見上げる。浴衣の襟元から白い首が露わになる。直哉も釣られて上を向くと紫色の空に一番星が煌々（こうこう）と輝いていた。

あの日と同じだった。

もうすぐ　わたしも　きえてしまう

これが　さいご

たぶん　もう　あえないよ

頬を伝う涙を拭って直哉はきつく齒を食いしぼる。

「そんな事…言わないでよ」

質量を感じさせない瑞穂の躰は今にも霧のように消えてしまいそうだ。

さいごに　いっておくね

あのとき　なにもいわずに　どこかにいって
ごめんなさい

そして　あのとき　いえなかった　ことば

「やめて…その先は言わないでくれよ！」

涙でくしゃくしゃになった顔の直哉を見詰めて瑞穂が静かに呟いた。

さようなら

その声はあの鈴の音のように冷たく、儚く…響いた。
僅かな斜陽の差し込む境内を長い沈黙が包み込んだ。朧げな瑞穂はそのまま俯き、それ以上口を開く事は無かった。

堰を切ったように直哉の感情は爆発し叫び声を上げた。

「僕は姉ちゃんを守るんだ！約束しただろ？」

直哉は唾を飛ばしながら形振り構わず喚き散らす。瑞穂は静かに顔を上げて憐れむような面持ちでそんな弟を見詰めた。

それは もうむりよ

わたしは もうすぐ かんぜんに きえる

もう あえないの

いっしょには いられない

わたしは そうなる うんめい なの

運命という言葉聞いて躰中の血液が沸騰するように熱くなった。

それは直哉が戦うべき憎々しい敵の名前だ。

「何もかもこいつが悪いんだ！」

直哉は石畳の上に紅いお守りを叩き付けた。無機質な鈴の音が鳴る。

それは…

瑞穂の表情が初めて初めて変わり、驚いたような顔をしていた。

「何が運命だよ…そんなもの…運命なんて無いんだよ！未来の事なんて決まってないんだ。運命なんて言葉で誤魔化しちゃ駄目だよ姉ちゃん！」

なおや…

直哉はその場に膝をついて屈み込み、乱暴にお守りを掴み取り紐に指を掛けた。

「もう一緒にいられないなんて事はないよ！姉ちゃんはこの中に閉

じ込められてるんだろ？ 僕が姉ちゃんを助け出すよ！」

制止する姉の声にも耳を貸さず、直哉はゆっくりと指に力を籠める。

ふと友人の云っていた言葉を思い出した。その力強い言葉は再び直哉の背中を押してくれた。

「運命よ…そこを退け」

直哉は大きく息を吸った。そして一気に解き放つ。

「僕が通るんだ！」

直哉は勢いよくお守りの紐を引いた。その勢いで紐は千切れ、結わえられていた鈴も宙に投げ出されてちりんと冷たい音を響かせた。

そして、固く結ばれていた鬼の口が静かに開く。

いつの間にか陽は沈み切り世界は夜になっていた。太陽に代わって黄金色の満月が空を飾っている。

その夜よりも暗い鬼の口の中に白い物が見えた。子供の頃、悪戯心に紐を解いて垣間見たのと同じあの歯、否、鬼の牙だ。その奥からは確かな邪気を孕んだ荒々しい息遣いが聞こえてくる。

この先は異世界。

鬼の口はみるみるうちに大きく広がって魔界に潜む魔獣のような鋭い牙を向けて襲いかかってくる。

直哉は声を上げる暇も無く躰ごと鬼に飲み込まれた。

※

秋も終わりに近付き、日中でも少し肌寒くなってきた。特に朝は特別寒い。教室の窓から望む運動場の木々も葉を散らし始め、頼りなくもか細い枝先を露わにしている。あら冬の澄は直ぐそこまで来た。あしおといた。

私立高校というのはそんな寒い外とは打って変わって空調が完備されていて快適だ。温々（ぬくぬく）とした教室内では如何にも体育会系の爽やかな男子生徒が難しそうな顔をしながら古典の教科書を音読している。教壇に立つ愛想の悪そうな仏頂面の非常勤講師、佐倉勇人は教科書を片手に黒板に凭もたれてながら窓の外を眺めている。晩秋の空は雲一つなく清冷せいれいな程に青い。

「先生……」

「佐倉先生！」

朦朧ぼんやりしていた所で突然呼び掛けられた勇人ははっとして教室内に向き直った。

「どうした？」

「どうしたって……読み終わりましたよ」

音読をさせられていた起立したまま生徒はやや不服そうに怠惰な教師を睨にらんでいる。周りの生徒はぽかんと口を開けている勇人を見てくすくすと笑っている。

「あ、ああ。すまん」

「もう、しっかりしてよ先生」

生徒はぼやきながら着席する。勇人が咳払いをして気持ちを切り替えると生徒達も笑うのを止めて前を向いた。

「今、お前達が読んだのは伊勢物語の芥川という話だ。おい、お前」
勇人は最前列に座っている女子に目配せする。

「どんな話か簡単に説明してみろ」

生徒は自信ありげに口を開く。

「ええと、ある男がずっと好きだった女の人を強引に連れ出して逃げていました。やがて夜も更けて雨まで降ってきたので男はこの辺りに鬼が出る事も知らずに女の人を通りかかった所にあつた蔵に入いれて夜が明けるのを待っていました。でも、女の方は蔵に潜ひそんでいた鬼に一口で食べられてしまって、その悲鳴も雷に消されてしまいました。夜が明けて男が蔵を開けると女の方は跡形もなく消えてしまっていて、男は悲しくてその場で泣きました。って所かなあ？」

お道化^{どけ}たように女子生徒は結んだ。

「まあ、大体そんな話だ」

勇人がそう評価すると教室中からおおと感嘆が沸く。女子生徒は照れ臭そうに歯を見せて笑っていた。

「じゃあ、その毬栗坊主^{いがぐり}」

一番後ろの席に座っていた坊主頭の生徒を指差した。

「オ、オレっすか？」

毬栗坊主は自分の顎に人差し指を当てて素^す頓狂^{どんきやう}な顔をしている。指名されるなど夢にも思っておらずどうやら完全に油断していたらしい。

ああそうだ、と云って勇人は薄く笑う。

「今の話で一番気の毒なのは誰だ？」

「好きな人がいなくなっちゃった男も可哀想だけど、オレは女の人が一番可哀想だと思うな」

勇人は毬栗坊主の目を確^{しっか}りと見据えて頷く。

「何故そう思う？」

「え、だって…男に連れ出されたばかりに鬼に食べられて消えちゃったんだよ！何も悪い事していないじゃん」

「なるほど…な」

軽く頷いて勇人は教科書を静かに閉じた。

「この教科書には載ってないけどな、実はこの話には続きがあるんだ。誰か知ってるか？知ってる奴は手を挙げてみろ」

三十名近くいる生徒達は皆一様にぽかんと目を丸くしている。誰も手を挙げる様子は無さそうだ。

勇人はポケットに両手を入れて再び偉そうに黒板に凭れ掛かり目を瞑った。

「これは二条の后^{きさき}のいとこの女御^{によう}の御もとに仕うまつるやうにてゐ給へりけるを、かたちのいとめでたくおはしければ、盗みて負ひていでたりけるを、御兄^{ほりかわのおとぎ}人堀河大臣、太郎国経^{くに}大納言、まだ下？（げろう）にて内へ参り給ふに、いみじう泣く人あるを聞きつけて、と

どめて取り返し給うてけり。それをかく鬼とは言ふなりけり。まだいと若うて、後のただにおはしける時とや」

暗誦し終えると勇人はゆっくり目を開ける。生徒達は相変わらず呆氣に取られている様子だった。

「先生：すげえな」

教室のどこからともなく声が上がった。

「この話は俺も好きだからな。すっかり覚えてしまってるんだ」

眼鏡を掛けた真面目まじめそうな女子生徒がすうと手を挙げた。勇人はどうしたんだ、と踏ん反り返ったまま眉を上げて訊く。

「何て意味なんですか？」

「ああ、今のか？ 所謂後日談いわゆるだよ。鬼に食われて消えたと思われた女だが実はその兄によって連れ戻されていたのさ。それを男が鬼に食われたって勘違いしてたんだ。結果的に女は家に帰れたって事だよ。男というよりそっちの方が女にとっては安全だし幸せだったかもしれないな」

そう云って勇人は再び窓の外に目を向ける。

「大切な者が消えてしまったら残された者は酷く悲しいかもしれない、でも消えた本人は意外と幸せにやってるのかもしれないな…」
窓の外に広がる広い空を見詰めながら勇人は目を細める。

「あれえ？ 先生、もしかして：失恋でもしたの？」

奥の方の席に座る活発そうな茶色い髪的女子生徒がにやにやしながら茶々を入れてくる。

「はあ？」

「今そんな顔してたよ。なんか遠くへ行ってしまった恋人を想う切ない眼差し。哀愁漂ってたじゃない：ああ、失って初めて大切だったと気付くのよねえ…」

その茶髪の生徒は勝手に妄想を膨らませている。彼女はどうか流行はやりの噺ドラマの見過ぎのようだ。

「残念。なかなか勘は鋭いが色恋沙汰じゃあない」

なあんだつまんない、と云って恋愛体質の女子生徒は頬杖をつい

た。

勇人は壁に架かった時計で時間を確認する。

「少し授業時間も余ったし余談でもしようか。興味がない奴は別に寝てても構わない」

生徒達は皆嬉しそうな顔をしている。

「実はな、こないだ俺の友達が遠くへ行ってしまったんだ：女じゃないぞ」

「外国？」

「否、でも兎に角遠くだ。多分もう会う事も無い」

教室はしんと静まり返った。しかし誰一人居眠りしている者もおらず皆真剣に勇人の言葉に耳を^{そば}く^{そば}てているようだ。

一人の男子生徒が怖ず怖ずと尋ねる。

「その先生の友達って：死んじやったんじゃ：ないよね」
額を指でとんとんと^{たた}敲きながら勇人は答える。

「そうかもしれない：そうじゃないかもしれない」

「先生、寂しくないのかよ？」

「寂しい。か：確かに少し寂しいけど俺の友達を選んだ道だからな。そいつが俺と別れた後にどうなったかは知らないが大体は解る。少なくとも後悔はしない道を選んでる筈だろうな」

先程の真面目そうな眼鏡の生徒が問い掛けてくる。

「知らないのに解るって何ですか？」

「知っている事と解っている事っていうのは別物なんだよ」

眼鏡の生徒は怪訝そうな面持ちで首を傾げる。

「まあ、お前にもその内違いが解ってくるよ」

今度は毬栗坊主が真剣な顔をして尋ねてくる。

「先生の友達は何をしに行ったんすか？」

「ああ、最終決戦って言ってたな：」

勇人の口から零れた漫画のような言葉に教室中が啞然としていた。だが誰一人としてその子供じみた単語を^{わら}嗤う者はいない。

「その：先生の友達は勝てたのかな？」

勇人は幽かに微笑んで窓際に歩み寄って行った。
「あいつは俺の知っている限りで一番強い男だ」
そう云ってから一気に窓を開け放った。
「運命という檻をぶち破ったんだろうよ…多分な」
教室に冷たく清らかな風が吹き込んだ。



暗い。
ここはどこだろうか。本当に何も見えない程に暗い。
暗闇の先から僕の名前を呼ぶ声が聞こえる。
随分と懐かしい声だ。

背中に畳の感触がある。僕は仰向けに倒れているらしい。
そして暗闇の正体は僕の瞼^{まぶた}だ。

「直哉、起きなさい！」

顔の前から怒鳴り声がするので僕は目を開いた。翳^{かす}む視界の先に
僕の顔を上から覗き込んでいる顔があった。

「アンタいつまで寝てるつもりなのよ」

徐々に視界が定まってきて懐かしい顔が僕の前に現れた。

「ね…姉ちゃん」

間違いない。その顔は白川瑞穂^{しらかわ みずほ}、僕のこの世で一番大切な姉だ。
「やっと起きたわね、この寝坊助^{ねぼすけ}！」

「姉ちゃん！」

僕は姉の軀に腕を回して強く抱きしめた。

「ちょ、直哉…」

懐かしい、優しい匂いがした。

「き、気持ち悪いわね！」

姉は僕の腕をいとも簡単に引き離し僕の頭を平手で引っ叩いた。

「いてえ、何するんだよ……」

「アンタ何寝惚けてんの？ 訳分らない事言ってるともう一発引っ叩くよ」

眉間に皺を寄せた姉は平手にはあと息を吐き掛けながら二発目の平手打ちの準備をしている。

「ごめんごめん！ もうしないよ」

僕は慌てて立ちあがった。

辺りを見回すところが自分の家だと解った。しかし何か違和感を覚えた。

視点が低い。

いつも勇人^{はやと}が悠々と腰掛けて煙草をふかしている窓枠が見上げる程の高さにある。不審に思い辺りを見回すも矢張り総ての家具の大きさが変だ。

ふと前を向くと眼前を紅い布に覆われた。僕はぎょっとして後ろへ一歩飛び退き上を向くと、そこには紅い浴衣を着た姉の姿があった。

「あれえ……姉ちゃん。ぼくよりでっかくない？」

そう云うや否や姉は僕の耳を乱暴に掴んでいた。

「当り前でしょ、なんで私が小学生のアンタよりチビなのよ！」

「いててて、小学生って？」

「おかしいなあ。直哉ったら頭が変になっちゃったのかな？ やっぱりもう一発引っ叩いて元に戻してあげないと駄目かもねえ……」

姉は不敵に笑っている。

「大丈夫！ ぼくは大丈夫だからやめてよ」

窓硝子に反射して映った自分の姿を見て僕は腰が抜けるほど驚いた。

甚平^{じんぺい}を着ている僕は子供に戻っていた。

総てがああの頃に戻っている。ここはあのお守りの、鬼の口の中な

のだろうか。それとも僕があゝの紐を引き千切ったからお守りの効力が無くなり時間ごと全部元に戻ったのだろうか。

しかしそれは考えても解らない事だ。

「ほら、もう暗くなってきたからそろそろ行くよ」

姉は部屋の襖を開けて僕をどこかへ連れて行こうとしている。

「どこへ？」

「夏祭りよ！」

姉はこめかみに血管を浮き出してヒステリックに叫んだ。そして呆れた顔をして先に階段を下りて行った。今日は町外れの神社で行われる夏祭りの日だったようだ。どうやら僕はあの夏祭りの日を繰り返しているらしい。

「姉ちゃん、待ってよ！」

僕は姉を追って部屋を飛び出した。

いつもは誰からも忘れ去られたように閑寂な参道かんじゃくも今夜ばかりは露店が立ち並び、沢山の人で賑わっていた。

屋台の提灯や白熱灯が夜の町を煌々（こうこう）と照らし、人々の楽しげな声が辺りを包んでいる。

「姉ちゃん、今何時ぐらい？」

僕は口元にたこ焼きのソースを付けたまま問いかける。

「時計がないからはっきり分からないけど、きっと小学生はとつくに家に帰る時間よ」

「今日はお祭りだから良いんだよ」

僕は口元のソースをぺろりと舐めた。

「いつもならアンタもう寝てる時間じゃないの？　なんで今日はこんなに元気でいられるのよ」

「だって今日はお祭りのために昼寝してたんだからまだまだ平気さ」
何もかも同じだ。十七年前に自分がこの場所で何と云ったか何となく覚えていたので僕は大体同じような事を云ってみた。すると姉の反応も殆ど同じだったので少し面白かった。

「もう…」

姉は呆れた顔をして額に手を当てた。

「夏休みの宿題もちょっとぐらいやってるの？」

「大丈夫さ、あんなの最後にちょちょいって片付けちゃえばいいんだよ」

僕はにやにやしながら姉の顔を覗き込んだ。よかったら姉ちゃんの宿題も教えてあげようか？と云いたかったが止めておいた。

姉は苦笑いを浮かべている。

「姉ちゃん次はどこに行く？」

「そうねえ…」

姉は視線を辺りに泳がせながら泳がせながら考えている。

「ぼく、姉ちゃんが考えている事が解るんだ。姉ちゃんがどこに行きたいって言うか中^あててやろうか？」

「へえ：面白いわね。じゃあ今から私が言うから中ててみなさいよ」次に姉が云う言葉は僕には解っている。

「せえので言うのよ」

「うん！」

せえの、と姉が云った。

「金魚^{すく}掬い」

「金魚^{すく}掬い」

見事な程に僕らの声は揃った。姉は不思議そうな顔をしてアンタ何で解ったのよ、とぼやいている。

「よし、じゃあ行こう行こう」

僕は得意気に笑って姉の背中を押して行った。

夏祭りも終わりに近付いているようで店を畳む^{やし}香具師もちらほらと窺える。徐々にいつもの静かな参道に戻りつつある。僕らは金魚の入った袋をぶら提げてクレープを頬張りながら家路に就こうとしていた。

「アンタ、何か今日はいつもと違うような気がするのよね…」

「何が？」

姉がこめかみに指を置いて難しそうな面持ちで僕の顔を覗き込んできた。

「うーん。大人っぽいっていうか何ていうか……」

「何言ってるんだよ、ぼくはいつも通りのぼくだよ」

「何か変な感じ」

「あはは、気の所為だよ」

姉の猜疑さぎの視線を僕は笑い飛ばした。

「そうね、じゃあ帰ろっか」

「うん！」

そう元氣良く返事して僕は姉の手を握って歩き出した。その手は柔らかくて温かくて懐かしい手触りだった。

参道を少し歩き、僕は鳥居の方を振り返る。そして大きく手を振った。

「バイバイ！また家に来てね」

誰もいない鳥居に向かって手を振り、別れを云う僕を怪訝けげんそうに姉が見詰めている。もしかしたら頭がおかしくなったのではないかと思われているかもしれない。

「バイバイってアンタ……誰に言ってるの？」

「猫だよ！」

「猫？」

「そう、あの鳥居の所には猫がいるんだよ！」

姉は鳥居の方を見て目を細める。そして

「猫なんていないじゃない」

と、首を傾げている。

「へへ、あの猫。隠れるの上手だからね。そうだ近道して帰ろうよ！」

僕は姉の温かい手を牽ひいて走り出した。

僕らは田圃たんぼの畦道あぜみちをとぼとぼと歩いていた。

畦道と云ってもただ田圃の間に土を盛っただけのもので凸凹ついでこして歩いて歩き難い。頼りない月明かりだけでは足を踏み外して水田に落ちてしまいそうで自然と歩くのが遅くなる。稲の陰に隠れている蛙達の合唱会が行われている。

そして、辺りには沢山の螢が仄かな光を放ちながらふわふわと浮かんでいる。

「姉ちゃん：螢だよ」

「うん、あれは平家螢ね」

「きれいだね」

「そうね：」

姉は恍惚うつとろしながら螢の群れを眺めている。黄金色こがねの儚い光に照らし出される姉の透き通るように白い顔はこの上なく画になっていた。姉はその白い顔を向けて僕に訊いてきた。

「直哉、知ってる？」

「何を？」

「螢ってのはね、千年以上も昔から皆に愛され続けているのよ」
姉はそう云って光の群れの方を向き直した。

そしてすうと大きく息を吸った。

「夏は夜。月の頃は更なり。闇もなお。螢の多く飛びちがいたる。また、一つ二つなど仄かに打ち光りて行くものをかし。」

一息に云ったので息を切らしてしまったようだ。

僕もそこで姉の隣に躍り出て大声で叫んだ

「雨など降るものをかし！　：だよね？」

姉は僕の顔を見て目玉が零れるのではないかという程に目を剥いて驚いている。

「へへん、枕草子だろ？」

両手を腰に当て、胸を張って僕は得意気に云う。

「アンタ：なんでそんなの知ってるのよ？」

「まあ、ちよっとね」

姉は感心したような顔で僕を見ている。

「凄いじゃないアンタ！私も暗誦あんしょうテストで覚えたばかりなのに」

そう云って僕の頭をくしゃくしゃと掻き回すように撫でた。

「えへへ、ぼくも物知りだろ」

「なかなか感心しちゃったわ。そんな賢い子にはプレゼントをあげましょう」

「なにになに？」

さあ、出て来いよ。僕はお前と戦う準備はもう出来ている。今から僕ら姉弟の前に姿を現すのは『運命』。僕が打ち倒すべき相手だ。

「ちよっと待ってね」

姉は浴衣の懷をこそそと探っている。

僕の戦うべき敵の顔が露わになろうとしている。

もうお前に僕の邪魔などさせない。もしかしたら僕はお前に負けてしまうかもしれないが只では負けない。

僕が姉を守るんだ。

運命よ、そこを退け。僕が通るんだ。

ちりん

(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2102p/>

赤い鬼

2010年12月1日15時41分発行